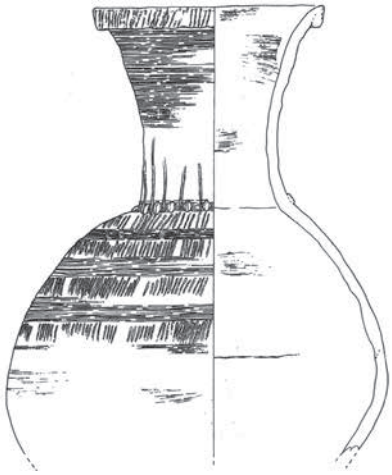
高知県四万十市文化財調査報告 第1輯

古 津 賀 遺 跡 群

第1次～第6次発掘調査報告

古津賀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2006.1

四 万 十 市 教 育 委 員 会
古津賀土地区画整理組合

第 3 次調査全景（東ナルザキ地区）

九州地方からの搬入土器

第 6 次調査（ホウシボウ地区）土坑 2 出土土器

高知県四万十市文化財調査報告 第1輯

古 津 賀 遺 跡 群

第1次～第6次発掘調査報告

古津賀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006.1

四 万 十 市 教 育 委 員 会
古津賀土地区画整理組合

刊行にあたって

炎天下の照りつける太陽のもと古津賀の地面を下へ下へと掘り進んでいくと、そこには今から千年以上前に古津賀に暮らした人々の生活が埋もれていました。出土する土器や石器、柱の跡など千年をこえる年月を経て当時の人々の記憶が姿をあらわしたのです。
私どもはこのような生き生きとした歴史の断片を次の世代を担っていく子供達や地域の皆様にぜひ現地で見ていただきたい、そして歴史を体験として感じてほしいとの願いから現地での説明会や市内の小・中学校の見学を計画いたしました。近くにお住まいの方々や、諸学校の先生方のご協力のもと、歴史の学習をはじめたばかりの小・中学生が古墳時代や弥生時代の頃の地面に立ち、ときには地中に埋もれた土器を探すなど実際に発掘を体験することもできました。この日ばかりは真横を走る県道の騒音も、子供たちの歓声にかき消されてしまうようでありました。後日、そのときの歓声が閉じ込められたような感想文を届けていただくなど、私どもにとっても忘れがたい行事となりました。今後もできるだけ多くの方々、子供たちにこのような体験をしていただけるよう努力していきたいと考えております。

現地調査から数年を経て、このたび調査報告書を刊行するはこびとなりました。報告書作成の過程では、現地調査の際にはおぼろげであった事柄が次々と明らかになってまいりました。かつて古津賀に暮らした人々と後川とのかかわりや暮らし、他の地方との交流など古津賀の歴史を読み解くたくさんのカギが見えてきたと言えるでしょう。高度に成長した社会に生きる私たちが、忘れてはならない生活の原点がそこに埋もれているのかもしれません。

このたび刊行するこの報告書が、今後の専門的な調査・研究の基礎資料として、また地域にくらす市民の方々にとって郷土の歴史を伝える貴重な資料として活用されることを期待いたしております。

最後になりましたが、現地での発掘調査および報告書刊行にあたり、各研究機関、市町村教育委員会、高知県教育委員会文化財課の皆様方には多くのご指導とご協力をいただきました。また、近隣にお住まいの方々、古津賀土地区画整理組合ならびに関係されたすべての皆様方に対しまして厚く御礼申しあげます。

平成 18 年 (2006 年)1 月

四万十市教育委員会
教育長　宮地 昭一郎

例　　言

1. 本書は中村市古津賀土地区画整理事業に伴って、高知県四万十市古津賀西中野・西大場・ホウシボウ・東ナルザキ地域において実施した、古津賀遺跡群第 1 次 ～ 第 6次発掘調査の報告書である。

2. 現地調査の呼称、調査期間、担当者は以下の表のとおりである。

調査次数	調査記号	調査期間	調査担当者
第 1 次調査	99-3NK	平成 11 年 (1999 年)5 月 10日～ 同年 8 月 20 日	小林麻由
第 2 次調査	99-6NK	平成 11 年 (1999 年)10 月 12日～ 同年 11 月 19 日	小林麻由
第 3 次調査	00-1NK	平成 12 年 (2000 年)4月 10日～ 同年 7 月 26 日	山本哲也
第 4 次調査	00-3NK	平成 12 年 (2000 年)10 月 10日～ 平成 13 年(2001 年)1月16日	山本哲也
第 5 次調査	2002001	平成 14 年 (2002 年)4月2日～同 年 8 月 20 日	川村慎也
第 6 次調査	2002012	平成 15 年 (2003 年)7 月 23日～ 同年 10 月 4 日	川村慎也

3. 各調査は、中村市古津賀土地区画整理組合より業務の委託もしくは現地指導依頼をうけて、四万十市教育委員会の指導のもと現地調査を行った。

4. 現地での発掘作業参加者は以下にあげるとおりである。

平成 11 年度 (第 1 次調査・第 2 次調査)

麻田周子、江口牧子、岡上瑞江、尾崎幸美、尾山 茂、加用静香、川村健一、北川久子、佐竹 正、宗崎重孝、武政輝忠、田辺勝茂、田辺貞雄、前田啓子、松囲澄子、松田五六、松本安雄、宮崎貞義 (50 音順)

平成 12 年度 (第 3 次調査・第 4 次調査)

麻田三子、江口牧子、岡上瑞江、尾崎幸美、尾山 茂、加用静香、川村健一、川村英之、北岡美幸、久保田百合子、佐竹 正、宗崎重孝、武政輝忠、花岡愛、堀渕一敏、前田啓子、百田進一、安光政一 (50 音順)

平成 14 年度 (第 5 次調査)

麻田三子、大崎多恵子、岡上瑞江、尾崎幸美、小野洋子、上岡秀美、加用静香、宗崎重孝、瀧本めぐみ、野町和人、前田啓子、堀渕一敏 (50 音順)

平成 15 年度 (第 6 次調査)

岡上瑞枝、尾崎幸美、宗崎重孝、 野町和人、桝屋豊、松田康平、宮添あきら (50 音順)

5. 出土遺物の整理作業は、四万十市教育委員会 生涯学習課 川村慎也の指導のもと以下の参加者の助力を得た。

平成 14 年度 岡本智子、吉福 愛

平成 15 年度 秋森正久、下岡こずえ

平成 16 年度 秋森正久、下岡こずえ、野町和人、松田康平、安光七重

6. 本書の執筆、編集は四万十市教育委員会 生涯学習課 川村慎也が行った。

7. 調査の実施と本書の作成にあたり、田崎博之 (愛媛大学考古学研究室)、梅木謙一 (松山市考古館)、坪根伸也 (大分市教育委員会)、浜田恵子 (高知市教育委員会)、高知県教育委員会文化財保護室、(財) 高知県埋蔵文化財センター諸氏よりご指導、ご助言を、また当市都市整備課、水道課、工事関係者、ならびに近隣にお住まいの方々には多大なご支援とご協力をいただいた。ここに銘記して謝意を表す。

8. 現地調査と報告書の記述に際して、堆積層の記録及び遺物の観察には『新版 標準土色帖』(日本色研事業株式会社) を用い、標高は T.P.(東京湾平均海水位) で表記した。また、方位は特に注記しない限り、座標北 (公共測量座標系第 Ⅳ 系) で表示している。

9. 当調査に関わる遺物、写真・カラースライド、図面等は、四万十市教育委員会 生涯学習課 [TEL0880(34)7311] において保管している。広く活用されることを希望する。

10. なお､旧中村市は平成 17 年 4 月に旧西土佐村と市町村合併を行い四万十市となっている。本文中ではこれをうけて固有名詞等必要な場合を除き、中村市を四万十市と置き換えて表記している。

目　　次

原色写真図版

刊行にあたって　（四万十市教育委員会　教育長　宮地 昭一郎）

例　　言

第Ⅰ章　遺跡をとりまく諸環境 …… **1**

第1節　地理環境 …… 1
第2節　歴史環境 …… 4

第Ⅱ章　西中野地区の調査 …… **9**

第1節　調査に至る経過 …… 9
第2節　基本的な層序 …… 11
第3節　第1次調査の成果 …… 18
第4節　第5次調査の成果 …… 33

第Ⅲ章　ホウシボウ地区の調査 …… **61**

第1節　調査に至る経緯と経過 …… 61
第2節　基本的な層序 …… 62
第3節　第2次調査の成果 …… 64
第4節　第4次調査の成果 …… 78
第5節　第6次調査の成果 …… 104

第Ⅳ章　東ナルザキ地区の調査 …… **131**

第1節　調査に至る経緯と経過 …… 131
第2節　第3次調査の成果 …… 134

第Ⅴ章　調査成果のまとめ …… **159**

写真図版

報告書抄録

図版目次

第１章　遺跡をとりまく環境

I-1　高知県地質図
I-2　付加体形成概念図
I-3　幡多周辺地質図
I-4　四万十市地形分類図
I-5　古津賀遺跡群周辺の遺跡分布図
I-6　古津賀古墳石室実測図
I-7　古津賀遺跡群の範囲

第２章　西中野地区の調査

II-1　土地区画整理事業計画図
II-2　第１次・第５次調査地点位置図
II-3　第１次・第５次調査層位柱状図

第１次調査

II-4　第１次調査グリッド設定図
II-5　第１次調査遺構平面図
II-6　古代～中世包含層出土遺物
II-7　古墳時代包含層出土遺物１
II-8　古墳時代包含層出土遺物２
II-9　古墳時代包含層出土遺物３
II-10　弥生時代包含層出土遺物１
II-11　弥生時代包含層出土遺物２
II-12　弥生時代包含層出土遺物３
II-13　搬入土器
II-14　出土石器１
II-15　出土石器２

第５次調査

II-16　第５次調査グリッド設定図
II-17　第５次調査東壁土層断面図
II-18　遺物出土範囲図
II-19　V-2 層 (E 層) 出土遺物
II-20　土坑１平面図
II-21　土坑２平面図
II-22　土坑３平面図
II-23　土坑出土遺物
II-24　土坑４・土坑５平面図
II-25　土坑４遺物出土状況図
II-26　土坑４・土坑５出土遺物１
II-27　土坑４出土遺物２
II-28　土坑６平面図・出土遺物
II-29　溝１・溝２平面図
II-30　溝２遺物出土状況図
II-31　溝１・溝２出土遺物
II-32　落ち１出土遺物
II-33　包含層出土遺物１
II-34　包含層出土遺物２
II-35　包含層出土遺物３
II-36　搬入土器
II-37　出土石器
II-38　第５次調査遺構平面図

第３章　ホウシボウ地区の調査

III-1　第２次・第４次・第６次調査地点位置図
III-2　第２次・第４次・第６次調査層位柱状図

第２次調査

III-3　第２次調査グリッド設定図
III-4　第２次調査東・南壁土層断面図
III-5　第２次調査遺構全体図
III-6　土器群１・土器群２遺物出土状況図
III-7　土器群３遺物出土状況図
III-8　土器群1～土器群７出土遺物
III-9　土器群８遺物出土状況図
III-10　土器群８出土遺物
III-11　土器群９遺物出土状況図
III-12　土器群8～土器群 10 出土遺物
III-13　出土石製品
III-14　落ち１・落ち２出土遺物
III-15　包含層上部出土遺物１
III-16　包含層上部出土遺物２
III-17　包含層下部出土遺物

第４次調査

III-18　第４次調査グリッド設定図
III-19　第４次調査北壁土層断面図
III-20　８層出土遺物
III-21　土坑１平面図
III-22　土坑１出土遺物
III-23　竪穴住居１平面図
III-24　竪穴住居１遺物出土状況図
III-25　竪穴住居１出土遺物
III-26　土坑２出土遺物
III-27　土器群１遺物出土状況図
III-28　土器群２遺物出土状況図
III-29　土器群３遺物出土状況図１
III-30　土器群３遺物出土状況図２
III-31　土器群1～土器群３出土遺物
III-32　土器群４遺物出土状況図１
III-33　土器群４遺物出土状況図２
III-34　土器群４出土遺物１

III-35　土器群 4 出土遺物 2
III-36　土器群 5 遺物出土状況図
III-37　土器群 6 遺物出土状況図
III-38　土器群 8 遺物出土状況図 1
III-39　土器群 8 遺物出土状況図 2
III-40　土器群 5 ～ 8 出土遺物
III-41　土器群 9 遺物出土状況図
III-42　土器群 9 出土遺物
III-43　土器群 7・土器群 10 遺物出土状況図
III-44　土器群 10 出土遺物
III-45　包含層出土遺物 1
III-46　包含層出土遺物 2
III-47　包含層出土遺物 3
III-48　包含層出土遺物 4
III-49　第 4 次調査遺構全体図
第 6 次調査
III-50　第 6 次調査トレンチ配置図
III-51　第 6 次調査グリッド設定図
III-52　第 6 次調査壁面土層断面図
III-53　土坑 2 平面図
III-54　土坑 2 遺物出土状況図
III-55　土坑1～土坑 3　落ち1 出土遺物
III-56　溝 2 平面図
III-57　溝 2 断面図
III-58　掘立柱建物 1・掘立柱建物 2 平面図
III-59　掘立柱建物 3 平面図
III-60　掘立柱建物 4 平面図
III-61　遺構・包含層出土遺物 1
III-62　包含層出土遺物 2
III-63　包含層出土遺物 3
III-64　出土石器
III-65　石製品
III-66　試掘確認調査出土遺物
III-67　遺構平面図
III-68　遺構平面図

第 4 章　東ナルザキ地区の調査

IV-1　第 3 次調査地点位置図
IV-2　第 3 次調査グリッド設定図
IV-3　第 3 次調査北壁土層断面図
IV-4　試掘確認調査出土遺物 1
IV-5　試掘確認調査出土遺物 2
IV-6　試掘確認調査出土遺物 3
IV-7　遺構平面図
IV-8　包含層出土遺物
IV-9　土坑 1 平面図
IV-10　土坑 1・土坑 2 出土遺物
IV-11　柱穴 1 平面図
IV-12　柱穴 2 平面図
IV-13　柱穴 1 出土遺物
IV-14　柱穴 2 出土遺物
IV-15　掘立柱建物 1 平面図
IV-16　竪穴住居 1 平面図
IV-17　竪穴住居 2 平面図
IV-18　竪穴住居 1・竪穴住居 2 出土遺物 1
IV-19　竪穴住居 1 出土遺物 2
IV-20　竪穴住居 1 出土遺物 3
IV-21　竪穴住居 3 平面図
IV-22　竪穴住居 4 平面図
IV-23　土坑 3 平面図
IV-24　竪穴住居・土坑 3 出土遺物 1
IV-25　竪穴住居・土坑 3 出土遺物 2
IV-26　包含層出土遺物

表目次

第 2 章　西中野地区の調査

II-1 大別層序対応表
II-2 出土遺物観察表 1
II-3 出土遺物観察表 2
II-4 出土遺物観察表 3
II-5 出土遺物観察表 4
II-6 出土遺物観察表 5
II-7 出土遺物観察表 6
II-8 出土遺物観察表 7

第 3 章　ホウシボウ地区 の調査

III-1 出土遺物観察表 1
III-2 出土遺物観察表 2
III-3 出土遺物観察表 3
III-4 出土遺物観察表 4
III-5 出土遺物観察表 5
III-6 出土遺物観察表 6
III-7 出土遺物観察表 7
III-8 出土遺物観察表 8
III-9 出土遺物観察表 9

第 4 章　東ナルザキ地区の調査

IV-1 出土遺物観察表 1
IV-2 出土遺物観察表 2
IV-3 出土遺物観察表 3

写真図版目次

原色写真図版

東ナルザキ地区遠景・・・・・・・・原色写真図版 1
九州地方からの搬入土器・・・・・・原色写真図版 2
第 6 次調査土坑 2 出土土器・・・・・原色写真図版 2

写真図版（遺構写真）

第 1 次調査

調査前の現況・・・・・・・・・・・写真図版 1
土層堆積状況・・・・・・・・・・・写真図版 1
遺構検出状況・・・・・・・・・・・写真図版 2
古墳時代包含層遺物出土状況・・・・写真図版 2
弥生時代包含層遺物出土状況・・・・写真図版 3
石製品出土状況・・・・・・・・・・写真図版 3
柱穴半裁状況・・・・・・・・・・・写真図版 3

第 5 次調査

V-2 層遺物出土状況・・・・・・・・写真図版 4
遺構完掘状況 (VIII-2 層)・・・・・・写真図版 4
土層堆積状況・・・・・・・・・・・写真図版 5
土坑 4 石包丁 (159) 出土状況・・・・写真図版 5
搬入土器出土状況・・・・・・・・・写真図版 5
遺構完掘状況 (IX 層)・・・・・・・・写真図版 6
柱穴 1 半裁状況・・・・・・・・・・写真図版 6
溝 1 土層堆積状況・・・・・・・・・写真図版 7
溝 2 遺物出土状況・・・・・・・・・写真図版 7

第 2 次調査

遺構検出状況・・・・・・・・・・・写真図版 8
調査前の現況・・・・・・・・・・・写真図版 8
古墳時代包含層遺物出土状況・・・・写真図版 9
土層堆積状況・・・・・・・・・・・写真図版 9

第 4 次調査

土器群 9 遺物出土状況・・・・・・・写真図版10
土器群 4(367) 出土状況・・・・・・ 写真図版10
土器群 9(366) 出土状況・・・・・・ 写真図版11
土坑 2 検出状況・・・・・・・・・・写真図版11
竪穴住居 1 炭化物検出状況・・・・・写真図版12
竪穴住居 1 完掘状況・・・・・・・・写真図版12

第 6 次調査

土層堆積状況 1・・・・・・・・・・写真図版13
土層堆積状況 2・・・・・・・・・・写真図版13
9 層完掘状況 (A 区)・・・・・・・・ 写真図版14
9 層完掘状況 (B～D 区)・・・・・・ 写真図版14
土坑 3 半裁状況・・・・・・・・・・写真図版15
柱穴 21 半歳状況・・・・・・・・・ 写真図版15
10 層完掘状況 (A 区)・・・・・・・ 写真図版16
10 層完掘状況 (B～D 区)・・・・・ 写真図版16
掘立柱建物 3・・・・・・・・・・・ 写真図版17
溝 2 完掘状況・・・・・・・・・・・写真図版17
土坑 2 遺物出土状況・・・・・・・・写真図版18
土坑 2 石包丁 (455) 出土状況・・・・写真図版18
土坑 2 壷 (453) 出土状況・・・・・・写真図版18

第 3 次調査

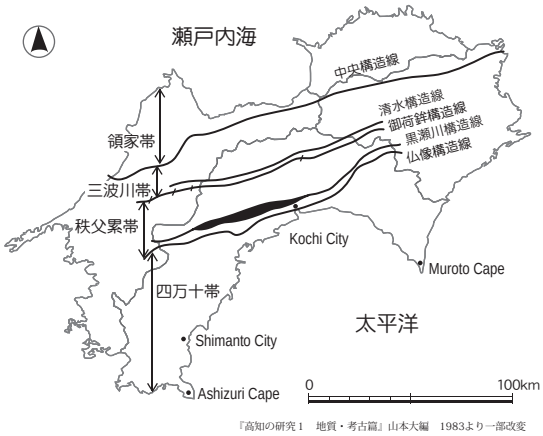
竪穴住居 1・竪穴住居 5 完掘状況・・ 写真図版19
竪穴住居 3 完掘状況・・・・・・・・写真図版19
柱穴 2 遺物出土状況・・・・・・・・写真図版20
柱穴 7 半裁状況・・・・・・・・・・写真図版20

写真図版（遺物写真）

第 1 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版21～25
第 5 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版26～28
第 2 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版29
第 4 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版30～35
第 6 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版36～37
第 3 次調査 遺物写真・・・・・・・・写真図版38～40

第Ⅰ章　遺跡をとりまく諸環境

Ⅰ－1　地理環境



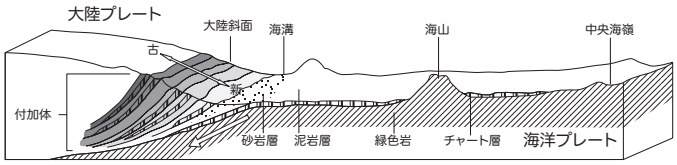
『高知の研究１　地質・考古篇』山本大編　1983より一部改変

図Ⅰ－１　高知県地質図

1. 概　観

四万十市は高知県西南部に位置し、四万十川河口付近が土佐湾に面するほかは四方を山林に囲まれている。市内には流路延長 177km をはかる四万十川が土佐湾に向かって南流しており、その支流である後川が下流域でこれに合流し、次いで河口近くになって中筋川が合流する。当地はこの３つの河川が形成する平野に開けた地域である。これらの河川はいずれも蛇行を繰り返して下流するもので、現在は河川改修や堤防設置によって水害は減少しているが、かつては流域での洪水災害などが多発していた地域でもある。当該調査地点である古津賀地区は後川の氾濫原もしくは後背湿地上に立地しており、後川堤防設置後も降雨量が多い際には床下浸水等が多発する地域である。

2. 四万十帯



『新版地学教育講座　日本列島のおいたち』東海大学出版会1995　より一部改変

図Ⅰ－2　付加体形成概念図

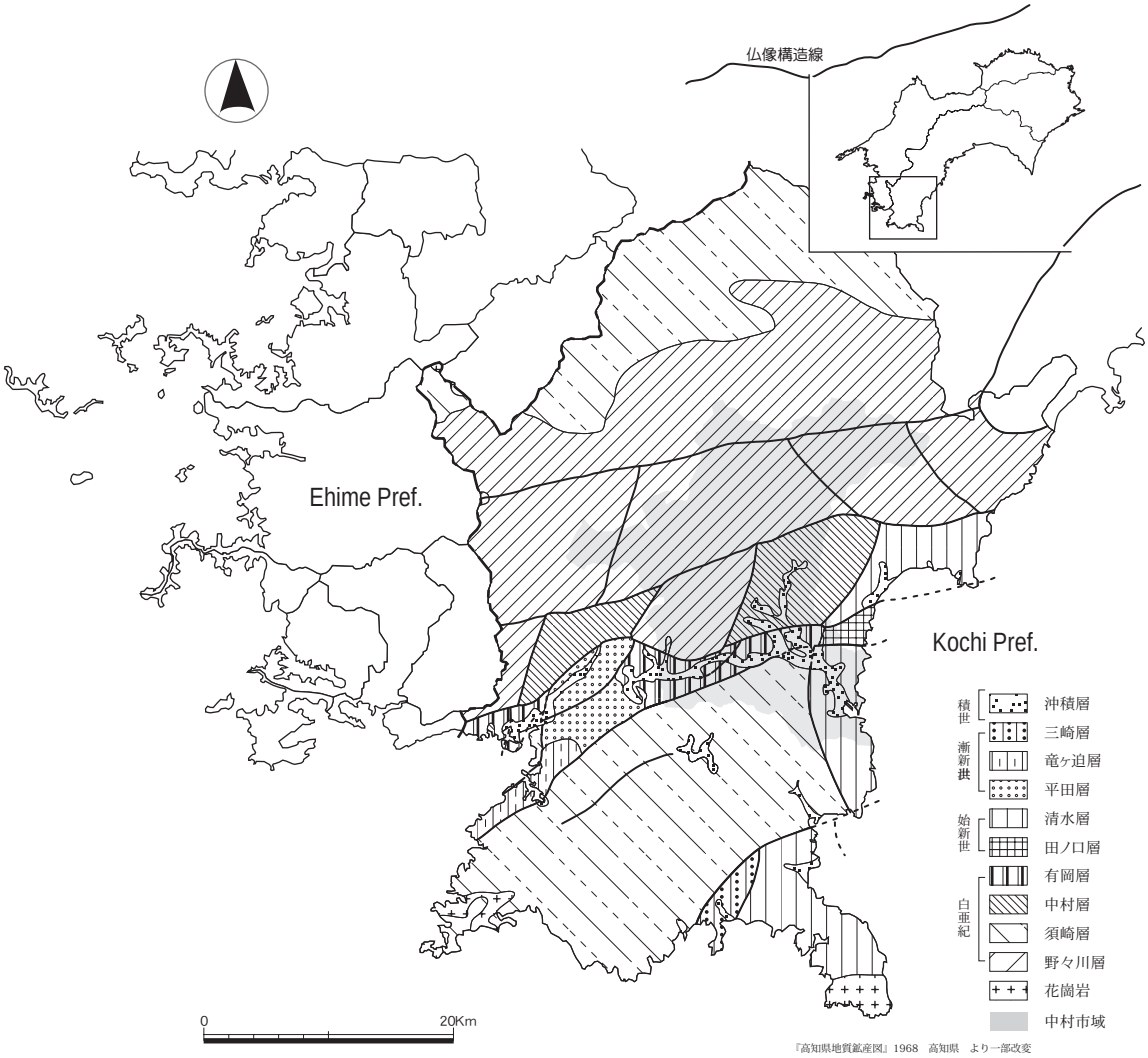
高知県の面積の５分の３は四万十帯と呼称される中生代白亜紀の地層で占められている。四万十帯とは四国を走る３つの断層のうち最も南に位置する佛像構造線以南の地域を区別する呼称である（図Ⅰ-1）。四万十市も市全域が四万十帯に含まれており、白亜紀からなる丘陵に囲まれた沖積地に市街地が形成されている。古津賀地域に着目すると、中生代白亜紀の有岡層と第三紀田ノ口層の断層、及び第三紀田ノ口層と清水層の断層が付近を走っている。

3. 沖積低地

四万十市の大半は高度 500 m以下の中起伏山地である。市内で最も広域な平野である中村平野は、中筋川流域を主軸として形成される沖積低地である。中筋川は南北を断層が走る地溝上の

凹地を流れる河川であり、周辺は高度の低い山麓丘陵が発達する。現在の中筋川は河口の実崎付近で四万十川に合流するが、河川改修以前は坂本付近で合流しており支流への逆流現象が生じるなど氾濫原となっていた。

これに対して四万十川下流域の沖積低地は狭く、複雑な山麓線を示すおぼれ谷地形をなしている。四万十川および後川流域に展開する平地は自然堤防および洪水時の氾濫原堆積によって形成される三角州性低地であり、中筋川の形成する平地とは区別される。古津賀地区もこのような沖積低地上に立地する地域である。



図Ⅰ–3　幡多周辺地質図

図Ⅰ–4　四万十市地形分類図

Ⅰ‐2　歴史環境

1.「古津賀遺跡」の発見

古津賀遺跡の発見は今から約 50 年ほど遡る昭和 30 年（1955）の後川築堤工事の際においてであった。当時河川敷内から古墳時代後期所産の須恵器を含む大量の土器片が確認され、遺跡として認識されるようになる。発見時の遺物のなかには手づくね土器や土製鏡、滑石製有孔円板などが含まれており、これらの遺物を検討した岡本健児は出土状況や遺跡の立地から古墳時代後期の河川祭祀に関連する遺跡であるとの評価をなしている。この後、本格的な発掘調査が計画されることなく年数を重ねていたが、1981 年の後川改修工事を皮切りに、土地区画整理事業及び国道拡幅工事などの計画にあわせて遺跡内で発掘調査が実施される機会が増加することとなる。

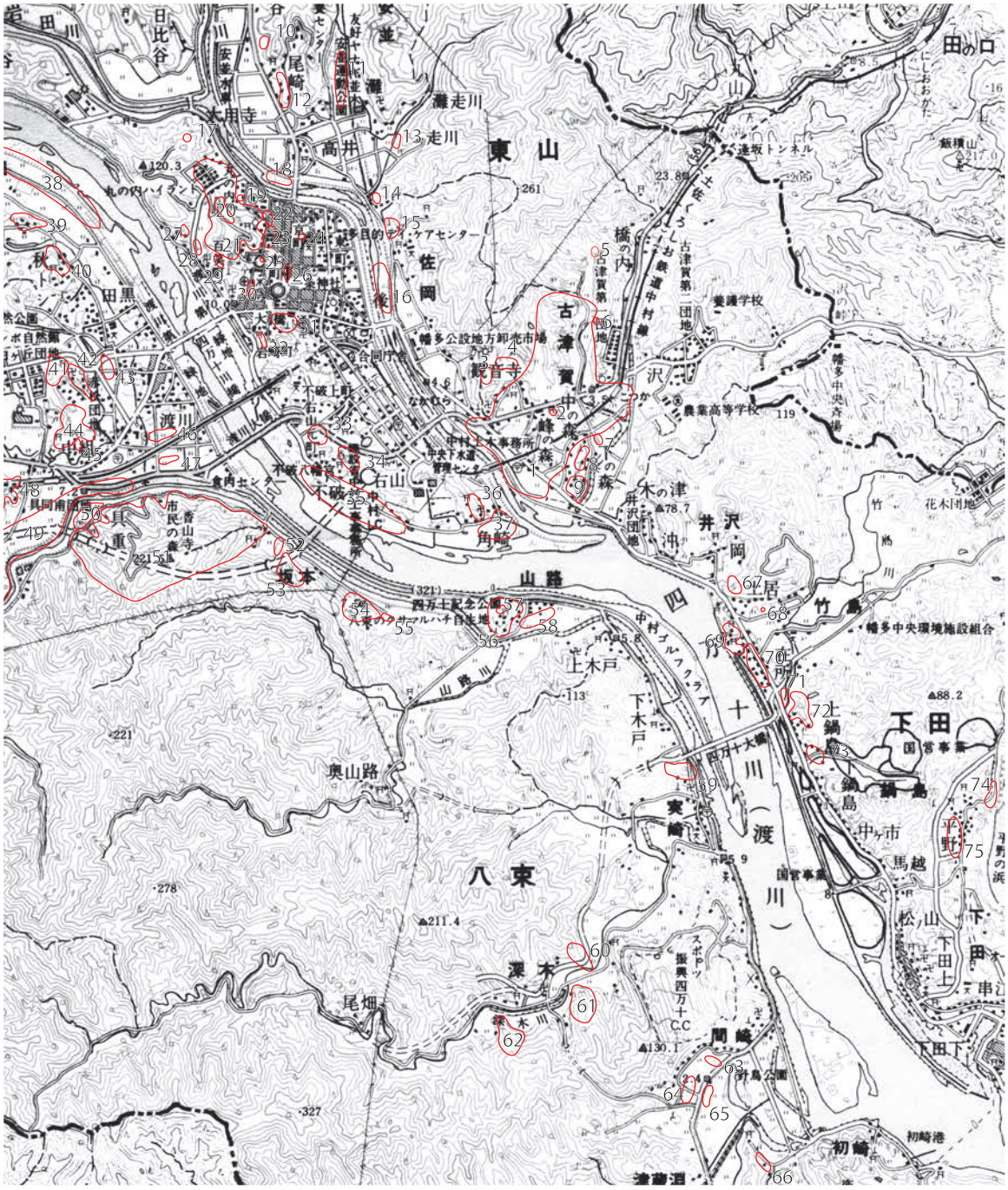
2. 弥生時代の集落

四万十市を含めた幡多地域における弥生時代の幕開けは西日本の各地でみられるように遠賀川式土器の伝播等によって確認することができる。搬入される遠賀川式土器は既に形式的に安定したものであり、高知平野に若干遅れて弥生文化の享受が始まるものと理解されている。当市における弥生時代前期の遺跡は数少なく、入田遺跡、西ノ谷遺跡、具同中山遺跡群、国見遺跡など中筋川流域を中心に、一部四万十川下流域に展開している。既往の調査では良好な遺物は確認されているものの、遺構は希薄であり集落の具体像に迫る資料に欠けている。

また、弥生時代中期前葉～中葉に関しても遺跡はほとんど知られておらず、その様相は未だ判然としない。このような状況は県下を通じて同様に見られる現象といえる。しかし、中期末から後期をむかえると状況は一変し、市内の遺跡数は飛躍的に上昇する。中筋川流域は前期から営まれる遺跡が存在するが、四万十川・後川流域では河川の合流地点付近の微高地に新たに遺跡が営まれ始める。

このような状況下で、現在古津賀周辺で知られる弥生時代の遺跡は古津賀遺跡群と観音寺遺跡、後川左岸上流域には後期に属する佐岡遺跡や安並遺跡等が知られる。観音寺遺跡は標高 60 mの丘陵頂上部に立地し、地表面からは中期末～後期の遺物が採取されている。調査者は高地性集落の可能性を示唆しているが、現在のところ追加資料はなくその性格は明確になっていない。

このように古津賀周辺でも他の地域と同じく、確認されている弥生時代の遺跡は中期末～後期所産であり、古津賀地域はこの時期以降に集落を発展させてきたことがわかる。しかしながら、具体的な集落の範囲や構造、墓域などを明らかにする資料はいまだ確認されておらず、今回の調



1.古津賀遺跡群 2.古津賀古墳 3.観音寺遺跡 4.観音寺城跡 5.古津賀岡田屋敷遺跡 6.ササ山遺跡 7.オカノハナ遺跡 8.アミダ堂遺跡 9.宮田城跡 10.カキ谷遺跡 11.八宗田遺跡 12.安並城跡 13.走川端遺跡 14.佐岡製鉄所跡 15.佐岡城跡 16.佐岡遺跡 17.山内忠直の墓 18.後川橋西遺跡 19.一条房基の墓 20.古城山遺跡 21.為松城跡
22.中村奉行所跡 23.土佐一条氏遺跡 24.玉姫の墓 25.一条教房の墓 26.中村御所跡 27.吹越山遺跡 28.百笑遺跡 29.久山遺跡 30.中村貝塚 31.羽生古城跡 32.岩崎山遺跡 33.不破城跡 34.潰ノ谷城跡 35.不破遺跡 36.葛城城跡 37.角崎遺跡 38.入田遺跡 39.秋トシ遺跡 40.長崎城跡 41.扇城跡 42.ナリカド遺跡 43.田黒遺跡 44.西和田遺跡 45.栗本城跡 46.五反田遺跡 47.永田遺跡 48.近沢城跡 49.具同中山遺跡群 50.具重遺跡 51.香山寺跡 52.坂本遺跡 53.皇子山城跡 54.サラガミネ城跡 55.馬場谷遺跡 56.山路城跡 57.山路遺跡 58.曽我ノ前遺跡 59.チシ古城跡 60.岡崎ノ城跡 61.サコノ城跡 62.深木城跡 63.中西遺跡 64.ナカノ遺跡 65.ナキリ遺跡 66.宮ノ沢遺跡 67.井沢城跡 68.白皇山古墳 69.竹島城跡 70.竹島遺跡 71.福満遺跡 72.鍋島城跡 73.上鍋島遺跡 74.磯ノ上遺跡 75.平野遺跡

図Ⅰ－5　古津賀遺跡群周辺の遺跡分布図（1/25,000）

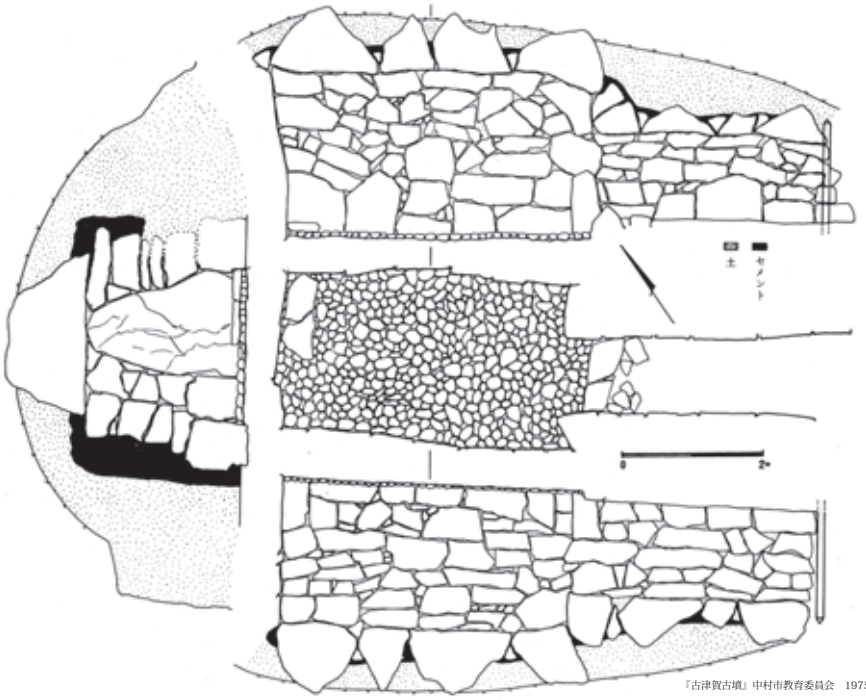
査で柱穴群や土抗を確認できたことは、今後古津賀地域の集落像を復元していくうえでひとつの前進である。

3. 古津賀古墳

市内の古墳時代の遺跡は、時期的には一時期断絶をおく場合もあるが概ね弥生時代後期に展開していた集落付近で営まれる。特に具同、古津賀付近では祭祀跡を含めた比較的規模の大きい集落が発展する。両遺跡については、具同中山遺跡群の衰退と共に古津賀遺跡群が最盛期を迎えることから、両者が補完的な関係にあった可能性も指摘できる。

具同中山遺跡群や古津賀遺跡群が展開する中筋川・後川流域では集落遺跡に加えて、自然堤防付近で河川祭祀を想定させる祭祀関連遺物の出土が顕著になる。手づくね土器や土製鏡、臼玉などが大量の土器片とともに数箇所にまとまって出土することが多く、遺物が集中する付近には焼土を含む炭化物などが散見される。しかし、柱穴等はほとんど検出されておらず遺構の分布をとらえているケースは稀である。

幡多地域では古墳時代後期をむかえても、集落内から出土する土器は土師質のものが主体で須恵器の占める割合はきわめて低い。しかし、祭祀関連遺物を出土する地点においては須恵器の出土比率が高く、このような現象からもその地点が他の生活領域とは異なる意味合いを持つ場所であったことがうかがえる。



図Ⅰ–6　古津賀古墳石室実測図

また、古津賀において特筆すべきなのが古津賀古墳の存在である。古津賀古墳は古津賀地区の峯の森と呼ばれる独立丘陵上に築かれた古墳時代後期の円墳である。昭和 37 年と昭和 48 年に発掘調査および石室の復元が行われ、両袖式の横穴式石室の玄室内より有蓋高坏や耳環、鉄刀、鉄鏃、馬具などが出土している。墳丘規模について報告書では明記されていないが、現在の形状から直径約12m程の墳丘が想定される。幡多地域一円でも古墳を持つ地域はきわめて限定されており、当該期に古津賀地域が政治的にも重要な役割を担っていたことが推測される。

4. 古代～中世の様相

古代・中世期に至ると古津賀周辺では集落が減衰するものの、具同中山遺跡群では官衙跡を思わせる礎板をもつ大型の掘建柱建物が営まれるほか、船戸や風指、アゾノといった中国産貿易陶磁器等の搬入品を出土する、中筋川を媒体とした河川運輸を担う集落が顕在化してくる。8世紀後半～ 9 世紀前半には上流域に須恵器を産出する宿毛市神ヶ谷窯跡が営まれるなど流域の活性化が認められる。

当該期古津賀地域では各発掘調査や試掘確認調査において微量の遺物が採集できるほかは明確な遺構を確認していない。河川の氾濫原に位置しているため、水害時に失われてしまった部分もあろうが、現時点では集落がさほど広域に展開していなかったものと見受けられる。

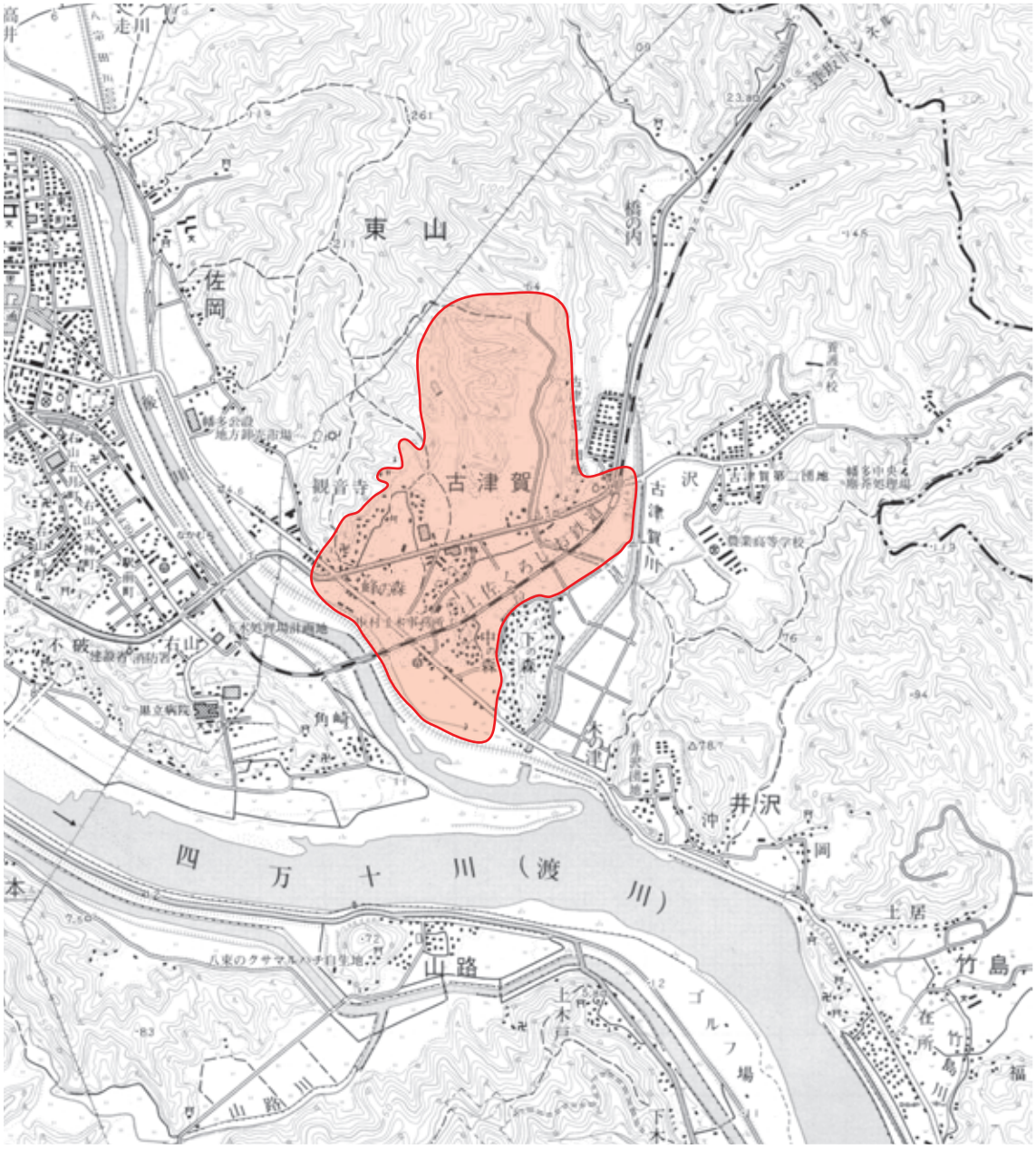
15 世紀以降は一条氏の下向に伴って幡多地域が大きな変革期を迎える。一条氏に関わる遺物は発掘調査でも明らかになっているが、当該期の集落の様相を示す発掘調査成果はまだ少ない。古津賀を含め後川流域の古代・中世は未だ調査成果がなく、今後の調査に期待するほかないが、中筋川流域と比べると主たる物流ルートからはやや距離があるものと推測される。

5. 四ヶ村溝

16・17 世紀になると四万十市周辺は山内家による支配下におかれるようになる。いわゆる中村山内時代と称されるこの 90 年間には、市域が広がり政治・経済ともに活性化する。これに伴い家老野中兼山による、かいろく溝の設置、中筋川改修、下田の阿房堀掘削など市内における土木事業も増加することとなる。これらの土木事業のなかでも古津賀地域に関与するものとして四ヶ村溝の開掘が挙げられる。これは後川を麻生付近で分水するために長さ 160 m余りの井堰を作ったものである。この堰は麻生堰と呼ばれ、この堰によって秋田、安並、佐岡、古津賀の四ヶ村を灌漑することから四ヶ村溝と呼ばれることになったと伝えられている。この井堰の構造等の詳細については明らかでないが、現在安並に残る溝は後川堤防の外側を巡り、現在も農業用水路として機能している。今後機会に恵まれれば、麻生堰周辺の発掘調査にて、当時の灌漑工事のありようを知ることができるであろう。

6. 古津賀遺跡群

以上、古津賀地域を中心に四万十市及び幡多地域の略歴を概観してきた。前述したとおり、古津賀遺跡は平成 10 年（1998 年）以降土地区画整理事業に伴う試掘調査結果が詳細に実施され、これまで認識されていた範囲の外側でその広がりが確認されるに至った。この成果を受けて、当市教育委員会は平成 13 年（2001 年）に県文化財保護室（現在は文化財課）と調整し遺跡の範囲を観音寺地区まで広げ、名称も古津賀遺跡群と呼称することとして周知を行った。これによって遺跡範囲は東西 1,500 m、南北 1,000 mをこえる広範囲なものとなった。この遺跡範囲にはこれまでオツケバ遺跡、古津賀遺跡などと呼称されていた個別の遺跡が包括されている。



図Ⅰ-7　古津賀遺跡群の範囲

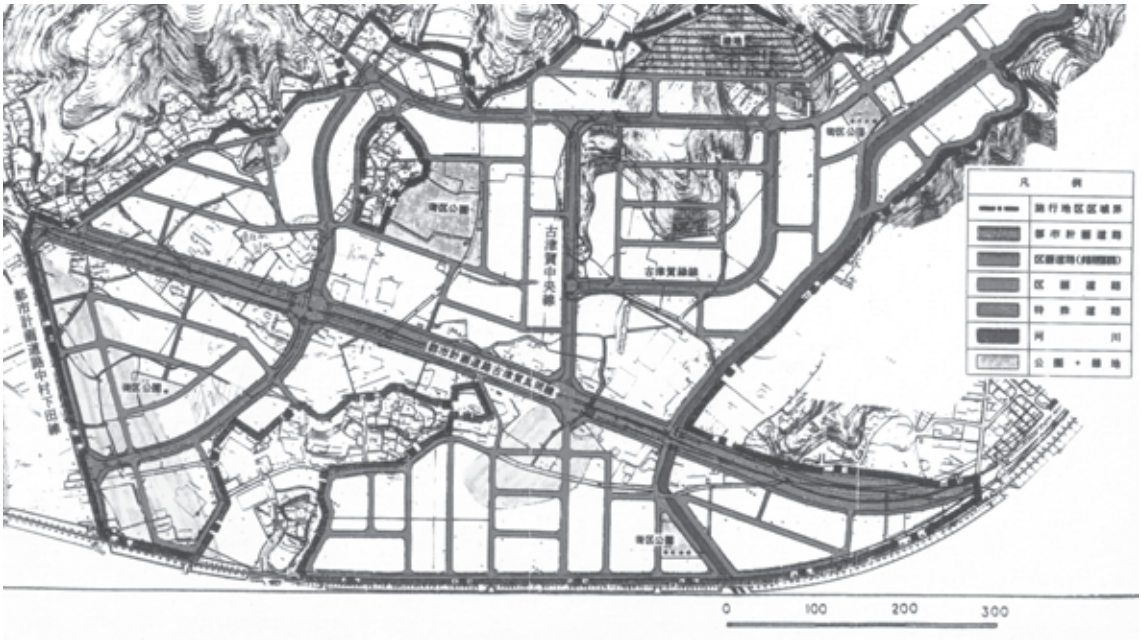
第Ⅱ章　西中野地区の調査

Ⅱ-1　調査に至る経緯と経過

1. 試掘確認調査

古津賀土地区画整理組合は古津賀地区の区画整理事業に伴い、市道の一部新設を計画した。新設する市道は国道56号線と県道下田線を結ぶもので、下田分岐を経ずして県道下田線につながる経路をとる。当該予定地周辺は埋蔵文化財包蔵地にあたることから、教育委員会では計画の具体化に伴い、平成10年（1999年）4月15日～7月31日に試掘確認調査を行った。

試掘の結果、予定地の一部で遺構、遺物が良好な状態で確認され、その重要性から発掘調査の必要があると判断された。これを受けて古津賀土地区画整理組合と教育委員会は発掘調査についての諸協議を行った。この協議のなかで用地買収等の問題から、調査は工事の進捗状況にあわせ二時期にわけて実施することとなった。発掘調査については教育委員会があたることになったため教育委員会と古津賀土地区画整理組合との間で委託契約を締結し、発掘調査実施の運びとなった。なお、教育委員会では埋蔵文化財包蔵地の本発掘調査に対して、調査の時期が早いものから順に次数を振って整理している。今回報告する二つの調査をこの整理次数に照らすと、平成11



図Ⅱ-1　土地区画整理事業計画図

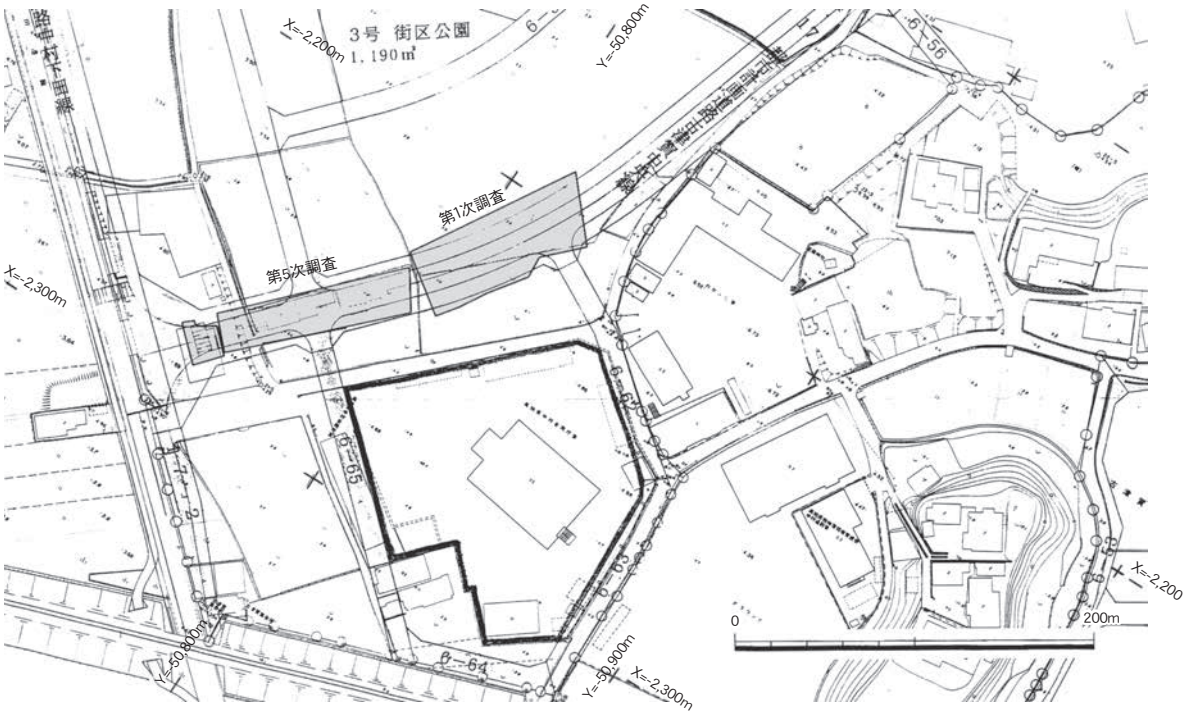
年（1999 年）5 月 10 日～ 8 月 20 日までの期間に約 640 ㎡を対象として実施した調査が第 1 次調査、平成 14 年（2002 年）4 月 1 日～ 8 月 20 日までの期間に約 800 ㎡を対象として実施した調査が第 5 次調査に該当する（図Ⅱ –2）。

2. 調査の実施

現地調査にあたっては、調査区の外郭に仮囲いを行い、調査範囲を遺構検出面まで重機にて掘り下げた。調査時には、両調査とも掘削深度が増すにつれて安全性を確保するため必要に応じて法面、犬走り等を設けた。なお、第 5 次調査では調査区北側に隣接した電信柱や側溝等に影響を与えないため、調査区の北側 50m にⅢ型鋼矢板を設置した。また、第 5 次調査の東側は道路に面しているため、東側にもトレンチシートを設置して道路へ影響を及ぼさないための対策を講じた。これらの矢板は調査終了時にすべて抜き取り現状に戻した。

第 5 次調査では、当初の打合せでは存在しないとされた地下埋設施設が調査中に確認された。これは調査区北側隣接地で営業する店舗等に給水するための水道管であり、水道管を撤去および移設することが困難であったため、やむを得ず調査区を水道管の東西で二分し、東を 1 区、西を 2 区と呼称して調査を行った。

調査終了後は第 1 次調査では調査の完了した状態で土地区画整理組合に引渡しを行い、第 5 次調査では埋め戻しを行い現状に復旧して土地区画整理組合に引き渡した。



図Ⅱ –2　第 1 次・第 5 次調査地点位置図

3. 調査の方法

調査は両調査とも現代の耕作土直下もしくは住宅の基礎構造物下より人力掘削を開始し、各遺構面を平面的に精査しつつ、下層へと調査を進捗させていった。

第 1 次調査では調査区を任意の 4m 四方のグリッドで区分けし、第 5 次調査では 10m 四方のグリッドを設定した。第 5 次調査では包含層等からの遺物の取上げは特に必要がある場合を除き、このグリッドごとに区分して取上げている。このグリッドは調査区の平面形に対して相対するように配慮され、国土座標に対しては任意の傾きを持っている。なお、第 1 次調査のグリッドは国土座標の傾きにあわせて設定されている。各調査のグリッドによる地区設定と国土座標との関係は各調査ごとに詳述する。

発掘調査は重機による機械掘削の後に人力によって遺物包含層を掘削し、必要に応じて遺構の精査を行った。出土した遺物・遺構についてはその都度写真撮影および図面の作成を行い記録にとどめた。調査区内の層位の堆積状況は必要箇所の壁面において観察し、その関係を記録した。

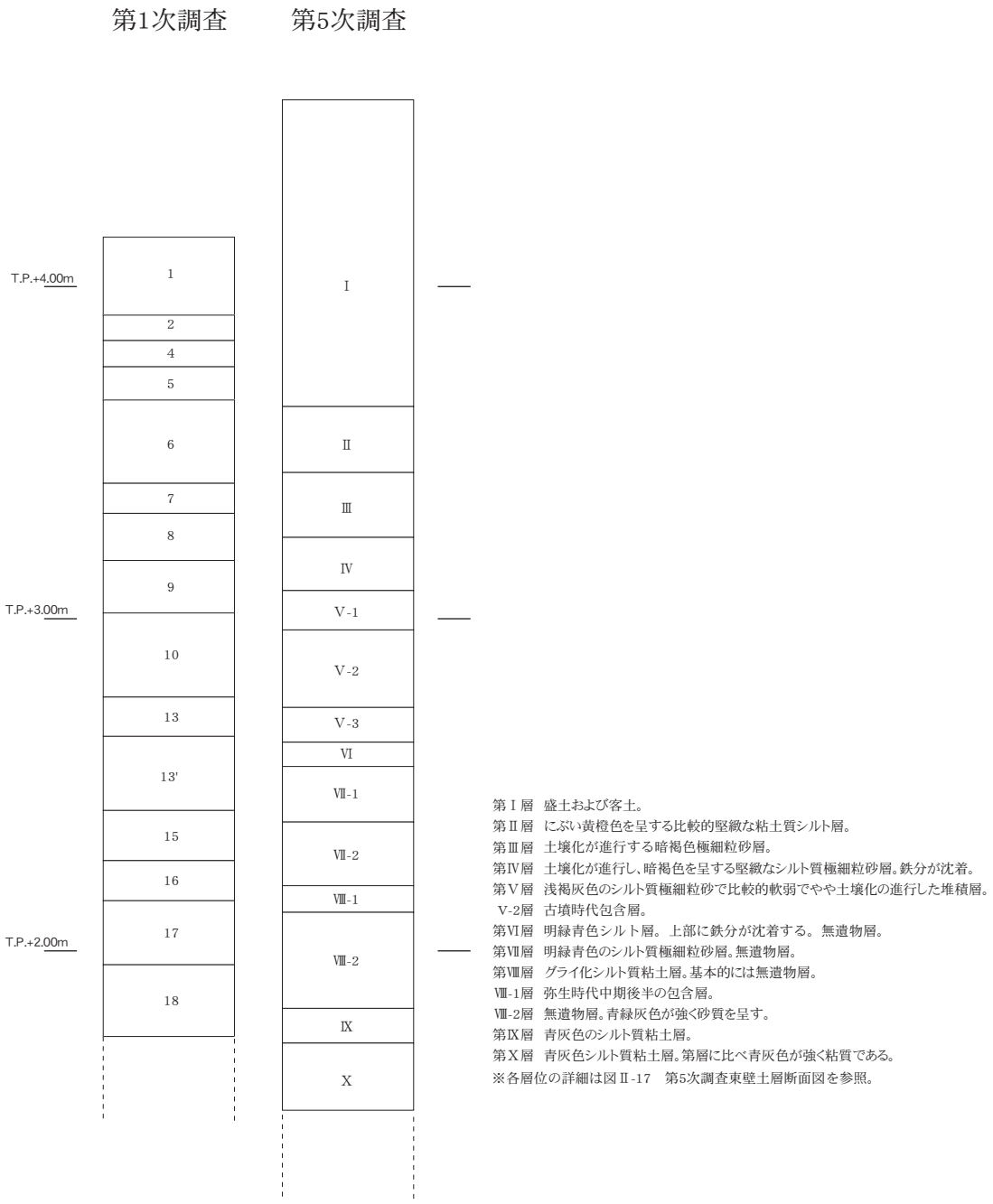
Ⅱ -2　基本的な層序

第 1 次調査区と第 5 次調査区は隣接する調査区であり、地形的に大きな変化もなく、概観する限りにおいて層序にも大きな相違点は認められない。調査年度等が異なり調査に若干粗密があるほか、各層位の呼称などに若干違いがあるものの、概ね近似した堆積をなしているものと考えられる。隣接した調査区の層位に異なる呼称を用いるといった煩雑さを避けるため、当章では両調査の層序を対比・整理し、類似する層位を同一の名称を用いて表現することとする。

1. 第 1 次調査の層序

第 1 次調査の現状は畑地と荒地であり、堆積の最上部は現代の耕土である。第 1 次調査の層序を概観すると図Ⅱ -3 のようになる。この下に層厚約 50 ㎝のマンガンを含む暗褐灰色のシルト質極細粒砂層（2 層～ 6 層）が堆積し、暗褐色の堆積（7 層）に漸移的に変化する。なお、7 層は比較的鉄分を多く含みやや堅緻な堆積である。8 ～ 9 層は明褐色のやや堅緻な粘質の堆積で、わずかながらマンガンが含まれる。次いで暗褐色でやや土壌化した 10 層が約 20 ㎝堆積し、ややグライ化して黄灰色を呈する 11 層・12 層から明黄褐色のシルト層（13 層）へ移行する。なお、11 層では古代～中世にかけての遺物の出土が微量ながら確認されている。13 層は上下でグライ化の進行状況が異なるため、グライ化の進んだ下部はやや青灰色を呈している。古墳時代

の遺物はこの 13 層下部のグライ層から出土しはじめる。14 層以下はグライ化の進行した粘土層で黒色～暗灰色を呈し、堅緻で湿潤な環境下では強い粘質を示す。古墳時代の遺物は 13 層～15 層にかけて出土するが、遺物の出土するレベルから考えて少なくとも 2 面以上の時期を考慮する必要があろう。16 層に移行するとやや明灰色シルト質粘土層に転じ、遺物は含まれなくなる。16 層下部から 18 層にかけては暗灰色のシルト質粘土堆積で堅緻な粘質を呈し、層厚は約 30 ～



図Ⅱ –3　第 1 次・第 5 次調査層位柱状図

50 ㎝を測る。16 層及び 18 層には弥生時代中期の遺物が包含されるが、17 層に遺物は含まれない。

2. 第 5 次調査の層序

第 5 次調査区の現状は宅地と宅地に付随する畑地である。調査区内の西側は宅地として利用されており、耕作面よりも 90cm ほど盛土を行って基礎を築いている。これに対し東半分は発掘調査直前まで耕作が続けられていたもので、宅地の盛土分周囲より低い。周囲の道路および店舗の高さは概ね宅地の高さに合うもので、畑地のみが周囲より低い状態であった。

層序を概観し、模式化すると図Ⅱ -3 のようになる。宅地の地表下 90 ㎝ほどは盛土（Ⅰ層）されており、次いで現代の耕作土（Ⅱ層）が見られる。以下褐色～黄褐色を呈するシルト質の極細粒砂層（Ⅲ層～Ⅴ層）が堆積しており、この中に中世及び古墳時代の遺物包含層が存在する。Ⅶ層以下はグライ層で、暗灰色と青灰色のシルト層が交互に堆積し、このグライ層の上部（Ⅷ層）より弥生時代中期の遺物が出土する。後述するが、弥生時代の遺構検出については包含層直下では全ての遺構を明確に検出し得なかったため、下の暗灰色粘土質シルト層（Ⅸ層）で再度遺構の検出を試みている。Ⅸ層以下は暗灰色と青灰色のシルト層が交互に堆積し、人為的な痕跡は認められない。なお、調査区の中央付近から西へ向かっては、徐々に傾斜をはじめ、調査区西端では大きな地形の落ち込み（落ち 1 ）となってさらに西へ下っている。

3. 第 5 次調査の層位

次いで、第 5 次調査では比較的明確に層序が確認されているため各層の堆積状況をやや詳しく述べておくこととし、次節での標準的層位設定の一助とする。各層位の記述は上部の層から順に列挙し、その特徴を整理する。遺構、遺物について特に記載しない層は無遺物層である。

第Ⅰ層　盛土および客土。宅地部分には基礎が残存する。層厚は約 90 ㎝～ 1m を測る。

第Ⅱ層　にぶい黄橙色を呈する比較的堅緻な粘土質シルト層である。調査区全域に層厚 35 ㎝程度で堆積している。Ⅱ -1 層からⅡ -2 層へは漸移的に変化し、層理面を明確に追いつづけることは困難である。層理を面として確認することは難しいが、Ⅱ -2 層になるとⅡ -1 層に比して灰白色シルトブロックが多く混入し、湿潤な状態ではより強く粘質を示すようになる。中世～近代までの遺物がこのⅡ -2 層中に微量ながら含まれている。

第Ⅲ層　Ⅱ層に比べて土壌化が進行しやや濃い褐色を呈している。Ⅱ層と同様の灰白色シルトブロックが混入し、弱い粘性を示す。調査区全域で厚さ 15 ～ 20 ㎝ほどの堆積として確認される比較的堅緻で安定した堆積である。

第Ⅳ層　土壌化が進行し、暗褐色を呈する堅緻なシルト質極細粒砂層である。層厚は 5 ～ 15cm

と薄いが調査区全域で認められる。鉄分の沈着が認められる。

第Ⅴ層　浅褐灰色のシルト質極細粒砂で比較的軟弱でやや土壌化の進行した堆積層である。調査区西部では第Ⅳ層との層理面近くでは鉄分が沈着し、部分的にやや堅緻な鉄分の層が形成される。土壌化の進行状況やグライ化の程度によってさらに 4 層に小区分できるが、調査区全域を通して観察すると変化が漸移的で層理が明確でなくなる箇所も多い。第Ⅴ層は第 1 次調査で古代～中世の遺物が確認された層位（第 1 次調査 10 ～ 11 層）と高さが対応し、堆積の様相にも大きな違いが認められないことから同時期の遺物が出土するものと期待されたが、当該期の遺物は全く確認されなかった。なお、第Ⅴ層下部（Ⅴ-2 層）からは須恵器を含む古墳時代の遺物が出土する。また、第Ⅵ層の存在しない箇所では、第Ⅴ層が第Ⅶ層と接することとなるが、この場合の層理面はやや不明瞭であることが多い。

第Ⅵ層　明緑青色のシルト質極細粒砂層である。約 10 ～ 15cm の厚みで堆積しており、調査区の西半にのみ分布する。上部では酸化や鉄分沈着の影響で黄灰色を呈すが、下部はややグライ化して青灰色が強くなる。第Ⅵ層には遺物は含まれない。

第Ⅶ層　当層以下はグライ化の進行したシルト質粘土層が確認される。第Ⅶ層は土壌化の進行した暗灰色を呈しており、粒径はやや粗い。上面では乾痕と思われる痕跡が認められる。なお、Ⅶ-1 層からⅦ-2 層への変化は漸移的で明瞭な層理面を追いつづけることは困難であるが、グライ化の差による色調等の違いで区分される。上面では若干古墳時代の遺物が見られるが、堆積後に第Ⅴ層に侵食された際の遺物が混入したもので、基本的には無遺物層である。Ⅶ-1 層は調査区全域で確認されるが、Ⅶ-2 層は調査区中央付近では地形の隆起に沿って層厚が薄くなり、一時消滅するが西側への緩やかな傾斜にともなって再度出現する。なお、Ⅶ-2 層は上下に区分可能な箇所もあるが、西側で曖昧になり、層理面が明瞭でなくなる。

第Ⅷ層　グライ化した緑灰色～青灰色を呈するシルト質粘土層である。第Ⅶ層に比して緻密なシルトで構成され、やや強い粘質を示す。上半（Ⅷ-1 層）が弥生時代中期後半の包含層であり、下半（Ⅷ-2 層）は無遺物である。遺構は上半部層中から切り込んでおり、また、微量ながら堆積層中に炭化物が見られるなど生活面を形成していたことがわかる。上半部はやや土壌化が進行している。これに対し下半部は青緑灰色が強く粒径がやや大きくなり砂質を呈すが、乾燥すると堅緻で湿潤な環境では強い粘質を示す。

第Ⅸ層　青灰色のシルト質粘土層であるが、第Ⅷ層に比べグライ化が進行して暗灰色を呈する。第Ⅷ層下半部上面で検出し得なかった遺構は第Ⅸ層上面で追認している。遺物を含まず、均質で強い粘質を示す。第Ⅷ層から切り込んだ遺構は第Ⅸ層に及ぶものも多く、出土する遺物は遺構に伴うものである。なお、第Ⅸ層以下は第 5 次調査においてのみ掘削して確認したもので、第 1 次調査ではⅧ-2 層までで掘削が終了しており対応する層序は不明である。

第Ⅹ層　青灰色シルト質粘土層で、第Ⅸ層に比べて青灰色が強く粘質である。この層以下は青灰色シルト層と暗灰色シルト層の互層が 1m 以上続き、人為的な痕跡は見られなくなる。

4. 層位の対比

両調査の層位を対比すると、地形に若干の起伏は認められるものの、全体的にほぼ平行な堆積状況を示していることがわかる。高さを基準に観察しても、各包含層は概ね同一のレベルに堆積していることが看取できる。しかし、層位のいくつかには若干の相違点を指摘できることも確かであり、各層の対応関係を明らかにすることが必要である。そこで、以下では包含層を主に両調査の層位を対比し、対応する層位を整理することとする。

(1) 中世～近世の包含層（？）

第 1 次調査の 6 層～ 7 層、第 5 次調査の第Ⅱ層が概ね該当する。出土する遺物はいずれもローリングを強く受けて摩滅した細片で、原位置を保った出土状況ではない。また、出土量もごくわずかで遺物の属する時期にも時間幅が想定できるため、今後の調査で明確に遺構面が捉えられる可能性は否定できないが、今次調査の成果のみで包含層として評価することは難しい。なお、下位層では第 1 次調査の 8 層に第 5 次調査の第Ⅲ層が、9 層に第Ⅳ層が対応している。両層とも埋蔵文化財は含まれないが、9 層・第Ⅳ層は鉄分を含み暗褐色を呈するやや堅緻な堆積で、上下の層とは明確に区別できるため、各層位を対応させるメルクマールとなる。

(2) 古代～中世の包含層

第 1 次調査の 10 層～ 11 層と第 5 次調査の V-1 層が対応するものと考えられる。第 1 次調査では備前焼の破片などが出土することから時期を想定しているが、第 5 次調査では時期を想定するに足る資料に恵まれていない。遺構面として明確な面も判然とせず、遺物の示す時期にも幅があることから、今後の周辺での調査が期待される。

(3) 古墳時代の包含層

古墳時代の遺物は大まかに明褐灰色のシルト質極細粒砂層とグライ化した粘質灰色シルト層の 2 つの層位から出土する。明褐灰色層に該当するのは、第 1 次調査の 13 層と第 5 次調査の V-2 層である。遺物の出土位置はいずれも層の下部からである。両者を比較すると V-2 層のほうがやや土壌化が進行した様相を示すが、遺物の出土量は明らかに 13 層が多い。

13 層（V-2 層）の下位層はグライ化した堅緻な粘質灰色シルト層が互層に堆積しており、それまでの堆積とは様相が大きく異なる。その中でも古墳時代の遺物を出土するのは、第 1 次調査の 14 層～ 15 層と第 5 次調査のⅦ層である。相対的な層序から考えて 14 層・15 層と第Ⅶ層は連続した層位であると考えられるが、第 1 次調査では下部の 15 層に遺物が集中するのに対し、第 5 次調査では上部（Ⅶ -1 層）からの出土が目立つ。また、西側に位置する 14 層・15 層のほ

うが、土壌化が進行し黒色に近い色調であるのに対し、第５次調査のⅦ層は青灰色を呈すなど若干堆積状況もしくは堆積後の環境に違いがあることが想定される。このような現象に対応するかのように、包含層からの遺物の出土量は第１次調査が第５次調査を上回る。

第５次調査の東部から中央部にかけてはⅦ層中にも遺物を含まない層が認められる（Ⅶ-2 層）。この層は第５次調査でのみ確認される層位で、やや低位の箇所にのみ堆積が確認される。したがって第５次調査においても中央付近のやや高位の箇所では消滅して、第１次調査と同様に第Ⅶ層直下から弥生時代の包含層へ移行するようになる。

（4）弥生時代の包含層

弥生時代の包含層に該当するのは、第１次調査の 16 層・18 層と、第５次調査のⅧ-1 層である。弥生時代の包含層は第１次調査と第５次調査で様相が異なる。古墳時代の包含層（15 層・第Ⅶ層）下位に堆積する青灰～灰色シルト層（第１次調査 16 層・第５次調査Ⅷ-1 層）は高さもほぼ等しく、同様に弥生時代中期の遺物を含み、その下層には無遺物の堆積層（第１次調査 17 層・第５次調査Ⅷ-2 層）が見られる。上記までは全く同様の堆積状況であるが、第１次調査では 17 層直下の 18 層に良好な遺物が含まれるのに対し、第５次調査ではⅧ-2 層以下には包含層が認められない。隣接地する地点の層位がこのような齟齬をきたしていることはきわめて不可解といえる。なお、第１次調査の 18 層中で遺物が確認されるのは西半のみで、東側では全く遺物は出土していない。また、第１次調査の 18 層と第５次調査の第Ⅸ層上面は近しいレベルにあり、第５次調査で遺構の検出を第Ⅸ層上面で行っていること等を勘案すると、包含層としての 18 層の評価は慎重であらねばならない。このことについては後章で検討することとする。

5. 標準的な層序

（1）大別層序の設定

これまでの対比の結果から、各次調査の層序の対応関係を埋蔵文化財の有無に着目して大別すると、A～Gの7つに区分できる。この７つの層を大別層序として設定することで、各次調査の層位の内容を明確に表記する一助とする。次いで、各層についてその概要を記す。

西中野第 A 層　耕作土および盛土を含む近代～現代に属する層位である。

西中野第 B 層　中世～近代にかけての遺物が散見される層位である。現段階ではこの層位の詳細を明らかにすることはできないが、今後の調査成果によっては明確な遺構面を確認し、細分することができる可能性がある。

西中野第 C 層　明褐灰色を呈するシルト質極細粒砂で鉄分がやや沈着する。埋蔵文化財を含まない、いわゆる無遺物層である。この層についても堆積の時期等不明な点が残り、正確な評価は難しい。B 層とあわせて、今後の資料増加が期待される。

<table>
<tr><th>大別層序</th><th>第 1 次調査</th><th>第 5 次調査</th><th>埋蔵文化財の有無等</th><th>層位の様相</th></tr>
<tr><td rowspan="5">A</td><td>1</td><td rowspan="5">Ⅰ</td><td rowspan="5">耕土・客土</td><td rowspan="5">褐灰色粘質層</td></tr>
<tr><td>2</td></tr>
<tr><td>3</td></tr>
<tr><td>4</td></tr>
<tr><td>5</td></tr>
<tr><td rowspan="2">B</td><td>6</td><td rowspan="2">Ⅱ</td><td rowspan="2">中世～近代包含層 (?)</td><td rowspan="2">褐色粘質層</td></tr>
<tr><td>7</td></tr>
<tr><td rowspan="2">C</td><td>8</td><td>Ⅲ</td><td rowspan="2">無遺物層</td><td rowspan="2">明褐色粘質層</td></tr>
<tr><td>9</td><td>Ⅳ</td></tr>
<tr><td rowspan="3">D</td><td>10</td><td rowspan="3">Ⅴ -1</td><td rowspan="3">古代～中世包含層（?）</td><td rowspan="5">明褐灰色粘質層</td></tr>
<tr><td>11</td></tr>
<tr><td>12</td></tr>
<tr><td rowspan="5">E</td><td>13</td><td>Ⅴ -2</td><td rowspan="5">古墳時代包含層</td></tr>
<tr><td>13’</td><td>Ⅴ -3</td></tr>
<tr><td>-</td><td>Ⅵ</td><td rowspan="3">灰～黒色粘質層
（グライ層）</td></tr>
<tr><td>14</td><td rowspan="2">Ⅶ -1</td></tr>
<tr><td>15</td></tr>
<tr><td rowspan="2">F</td><td>-</td><td>Ⅶ -2</td><td>無遺物層</td><td>青灰色粘質層（グライ層）</td></tr>
<tr><td>16</td><td>Ⅷ -1</td><td>弥生時代包含層</td><td>灰色粘質層（グライ層）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">G</td><td>17</td><td>Ⅷ -2</td><td>無遺物層</td><td rowspan="4">青灰～暗灰色シルト互層
（グライ層）</td></tr>
<tr><td>18</td><td>-</td><td>弥生時代包含層（?）</td></tr>
<tr><td>-</td><td>Ⅸ</td><td rowspan="2">無遺物層</td></tr>
<tr><td>-</td><td>Ⅹ</td></tr>
</table>

表Ⅱ –1　大別層序対応表

西中野第 D 層　古代～中世所産の遺物を包含する堆積層である。第 1 次調査では一部で遺構面らしき面を確認しているが、遺物も摩滅しており様相をあきらかにする遺構にも恵まれていないため、評価しがたい層位である。しかし、周辺での試掘確認調査においても常に確認される層位であるため、今後プライマリな遺物・遺構に伴った資料が確認される可能性は高いものと考えられる。

西中野第 E 層　古墳時代後期の遺物を含むシルト層である。グライ化が進行し強い粘質を呈するため、色調・質感ともに上位の層と明らかに区別できる堆積である。東京湾平均海水位より概ね 2.8m ほど上位から確認される。既往の試掘確認調査等の成果からも古津賀地域に広域に存在することが明らかな層である。

西中野第 F 層　弥生時代中期の遺物を含む堆積層である。この層もグライ化して青灰色～暗灰色を呈する場合が多い。弥生中期の遺物が確認されているのは当該調査地点と北東方向に 400 m ほど離れた東ナルザキ丘陵の裾部のみで、分布の状況は明らかでない。

西中野第 G 層　当該層はシルト～粘土が堆積する無遺物層である。還元作用やグライ化の影響で青灰色～灰白色、黒色を呈する層が互層に堆積する。現在 G 層以下で埋蔵文化財は確認されていない。

（2）層位の記述

以上、第 1 次調査及び第 5 次調査の層序を整理し、両調査の層序を比較した。この結果、各調査地点の層位は 7 つに大別された層序に区分することができた。次章以降では各調査の層位名を記述する場合、調査個別の層位名とともに、この大別層序を加えて記述することとする。具体的には○層（第 A 層）のように調査時の層名の後に大別層序を表記する。

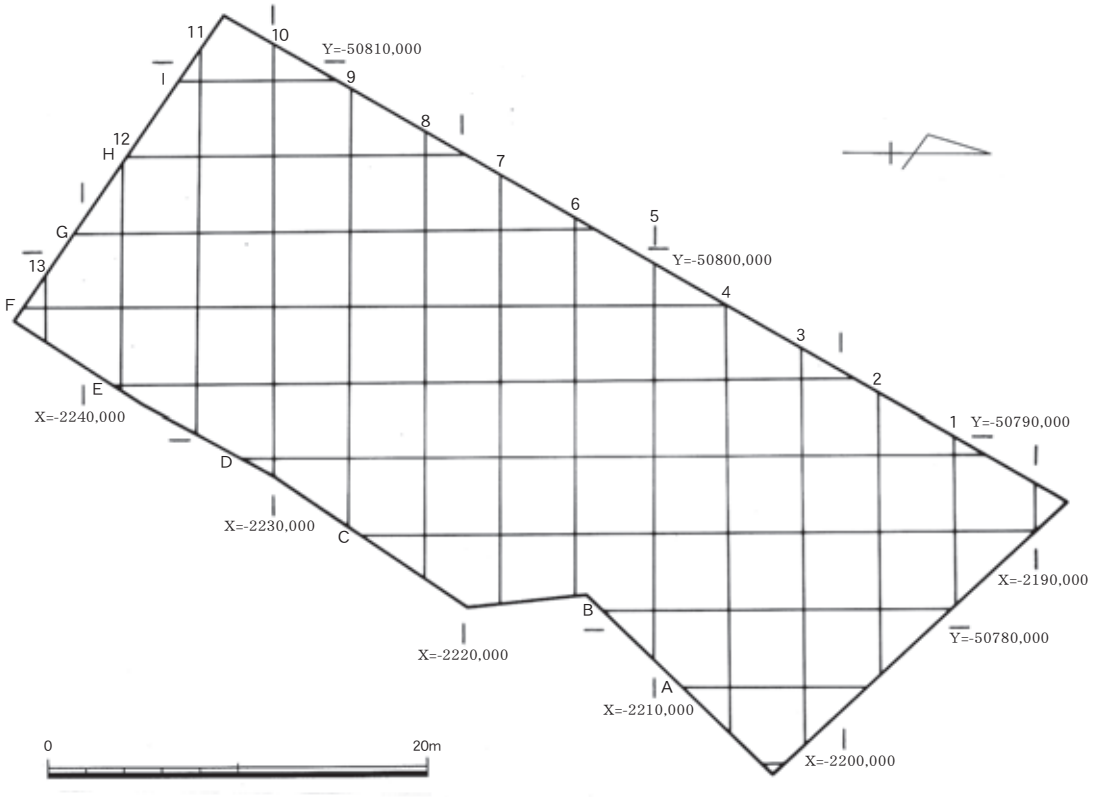
II-3　第 1 次調査の成果

1. 第 1 次調査の経過

第 1 次調査の西半については中世の明確な包含層を確認し得なかったため古墳時代の包含層まで掘削を進めたが、東半掘削時に耕土下より中世の所産と考えられる遺物等を確認したため東半については遺物を出土した層位以下を精査し、遺構検出に努めた。古墳期の包含層では部分的に遺物が密集する地点が認められたため、遺物の出土レベルにおいて遺構の精査もあわせて行った。なお、古墳時代の包含層直下で弥生時代の遺物も確認しているが、遺構面を明確にとらえるには至っていない。また、梅雨期の降水および台風などで数回に渡り調査区が水没し、壁面が崩壊するなどの影響が随所に生じた。

2. 設定したグリッド

第 1 次調査のグリッドは公共座標の傾きにあわせて 4m の正方形を設定した。このグリッド



図Ⅱ –4　第 1 次調査グリッド設定図

図Ⅱ–5　第1 次調査遺構平面図

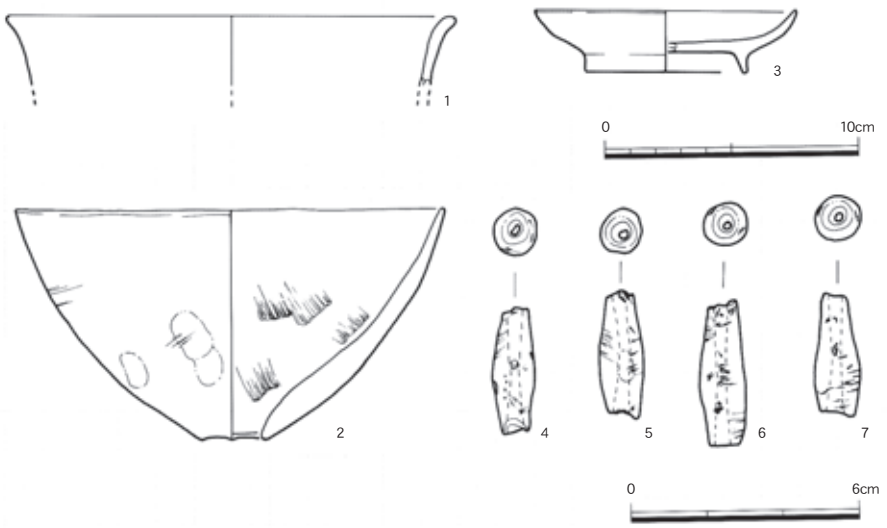
の境界線に対して北からに南向かって1～12、東から西に向かってA～Iの呼称を割り当て、各境界線の北東隅の交点をそのグリッドの名称とした。各グリッドの名称と国土座標との関係は図II-4 のとおりである。

3. 検出した遺構と遺物

(1) 古代～中世の遺構と遺物

10層～11 層 (第 B 層)から古代から中世にかけての遺物が確認されている。この検出面では、明確な遺構は確認されていない。

杭の打込面が当該時期のものであるかどうか判然としないため評価は難しい。この他には明確な遺構は確認されておらず、生活面自体を明確に把握することはできない。出土遺物としては、図 II-6 に掲げたものはいずれも1～5層（A 層）の耕作土および 12 層（D 層）までの中近世の包含層より出土した遺物である。3 を除く1～7は耕土および客土からの出土で、原位置を留めたものではない。3 は中世の包含層 (10～12 層) の出土である。5は、小型の土錘である。最大径が 1.2cm ほどで土錘のなかでも小型のものである。欠損することなく残存するが、土錘内部の穿孔は充填された土が硬化し、除去ができなかったため内部の調整は不明である。4、6、7 も同様に、中近世の包含層から出土する土錘である。いずれも3.4～4cmほどの小型のものである。両端から先端の丸い櫛状の刺突具で穿孔をおこなっている。1 は、土師器甕であろうと思われる。口径は 17.8cm ほどに復元される。体部から緩やかに外傾し口縁端部でやや外反する。破片のため時期は不明である。2 は、土師質の甑である。口径 は17cmを測り、鉢状の器形をなすが底部の最下部に 1 ヶ所穿孔がみられる。底部の穿孔は直径 2cm ほどで焼成前に穿たれたものである。器形は底部から口縁にむけて滑らかに外反し、端部は丸くおさめている。外面内面ともにナデ主体で仕上げられ、内面にはハケ調整が確認される。このタイプの甑は使用する時期に幅が認められるため時期を限定することが難しいが、胎土から古墳時代から中世までの所産と思われる。3



図Ⅱ –6　古代～中世包含層出土遺物

は、見込み及び体部外面に青色の釉が施されている。高さ 3mm ほどの高台がつき、高台端部は比較的尖って終わる。包含層からの出土ではあるが近代以降の所産であろうと思われる。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

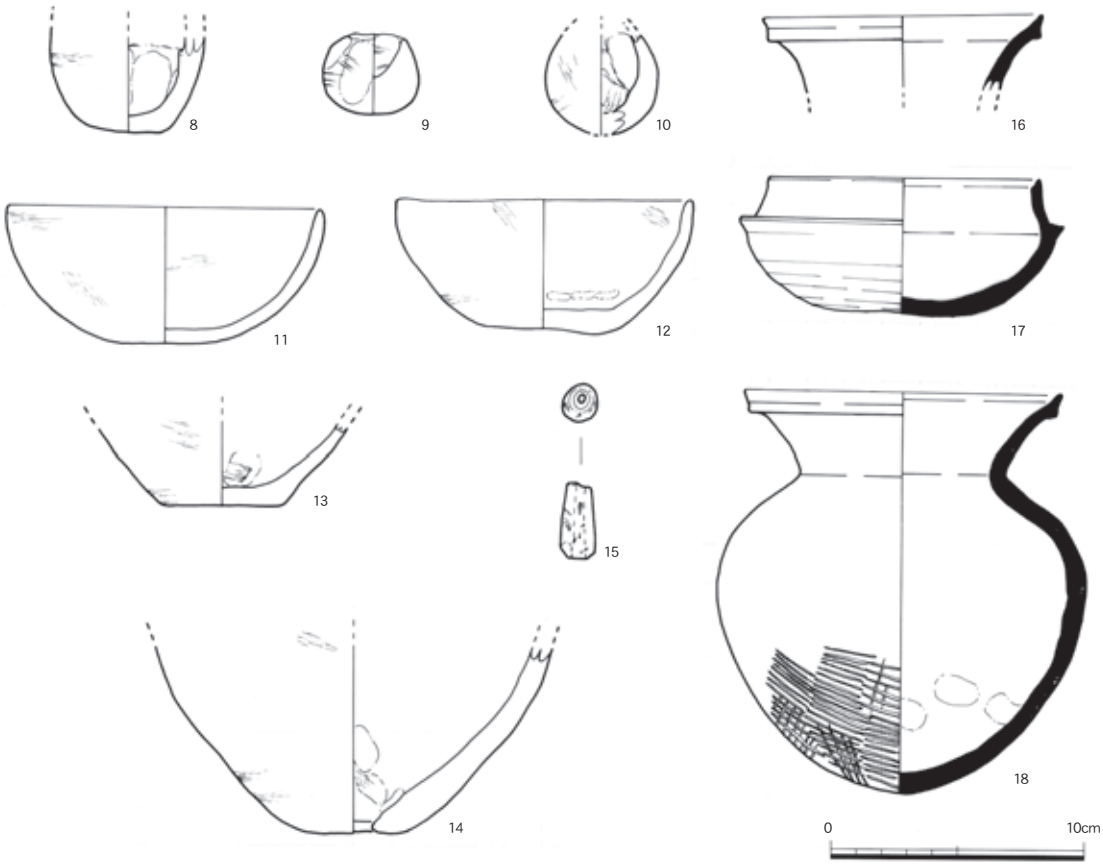
13 層から 15 層にかけては古墳時代の遺物が出土するものの、明確な遺構は全く確認されていない。13 層と 15 層中の 2 面において数箇所で一定のまとまりで出土する土器群が確認されているのみである。これらの土器群から出土する遺物の中には滑石製の粗製勾玉や臼玉等の石製品や手づくねのミニチュア土器等が含まれている。土器片が密集する場合も概ね1～3個体分程度の量であり、接合しても完全な個体まで復元することができない場合が多い。これらの遺物と祭祀行為との関連性については今後さらに検討されなければならないものと思われるが、第1次調査での遺物の出土状況は、既往の祭祀関連遺構の様相に比べて遺物の密度も低く、祭祀関連遺物の出土のみをもってすなわち祭祀関係遺構であるとの判断は尚早であろう。

先述したように、今次調査では遺物の分布状況は比較的散漫な箇所も多いため、上記の条件を勘案すると 13 層、15 層中でとらえた土器群は現段階では祭祀関連の遺物を含む土器群としてとらえておきたい。

13 層土器群　約 7m × 5m の範囲に遺物がまとまって出土し、掘りかたは持たない。特にこの広がりの西側では滑石製の臼玉 6 点がまとまって出土するなど祭祀に関わる遺物もみられる。

古墳時代の出土遺物は、13 層及び 15 層で確認されている。以下で挙げる遺物は特別記載しない限り包含層出土の遺物である

9、8、10 は所謂手づくね土器である。9 は外面に指頭圧痕が施されるが、他の 8、10 は外面はナデ調整で、内面に指頭圧痕がみられる。9 の指頭圧痕は斜め方向に並ぶように施されており、調整に加えて加飾する意図があった可能性もあろう。11 は、底部が丸底を呈す椀であり、口縁部にかけてやや内湾する。12 はやや平底の椀である。口縁端部はやや内湾気味に立ち上がり端部は丸く仕上げている。底部には指頭圧痕が残る。13は底部である。平底で体部へ向かって大きく開く。14 は甑である。丸底で体部に向けて緩やかに屈曲をみせ、やや外傾気味に立ち上がる。底部には焼成前に施された穿孔がみられ、周辺には指頭圧痕が集中する。内外面ともナデ調整で仕上げられている。15 は土錘破損品である。小型の土錘欠損品で、体部半が欠けているが一般的な小型の土錘であり、両端から刺突具で穿孔したものである。16 は須恵器壺口縁部である。外反する口縁の端部を断面三角形に肥厚させるタイプのものである。17 は須恵器坏身の完形品である。底部はやや丸底ぎみで受部でやや外反する。立ち上がりは内傾してやや長く伸び、端部は内側に段をなす。底部下半はヘラ削りで、内面にはナデ調整が認められる。18 は須恵器壺である。口縁は断面三角形をなし体部から外反気味に立ち上がる。底部は尖り気味の丸底で、底部の外面には叩き目の残りが顕著にみられる。その他は内外面ともナデ調整主体で仕上げられており、内面には指頭圧痕が若干観察される。焼成状態は良好である。19 は口径 14.9cm に復元さ



図Ⅱ –7　古墳時代包含層出土遺物 1

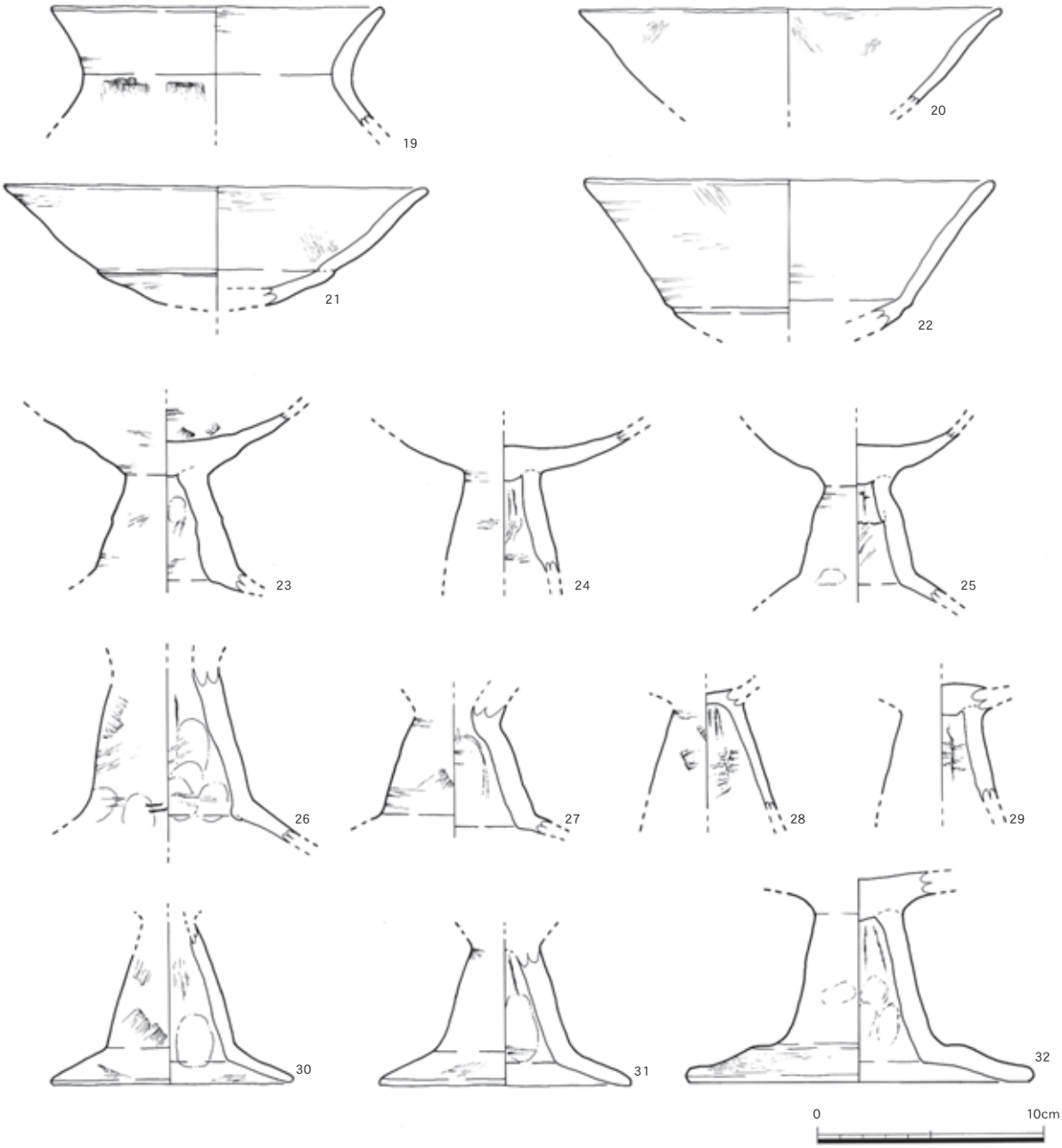
れる甕口縁部である。体部から頸部、口縁にかけて大きく外反し、端部は比較的丸く仕上げる。内面・外面ともナデ調整主体で仕上げられ、外面には頸部の際まで終わる縦方向のハケ調整がみられる。20 ～ 22 は高坏坏部である。20 は屈曲部をもたず口縁端部付近で外反する。端部は丸くおさめる。21 は屈曲後外側へ大きく伸びる。端部は外反して丸く仕上げる。22 は屈曲後角度を持って外傾する。端部はやや外側へ外反して丸くおさめる。23 ～ 32 は高坏脚部である。24、25 は屈曲部を持たない坏部が続くものと思われる。いずれも裾部で屈曲し外側へ延びるが 32 は脚部及び底部が残存する。底部は中ほどでやや屈曲し外側へ広がる。端部にはミガキ痕と思しき調整が認められる。底部外面にはハケ調整が顕著で脚部はナデで仕上げられる。30 は器壁の薄いタイプで坏部の接合部分も他のものとは異なる。

33 ～ 36、39 ～ 45 は甕である。33、34 は小型の甕である。体部から口縁部に向かって稜線をつくり、口縁は外傾する。口縁部径が体部径を上回るタイプのものであろう。35 は口縁部が外反し、端部は丸く仕上げられる。全体はナデ調整が施され、体部最大径部分に向かって器厚が減少する。内面の頸部には指頭圧痕がみられる。36 は口縁部が大きく外反する甕である。39 は口縁部が粗雑なつくりをなす甕である。頸部が屈曲後外側へやや外傾し端部は丸くおさめる。肩部に粘土帯接合痕が観察される。40 は屈曲後ゆるく外反する口縁を持ち端部は丸い。41 は肩の

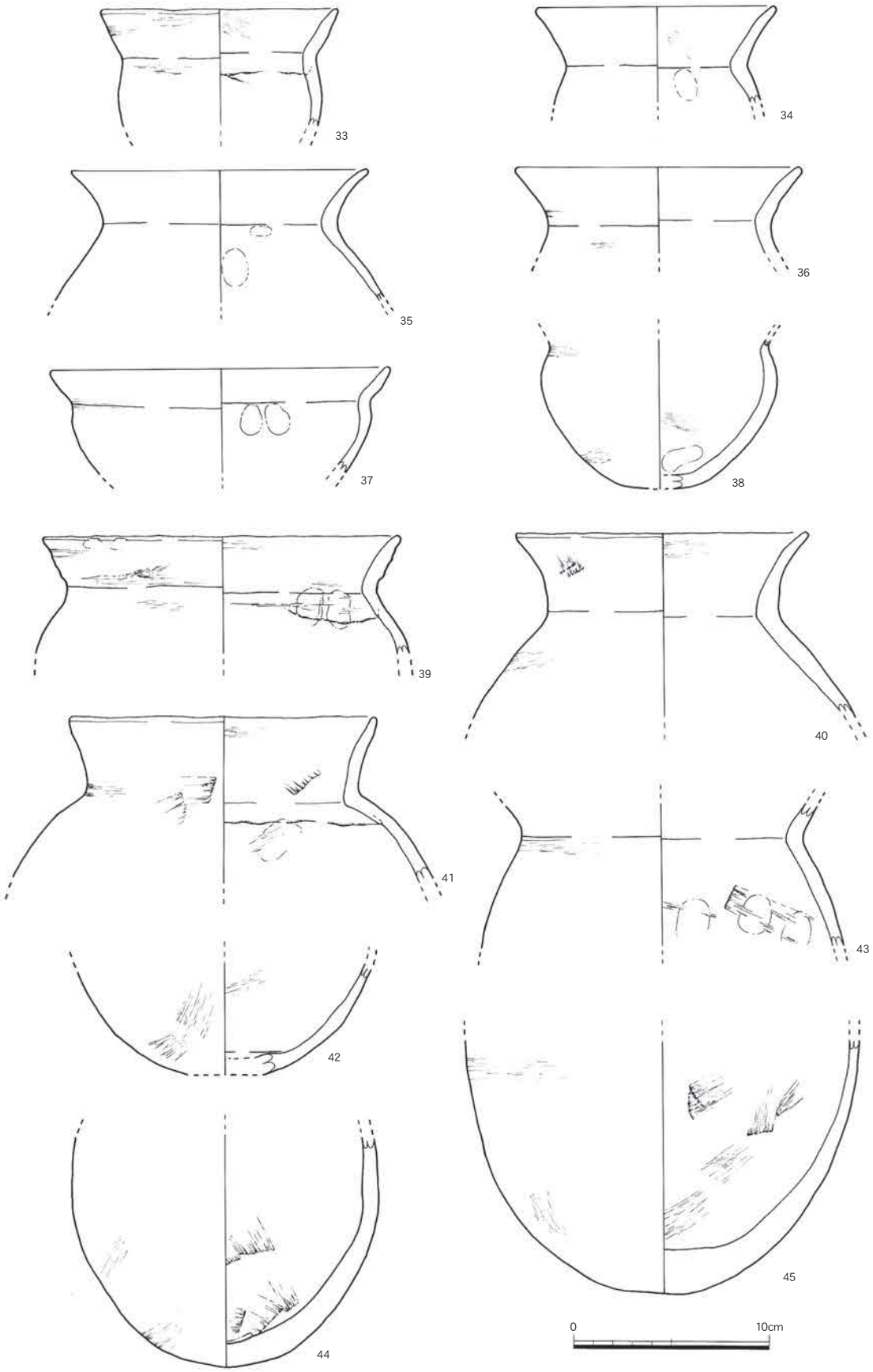
張る体部から明瞭な屈曲点をもって直立気味に口縁端部へ向かう。端部はやや内傾し丸くおさめる。43 はなで肩の体部から屈曲し、口縁は外側へ外傾気味に伸びる。42、44、45 は甕底部であろうと考えられる。丸底でナデ、ハケ調整で仕上げられる。44は底部がややとがる。37、38は鉢である。37 は 体部から「く」の字に屈曲し、端部は内湾気味に丸く仕上げられる。

(3) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、遺物のまとまりが数箇所と遺構との判定が難しい柱穴が数基確認されて



図Ⅱ –8　古墳時代包含層出土遺物２



図Ⅱ –9　古墳時代包含層出土遺物 3

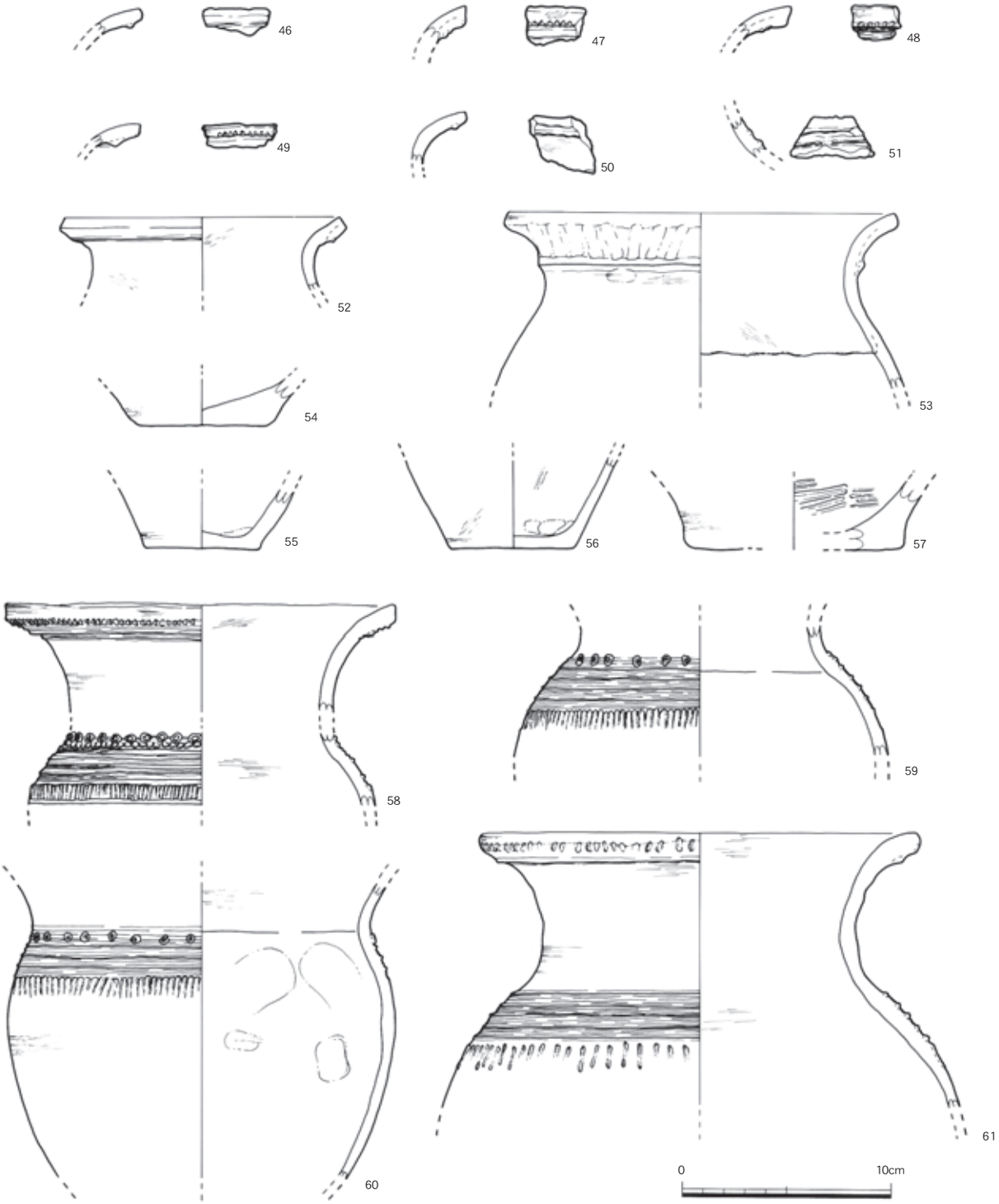
おり、明確な遺構は 16 層中で確認した柱穴 1 基のみである。直径約 40cm、残存する深さは 53cm を測る。埋土はφ2～3cmほどの 17 層の青灰色シルトと灰色粘土のブロックで構成され、炭化粒が散在する。柱跡は明確でないが、比較的明確に検出できる柱穴である。第 1 次調査ではこの柱穴以外に遺構は確認されていないが、柱穴が 1 基のみで存在することは不自然でありおそらく近隣に対応する柱穴群が存在したものと思われる。

弥生時代に属する遺物は主に 16 層を中心とする包含層（F 層）から出土する。器種構成は甕が圧倒的に多く、数点壺が出土する。また、出土する甕の大半がいわゆる南四国型甕と呼称される地域性の強い特徴を持ち合わせたものである。

46 ～ 51 は甕口縁部もしくは体部の小片である。46 は口縁部直下に微隆起突帯を施し端部は丸く仕上げる。47 の端部はナデ調整で仕上げて、やや凹状をなす。端部下端に細かい刻目が施文され口縁部外面に微隆起突帯がめぐる。49 はやや器厚の薄いもので口縁下端に細かい刻目と、口縁外面に微隆起突帯を巡らせている。50 は強く外反する口縁端部である。端部直下の外面に微隆起突帯が巡るが刻目はもたない。51 は甕頚部である。微隆起突帯が 2 条めぐる。52、53、58～61は甕である。52は強く外反する粘土貼付口縁をもつ。端部はゆるい凹状をなし口縁部下端に微隆起突帯が巡る。53は強く外反する口縁部をもち端部を丸くおさめる。頚部半ばに微隆起突帯が 1 条巡る。口縁部外面には連続する指頭圧痕がみられる。58 は南四国型甕である。外反する口縁の下端に細かい刻目を施文しその下に微隆起突帯が 2 条巡る。体部と頚部の境界付近に環状浮文が連続して貼り付けられており、その直下に竹管文が施される。肩部にも微隆起突帯が 3 条めぐりその間を粗い櫛描文でうめている。微隆起突帯の下部にはヘラ描原体による斜線が連続して施文される。南四国型甕の中ではやや肩の張りがあるタイプに分類できる。59もも同様の南四国型甕である。最大径が肩部にあり外反して口縁部へ向かう。60は南四国型甕である。肩を張らずゆるく外反して口縁へと向かっている。頚部には粗い櫛描文の上から環状浮文が貼り付けられており、その下に微隆起突帯が 3 条めぐる。微隆起突帯の間は粗い櫛描文でうめる。微隆起突帯の下にはヘラ描原体による斜線が連続して施文される。61 も南四国型甕である。大きく外反する口縁部は端部を丸く仕上げ、下半に粗く刻目を施す。口縁外面には微隆起突帯がめぐる。肩部から体部上半にかけて微隆起突帯が 4 条めぐり、その間を粗い櫛描文でうめる。微隆起突帯下には棒状浮文が一定の間隔で施文される。

54 ～ 57 は底部である。57 を除く 3 点はいずれも小径の平底で器厚は薄い。57 は平底で内面に工具痕が残る。器厚がやや厚く、やや大型の壺もしくは甕の底部と思われる。

図 II-11 に挙げる 78 以外の遺物はすべて甕である。個体による程度の差はあるものの、大きく外反する頚部に扁平な粘土帯を貼り付けて口縁部を形成し、端部はやや平坦に仕上げたのち口唇部下端に刻目を施すものが多い。また、刻目下部には微隆起突帯を 1 条以上巡らせている。62 は強く外反する口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、端部はナデて平坦に仕上げており頚部に微隆起突帯が 1 条巡る。口唇部に施文はなく、口径から小型の製品が想定される。63 も同



図Ⅱ –10　弥生時代包含層出土遺物 1

様に刻目を持たず小型のものである。66 は口縁部外面の微隆起突帯が 2 条巡るタイプ。73 は口唇部下端には刻目を持たず、口縁部外面に貼り付けられた微隆起突帯に刻目が施される。67 は強く外反せず口縁が大きく広がらない。69 は外反し大きく広がる口縁をもつが刻目などの加飾のないものである。71 は厚い粘土帯を貼り付けて口縁部を肥厚させており、口唇部下端に刻

目を施している。74 は南四国型甕体部である。肩の張らない胴部からゆるく口縁部に続いており、肩部との境界付近に環状浮文が貼り付けられる。微隆起突帯が 3 条肩部をめぐり、その間を荒い櫛描文でうめる。78 は長頸壺口縁である。頸部は外傾し、口縁部には扁平な粘土帯を貼付け肥厚させている。口縁部外面に長い刻目を施し、微隆起突帯が 6 条めぐる。刻目の下には円形浮文が一定の間隔で貼り付けられる。端部はナデ調整によって凹状を呈している。図 II-12 についても同様に大半が南四国型甕に分類される甕の口縁部である。85、92、93 は厚い粘土帯を付加して口縁部を肥厚させており、口縁端部に刻目を施している。94 は扁平な粘土帯を貼り付けて口縁部を形成し、貼り付けた粘土帯の外面に長い刻目を施す。端部はナデ調整によって凹状をなす。95 は粘土帯は貼り付けず口唇部下端に細かい刻目を施す。その下部に 1 条微隆起突帯を

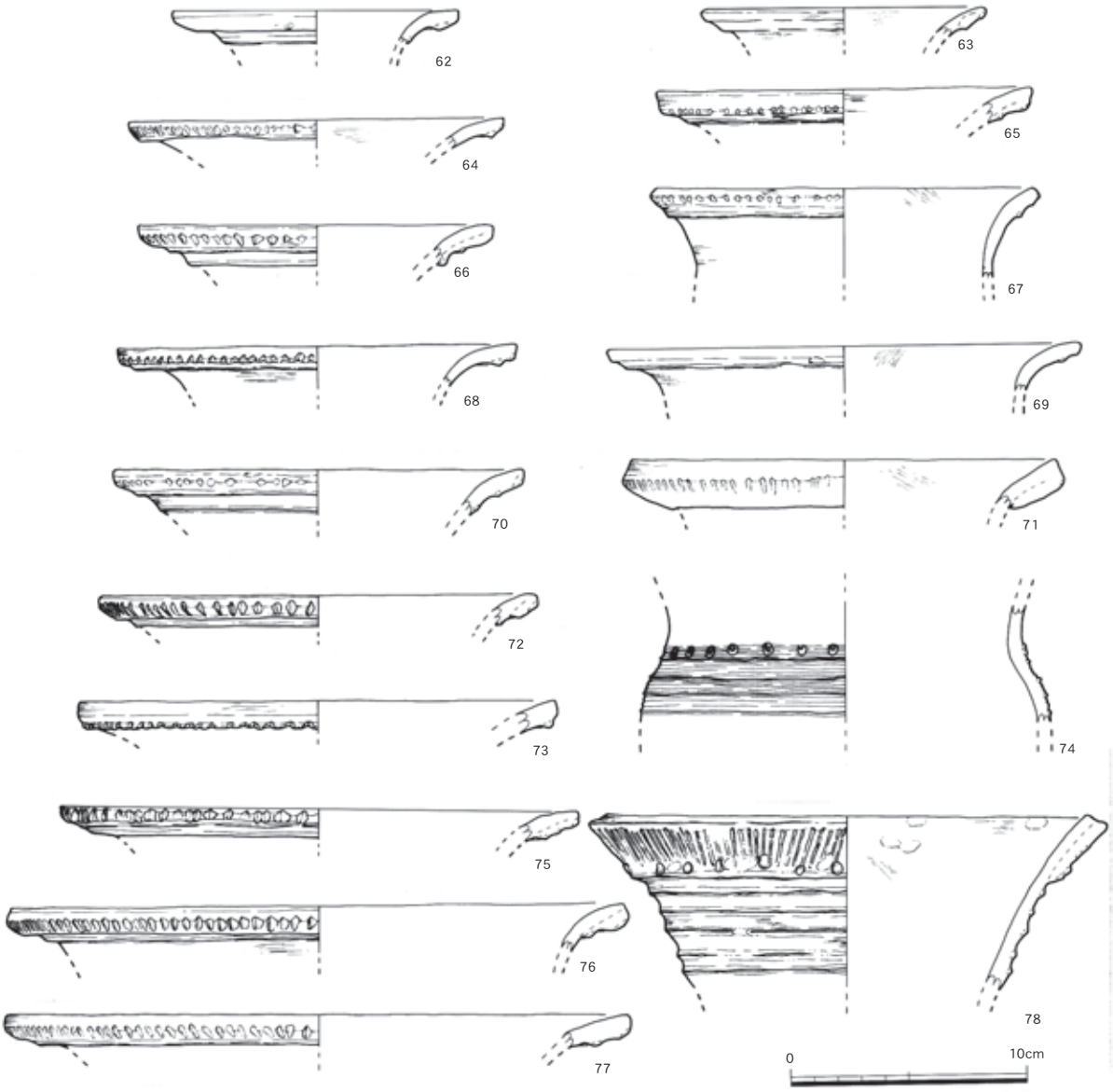
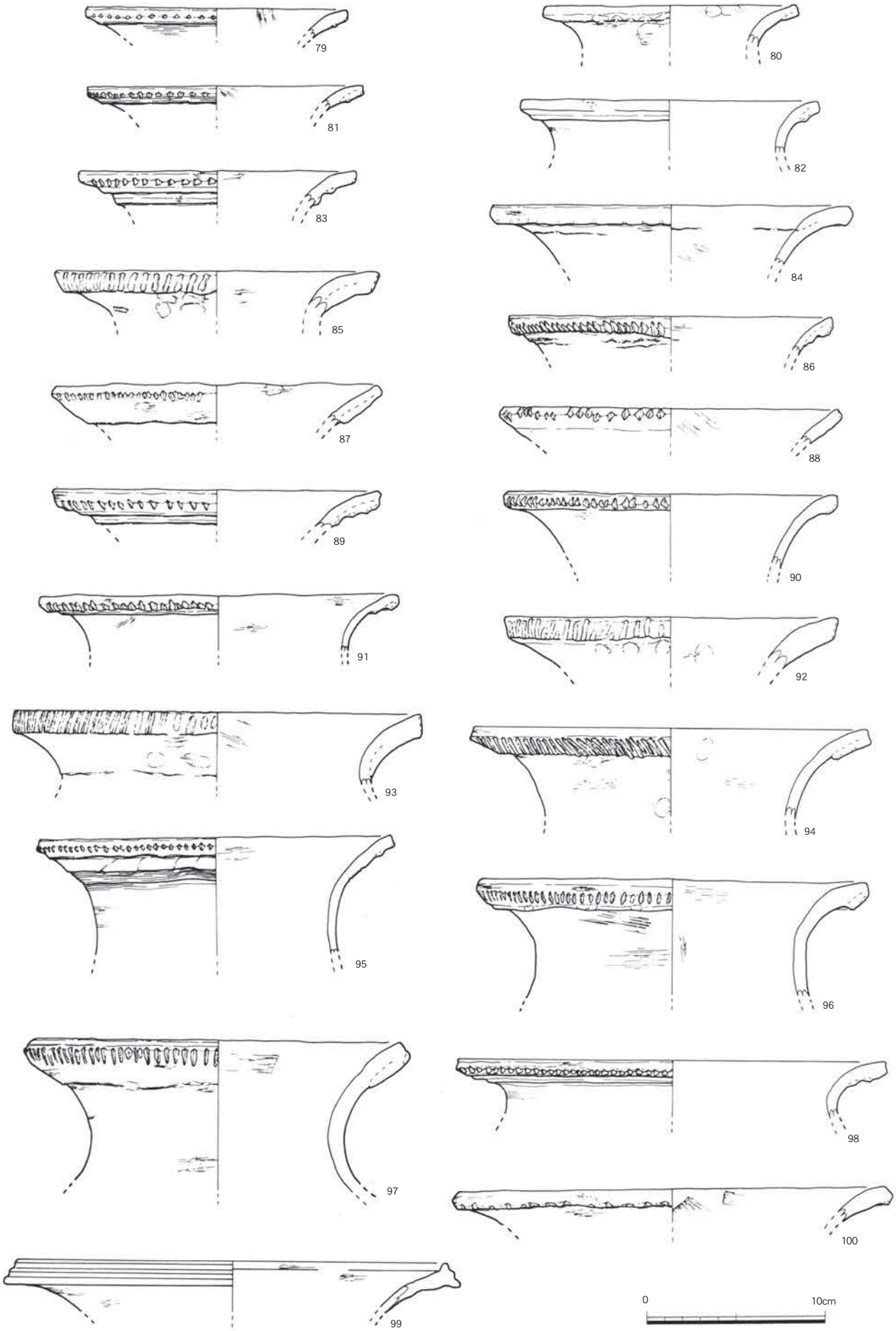
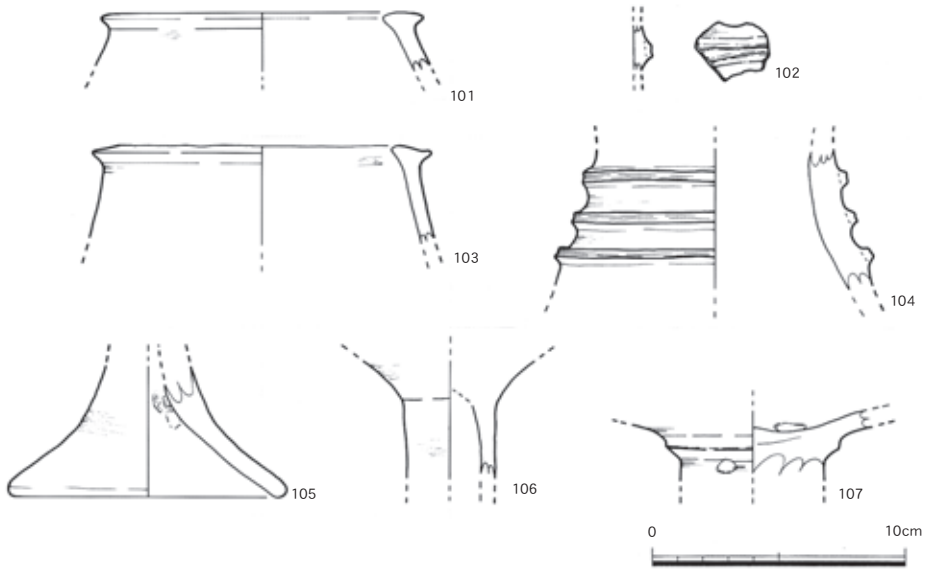


図 II –11　弥生時代包含層出土遺物 2



図Ⅱ –12　弥生時代包含層出土遺物 3



図Ⅱ –13　搬入土器

配し、微隆起突帯の下に連続する指おさえが口縁部を巡っている。97 は厚い扁平な粘土帯を付加し、端部はナデによって凹状を呈する。頸部は外反し、体部もやや肩が張るものと思われる。

搬入された土器　きわめて地域的な特徴を強く持つ一群の中に、図Ⅱ-13 で示すような一見して異なる胎土、器形を呈する土器が出土する。これらは大半が乳白色の胎土で外面に赤色顔料を塗布する。101、103 は口縁端部である。内傾して立ち上がる胴部から小さな鋤先状の口縁へと続く。両者共に外面に赤色顔料が塗布される。102 は体部片である。薄い器壁に M 字状突帯が貼り付けられている。104 は壺頸部である。M 字状突帯が 3 条貼り付けられている。105 は脚部である。明確な屈曲をもたずにゆるく外側へひらき端部は丸くおさめる。外面は剥落が著しいがまばらに赤色顔料が付着している。106 は高坏脚部である。坏部から垂直に脚部がのびる。107 は脚付壷脚部であろうと思われる。接合部で稜を持つ段を形成する。磨耗が著しく調整等を観察することはできない。なお、復元される器種を探すと 101 ～ 103、107 は脚付壺と呼称される同一器種である可能性が指摘できる。これらの一群は復元される器形、胎土などを考慮するといわゆる北部九州地方で生産される須玖式土器そのものには該当せず、九州大分県付近で出土する遺物と類似している。類似する器形の存在や、選択される赤色顔料の種類などによって、その出自は九州地方大分県東海岸沿岸地域に求めることができよう。

出土石器　108 ～ 116 は小型の打製石鏃である。これらの石鏃は基部の形状により凹むもの、突出するもの、平坦に仕上げるものに分類できる。石材は赤色チャート製のものが 6 点、サヌカイト製のものが 3 点出土している。108 ～ 113 は赤色チャートを石材とするものである。108 は 13.2mm と小型の製品で側縁に微細な剥離が連続する。作用部は基部に向かって直線的に伸びようと志向するものと思われるが調整は粗雑でいびつな形状をなしている。基部は平坦な形状をなすが、整形が途中の可能性もあるため未製品とすべきものとも思われる。109 は最大

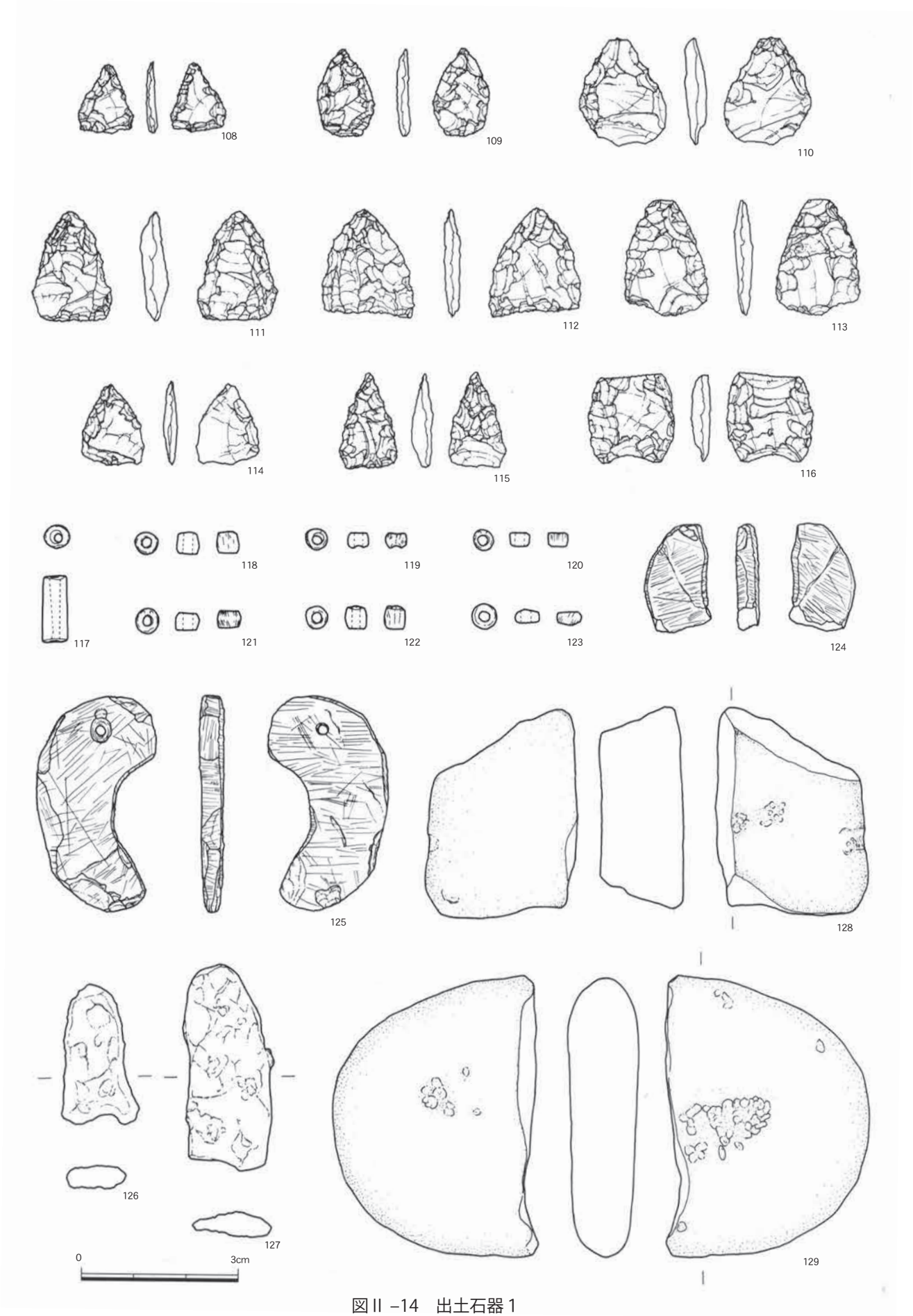
長 16.7mmをはかる小型の石鏃である。基部は突出し作用部は弧を描いて基部に至る。調整は粗雑で左右の形状はシンメトリーではない。110 は石鏃未製品である。作用部は基部に向かって直線的に開く。111 は基部を平坦に仕上げるもので、粗雑で浅い調整で作用部を形づくっている。作用部は直線的に基部へと向かっている。112 は基部が凹む形状をなす。作用部は緩く弧を描いて基部に至り、逆刺は短く、緩く凹む基部へと続く。片側の逆刺は欠損している。113 は基部がわずかに突出するもので、作用部は緩くカーブを描いている。側縁明瞭な逆刺をもたず基部は緩いカーブを描き、片側の逆刺を欠損する。114 ～ 116 はサヌカイトを石材とする石鏃である。114 は粗い調整で作用部を作り出す小型の石鏃で、左右の厚みも一定でない。基部の形状は平坦なものに分類される。115 も基部を平坦に仕上げるタイプに分類される。先端部は鋭角に尖り直線的に基部へと向かう。基部は腹面側からの 1 度の調整で仕上げられる。116 は基部が凹むもので、作用部側縁は緩いカーブを描き、逆刺は側縁の最大幅よりも内側に存在する。

石鏃の他に祭祀関連の遺物も確認されている。117 は緑色凝灰岩を石材とする管玉である。長さ 12.7mm、直径 4.9mmで孔径 2mm をはかる。124 は滑石製勾玉欠損品であろうと思われる。全体に擦痕が顕著に観察できる。125 は滑石製勾玉である。上部に孔径 2mm 程の穿孔があり、全体には擦痕が顕著にみられる。穿孔は片側からのみ行われている。118 ～ 123 は 13 層より出土した臼玉である。いずれも直径 4.5mm 前後の類似した大きさをはかる。

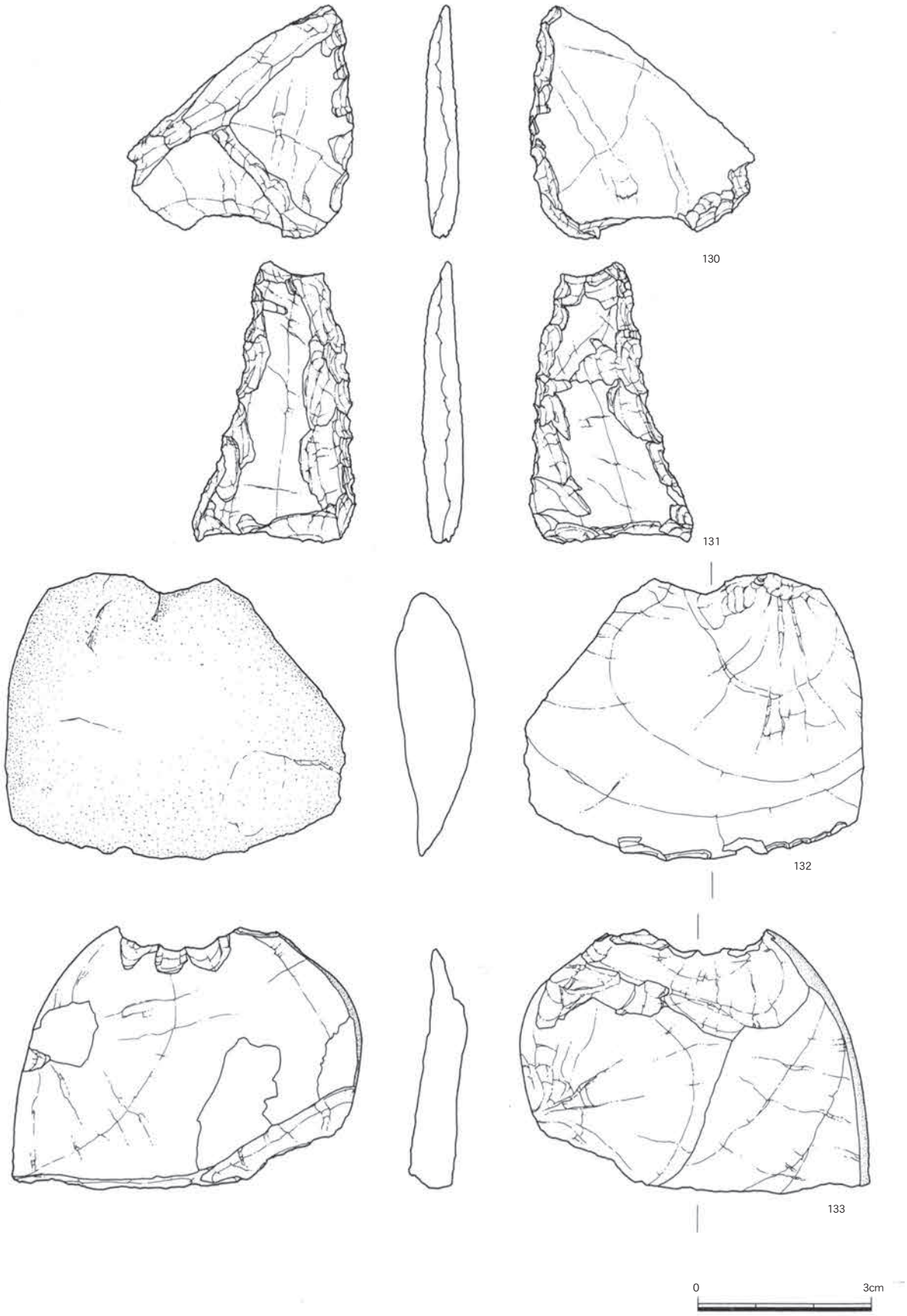
128 は砂岩製の砥石である。側縁の 2 辺は割れによって欠損するが、表裏にわずかながら擦痕が残存する。129 は花崗岩製の叩石である。片面に顕著な敲打痕が残る。本来楕円形であったとおもわれるが半分程は割れによって欠損する。表面は比熱してやや黒色に変色している。

130はサヌカイトを石材とするスクレイパーである。刃部は背面側に鋭角的に形成されており、腹面側にも二次的な剥離が観察できる。132 は周辺の河川敷等で用意に入手できる亜円礫を素材とするスクレイパーである。素材剥片を自然礫面を打面として取得しており、打点、バルバスカーも確認できる。背面側への調整はなく自然面が残る。刃部は素材剥片の下部にインバース調整によって腹面側に形成されている。刃部の調整は鋭角的な細かい剥離の連続による。131 は連続する剥離によって調整した剥片で、上端は直線的であるが、下端は緩くカーブして凹み、上下辺ともに重複する剥離が多く観察されている。側縁の片側は折れによって欠損し、片側は細かい剥離によってやや平坦に仕上げられている。大型の石鏃欠損品である可能性もあるが、器種の特定に至らなかったため二次加工のある剥片と分類しておく。133 は亜円礫を素材とした剥片の腹面側縁に連続する剥離を施している。自然礫面を打面としており打面周辺と下部に礫面が残り、打点、バルバスカー等も観察できる。インバース調整によるスクレイパーとすべきものか。

出土鉄器　鉄製品 2 点が出土している。126 は鉄鏃と思われる。作用部が直線的に基部にむかって伸び、逆刺は丸く短い。基部は錆等により判別しづらいが凹むものであろう。片側の逆刺は欠損している。127 は長軸 3.9cm、短軸 1.7cm をはかる鉄製品である。先端は丸く片側は直線的に伸びるがもう一方はややカーブして膨らむ。厚みは一定で厚みは最大で 4.8mm をはかる。


108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0
3cm

図Ⅱ－14　出土石器１



図Ⅱ –15　出土石器 2

Ⅱ-4　第 5 次調査の成果

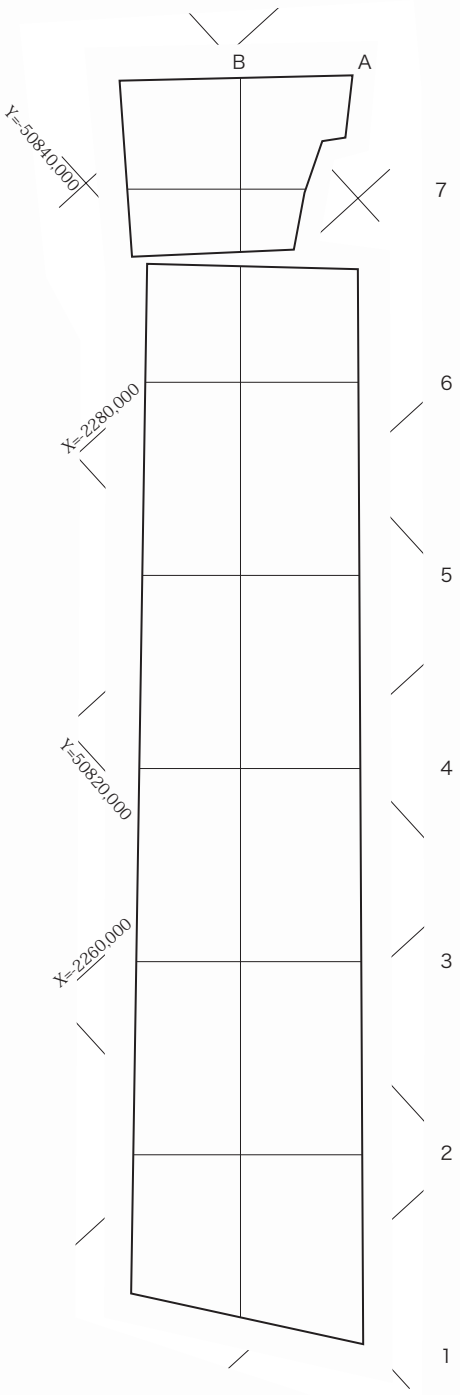
1. 第 5 次調査の経過

第 5 次調査では第 1 次調査の結果を踏まえ、調査区南側に 3 つの排水ポンプ槽を設置し、ポンプ槽内が一定の水位になると排水するように設定した。遺構面の調査では、第 1 次調査での中世包含層に対応する層位で遺構の精査を行ったのち、古墳時代の包含層までを掘削し遺物の確認に努めた。

この間、市内の小中学校より遺跡発掘調査の見学を計画し、6 校 287 名の生徒が現地を訪れて発掘を体験したほか、古津賀古墳などの見学も同時に行った。

調査では側溝掘削時に弥生時代中期の遺構および遺物を確認し、包含層および基盤層上面での遺物採取および遺構検出に努めた。なお、弥生時代の遺構は、包含層直下の基盤層上面では検出が困難であり、一部確認した遺構の他は無遺物層を掘り下げ一層下の面で確認することとした。また、当該調査も調査期間が夏場に及んだため、調査実施期間中に 2 度の台風襲来を受け、強風で仮囲いが破損した他、降雨によってポンプ槽のセンサーが故障をきたし、調査区が水没して壁面の一部が崩落するなどの被害があった。

第 5 次調査では調査中に地下埋設物が確認され、調査区の分割を余儀なくされた。このため当初より調査中であった 1 区の調査を 7 月 31 日に終了したのち埋め戻しを行い、調査に使用した矢板等を撤去して 8 月 5 日より 2 区の



図Ⅱ –16　第 5 次調査グリッド設定図

調査を開始した。2 区の調査は 1 区と同様に中世～弥生の各期にわたって行い、8 月 20 日に現地でのすべての調査を終了した。

2. 設定したグリッド

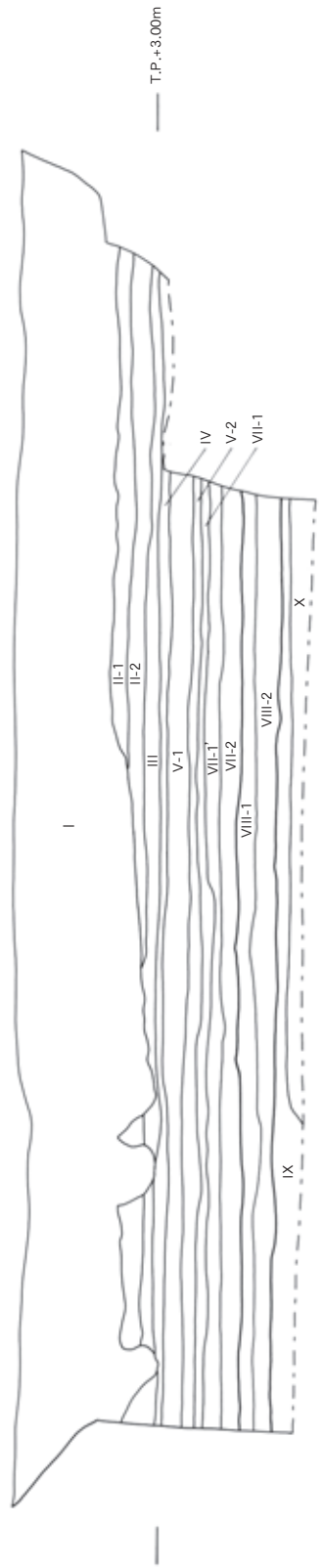
第 5 次調査では遺物回収や図面作成の便宜上、グリッドを設定して調査を行った。設定したグリッドは 10m の正方形で東から西へ 1～7、北から南へ A～Bの各単位を割り当て、北東隅の交点をグリッド名として、A1～B7 グリッドと呼称した。ただし、グリッドの設定は調査区の平面形に対して相対するよう配慮され、国土座標に対しては任意の傾きを持っている。調査区とグリッド及び国土座標の関係は図 II-16 に示すとおりである。

3. 検出した遺構と遺物

(1) 古墳時代の遺構と遺物

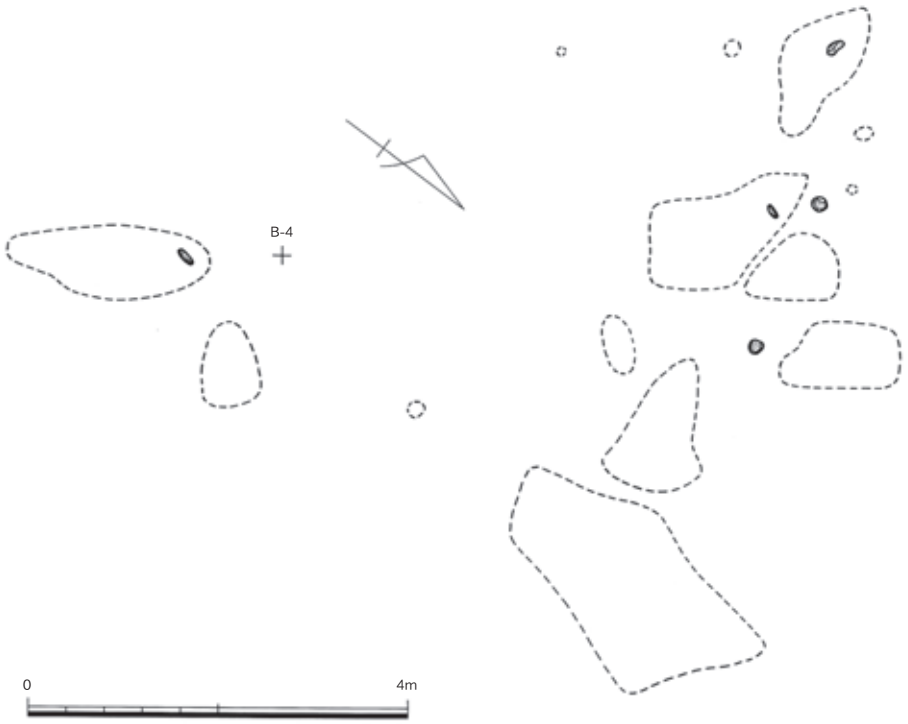
第 1 次調査では中近世の遺物が確認されていたが、第 5 次調査では明確な中近世の時期に所属する遺構・遺物ともに確認されていない。各面での検出等の都合上、SK-1～3までの遺構番号を使用した落ち込みが存在したが、遺構と呼ぶには至らない。したがって、埋蔵文化財が確認されるに至るのは古墳時代以前ということになる。

古墳時代の遺物を含む層位は、V-2 層から VII-1 層までで厚さ約 60cm 弱の間である。当該調査では古墳時代の遺物は出土するが、出土量は多いものではなく細片が多い。第 5 次調査で最も当該期の遺物を出



I　層　客土
II-1 層　10YR 6/4 にぶい黄橙 極細粒砂（～細粒砂）10YR 4/4 褐の斑文が入る
II-2 層　10YR 6/4 にぶい黄橙 極細粒砂（～細粒砂）10YR 4/4 褐の斑文が入る　微量遺物混入
III　層　10YR 5/4 にぶい黄橙 極細粒砂（～細粒砂）10YR 4/4 褐の斑文が入る
IV　層　10YR 3/3 暗褐 極細粒砂（～シルト）10YR 5/1 褐灰シルトが30～40％混入　無遺物層
V-1 層　10YR 5/6 暗褐 極細粒砂（～シルト）10YR 5/1 褐灰シルトが30～40％混入　10YR 4/4 褐斑文混入
V-2 層　基本的にV-1に類似するが10YR 4/4 褐シルトが多く混入、濃い褐色を呈す　古墳時代包含層
VII-1 層　上下層の影響を受ける漸移的な堆積　鉄分の沈着あり　微量遺物含む
VII-1'層　10YR 4/1（～3/1）褐灰シルト（～粘土）若干青緑シルト混入　微量遺物含む
VII-2 層　N 4/0～5/0灰粘土シルト　無遺物で均質で強い粘質
VIII-1層　N 5/0灰シルトに 10GY 7/1 明緑灰が30～40％混入　しまったシルト層　弥生時代中期の遺物含む
VIII-2層　10GY 7/1 明緑灰シルト（～極細粒砂）無遺物層
IX　層　N 4/0 灰シルトに 10GY 7/1明緑灰シルトが若干混入　黒～オリーブ灰といった印象
X　層　N 4/0 灰粘土に少量細粒砂混入　基盤層

図 II –17　第 5 次調査東壁土層断面図

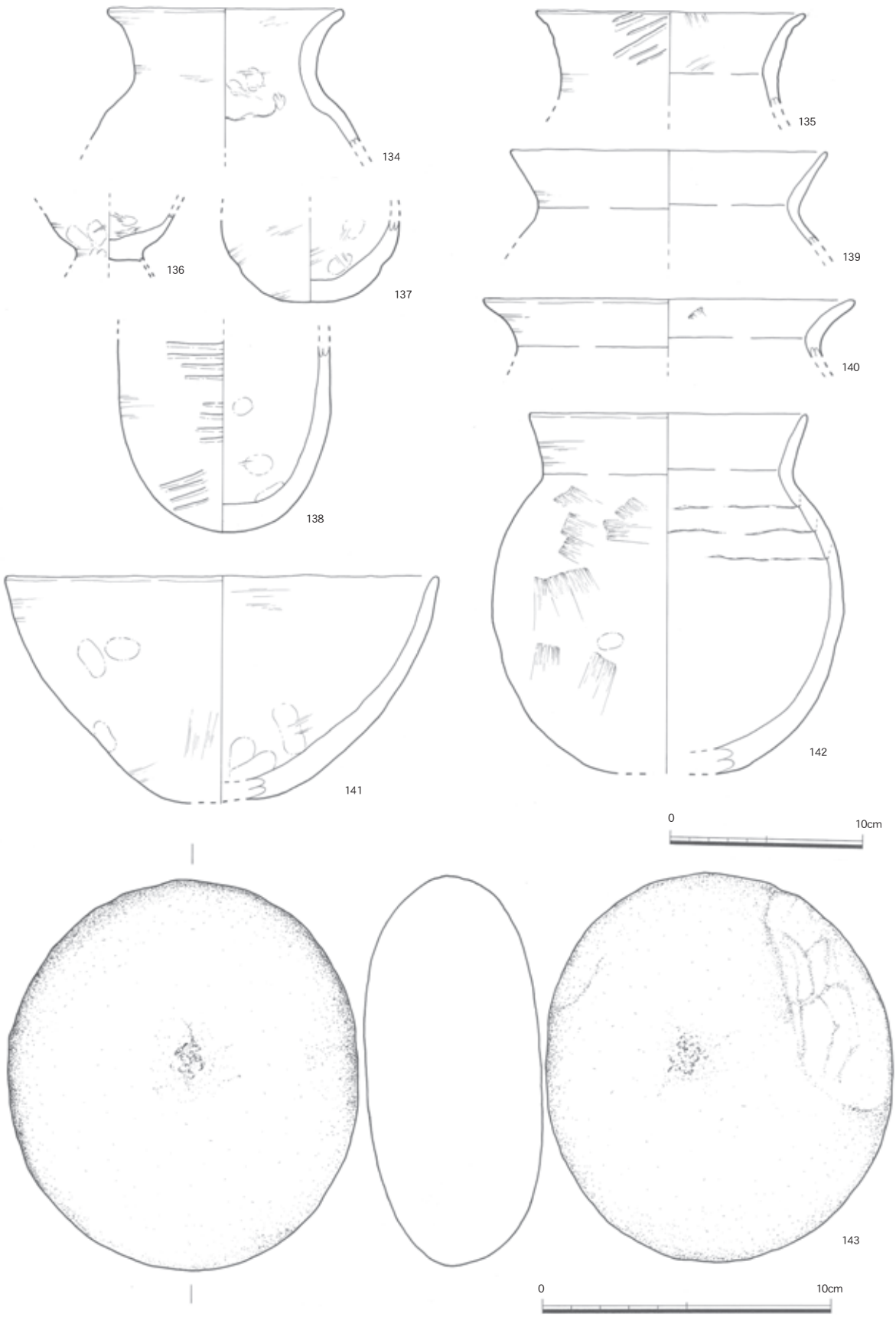


図Ⅱ –18　遺物出土範囲図

土したのがV-2層とⅦ-1層であり、両層の間は散漫な出土状況であった。第1次 調査で古墳時代の遺物を顕著に確認したのが13層、15層であったが、第5次調査のV-2層とVII-1層はレベル的にも概ねこの13層、15層に対応するものと考えてよい。

土器群　第1次調査の結果と同じく、第5次調査でも古墳時代における明確な遺構を確認していない。当該調査で唯一確認されたまとまった資料はA3～B4グリッドにかけての土器群のみである。この地点では出土状況からほぼ同一個体のものと思われる遺物がまとまって出土している。しかし、そのほとんどが土師器であり3～4cmほどの細片に分割され、図化及び、復元することはかなわなかった。また、φ10～15cmほどの使用痕のある亜円礫が土器出土範囲に散在することも注目される。これらの亜円礫は概ね各個体範囲の中および付近に出土することからこれら土器の出土状況と関わりのある可能性も捨てきれない。なお、この遺物が出土する範囲にもいくつかの単位が存在し、その状況を図Ⅱ-18に示した。点線で囲われている範囲が同一個体の散布範囲と思われるエリアであり、礫は各々図示した。なお、図示された礫以外にも図化以前に取上げがなされた礫があり、これらを含めると概ね全ての個体範囲に1個もしくはそれ以上の礫が存在したことになる。

遺物は大半が図化できなかったが甕2点のみが図化できた。135は、土師器甕口縁部である。口縁は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。内外面ともに指頭圧痕がみられる。頸部から口縁端部まで叩き目が残るなど粗雑なつくりである。138は、小型の甕の体部である。丸底で大きく膨らむことなく長胴気味に立ち上がる。外面全体に太めの叩き目が見受けられ、内面はナデ主体で指頭圧痕が散見される。つくりは粗雑であるが焼成は良好である。143は遺物散布地点で



図Ⅱ –19　Ⅴ -2 層（E 層）出土遺物

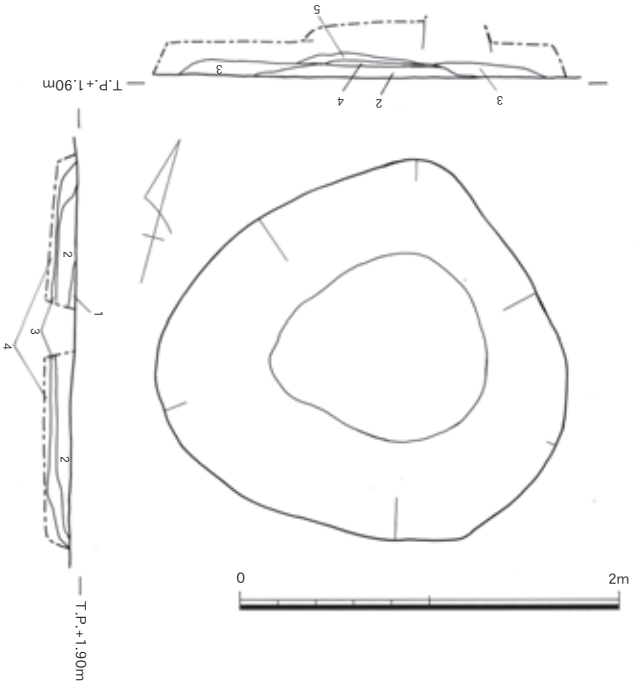
出土した叩石である。扁平な楕円形をなす自然礫の表裏に敲打痕を残し、加撃に伴う古い剥離面が形成されている。

包含層出土遺物　古墳時代の遺物を主に包含するのはV-2層である。134、139、140、142は甕である。134は頚部で屈曲し口縁部に向かって外反する。端部は丸く仕上げている。139は、甕口縁部である。体部から屈曲して口縁は外傾ぎみに立ち上がる。口縁端部はやや内湾して終わる。復元される口縁径は16.4cmほどである。焼成は堅緻でナデ調整で仕上げられている。140は甕口縁部である。外側へ向かって外反して伸びる口縁は端部を丸くおさめる。142は、ほぼ完形の甕である。復元される器高は18cmほどを測り、丸底で球形の体部から口縁はゆるく外傾する。端部は丸く外面はハケ調整が顕著である。内面は指頭圧痕とナデ調整で仕上げられている。136、137はミニチュア土器である。136はいったん屈曲して細くなるものの下部へ向けて開く形状を見せるため脚がつくものか。137は丸底の底部である。141は完形の鉢である。口径22.5cm、器高11.9cmを測る。底部はやや平坦な丸底で外側に外湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられる。外面はハケ調整ののちナデ調整で仕上げられている。指頭圧痕は内外面ともにみられる。内面はナデ主体とおもわれるが剥落が著しく判別がつき難い。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

第5次調査では、弥生時代中期後半代の遺構・遺物を多く確認した。これまでに古津賀周辺で当該期の遺構が明確に検出されることはなかったため古津賀集落の形成を考えるうえで良好な資料となろう。検出された遺構は柱穴63基、土抗17基、溝3条、自然地形の落ちである。これら全ての遺構に関しての詳細な記述は説明が煩雑になる恐れがあるため、当節ではこれらの確認された遺構群の中でも特徴的なものを取上げて詳細を述べることとする。

なお、今回の調査では、埋土とベース層にあたるⅧ-2層の区別が困難で、Ⅷ-2上面において全ての遺構を検出することが不可能であったため、Ⅷ-2層を除去してⅨ層上面にて再度遺構検出を行っている。しかし、出土する遺物や遺構の対応関係を考えると全ての遺構はⅧ-2層から存



1. N 5/0 灰 シルト(～粘土) 均質 しまった粘質土
2. N 5/0 灰 シルト(～粘土) 炭化粒と10GY 7/1 明緑灰 シルト(～極細粒砂)のブロック(青灰)が微量混入
3. 10GY 7/1 明緑灰 シルト(極細粒砂) 炭化物が混入し若干汚れる
4. N 5/0 灰 シルトに炭化物が濃く混入 黒色を呈す
5. 7.5GY 7/1 明緑灰 シルト 若干 N5/0 灰シルト混入 埋土

図Ⅱ-20　土坑1平面図

図Ⅱ –21　土坑２平面図

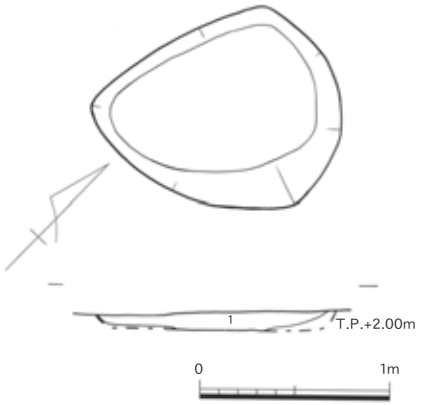
在するものであり、遺構に対するベース面として考えられるのはⅧ-2 層上面の 1 面のみである。したがって遺構平面図として掲載した図はⅧ-2 層検出分と IX 層検出分が混在している。

土坑１(図 II-20)　A1 グリッドに存在するⅧ-2 層上面で確認した土坑で、直径 210cm 程の不定形の楕円をなす。深さは 20cm ほどが残存しており、底部は比較的平らな形状をなしている。埋土はⅧ-2 に似るが炭化物を多く含みⅧ-2 層がブロック上に混入する。 144 の甕口縁端部と、別個体であるが甕もしくは壺の体部が出土している。144 は甕の口縁端部である。口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口唇部に刻目を施す。口唇部下にはヘラ描き沈線が 1 条めぐる。

土坑２(図 II-21)　調査区南東隅 (B1 グリッド) にて検出した土坑である。調査区端に位置し、その一部のみしか確認し得なかったため遺構の全容は明らかでないが、検出した遺構の形状から半径 2.5m ほどの楕円形をなすものではないかと推測される。20 点足らずの土器の破片が底付近で出土するが、復元可能な個体はなかった。破片はいずれも弥生中期の甕もしくは壺の一部である。

土坑３(図 II-22)　B1 グリッド西端に位置する土坑で、長軸 130cm、短軸 107cm を測る。楕円形の土坑で、残存する深さは浅く、10cm ほどである。

出土遺物は145、壺である。口縁は大きく外反し、端部はやや平坦に整形される。口唇部は断面三角形をなし、稜をなす部分に刻目が施文されている。頚部からの屈曲が大きいことが特徴として挙げられる。

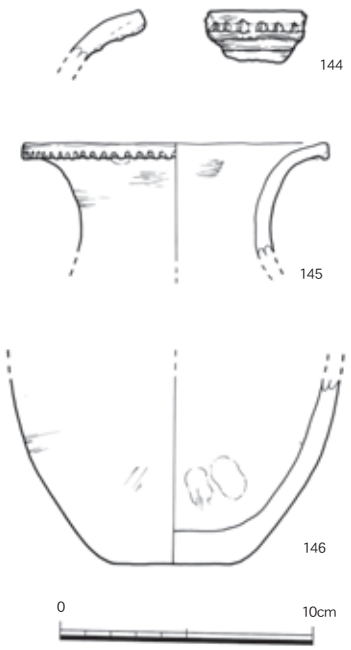


図Ⅱ –22　土坑３平面図

土坑４(図 II-24・25)　A3 グリッド北端で検出した長辺 453cm、残存する短辺 110cm の隅丸方形の土坑である。

調査区外へ続くため以降の全景は把握しきれないが、おそらく隅丸の正方形もしくは楕円状の土坑になるものと思われる。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。床面の際はやや溝状に窪む箇所が見られる。埋土上部は青灰色シルトに黄灰色極細粒砂が混入する粘質の土層が堆積し、炭化物を多く含む灰色シルト層へと転じる。最下層はベース(Ⅷ-2層)ブロックを含むやや粗い堆積となる。

検出面より40cmほど埋土を除去すると炭化した木片や土器片が多数出土する。検出面でも散見された焼土はこの面にて最も顕著にみられるようになる。遺物は壺、甕の破片を主に多数出土している。この他に使用痕らしき痕跡の認められる扁平な砂岩が南西隅で確認されている。遺物を回収し最下層を除去するとⅨ層に達する。この遺構内には柱穴が6基確認されている。



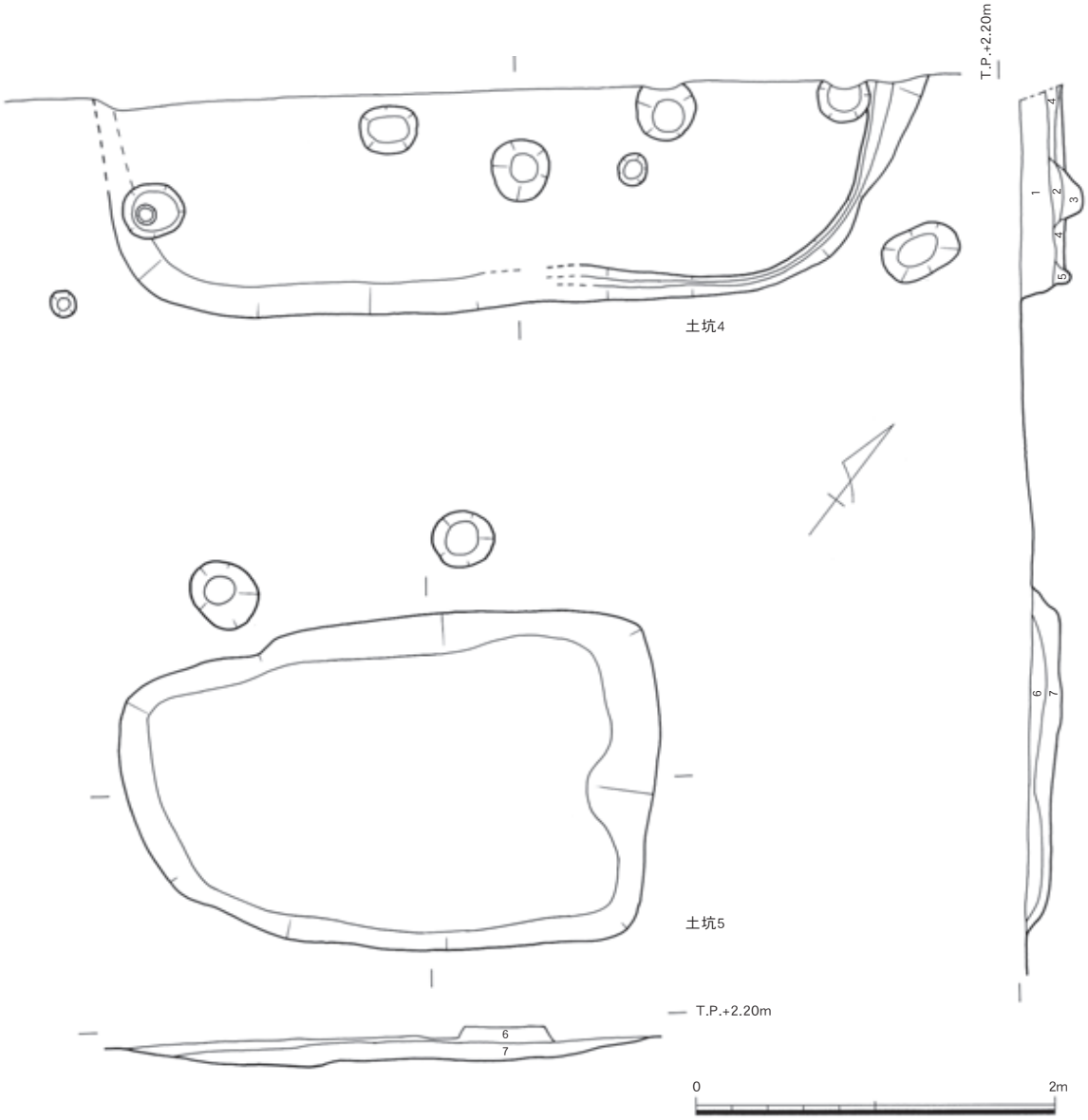
図Ⅱ-23　土坑出土遺物

出土する遺物は壺・甕・石包丁・叩石・剥片である。154は甕口縁部である。口縁が大きく外側へ外反し口唇部に3条の微隆起突帯が巡っている。口縁端部には刻目が施文される。調整はナデ主体である。158は、壺もしくは甕の底部である。平底で大きく広がりながら立ち上がる。内外面ともナデ調整で仕上げられる。156は壺頸部であろうと思われる。3条の微隆起突帯を2箇所に貼り付けており、微隆起突帯の下部に棒状浮文を貼り付けている。調整は丁寧なナデ調整で仕上げており比較的大型の器形が想定される。151は細片で器種が判別できない。縦方向に箆描き沈線が3条、それを切る横方向の沈線が認められる。器種は不明であるが大きく外湾することから体部の一部であろうと想定される。159は上下辺を剥離によって整形した後研磨によって仕上げた粗製の石包丁である。穿孔はなく上下辺の剥離面は擦痕のためでリング等が明瞭でない。160は叩石である。扁平な亜円礫を素材としたもので表裏に敲打痕が集中し窪む。161は二次加工のある剥片である。粘板岩を素材とし四辺に剥離が及ぶ。

土坑5(図Ⅱ-24)　土坑4南側に隣接する浅い土坑で、当初2つの土坑かと考えられたが、図面上では1基の土坑として表現している。両遺構は埋土および出土遺物に差はなく、包含層中から切り込んでいることを考慮するとひとつの遺構の最終床面でやや起伏が生じている可能性が高い。また土坑4出土土器と土坑5出土の土器が接合することは、両者の関係を考えるうえで重要である。

出土遺物は壺・甕である。152は、壺口縁端部である。口縁は大きく外反し、粘土帯を貼り

付けて口縁端部を肥大させ、端部先端は平坦に仕上げる。口唇部に刻目を施文し刻目下に微隆起突帯を１条巡らせている。148 も壺口縁端部である。152 と同様に大きく外反する口縁をもち、粘土帯を折り返して口縁端部を肥厚させている。口唇部の稜を穿つように刻目を施文し、肥大した口縁下部に１条のヘラ描き沈線を施している。基本的にナデ調整を主として仕上げられており、



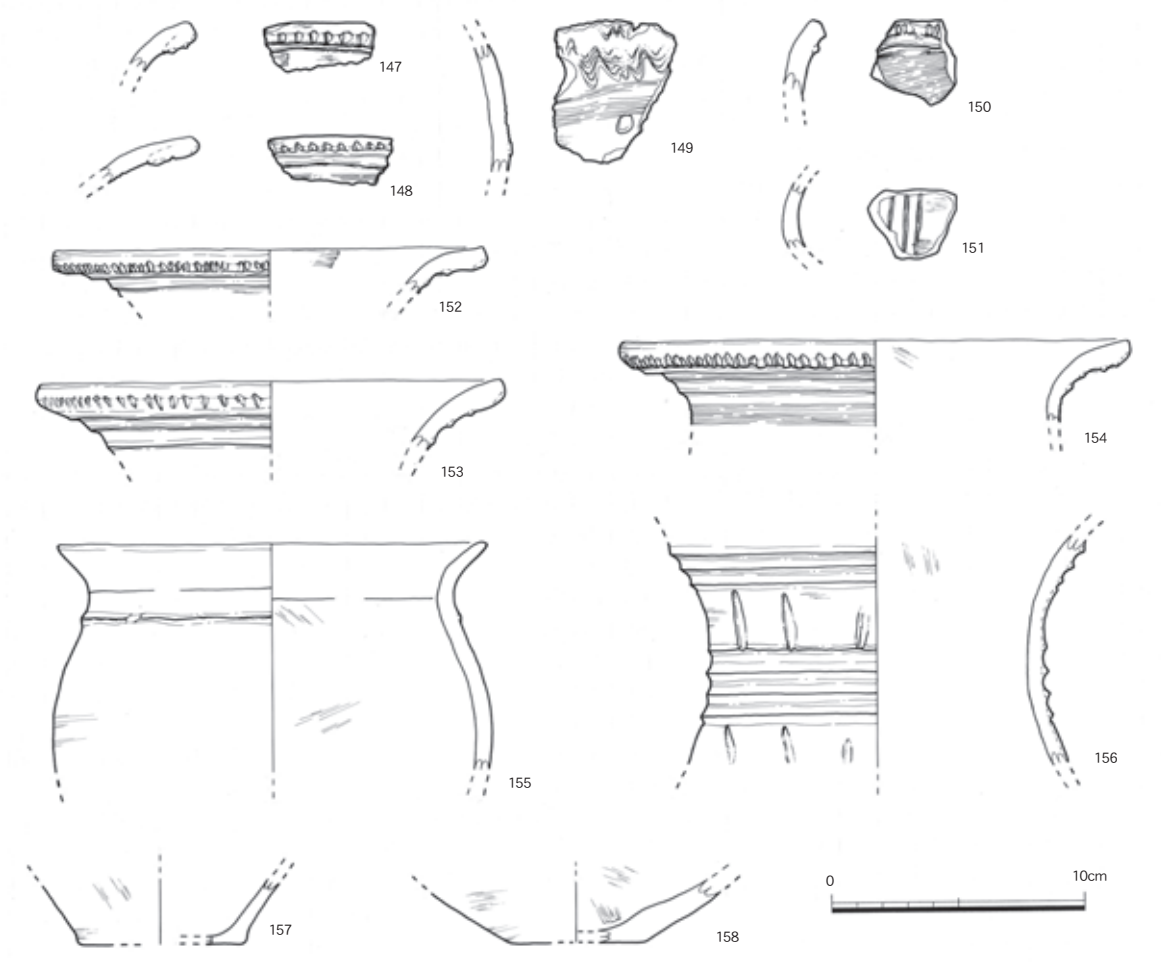
1. 7.5Y 5/1 灰シルト（～極細粒砂）
2. 7.5Y 5/1 灰シルト（～極細粒砂）炭化した植物遺体、焼土が混入（柱穴埋土）
3. 7.5Y 5/1 灰シルト（～極細粒砂）ベースブロック（φ10～20mm）が混入（柱穴埋土）
4. 7.5Y 5/1 灰シルト（～極細粒砂）混入物の少ない均質な堆積
5. 基盤層に青灰シルトブロック（φ5mm）が混入する
6. 7.5Y 4/1（～5/1）灰シルト（～極細粒砂）炭化物・遺物混入
7. 10GY5/1 緑灰極細粒砂（～シルト）炭化物少量含む

図Ⅱ –24　土坑４・土坑５平面図

その他の第１次調整は観察されない。147 も同様に口縁が外反するタイプの壺口縁部であるが、148 ほど口縁は外側へ広がることなく短く外反して終わる。口縁端部は粘土帯貼付で、口唇部を平坦に整形し、刻目を施文する。150 は、甕口縁端部である。ほぼ直立気味に立ち上がる口縁端部に刻目を施し、刻目下に沈線を１条施文している。153 は、152 と同様に大きく外側へ口縁端部が伸びるタイプの甕口縁部である。口唇部に刻目を施し外反する曲線部分に２条の微隆起突帯を貼り付けている。149 は、甕もしくは壺の体部片であると思われる。上下２組の山形文の下方に５条のヘラ描き沈線が認められる。157は、壺底部である。平底で体部へ向かって徐々にふくらみを増している。調整はナデ調整で指頭圧痕が観察される。155 は、甕である。口縁は緩やかに外反して短く終わる。端部は丸くおさめられている。上胴部には２条の比較的幅の広い微隆起突帯が貼付されそのやや下で体部最大径に達する。調整はナデ主体で全体的に多く飾らない甕である。

土坑６(図 II-28)　B2 グリッド南隅で確認された土坑である。土坑６も調査区外へ伸び、その全体は明らかでない。しかし、検出しているプランから、円形もしくは楕円形の土坑であろうと考えられる。土坑６については南側側溝掘削時に焼土を含む焼成面が存在することが確認されていた。遺構の残存する深度が浅いため、Ⅷ-2 層上面で捕らえる必要があったものの、検出が難しく、遺構の東側は平面図に図示した形状よりもやや東側に延びる可能性も否定できない。なお、土坑６の外側には細い溝が並行して存在する。

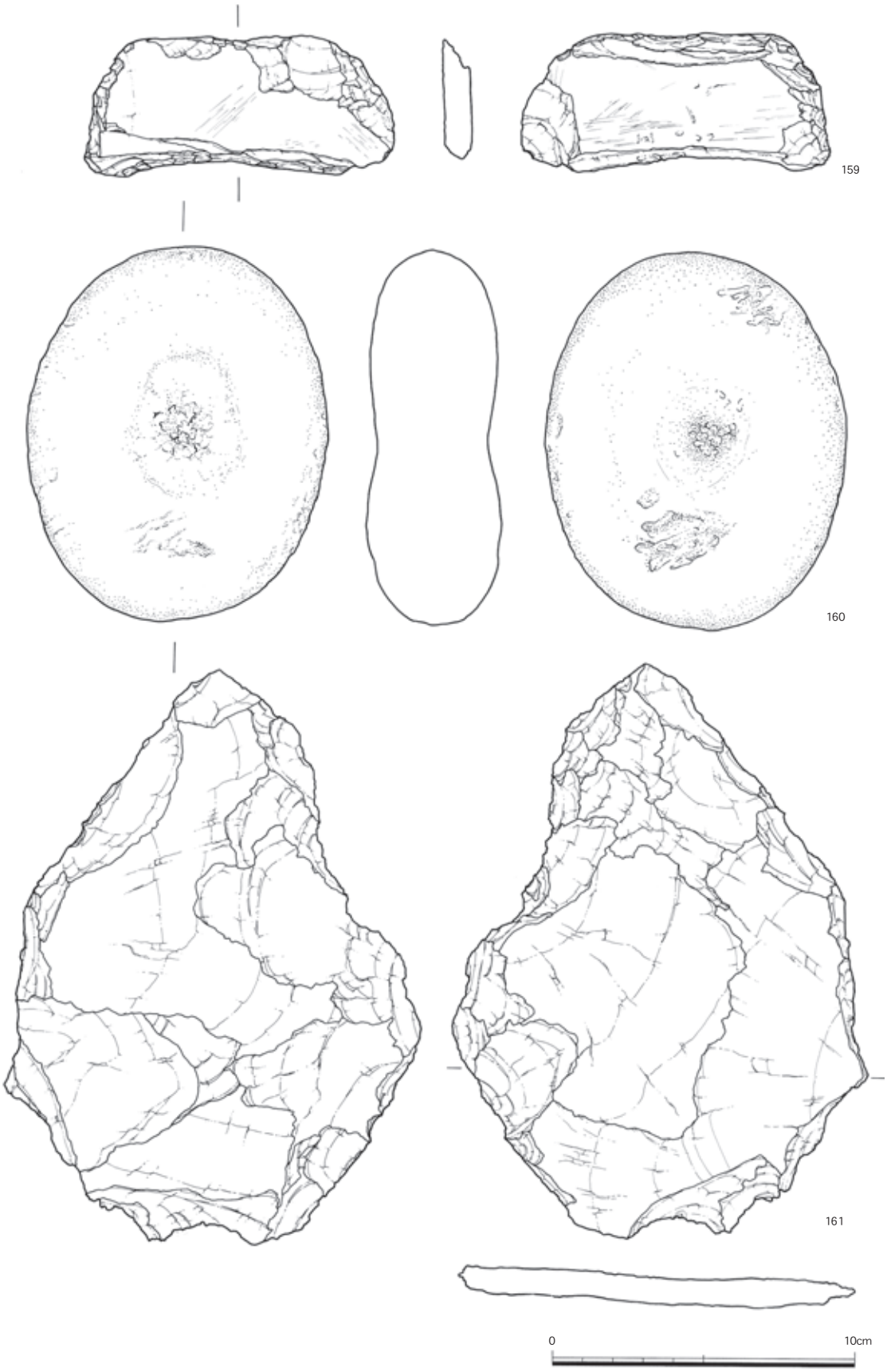
図Ⅱ –25　土坑４遺物出土状況図



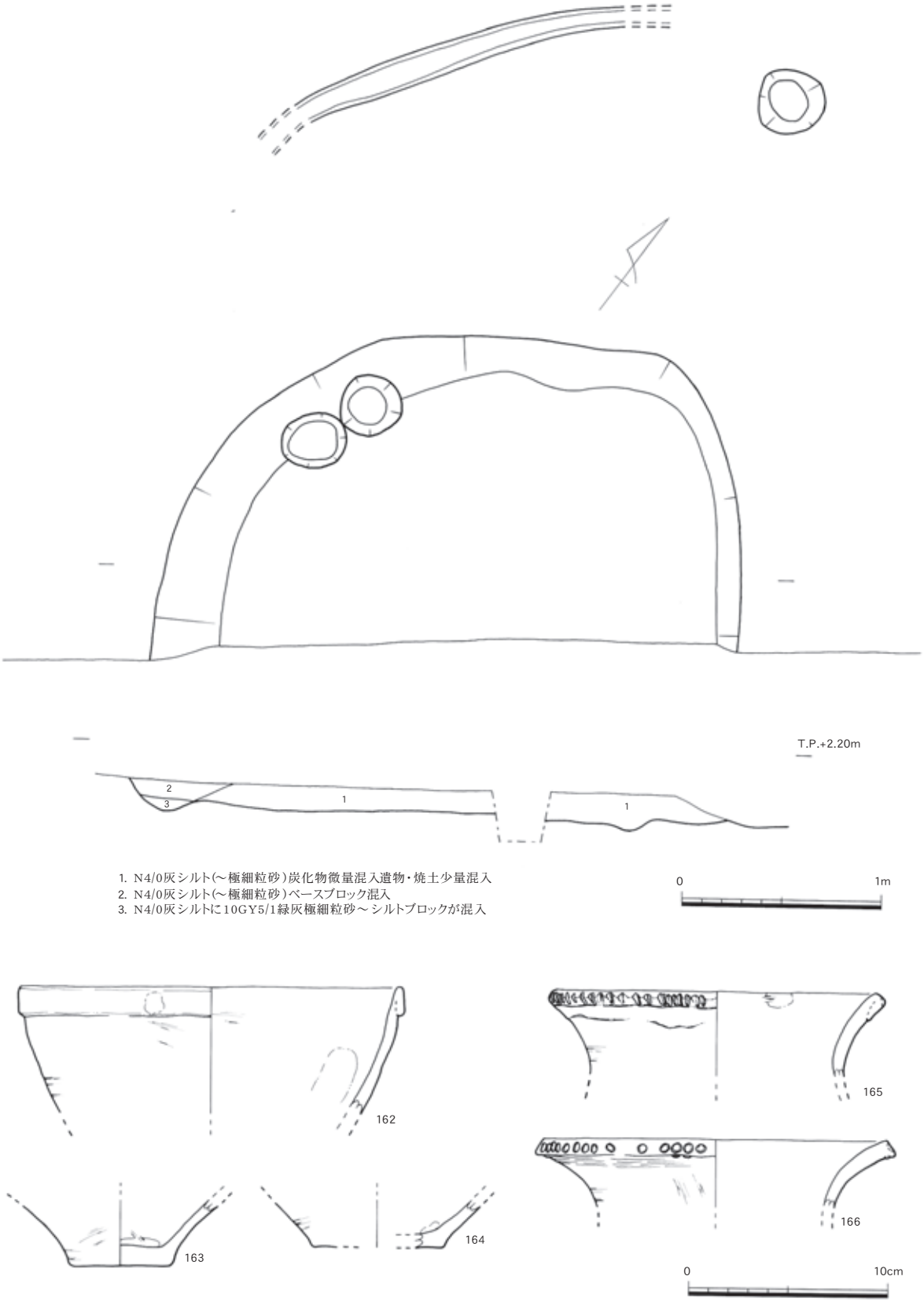
図Ⅱ –26　土坑４・土坑５出土遺物１

出土する遺物は、壺・甕である。166 は大きく外反する短めの口縁端部を持ち、端部は斜め下にむかって直線的に終わる。口縁端部にナデ調整で仕上げられた平坦な面には竹管文がまばらに施文される。内外面ともナデを主とした調整が観察される。165 も甕である。166 ほど大きく外反しないが、緩く外反する短い口縁が形成される。端部は短く粘土帯を貼り付けて厚みを増し、口縁端部の稜部分に刻目を施文する。163、164 は壺もしくは甕の底部である。両者とも平底で器壁は薄い。163 はやや外反気味に立ち上がるが、164 は底部直上で屈曲し、内湾気味に径を増す。162 は直線的に内湾する鉢である。口縁部は粘土帯を折り返して帯状の口縁を形成している。ナデ調整で仕上げられており、内面にはナデの痕跡と指頭圧痕が観察される。

溝１・溝２(図 II-29)　調査区 AB-2 グリッドで検出された溝である。両者はほぼ向かい合うように南北に走っており、調査区中央付近で一旦途切れる。溝１は検出した長さ約 3m、溝２は約 4m を測る。幅は 50cm～60cm ほどで規模的にも類似した溝であることがわかる。堆積も概ね等しい様相を示し、出土する遺物の時期にも差が認められないことから、両溝は同時期に機能していたと考えられる。溝２からは図 II-30 に示すような状況で良好な遺物が出土している。これらの溝は当初断続的につながるものと考えていたが、掘削した結果、両者が中央付近で途切れるこ



図Ⅱ –27　土坑４出土遺物２

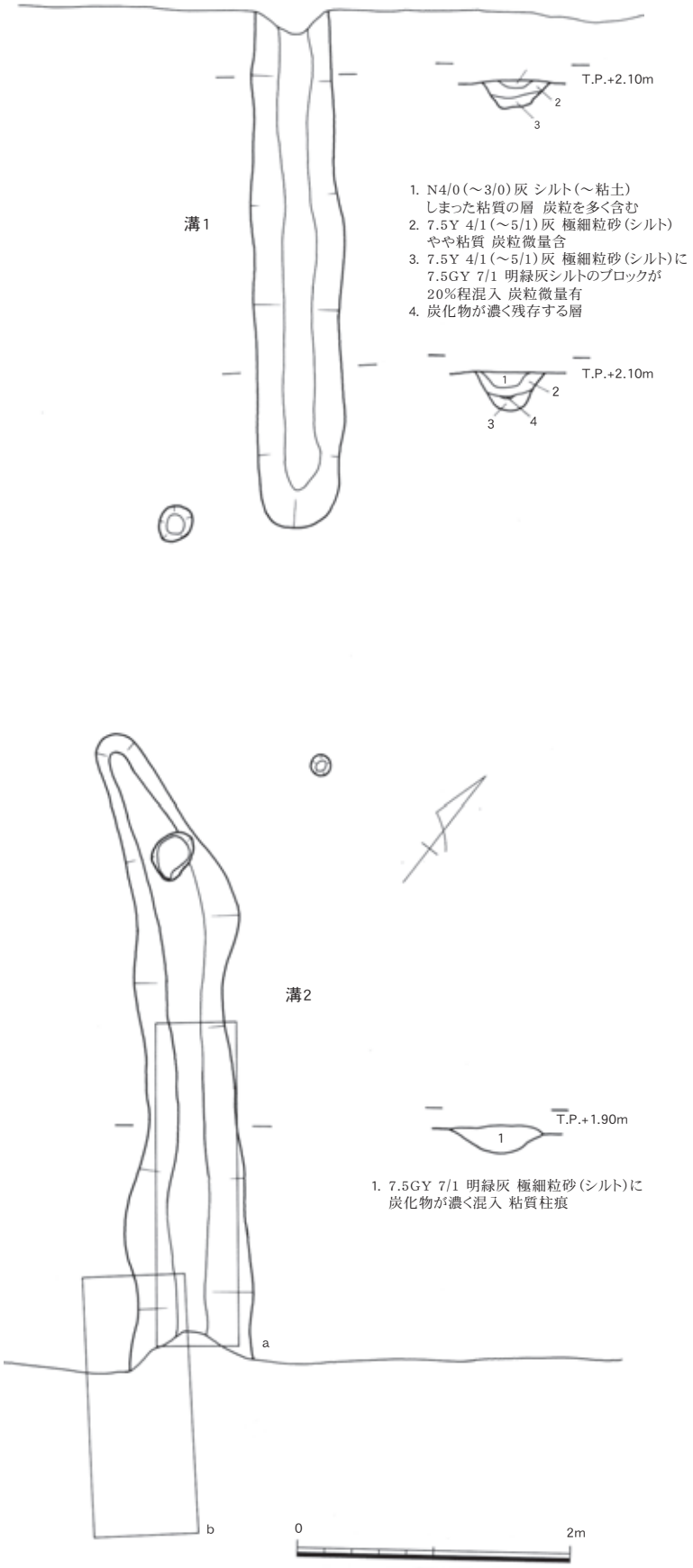


図Ⅱ –28　土坑６平面図・出土遺物

とが明らかとなった。集落を区切るような規模のものではないが、住居間を仕切りや排水溝と考えれば妥当な規模であろうか。

溝１出土の遺物は甕及び底部である。167 は、甕口縁部である。端部に微隆起突帯を貼り付けて口唇部を形成し、刻目を施している。口唇部下部には微隆起突帯が１条めぐらされている。169 は、壺底部である。平底でナデ調整で仕上げられている。体部へ膨らみを増す。

溝２からは、壺・甕が出土する。173 は壺口縁部である。口縁は大きく外反し端部はやや凹むが平坦に仕上げられている。口縁部に粘土帯を薄く貼り付けて口縁の端部と口縁への立ち上がりの境に稜を形作っている。比較的大型の壺であろうと考えられる。174 は、甕もしくは壺口縁部である。口縁部を折り曲げて肥厚させ、口唇部にまばらな刻目を施している。口縁はゆるく外反し上胴部に山形文と１条の沈線が巡っている。170 は甕もしくは壺底部である。平底で体部上方に向かって大きく開きながら立ち上がる。調整はナデ調整が主で内面には指頭圧痕がみられる。171 も壺もしくは甕の底部である。平底で体部にかけて緩く広がりながら立ち上がる。ナデ調整で仕上げられ、底部内面には指頭圧痕が確認される。175 は、壺上半部である。口縁はやや肥厚させて丸くおさめられ



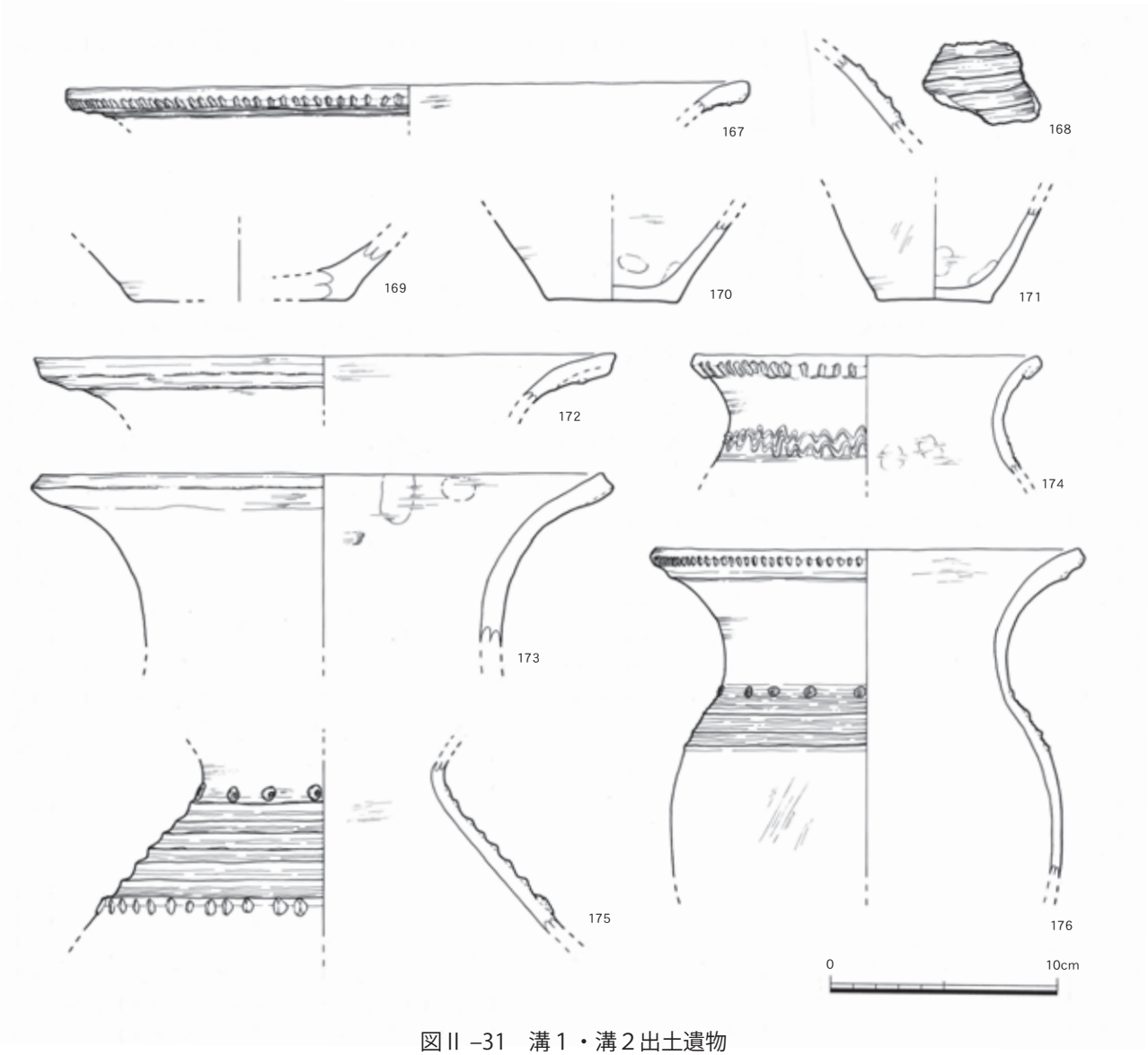
図Ⅱ–29　溝１・溝２平面図

図Ⅱ –30　溝２遺物出土状況図

ており、体部からゆるく外反して端部に至る。口唇部下に長楕円の浮文が貼り付けられている。上胴部には 6 条の微隆起突帯が貼り付けられており、突帯上方には円形浮文が、下方には等間隔で列点文が貼付される。176 は典型的な南四国型甕である。口縁部は大きく外反し、胴部最大径よりも口縁端部が外へ広がる。口縁部は粘土帯を折り曲げて肥厚させ、口唇部に刻目を施文する。刻目の下には微隆起突帯を 1 条貼付する。上胴部には 4 条の微隆起突帯がめぐり、突帯間を沈線がうめている。微隆起突帯の上部には円形浮文が等間隔で並んでいる。172 は甕口縁部である。ゆるく外反する頸部は口縁近くから角度を変え大きく外反し外方へ延びる。端部はやや内湾気味にしあげ端部は凹状をなす。口縁部は無文である。168 は甕肩部破片である。

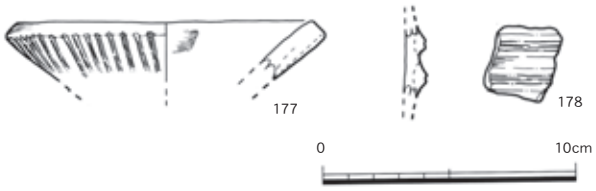
落ち１　調査区西半で検出した西側に向かって緩やかに下る落ちである。人為的な掘削行為によるものではなく後川へ向かって下る地形の変化に由来するものであろうと思われる。

出土遺物は、壺・甕である。177 は、長頸壺口縁部である。頸部から外傾し、口縁部に粘土帯を薄く貼り付ける。口縁端部は平坦に形成され、口唇部にやや長めの刻目を施文している。



図Ⅱ –31　溝１・溝２出土遺物

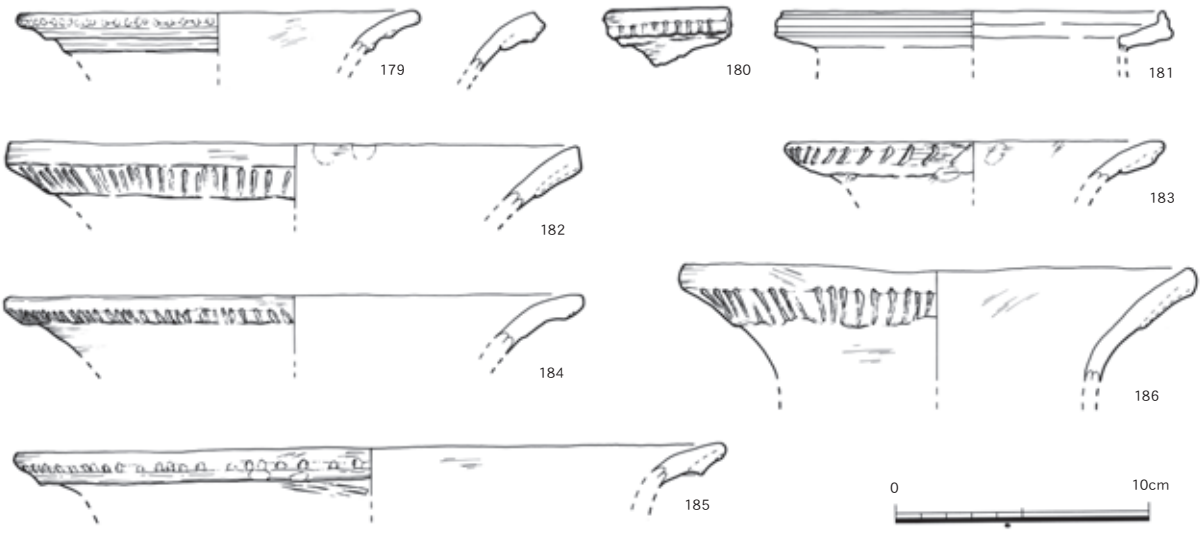
178 は搬入品である。乳白色の胎土に角閃石を含む。薄い器壁に M 字状突帯が 2 条貼り付けられており、外面には赤色顔料が付着する。器種ついては搬入土器の項で後述する。



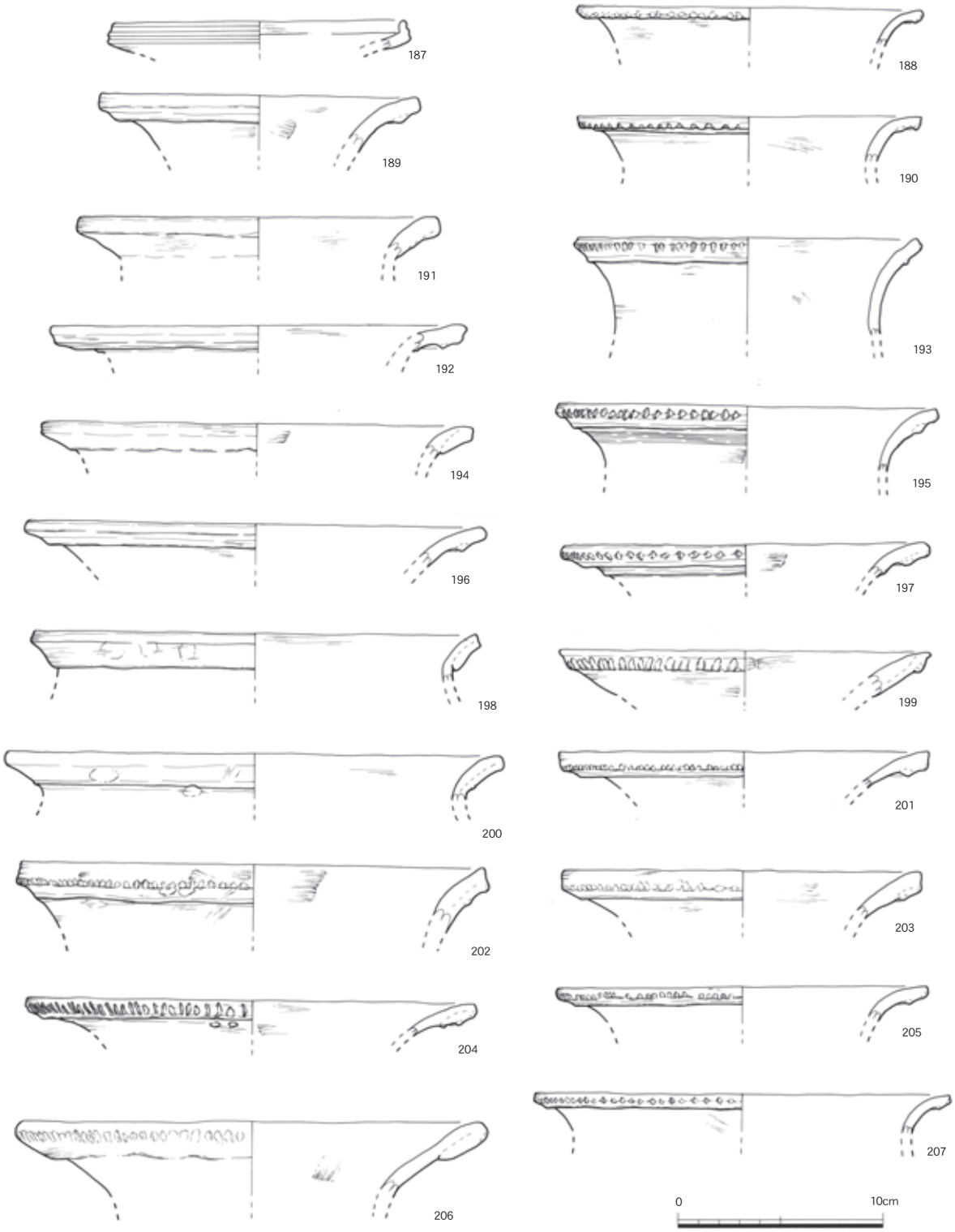
図Ⅱ –32　落ち１出土遺物

包含層出土遺物　第５次調査では包含層から多くの遺物を確認している。弥生時代の包含層から出土する遺物は弥生時代中期末葉の特徴を備えたものが圧倒的に多い。この時期に属する資料は市内でも希少であることから、細片でも積極的に復元し、図化を行った。

器種として最も多く出土するのはいわゆる南四国型甕である。179 は甕口縁部である。口縁は外反し、外反部に 2 条の微隆起突帯が貼付される。端部はまるく収められている。180 は、壺もしくは甕の口縁端部である。口縁部の粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口唇部に面を形成して刻目を施している。口唇部下端はやや尖る。182、186 は甕口縁である。口縁端部に幅 2cm ほどの粘土帯を薄く貼り付け、刻目を施している。端部は直立気味にやや内傾し、平坦な面を形成している。ナデ調整で仕上げられ、口縁端部内面には指頭圧痕がみられる。184 は甕口縁部であり粘土帯によって肥厚させた口縁端部外面に刻目を施文する。185 も粘土帯貼付口縁をもち、微隆起突帯を口縁外面に貼り付ける。口縁端部は刻目で加飾する。復元口径 28.0cm を測る中型品である。181 は口縁部が「く」の字状に強く屈曲し、端部を上下に拡張する。口縁部外面に凹線文をもつ小型の甕口縁部である。183 も粘土帯貼付口縁甕もしくは壺である。口縁端部に深い刻目を施文する。187 も数少ない凹線文を有する土器である。口縁を上下に拡張し 2 条の凹線がめぐる。やや小型の甕である。胎土はやや黄灰色をなす。189、191、192、194、196 は粘土帯を貼り付けて口縁を肥厚させるが刻目等で加飾を行わないもの。198 は粘土帯貼付口縁を持ち、端部はやや平坦におさめている。粘土帯下部が段をなして残る。200 は強く外反す

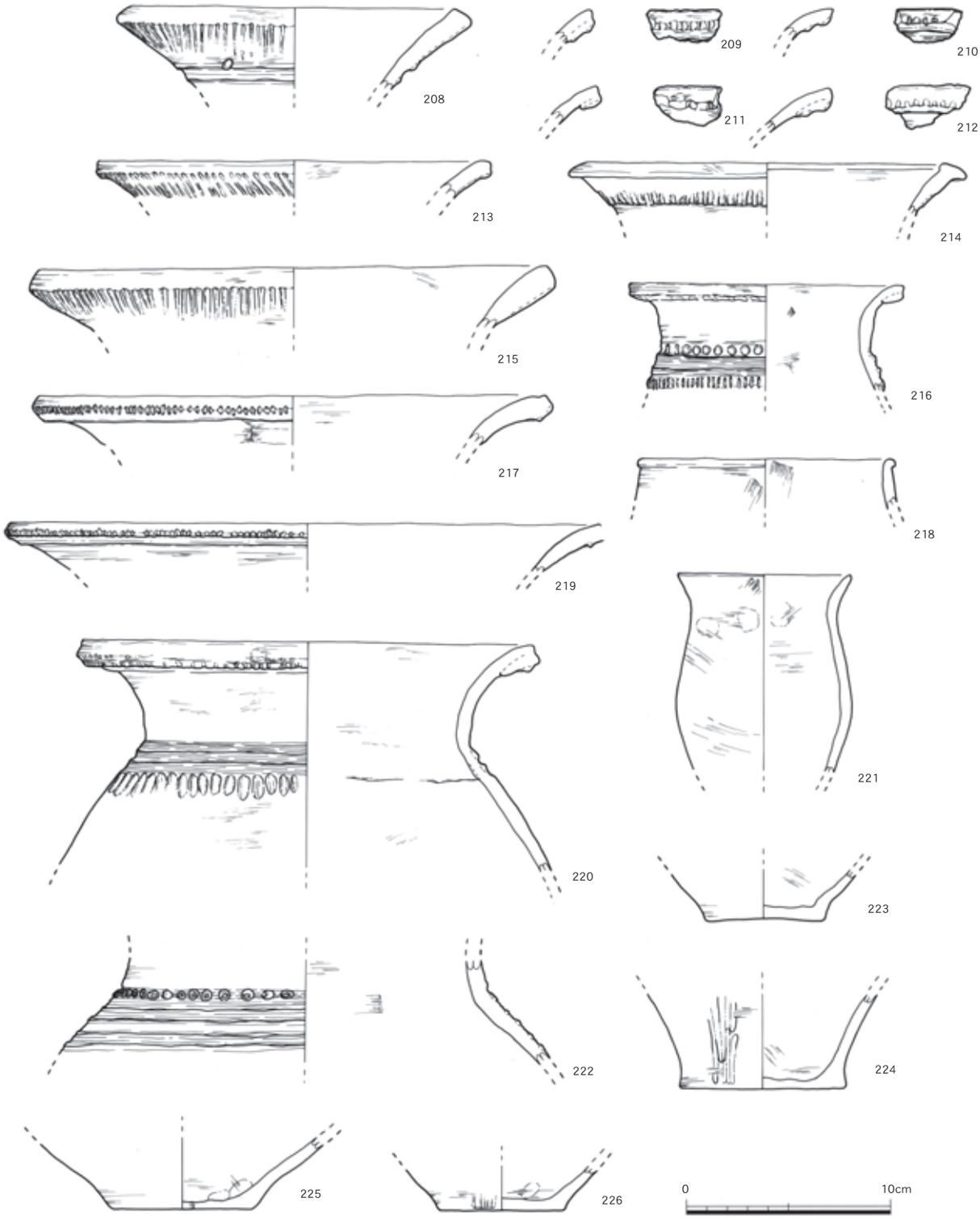


図Ⅱ –33　包含層出土遺物１



図Ⅱ –34　包含層出土遺物２

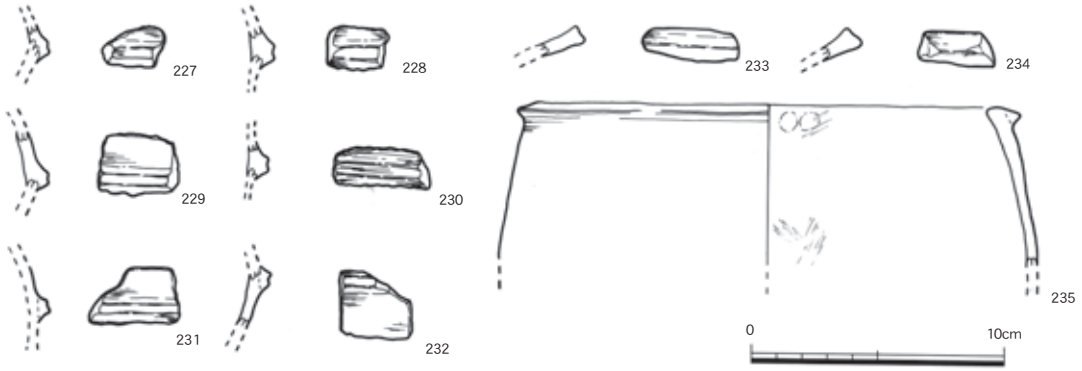
る口縁をもち端部はやや平坦に仕上げられる。粘土帯の貼付によって口縁部に段が生じている。202 は頸部からゆるく外反し端部はナデ調整によって凹状を呈する。口縁端部下部には刻目、口縁部外面には微隆起突帯が巡る。204 は外方へ大きく外反する甕口縁部である。口縁下部に



図Ⅱ –35　包含層出土遺物３

刻目、粘土帯の境界に微隆起突帯が巡る。206 は頸部で屈曲して大きく外傾する甕口縁部である。粘土帯貼付によって口縁部を肥厚させ口縁端部下部に刻目を施す。口唇部にはやや深い刻目を施している。器厚が厚く、比較的大型の甕であろうと考えられる。188、190 は外反する口縁部に幅の狭い粘土帯を貼り付け、端部を肥厚させる。口縁下部には刻目が施される。193 はゆ

るく外反する口縁をもち、口縁端部は平坦である。口縁部外面に微隆起突帯が 1 条めぐる。195 は、壺もしくは甕の口縁部である。口縁は端部直前で外反し、粘土帯を貼り付けて肥厚させている。口唇部には刻目を施し、下方に 2 条の微隆起突帯をめぐらす。頚部上方に沈線が 4 条刻まれている。197はやや幅広の粘土帯を貼り付けて口縁を肥大させた甕である。口縁下部には刻目、頚部には微隆起突帯が 1 条巡る。199 は粘土帯を貼り付けた後に端部をややつまんで口縁端部上部がとがる。口縁端部に太めの刻目が残る。201、203、205、207 は粘土帯貼付口縁の甕で、端部は平坦に仕上げ、下部に刻目が連続する。粘土帯下端に微隆起突帯が巡っている。208は長頚壺口縁部である。粘土帯の貼付によって肥厚させた口縁部外面に長い刻目を連続して施文する。刻目下部には 2 条の微隆起突帯が巡り、上の微隆起突帯には円形浮文が重なる。口縁の端部は平坦で刻目は端部まで及ばない。213、215 も同様に壺の口縁部でないかと思われる。甕口縁部とは異なり、口縁部外面に長い刻目を施し、端部を平坦に仕上げるのが特徴である。217 は、甕口縁部である。口縁は外反し、端部に 1 条微隆起突帯が貼付される。口唇部に細かい刻目が施文され、頚部にはハケ調整らしき痕跡が認められる。219 は復元口縁径が 29cm をはかる大型の甕口縁部である。端部下に刻目と、口縁部外面に微隆起突帯を 1 条めぐらせている。220 は典型的な南四国型甕である。体部からゆるく頚部へと接続し、外反しながら端部は凹状にしあげる。肩部には微隆起突帯が 2 条巡り、微隆起突帯の下部には浮文が連続する。222 も南四国型甕であるが、頚部が直立気味にたちあがる。頚部と体部の境界付近に竹管文を連続させている。214 は口縁部がやや鋤先上を呈する壺もしくは甕の口縁部であるものと考えられる。216 は南四国型の甕である。端部は粘土帯によって肥厚させやや凹状に仕上げる。肩部の張らない胴部から緩やかに頚部に移行し、口縁部は強く外反する。肩部には微隆起突帯、棒状浮文、竹管文が巡る。口縁端部は刻みを持たず、粘土帯貼付部に指頭圧痕が顕著に見られる。218 はやや口縁端部を肥厚させた無頚の甕である。221 は小型の甕である。口縁の肥厚はなく、最大径は体部下半にあり、ゆるやかに頚部から口縁へと外反する。端部は丸く仕上げている。209 ～ 212 はいずれも甕口縁端部である。端部は平坦、もしくは凹状に整え、端部下に細かい刻目を巡らせている。212 は口縁部に微隆起突帯をもつ。223 ～ 226 は底部である。いずれも平底で 223 は底中央部がややあがる。225 は、壺底部である。平底で、底部から 1cm 程の高さで一旦屈曲し、体

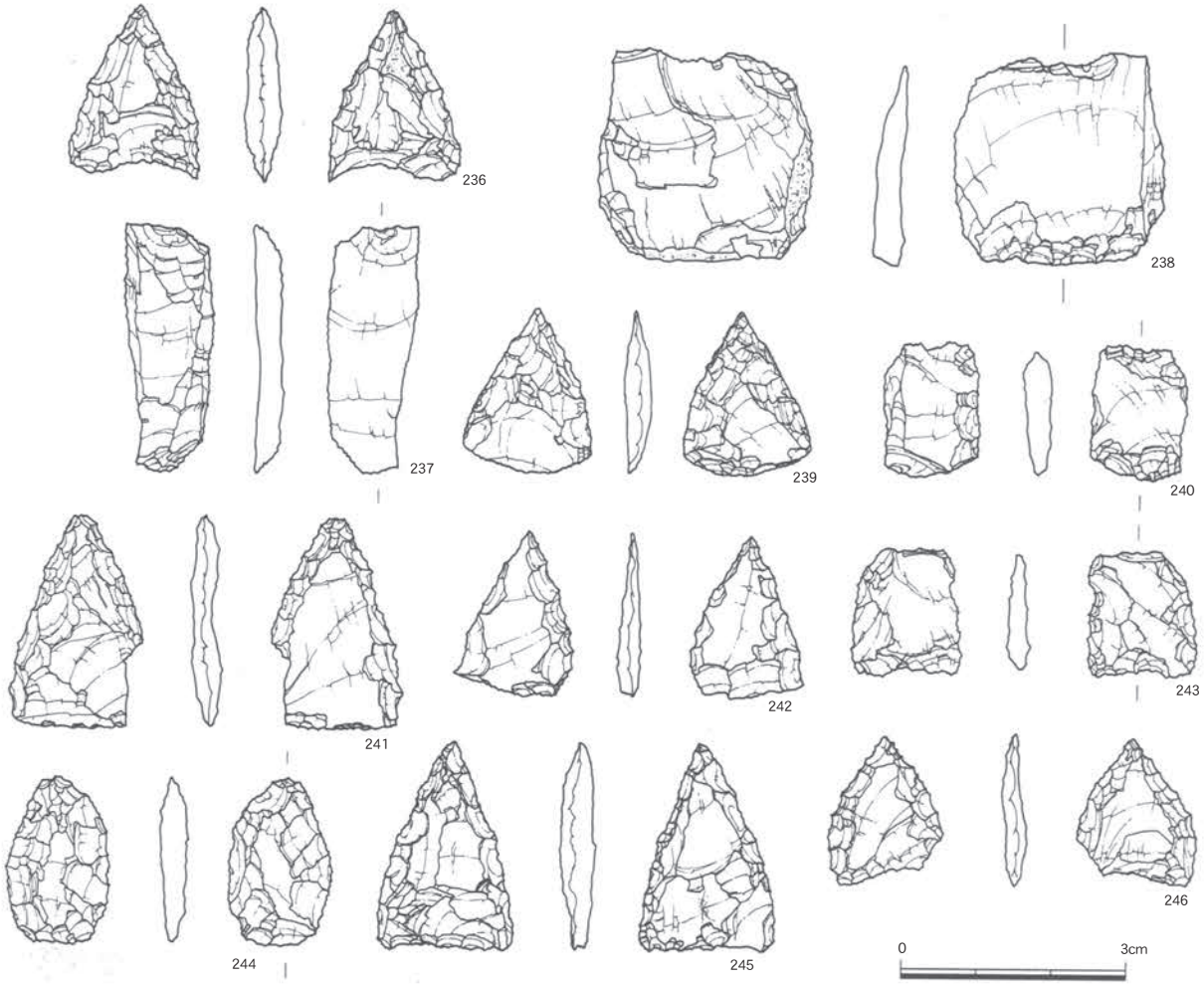


図Ⅱ –36　搬入土器

部へと広がる。底部内面には指頭圧痕が残る。224 は体部から裾部に至るまでに外反し、外面にミガキの痕跡が認められる。

搬入土器　図 II-36 は包含層から出土した搬入土器である。227 ～ 232 は体部破片である。M 字状突帯が貼り付けられており、外面は赤色顔料で彩色されている。235 は、乳白色の胎土を呈し口縁端部に赤色の彩色が認められる。胴部から内湾して立ち上がり口縁部を断面三角形に仕上げている。口縁端部の上端は平坦な面をなし、この平坦面に彩色が認められる。口唇部端は稜をもって尖る。233、234 は甕口縁部である。乳白色の胎土で、端部を摘み上げる。このような口縁端部は北部九州地方に分布する、いわゆる東北部九州型甕の特徴と一致する。これらの搬入品の出自ついては前節でも述べたが、大分県東海岸沿い周辺にその類例を追うことができる。

出土石器　第５次次調査では落ちもしくは包含層から広義の石器を確認している。石鏃は 242 を除くすべてが赤色のチャートを石材とし、基部を平坦もしくは凹ませるものが多数を占める。238 は上下辺から数度の連続する剥離がなされている。広義の二次加工のある剥片と考えるべきものかもしれないが、上下端からの剥離面はその境界があいまいであり、ほぼ同時に剥離面が形成されたものと考えられるため楔形石器に分類している。237 は縦方向に長く剥離した剥片である。240 は上下端に細かい剥離を連続させた二次加工のある剥片である。



図Ⅱ –37　出土石器

第１次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器種	法量（cm） 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
1	6	4 層	甕	(17.8)	(2.75)	7.5GY 7/1 明緑灰	7.5GY 7/1 明緑灰	N 8/0 灰白	
2	6	3 層	甑	(17.0)	9.1	10YR 6/4 にぶい黄橙	2.5YR 6/6 橙	5Y 6/1 灰	内外面に指頭圧痕。内面に板状工具によるナデ。
3	6	10 ～ 12 層	皿	(10.2)	2.5	藍	藍	N 8/0 灰白	
4	6	6 層	土錘	1.1	3.3	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	
5	6	5 層	土錘	1.2	3.2	5Y 4/3 暗オリーブ	5YR 7/8 橙	5YR 7/8 橙	
6	6	表採	土錘	1.2	3.8	5Y 6/1 灰	5Y 6/1 灰	5Y 6/1 灰	
7	6	7 層	土錘	1.2	3.2	7.5YR 6/8 橙	7.5YR 6/8 橙	7.5YR 6/8 橙	
8	7	包含層	手づくね	-	(3.8)	10YR 7/2 にぶい黄橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	内面に指頭圧痕あり。
9	7	18 層	手づくね	2.4	3.1	2.5Y 3/1 黒褐	10YR 6/2 灰黄褐	―	外面に指頭圧痕あり。
10	7	13 層	手づくね	-	(3.9)	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	内面に指頭圧痕あり。
11	7	包含層	椀	12.4	5.35	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
12	7	包含層	椀	11.8	5.3	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
13	7	13 層	底部	-	(3.0)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	内面に板状工具によるナデ。剥落。
14	7	包含層	甑	-	(7.4)	10YR 6/2 灰黄褐	7.5YR 6/5 橙	10YR 6/1 灰褐	内面ナデ、指頭圧痕あり。
15	7	18 層	土錘	0.9	2.0	5YR 7/8 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/8 橙	
16	7	包含層	壺	(11.0)	(3.0)	N 6/0 灰 2.5GY 暗オリーブ灰	N 4/0 灰 2.5GY 暗オリーブ灰	N 6/0 灰 2.5GY 暗オリーブ灰	内外面ナデ。内面に自然釉。
17	7	包含層	坏身	10.6	5.3	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	内外面ナデ。外面下方ケズリ。
18	7	包含層	壺	12.4	15.8	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	胴部外面下方タタキ。内面に指頭圧痕。自然釉がかかっている。
19	8	13 層	甕	(14.9)	(5.3)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	外面ナデ、ハケ。
20	8	包含層	高坏	(18.8)	(4.2)	10YR 5/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。
21	8	包含層	高坏	(18.5)	(5.2)	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。
22	8	13 層	高坏	18.0	(6.6)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。
23	8	18 層	高坏	-	(7.9)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。脚部内面に指頭圧痕。坏部内面に板状工具によるナデ。
24	8	包含層	高坏	-	(6.35)	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	2.5Y 7/2 灰黄	内外面ナデ。内面に絞り痕。
25	8	13 層	高坏	-	(7.8)	5YR 6/6 橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。外面に指頭圧痕あり。内面に粘土帯継ぎ目、絞り痕。
26	8	包含層	高坏	-	(7.9)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	内外面ナデ、指頭圧痕あり。
27	8	13 層	高坏	-	(5.7)	7.5YR 5/1 褐灰	5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/2 明褐灰	内外面ナデ。外面に工具痕。内面に指頭圧痕。
28	8	包含層	高坏	-	(5.3)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/3 にぶい橙	10YR 6/1 褐灰	
29	8	包含層	高坏	-	(5.3)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	内面ナデ。内面に絞り痕。
30	8	包含層	高坏	-	(7.2)	7.5YR 6/1 褐灰	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
31	8	包含層	高坏	-	(6.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	10YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
32	8	13 層	高坏	-	(9.3)	7.5YR 6/2 灰褐	5YR 6/4 にぶい橙	10Y 6/1 灰	内外面ナデ、指頭圧痕あり。内面に絞り痕。
33	9	包含層	小型甕	(12.0)	(6.0)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/6 橙	内外面ナデ。内面に粘土帯継ぎ目。
34	9	包含層	小型甕	(12.2)	(5.0)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ、指頭圧痕あり。

表Ⅱ –2　出土遺物観察表１

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器種	法量（ｃｍ） 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
35	9	包含層	甕	(14.8)	(6.7)	10YR 7/2 にぶい橙	10YR 7/2 にぶい橙	10YR 7/2 にぶい橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。剥落。
36	9	包含層	甕	(14.5)	(4.3)	10YR 6/2 灰黄褐	7.5YR 6/6 橙	10YR 7/1 灰	内外面ハケ。剥落。
37	9	包含層	鉢	(17.2)	(5.3)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/1 明褐灰	外面ナデ。内面に指頭圧痕あり。
38	9	包含層	鉢	-	(7.6)	7.5YR 7/3 にぶい橙	5YR 6/6 橙	7.5YR 5/4 にぶい褐	内外面ナデ。内面に指頭圧痕あり。
39	9	包含層	甕	(18.0)	(6.05)	5YR 6/3 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ、指頭圧痕あり。内面に粘土帯継ぎ目。
40	9	包含層	甕	(14.8)	(9.2)	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 5/1 黄灰	内外面ナデ。
41	9	包含層	甕	(15.5)	(8.45)	5YR 5/4 にぶい赤褐	5YR 6/6 橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕あり。
42	9	包含層	甕	-	(5.6)	5YR 6/4 にぶい橙	5YR 6/3 にぶい橙	5YR 4/0 灰	内外面ナデ。
43	9	包含層	甕	-	(7.3)	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	2.5YR 7/2 灰黄	内面ナデ、指頭圧痕あり。
44	9	包含層	甕	-	(11.7)	5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	N 5/0 灰	内面板状工具によるナデ、指頭圧痕あり。
45	9	包含層	甕	-	(12.9)	5YR 7/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	内外面ナデ。
46	10	16 層	甕	-	(1.25)	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 5/3 にぶい黄褐	2.5Y 2/1 黒	外面に微隆起突帯。
47	10	16 層	甕	-	(1.8)	10YR 5/2 灰黄褐	2.5Y 4/1 黄灰	5Y 3/1 オリーブ黒	外面に刻目、微隆起突帯。
48	10	16 層	甕	-	(1.6)	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 6/3 にぶい黄橙	5GY 2/1 オリーブ黒	外面に刻目、微隆起突帯。
49	10	16 層	甕	-	(1.1)	10YR 7/1 灰白	10YR 7/2 にぶい黄橙	5Y 6/1 灰	外面に刻目、微隆起突帯。
50	10	16 層	甕	-	(2.65)	2.5Y 6/2 灰黄	10YR 6/3 にぶい黄橙	N 3/0 暗灰	外面に微隆起突帯。
51	10	18 層	甕	-	(1.95)	N 3/0 暗灰	7.5YR 7/3 にぶい橙	N 3/0 暗灰	外面に微隆起突帯。
52	10	包含層	甕	(13.2)	(3.5)	10BG 2/1 青黒	10BG 2/1 青黒	10BG 2/1 青黒	貼付け口縁。外面に微隆起突帯。内外面ナデ。
53	10	包含層	甕	(18.4)	(19.3)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 3/1 黒褐	外面に浅く広い刻目、微隆起突帯あり。内面に粘土帯継ぎ目。
54	10	包含層	底部	-	(2.3)	10YR8/2 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄褐	
55	10	16 ～ 18 層	底部	-	(2.9)	7.5YR 6/4 にぶい褐	7.5YR 5/3 にぶい褐	7.5YR 6/2 灰褐	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
56	10	包含層	底部	-	(4.4)	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 3/1 黒褐	10YR 5/2 灰黄褐	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
57	10	14 層	底部	-	(3.3)	5YR 6/4 にぶい橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	10R 5/6 赤	外面ナデ。内面に工具痕。
58	10	包含層	甕	18.8	(8.6)	10YR 6/3 にぶい黄橙	2.5Y 6/2 灰黄	10YR 4/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。胴部外面に円形浮文、竹管文、微隆起突帯、刻目。南四国型甕。
59	10	16 ～ 18 層	甕	-	(6.2)	5YR 7/3 にぶい橙	5YR 6/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	外面に円形浮文、微隆起突帯、櫛描文、刻目。内外面ナデ。南四国型甕。
60	10	包含層	甕	-	(14.1)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	10YR 3/1 黒褐	外面に円形浮文、微隆起突帯、櫛描文、刻目。南四国型甕。
61	10	包含層	甕	(20.8)	(13.4)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 5/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯、板状工具によるナデ。胴部外面に微隆起突帯、櫛描文、刻目。南四国型甕。
62	11	16 層	甕	(12.1)	(1.4)	N 4/0 灰	N 4/0 灰	N 3/0 暗灰	内外面ナデ。
63	11	16 層	甕	(11.8)	(1.25)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	10YR 7/3 にぶい黄橙	内外面ナデ。貼付け口縁。強いナデによって隆起をかもしだしている。
64	11	16 層	甕	(16.0)	(1.3)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	10Y 6/1 灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
65	11	18 層	甕	18	(1.5)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
66	11	16 層	甕	(15)	(1.7)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 4/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
67	11	18 層	甕	16	(3.8)	10YR 6/3 にぶい橙	10YR 6/3 にぶい橙	10YR 4/1 にぶい橙	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。

表Ⅱ –3　出土遺物観察表 2

図番号	図版番号	出土地点 層位	器種	法量（cm） 口径	器高	色調 内面	外面	断面	特徴
68	11	16 層	甕	(17.0)	(1.8)	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	N2/0 黒	内外面ナデ。
69	11	16 層	甕	(20.0)	(2.0)	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	N2/0 黒	内外面ナデ。
70	11	16 層	甕	(17.4)	(1.9)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 5/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
71	11	16 層	甕	(18.0)	(2.1)	10YR 7/2 にぶい黄橙	2.5Y 5/2 暗灰黄	7.5Y 4/1 灰	外面に刻目があるように見えるが、剥落激しい。
72	11	16 層	甕	18.4	(1.3)	10YR 4/1 褐灰	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。強いナデで稜線をつくりだしている。
73	11	16 層	甕	(20.2)	(1.4)	5Y 4/1 灰	5Y 5/1 灰	10R 6/3 にぶい赤橙	外面に微隆起突帯、その微隆起突帯に刻目。内面ナデ。
74	11	16 層	甕	-	(5.0)	5YR 7/3 にぶい橙	10YR 6/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	外面に円形浮文、微隆起突帯、櫛描文。内面ナデ、指頭圧痕あり。
75	11	16 層	甕	(21.9)	(1.2)	10YR 4/1 褐灰	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
76	11	16 層	甕	(26.0)	(2.0)	2.5Y 6/1 黄灰	2.5Y 6/1 黄灰	2.5Y 6/1 黄灰	外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
77	11	16 層	甕	(26.4)	(1.4)	10YR 5/6 黄褐	10YR 5/6 黄褐	10YR 6/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。
78	11	18 層	長頸壺	(22.0)	(7.3)	10YR 2/1 黒	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 2/1 黒	外面に刻目、浮文、微隆起突帯。内面ナデ、指頭圧痕あり。
79	12	サブトレ東西下層	甕	(14.6)	(1.6)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	N 3/0 暗灰	口縁外面刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
80	12	包含層	甕	(14.0)	(2.35)	10YR 5/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	N 5/0 灰	口縁外面に浅く広い刻目。内外面ナデ。
81	12	サブトレ東西下層	甕	(16.4)	(1.4)	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	口縁外面刻目、微隆起突帯。刻目の下に沈線。内外面ナデ。
82	12	包含層	甕	(16.7)	(2.9)	N 3/0 暗灰	N 3/0 暗灰	N 3/0 暗灰	口縁外面に微隆起突帯。内外面ナデ。
83	12	包含層	甕	(15.4)	(1.9)	N 3/0 暗灰	N 4/0 灰	N 3/0 暗灰	口縁外面刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
84	12	包含層	甕	(20.0)	(3.35)	7.5Y 6/1 灰	2.5YR 6/6 橙	7.5Y 6/1 灰	口縁外面刻目。内外面ナデ、粘土帯継ぎ目あり。
85	12	15 層	壺	(17.9)	(2.55)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	口縁外面刻目。内外面ナデ、指頭圧痕あり。剥落激しい。
86	12	包含層	甕	(18.0)	(2.15)	N 3/0 灰	N 3/0 灰	N 3/0 灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目、粘土帯継ぎ目あり。内外面ナデ。
87	12	包含層	甕	(18.0)	(2.2)	10YR 6/2 灰黄褐	2.5Y 5/2 暗灰黄	2.5Y 5/1 黄灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目。剥落激しい。
88	12	包含層	甕	(18.8)	(1.9)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 2/1 黒	口縁外面に刻目。
89	12	包含層	甕？	(18.0)	(2.0)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 2/1 黒	10YR 2/1 黒	口縁外面刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
90	12	包含層	甕	(18.2)	(4.2)	10YR 6/1 褐灰	7.5YR 7/2 明褐灰	5Y 5/1 灰	口縁外面刻目。内外面剥落。
91	12	包含層	甕	(20.0)	(3.2)	10YR 2/1 黒	10YR 2/1 黒	10YR 2/1 黒	口縁外面刻目。内外面ナデ。剥落
92	12	サブトレ東西下層	壺？	(18.4)	(2.8)	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	口縁外面に刻目、指頭圧痕。内外面剥落。
93	12	包含層	甕	(22.8)	(4.0)	10YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	貼付け口縁。口縁外面に刻目、指頭圧痕あり。内外面ナデ。
94	12	包含層	壺？	(22.0)	(5.0)	5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 4/1 褐灰	口縁外面粘土帯貼り付け、刻目。内外面ナデ、指頭圧痕あり。剥落。
95	12	包含層	甕	(19.6)	(6.5)	5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	5YR 5/1 褐灰	口縁外面刻目、微隆起突帯、板状工具によるナデ。
96	12	包含層	甕	21.5	(6.5)	10YR 7/3 にぶい黄橙	2.5Y 5/1 黄灰	10YR 6/1 褐灰	口縁外面刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
97	12	包含層	甕	20.6	(8.4)	2.5Y 3/1 黒褐	2.5Y 3/1 黒褐	2.5Y 3/1 黒褐	口縁外面粘土帯貼り付け、刻目。内外面ナデ。
98	12	包含層	甕	24.0	(3.0)	10YR 5/1 褐灰	2.5Y 4/1 黄灰	2.5Y 3/1 黒褐	口縁外面刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
99	12	包含層	甕	(24.0)	(2.8)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 5/1 黄灰	2.5Y 8/3 淡黄	口縁外面に凹線文。内外面ナデ。
100	12	包含層	甕	(24.0)	(1.9)	10YR 5/1 褐灰	10YR 6/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	口縁外面刻目。内外面ナデ。剥落。

表Ⅱ－4　出土遺物観察表 3

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (c m)		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
101	13	包含層	脚付壺	(11.2)	(2.3)	7.5YR 7/6 橙	10R 4/8 赤	10YR 7/3 にぶい橙	内外面ナデ。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
102	13	包含層	脚付壺	-	(2.3)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
103	13	18 層	脚付壺	11.0	(3.9)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
104	13	16 層	壺	-	(5.6)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 6/1 褐灰	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
105	13	16 層	高坏	-	(5.2)	7.5YR 7/6 橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
106	13	16 層	高坏	-	(4.7)	7.5YR 7/2 明褐灰	7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 6/1 褐灰	赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
107	13	包含層	脚付壺	-	(2.8)	5YR 8/3 淡橙	5YR 8/3 淡橙	5YR 8/3 淡橙	内外面に指頭圧痕あり。搬入品。胎土にカクセン石。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　種	法　量 (mm/g)				石　材	特　徴
				最大長	最大幅	厚さ	重量		
108	14	18 層	石鏃	13.2	10.4	1.7	0.3	チャート	
109	14	包含層	石鏃	16.7	10.6	1.9	0.4	チャート	
110	14	包含層	石鏃未製品	20.5	16.3	2.8	1.2	チャート	
111	14	16 層	石鏃	20.8	15.8	4.3	1.5	チャート	
112	14	包含層	石鏃	20.6	17.7	2.8	1.1	チャート	
113	14	包含層	石鏃	22.3	16.0	3.3	1.2	チャート	
114	14	16 層	石鏃	15.5	12.0	2.6	0.4	サヌカイト	
115	14	16 層	石鏃	18.0	10.8	3.5	0.6	サヌカイト	
116	14	包含層	石鏃欠損品	17.1	16.5	3.8	1.2	サヌカイト	
117	14	18 層	管玉	12.7	-	4.9	0.5	緑色凝灰岩	
118	14	13 層	臼玉	4.5	-	3.9	0.1	滑石	
119	14	13 層	臼玉	4.3	-	2.7	0.1	滑石	
120	14	13 層	臼玉	4.0	-	2.9	-	滑石	
121	14	13 層	臼玉	4.8	-	3.4	0.1	滑石	
122	14	13 層	臼玉	4.3	-	3.9	0.1	滑石	
123	14	13 層	臼玉	4.9	-	2.7	0.1	滑石	
124	14	13 層	勾玉欠損品	20.5	12.6	3.9	1.8	滑石	
125	14	13 層	勾玉	40.9	22.0	3.9	5.9	滑石	
126	14	5 層	鉄族	26.8	13.9	4.7	3.0	鉄	
127	14	7 層	鉄製品	39.4	17.1	4.8	5.1	鉄	
128	14	16 層	砥石	77.0	56.3	35.0	241.0	砂岩	
129	14	15 層	叩石	106.7	82.4	28.0	362.0	花崗岩	被熱痕跡あり
130	15	包含層	スクレイパー	39.4	40.8	5.7	8.5	サヌカイト	
131	15	18 層	二次加工のある剥片	28.5	49.9	6.6	9.2	サヌカイト	
132	15	包含層	スクレイパー	49.0	59.3	13.0	36.2	砂岩	インバース調整
133	15	18 層	二次加工のある剥片	45.8	59.5	7.6	26.0	砂岩	

第 5 次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (cm)		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
134	19	Ⅴ -2 層	甕	(12.0)	(7.2)	5YR 6/8 橙	5YR 6/8 橙	5YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕、粘土帯継ぎ目。
135	19	Ⅴ -2 層	甕	(13.8)	(4.9)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 6/6 明黄橙	外面叩目。
136	19	Ⅴ -2 層	手づくね	-	(2.5)	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/6 黄橙	内外面ナデ、指頭圧痕。剥落。
137	19	Ⅴ -2 層	手づくね	-	(4.3)	10YR 8/1 灰白	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。内面指頭圧痕。

表Ⅱ –5　出土遺物観察表 4

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器種	法量 (cm) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
138	19	Ⅴ -2 層	甕	-	(9.7)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	外面叩目。内面に指頭圧痕。
139	19	Ⅴ -2 層	甕	(16.4)	(4.8)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
140	19	Ⅴ -2 層	甕	(19.4)	(3.0)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	7.5Y 4/1 灰	内外面ナデ。
141	19	Ⅴ -2 層	鉢	22.5	11.9	5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ、指頭圧痕。
142	19	Ⅴ -2 層	甕	(14.4)	(18.7)	10YR 5/3 にぶい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	
144	23	土坑 1	甕	-	(3.1)	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	2.5YR 4/1 黄灰	外面に刻目、微隆起突帯。
145	23	土坑 3	壺	12.0	(4.6)	10YR 4/6 褐	10YR 4/6 褐	10YR 4/6 褐	口縁外面に刻目、指頭圧痕。内面ナデ。
146	23	溝 2	底部	-	(7.2)	10YR 8/1 灰白	10YR 8/2 灰白	10YR 5/1 褐灰	
147	26	土坑 5	壺	-	(3.3)	10YR 4/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	貼付け口縁。外面に刻目、微隆起突帯。
148	26	土坑 5	壺	-	(4.35)	2.5YR 8/2 灰白	10YR 7/3 にぶい黄橙	2.5YR 4/1 黄灰	貼付け口縁。外面に刻目、微隆起突帯、ヘラ描き沈線。
149	26	土坑 5	甕・壺	-	(5.5)	10YR 4/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	N 2/0 黒	外面波状文、櫛描文。
150	26	土坑 5	甕	-	(3.3)	10YR 7/1 灰白	7.5YR 5/2 灰褐	5Y 4/1 灰	外面に刻目、微隆起突帯、ナデ。
151	26	土坑 4	体部	-	(2.8)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 6/2 灰黄褐	5Y 3/1 オリーブ黒	外面に縦方向のヘラ描き沈線。
152	26	土坑 5	壺	(17.0)	(1.8)	10YR 4/1 褐灰	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 灰黄褐	貼付け口縁。外面に刻目、微隆起突帯。南四国型甕。
153	26	土坑 5	甕	18.2	(2.8)	10YR 7/2 にぶい黄橙	5Y 6/2 灰オリーブ	5Y 2/1 黒	貼付け口縁。外面に刻目、微隆起突帯。剥落。南四国型甕。
154	26	土坑 4	甕	(20.0)	(3.2)	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯、櫛描文。内面ナデ。南四国型甕。
155	26	土坑 5	甕	(16.8)	(9.0)	10YR 6/1 褐灰	10YR 8/2 灰白	10YR 3/1 黒褐	外面に微隆起突帯 1 条巡る。
156	26	土坑 4	壺？	-	(8.8)	N 4/0 灰	N 4/0 灰	N 4/0 灰	内外面ナデ。外面微隆起突帯、棒状浮文。
157	26	土坑 5	壺	-	(2.5)	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 3/1 黒褐	7.5YR 4/2 灰褐	内外面ナデ。
158	26	土坑 4	甕・壺	-	(2.4)	10YR 3/1 黒褐	10YR 5/1 褐灰	10YR 3/1 黒褐	内外面ナデ。
162	28	土坑 6	鉢	(18.6)	(6.3)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	10YR 5/2 灰黄褐	貼付け口縁。内面に指頭圧痕。
163	28	土坑 6	甕・壺	-	(3.2)	10YR 5/1 褐灰	10YR 6/1 褐灰	10YR 3/1 黒褐	内外面ナデ。
164	28	土坑 6	甕・壺	-	(2.4)	7.5YR 3/1 オリーブ黒	10YR 6/2 灰黄褐	7.5YR 3/1 オリーブ黒	内外面ナデ。
165	28	土坑 6	甕	(15.9)	(4.2)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	口縁外面に刻目。内面ナデ、指頭圧痕。
166	28	土坑 6	甕	(17.7)	(3.4)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	2.5Y 5/1 黄灰	内外面ナデ。外面に竹管文。
167	31	溝 1	甕	(30.0)	(1.3)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/1 灰白	10YR 5/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内面剥落。
168	31	溝 2	甕	-	(3.7)	2.5Y 7/2 灰黄	10YR 7/3 にぶい黄橙	2.5Y 5/1 黄灰	外面に微隆起突帯。
169	31	溝 1	壺	-	(2.6)	2.5Y 6/1 黄灰	10YR 6/3 にぶい黄橙	2.5Y 6/1 黄灰	内外面ナデ。
170	31	溝 2	甕・壺	-	(3.4)	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
171	31	溝 2	甕・壺	-	(4.2)	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/1 褐灰	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
172	31	溝 2	甕	(25.6)	(2.2)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 2/1 黒	10YR 2/1 黒	貼付け口縁。外部に微隆起突帯。内外面ナデ。
173	31	溝 2	壺	(24.8)	(7.5)	7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 4/3 にぶい黄褐	内外面ナデ。内面指頭圧痕。
174	31	溝 2	甕・壺	(15.0)	(5.2)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/3 にぶい黄橙	2.5Y 6/1 黄灰	貼付け口縁。外面に刻目、波状文。内外面ナデ。
175	31	溝 2	壺	-	(7.5)	5Y 7/2 灰白	2.5Y 7/3 浅黄	5Y 7/2 灰白	外面微隆起突帯、円形浮文、楕円形浮文。
176	31	溝 2	甕	(18.8)	(14.5)	7.5YR 6/1 褐灰	7.5YR 7/1 明褐灰	5Y 3/1 オリーブ黒	口縁外面に刻目、微隆起突帯。胴部外面櫛描文、円形浮文。南四国型甕。
177	32	落ち 1	長頸壺	(11.7)	(2.3)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	5Y 4/1 灰	口縁外面に刻目。
178	32	落ち 1	体部	-	(2.8)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 6/1 褐灰	外面に 2 つの突帯。突帯の上に沈線。彩色跡が残る。搬入品。

表Ⅱ –6　出土遺物観察表 5

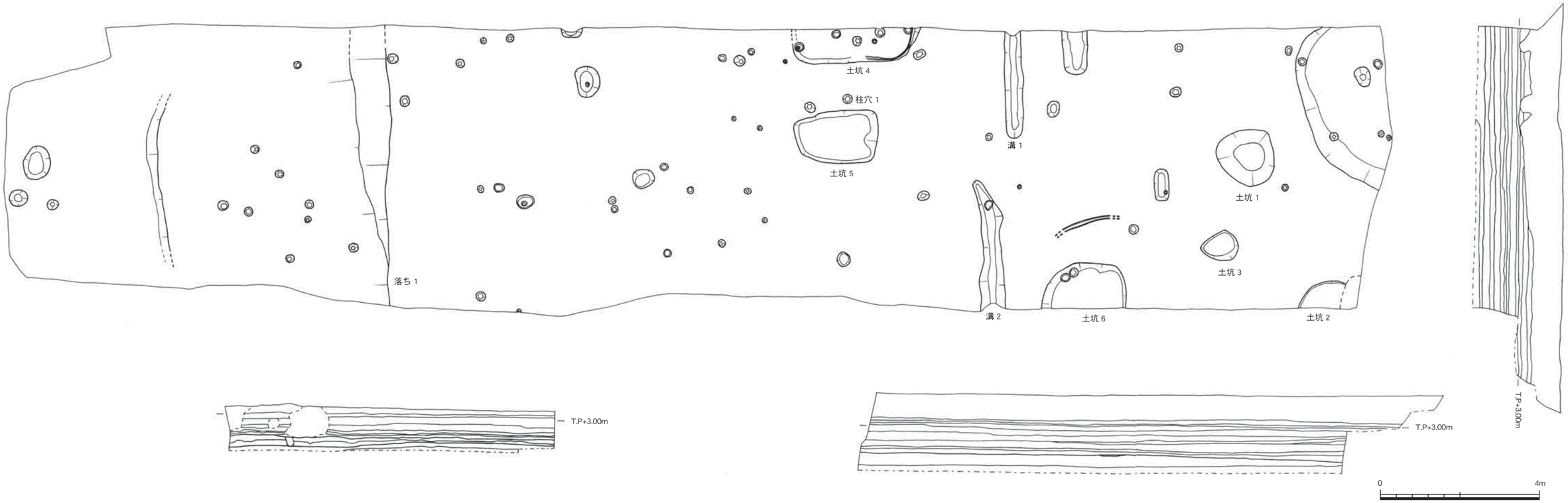
図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (cm) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
179	33	Ⅶ～Ⅷ層	甕	(15.6)	(1.7)	2.5YR 5/1 黄灰	2.5YR 6/3 にぶい黄	2.5YR 3/1 黒褐	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
180	33	Ⅶ～Ⅷ層	甕・壺	-	(2.25)	2.5YR 7/1 灰白	2.5YR 7/2 灰黄	2.5YR 3/1 黒褐	貼付け口縁。口縁外面に刻目。内外面ナデ。
181	33	Ⅴ～Ⅶ -2 層	甕	(15.0)	(1.7)	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 8/2 灰白	7.5YR 4/1 褐灰	外面ナデ。口縁外面に凹線文。内面板状工具によるナデ。
182	33	Ⅶ～Ⅷ層	甕	(22.5)	(2.55)	10YR 4/1 褐灰	7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 4/1 褐灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目。内面に指頭圧痕。
183	33	Ⅶ層	甕・壺	(15.0)	(1.6)	2.5Y 6/2 灰黄	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 6/1 褐灰	貼付け口縁。口縁外面に深い刻目。内面に指頭圧痕。
184	33	Ⅶ -2 ～Ⅷ層	甕	22.8	(2.3)	10YR 7/3 にぶい黄橙	7.5YR 7/2 明灰褐	7.5YR 5/1 褐灰	口縁外面に刻目。
185	33	Ⅶ -2 ～Ⅷ層	甕	(28.0)	(1.7)	2.5YR 4/1 黄灰	2.5YR 6/3 にぶい黄	2.5YR 4/1 黄灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目、指頭圧痕。内面ナデ。
186	33	Ⅶ -2 ～Ⅷ層	甕	(20.0)	(4.5)	2.5Y 6/2 灰黄	10YR 8/3 浅黄橙	2.5Y 3/1 褐灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目。
187	34	Ⅷ層	甕	(14.0)	(1.5)	10YR 4/1 褐灰	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 6/2 灰黄褐	口縁外面に凹線文。内外面ナデ。
188	34	Ⅷ層	甕	16.8	(1.8)	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 4/1 褐灰	口縁外面に刻目。内外面ナデ。剥落。
189	34	Ⅷ層	長頸壺？	(15.4)	(2.7)	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 2/1 黒	外面に微隆起突帯。内外面ナデ。
190	34	Ⅷ層	甕	16.8	(2.2)	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 2/1 黒	口縁外面に刻目、沈線、微隆起突帯。内外面ナデ。
191	34	Ⅷ -1、2 層	甕	17.4	(2.1)	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。剥落。
192	34	Ⅷ -1 層	甕	(20.2)	(1.3)	5Y 7/3 浅黄	5Y 7/3 浅黄	5Y 4/1 灰	外面に微隆起突帯。内外面ナデ。
193	34	Ⅶ -2 層	甕	(16.6)	(4.7)	7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 4/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
194	34	Ⅷ -1 層	甕	20.8	(1.6)	5YR 6/2 灰褐	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	貼付け口縁。内外面ナデ。
195	34	Ⅶ -2 層	甕・壺	(18.4)	(3.15)	N 4/0 灰	2.5Y 7/2 灰黄	N 3/0 暗灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯、櫛描文。内外面ナデ。
196	34	Ⅷ -1 層	甕	(22.0)	(2.0)	7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	口縁外面に微隆起突帯。剥落。
197	34	Ⅷ層	甕	18.0	(1.7)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	N 3/0 暗灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
198	34	Ⅷ層	甕	(21.7)	(2.3)	7.5YR 8/1 灰白	7.5YR 8/2 灰白	7.5YR 8/1 灰白	貼付け口縁。口縁外面に指頭圧痕。内外面ナデ。
199	34	Ⅷ層	不明	18.2	(2.2)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	口縁外面に粘土帯貼り付け後刻目。内外面ナデ。
200	34	Ⅶ -1 ～Ⅷ -1 層	甕	(24.0)	(2.2)	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 4/1 褐灰	外面に微隆起突帯、指頭圧痕。内外面ナデ。
201	34	Ⅷ -1 層	甕	(18.0)	(1.8)	10YR 5/1 褐灰	10YR 6/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。剥落。
202	34	Ⅷ -1、2 層	甕	(22.6)	(3.2)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 2/1 黒	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内外面に板状工具によるナデ。
203	34	Ⅷ層	甕	(17.4)	(2.3)	10YR 2/1 黒	10YR 3/2 黒褐	10YR 2/1 黒	口縁外面に刻目、微隆起突帯。内外面ナデ。
204	34	Ⅷ -1、2 層	甕	(22.0)	(1.6)	2.5Y 7/3 浅黄	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 2/1 黒	外面に刻目、微隆起突帯。微隆起突帯の上に円形浮文。
205	34	Ⅷ -1 層	甕	(18.0)	(1.7)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 4/1 褐灰	口縁外面に刻目、微隆起突帯。剥落。
206	34	Ⅷ層	甕	(22.4)	(3.7)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 5/1 褐灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目。内外面ナデ。
207	34	Ⅷ層	甕	(20.2)	(1.9)	7.5YR 3/1 黒褐	7.5YR 3/1 黒褐	7.5YR 3/1 黒褐	口縁外面に刻目。剥落。
208	35	Ⅷ -1、2 層	長頸壺	(15.7)	(4.0)	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 8/2 灰白	2.5Y 6/1 黄灰	口縁外面に刻目。頸部に微隆起突帯が、その上に円形浮文。
209	35	Ⅷ -1 層	甕	-	(1.6)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 5/1 褐灰	10YR 2/1 黒	外面に刻目、微隆起突帯。
210	35	Ⅷ層	甕	-	(1.6)	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/1 灰白	外面に刻目、微隆起突帯。
211	35	Ⅷ層	甕	-	(1.9)	7.5YR 7/6 橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 5/1 褐灰	口縁外面粘土帯貼り付け、刻目。内外面ナデ。
212	35	Ⅷ層	甕	-	(2.1)	5YR 7/1 明褐灰	5YR 8/1 灰白	N 4/0 灰	貼付け口縁。外面に刻目、微隆起突帯。
213	35	Ⅷ -2 層	壺？	19.2	(1.8)	7.5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 7/2 明褐灰	7.5YR 6/1 褐灰	外面に刻目、ナデ。
214	35	Ⅸ層	甕・壺	(17.4)	(2.6)	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 5/1 褐灰	外面に刻目。剥落著しい。

表Ⅱ –7　出土遺物観察表６

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (cm) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
215	35	溝２	壺？	(25.0)	(3.0)	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 6/2 灰黄橙	7.5Y 6/1 灰	外面に刻目。剥落著しい。
216	35	Ⅷ層	甕	(13.4)	(5.2)	7.5YR 6/2 灰褐	7.5YR 6/3 にぶい褐	7.5YR 2/1 黒	貼付け口縁。口縁外面に指圧による連続押圧文。頸部外面に竹管文、微隆起突帯、櫛描文、刻目。
217	35	Ⅷ層	甕	(25.0)	(2.4)	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/1 褐灰	外面に刻目、微隆起突帯。
218	35	Ⅶ-2 層	甕	(12.0)	(2.5)	2.5Y 7/3 浅黄	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	内外面に板状工具によるナデ。
219	35	溝２	甕	(29.0)	(2.3)	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 3/1 黒褐	外面に刻目、微隆起突帯、板状工具によるナデ。内面剥落。
220	35	Ⅷ層	甕	(22.0)	(11.0)	2.5YR 7/1 灰白	2.5YR 7/2 灰黄	2.5YR 4/1 黄灰	貼付け口縁。口縁外面に刻目。胴部外面に微隆起突帯、櫛描文、刻目。南四国型甕。
221	35	Ⅷ層	甕	(8.4)	(5.8)	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/2 灰黄褐	10YR 6/2 灰黄褐	内外面ナデ、指頭圧痕。
222	35	Ⅷ層	甕	-	(5.2)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 2/1 黒	外面に円形浮文、微隆起突帯。
223	35	Ⅷ層	底部	-	(2.4)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 4/1 褐灰	内面ナデ。外面剥落。
224	35	Ⅷ層	底部	-	(4.6)	7.5YR 5/1 褐灰	7.5YR 5/3 にぶい褐	7.5YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。
225	35	Ⅷ層	壺	-	(3.5)	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
226	35	Ⅶ-1 ～Ⅷ層	底部	-	(2.0)	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 4/1 褐灰	7.5YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
227	36	Ⅷ層	体部	-	(1.6)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
228	36	Ⅷ層	体部	-	(1.7)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
229	36	Ⅷ層	体部	-	(2.4)	2.5YR 7/2 灰黄	2.5YR 7/2 灰黄	2.5YR 7/2 灰黄	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
230	36	Ⅶ-2 ～Ⅷ層	体部	-	(1.55)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
231	36	Ⅷ層	体部	-	(2.2)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面に M 字突帯。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。
232	36	Ⅶ-2 ～Ⅷ層	体部	-	(2.5)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面ハケ、指頭圧痕。内面粘土帯継ぎ目。搬入品。
233	36	Ⅷ層	甕	-	(1.25)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。東北部九州型甕。搬入品。
234	36	Ⅷ-1、２層	甕	-	(1.3)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面ナデ。東北部九州型甕。搬入品。
235	36	Ⅷ-1、２層	甕	18.5	(6.2)	10YR 7/4 にぶい黄橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	内面ナデ、指頭圧痕。赤色顔料付着。搬入品。胎土にカクセン石。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　種	法　量 (mm/g) 最大長	最大幅	厚さ	重量	石　材	特　徴
143	19	Ⅴ－２層	叩石	135.0	122.0	62.0	1300.0	砂岩	表裏中央部に敲打痕顕著
159	27	土坑４	石包丁	42.0	100.0	19.0	62.1	不明	
160	27	土坑４	叩石	121.0	98.0	44.0	891.0	砂岩	
161	27	土坑４	二次加工のある剥片	188.0	136.0	9.0	351.0	黏板岩	
236	37	落ち１	石鏃	21.9	17.1	4.4	1.6	チャート	
237	37	落ち１	二次加工のある剥片	32.2	11.3	3.0	1.7	チャート	
238	37	落ち２	楔形石器？	27.7	27.7	5.4	4.1	チャート	上端と下端に細かい連続的な剥離痕あり。
239	37	落ち２	石鏃	21.7	17.0	3.3	1.1	チャート	
240	37	Ⅷ層	二次加工のある剥片	17.7	12.7	3.6	1.1	チャート	
241	37	Ⅷ-2 層	石鏃	28.0	15.9	2.8	1.6	チャート	欠損品
242	37	Ⅷ-2 層	石鏃	21.7	14.5	2.8	0.9	サヌカイト	
243	37	試掘表採	石鏃	(17)	14.2	2.8	1.0	チャート	欠損品
244	37	機械掘削時表採	石鏃	22.0	13.5	4.0	1.4	チャート	
245	37	Ⅷ層	石鏃	27.6	18.3	4.3	2.2	チャート	

表Ⅱ－8　出土遺物観察表７



図Ⅱ –38　第 5 次調査遺構平面図

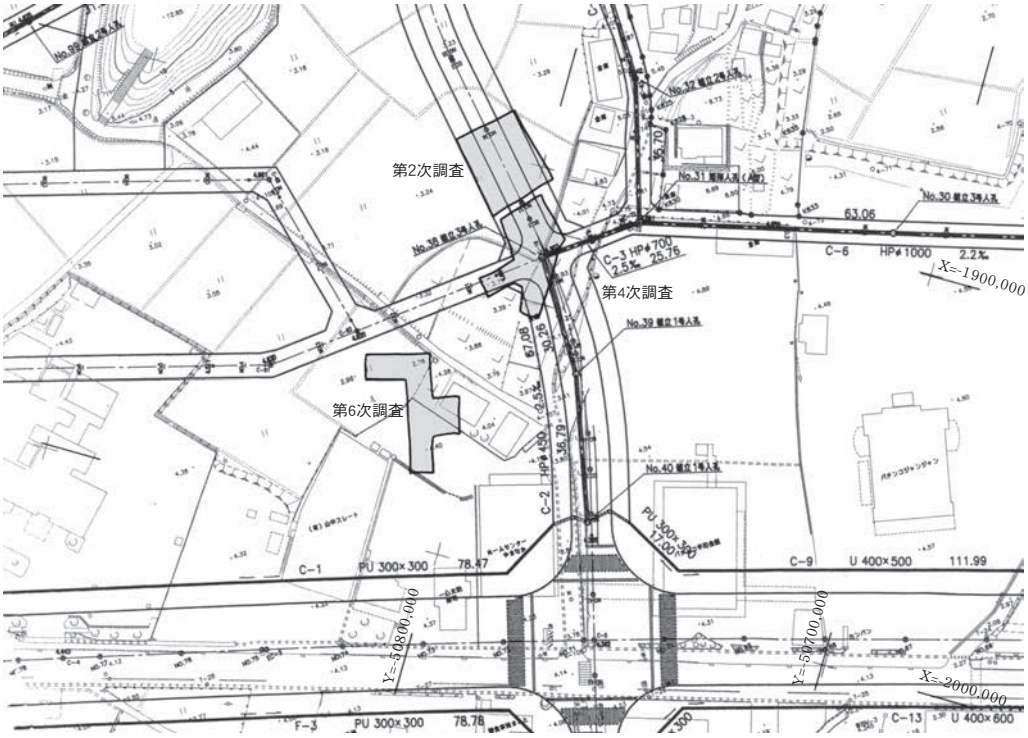
第 III 章 ホウシボウ地区の調査

III-1　調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯と経過

古津賀土地区画整理組合は古津賀地区の区画整理事業に伴い、古津賀ホウシボウ周辺の造成工事及び市道の延長・新設・拡幅を計画していた。この計画に先立って試掘確認調査を平成10年度以降順次実施した結果 、市道延長部分について埋蔵文化財が良好に残存することが判明したため、市教育委員会と古津賀土地区画整理組合との間に委託契約を締結し、平成 11 年度に第 2 次調査、平成 12 年度に第 4 次調査を実施した (図 III-1)。

なお、平成 15 年度に区画整理事業に伴う換地箇所に店舗が新設されることとなったため、開発箇所にて試掘確認調査を実施した結果、古墳時代および弥生時代の所産と考えられる遺物及び遺構が確認された。これをうけて開発工事によって埋蔵文化財が損壊を受ける箇所について発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は土地区画整理組合と発掘調査にかかる作業員及び使用機材の提供を請け負う市内業者が委託契約を締結して実施された。なお、発掘調査の実施にあ



図Ⅲ –1　第 2 次・第 4 次・第 6 次調査地点位置図

たっては、区画整理組合から依頼を受けた市教育委員会から担当職員が派遣され現地での指導にあたった。当該調査で古津賀遺跡群発掘調査は 6 次を数えることとなる。

2. 調査の方法

各調査では調査区を任意のグリッドに分割し、包含層等からの遺物の取上げは特に必要がある場合を除き、このグリッドごとに区分して取上げている。各調査のグリッドによる地区設定と国土座標との関係は以下で調査ごとに詳述する。

発掘調査は重機による機械掘削の後に人力によって遺物包含層を掘削し、必要に応じて遺構の精査を行った。出土した遺物・遺構についてはその都度写真撮影および図面の作成を行い記録にとどめた。調査区内の層位の堆積状況は必要箇所の壁面において観察し、その関係を記録した。なお、現地調査にあたっては、調査区の外郭に仮囲い等を行い、調査範囲を遺構検出面まで重機にて掘り下げた。第 2 次・第 4 次調査については、機械掘削による残土は調査区横に仮置きし、人力掘削による残土は場内に仮置きした。第 6 次調査では、機械および人力による掘削残土及び産業廃棄物は一時場内に仮置きし、ダンプにて廃棄もしくは埋め戻しに用いた。調査時には、両調査とも掘削深度が増すにつれて安全性を確保するため必要に応じて法面､犬走り等を設けた。いずれの調査についても周辺からの湧水が著しいため水中ポンプを常時稼動させて排水を行った。第 6 次調査では、安全を期すため犬走り部分にトレンチシート約 100 枚を設置した。これらの矢板は調査終了時にすべて抜き取り現状に戻した。なお、第 6 次調査では調査終了後調査区をすべて埋め戻し、現状に復旧して土地区画整理組合に引き渡した。

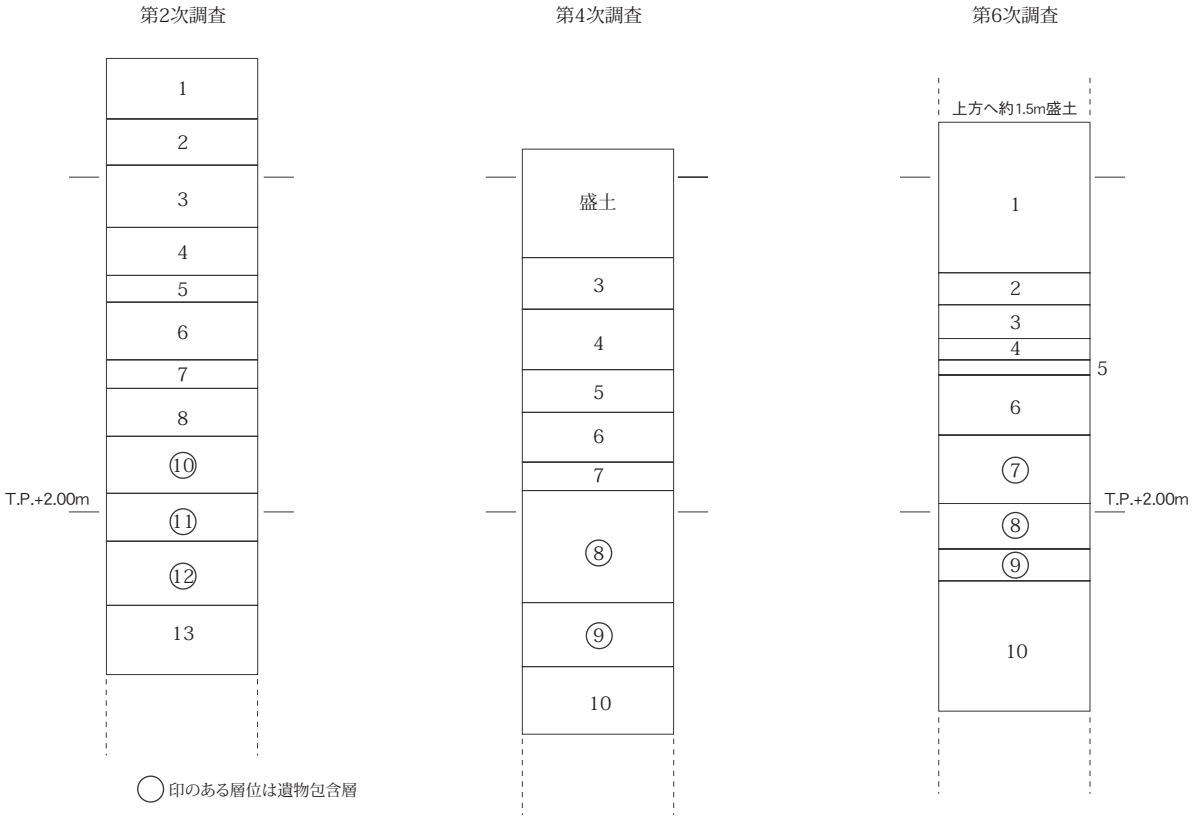
III-2　基本的な層序

ホウシボウ地区での 3 つ調査は近接した場所で実施されており、基本的に堆積状況もほぼ同様の様相を示す。各々の調査の成果を関連付けさせる一助とするため、以下では各調査における層位を比較し、その対応関係を整理することとする。

第 2 次調査、第 4 次調査、第 6 次調査の層位の堆積状況を柱状図に示したものが図 III-2 である。耕土より上部の堆積については区画整理に伴う造成工事が随時行われており盛土等のため現況地盤面に高低差が生じているが、いずれの調査においても概ね T.P.+2.00m 前後で古墳時代の包含層が堆積していることが分かる。さらに個別の層位における遺物の出土状況を観察していくと 3 調査の層位は大きく 3 つに大別できることが分かる。すなわち、近現代まで使用されていた耕土及び旧耕土層、主に古墳時代の遺物を含む褐灰色極細粒砂層、検出された遺構群に対して基盤層となる還元シルト層である。これらを上位に堆積するものから順にA～Cの番号を付

し、ホウシボウ地区における大別層序として設定する。また、遺物包含層における遺物の出土量に目を向けると、遺物出土の主体となる層位は第２次調査では 11 層、第４次調査では８層、第６次調査では7～8層であり、ほぼ水平な堆積状況が看取される。

なお、以下各節で層位を呼称する場合は、特に必要のある場合を除いて各調査における個別の層番号を用いることとし、調査をまたがる比較については大別層序を付して表記することとする。



1. 2.5Y4/1黄灰粘質土　耕作土
2. 2.5Y4/2暗灰黄粘質土　耕作土
3. 5Y4/1灰オリーブ粘質土　耕作土
4. 5Y4/2灰黄褐色粘質土　耕作土
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質土
　マンガン斑含む　耕作土
6. 5Y5/1灰粘質土　耕作土
7. 2.5Y4/2暗灰黄粘質土
8. 2.5Y4/2暗灰黄粘質土
　マンガン斑多く含む
10. 5Y4/2灰オリーブ粘質土
　包含層（古墳時代）遺物量多い
11. 2.5Y4/1黄灰粘質土　包含層（古墳時代）
12. 2.5Y4/1灰シルト　微量遺物混じる
13. 黒褐シルト　基盤層

3. 暗褐土
4. 灰褐土
5. 淡灰褐粘質土
6. 淡灰粘質土
7. 淡茶褐粘質土　マンガン斑混入
8. 暗茶褐粘質土
　マンガン斑混入　包含層（古墳時代）
9. 灰褐粘質土
　マンガン斑・鉄分沈着有　微量遺物混入
10. 灰粘質土　微量細粒砂混入

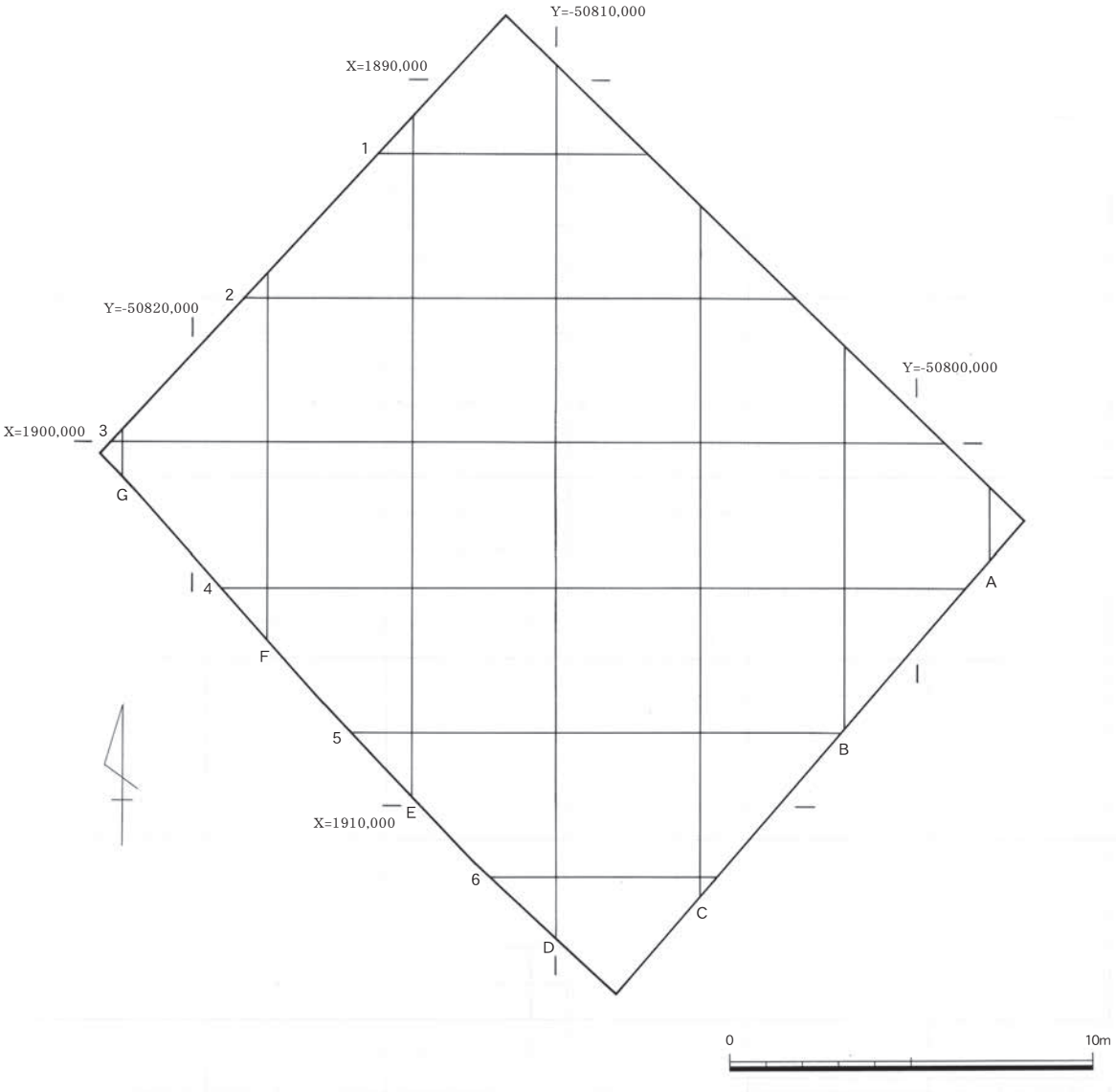
1. N5/0灰極細粒砂～シルト
2. N5/0灰極細粒砂～シルト
3. 10YR5/2灰黄褐極細粒砂～シルト　マンガン斑含む
4. 10YR5/1褐灰極細粒砂～シルト　マンガン微量含む
5. 10YR5/2灰黄褐極細粒砂～シルト　マンガン微量含む
6. N5/0灰極細粒砂～シルト
7. 10YR5/3にぶい黄褐極細粒砂～シルト
　マンガン多く含む　包含層（古墳時代）
8. 10YR5/2灰黄褐極細粒砂シルト～粘土
　包含層（古墳時代）
9. N5/0灰10YR5/1褐灰極細粒砂～シルト
　遺物は微量含まれる
10. N3/0暗灰粘土　基盤層

図Ⅲ –2　第２次・第４次・第６次調査層位柱状図

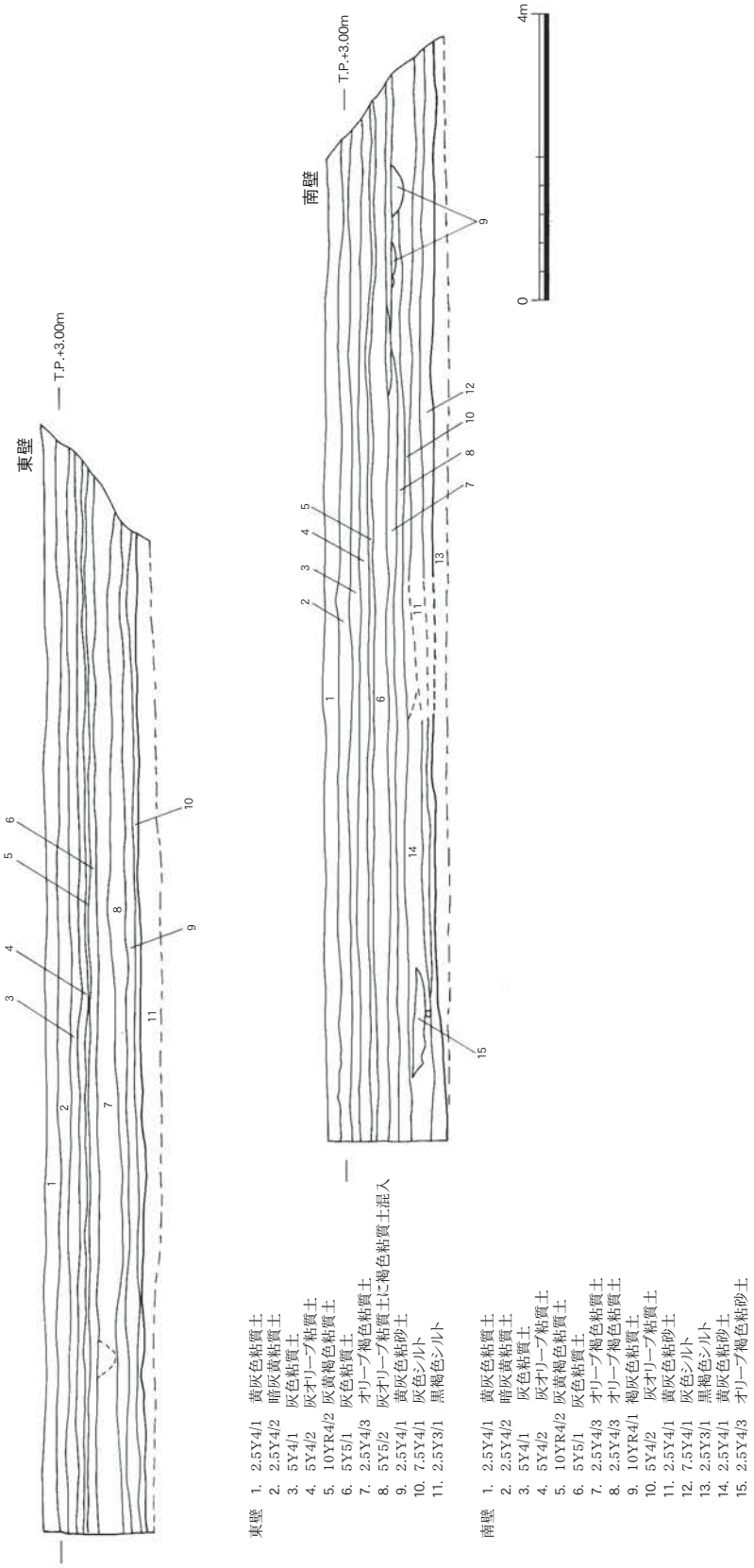
III-3　第 2 次調査の成果

1. 第 2 次調査の経過

第 2 次調査は平成 11 年 10 月 12 日から同年 11 月 19 日にかけて 320m² を対象に実施した。上部の盛土を重機にて掘削し、さらに遺物包含層 (9 層～12層) までを重機掘削したのち人力にて遺物包含層以下を掘削した。



図Ⅲ –3　第 2 次調査グリッド設定図



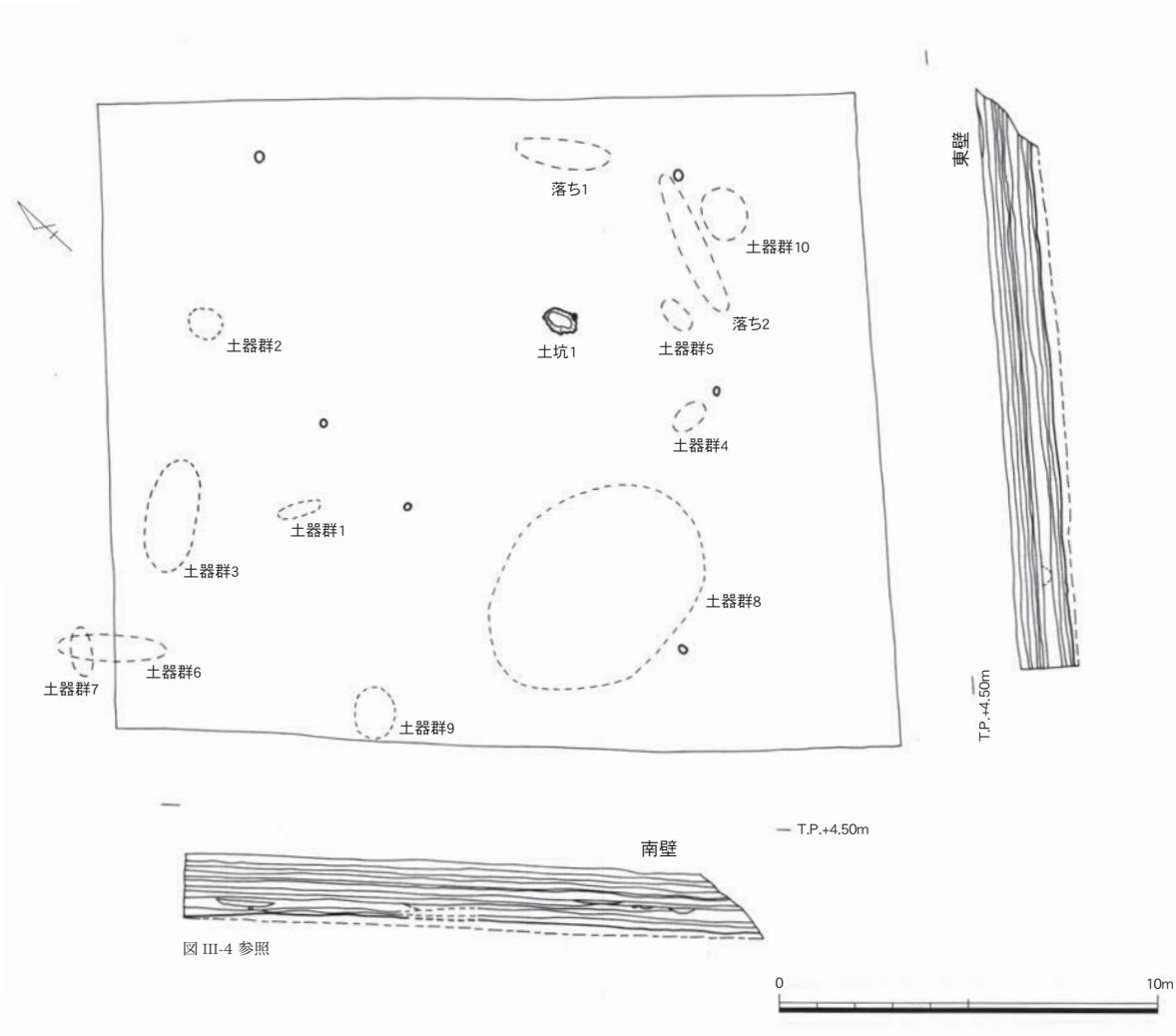
図Ⅲ –4　第 2 次調査東・南壁土層断面図

2. 設定したグリッド

第２次調査のグリッドは公共座標の傾きにあわせて 4m の正方形を設定した。このグリッドの境界線に対して北から南に向かって 1～6、東から西に向かってA～Gの呼称を割り当て、各境界線の北東隅の交点をそのグリッドの名称とした。各グリッドの名称と国土座標との関係は図 III-3 のとおりである。

3. 古墳時代の遺構と遺物

現地は近年まで畑地として利用されており、耕作に伴う堆積が 80cm ほど堆積する。重機に

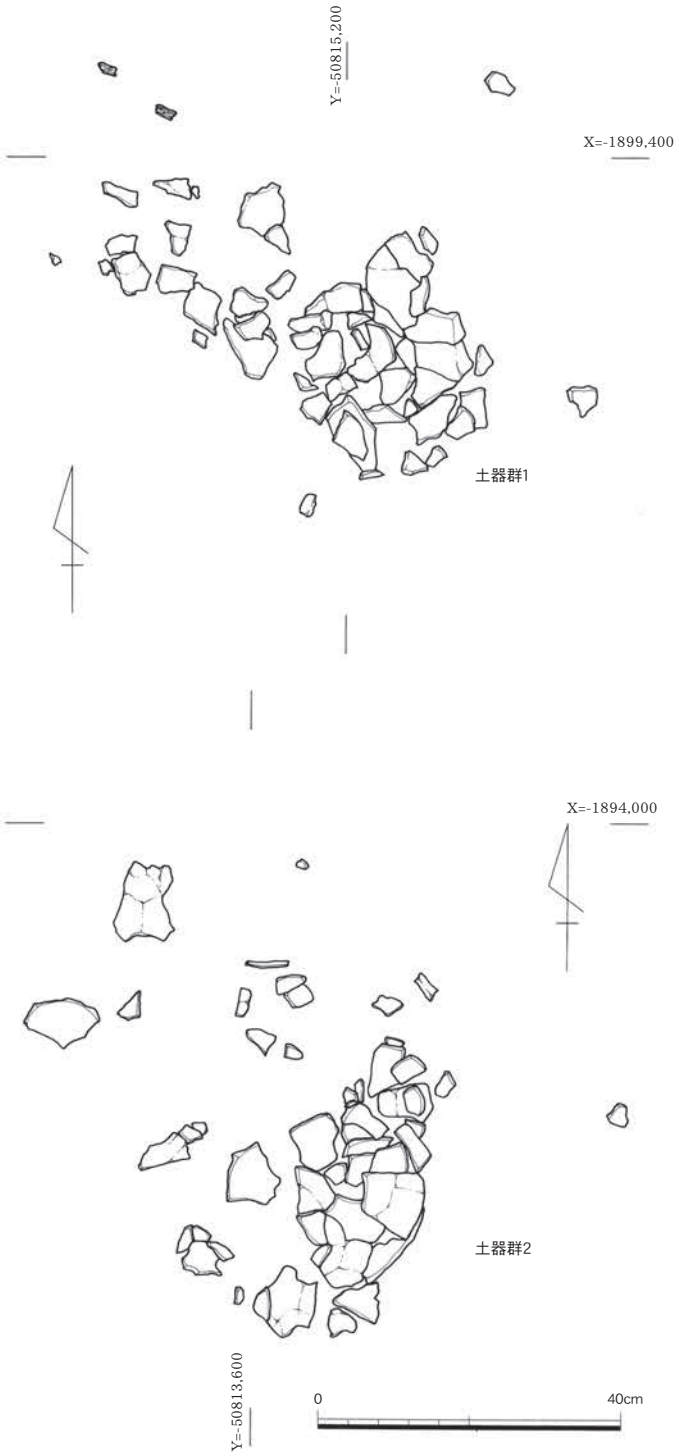


図Ⅲ –5　第２次調査遺構全体図

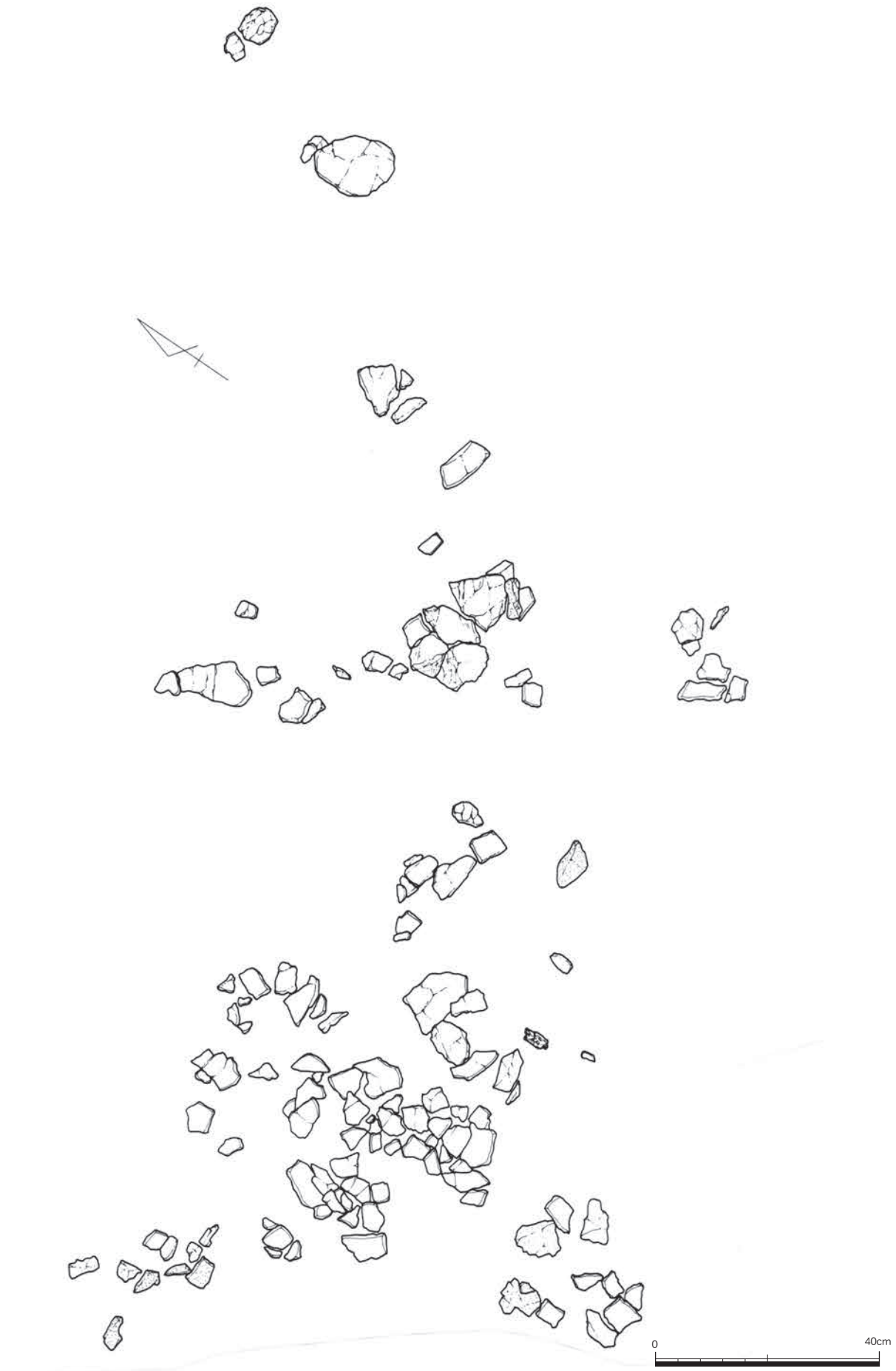
てこれら耕土層を除去していくと、中世の所産と思われる遺物が数点確認されているが(7～8層)、古墳時代に属する須恵器片も同一の層序から出土しており明確な時期を比定することは困難であった。中世期の遺物を包含する層位の直下から古墳時代の遺物が確認される。古墳時代の包含層は層厚約 45cm を測り層中からは多くの遺物が確認されているものの、当該調査ではまばらな柱穴及び土坑以外に明確な遺構は検出されていない。この他には包含層掘削時および遺構検出時に遺物がまとまりをもって出土する範囲が数箇所検出されているのみである。これら調査時に確認された遺物の密度が高いエリアについては土器群としてその範囲を図示している（図 III-5)。

土器群　遺物が密に出土する範囲は合計 11 箇所確認されている、分布の状況としては範囲の規模にばらつきがあるものの比較的調査区南側に多く確認される。土器群のなかでもっとも範囲が広く、出土量の多いものは土器群 8 である。

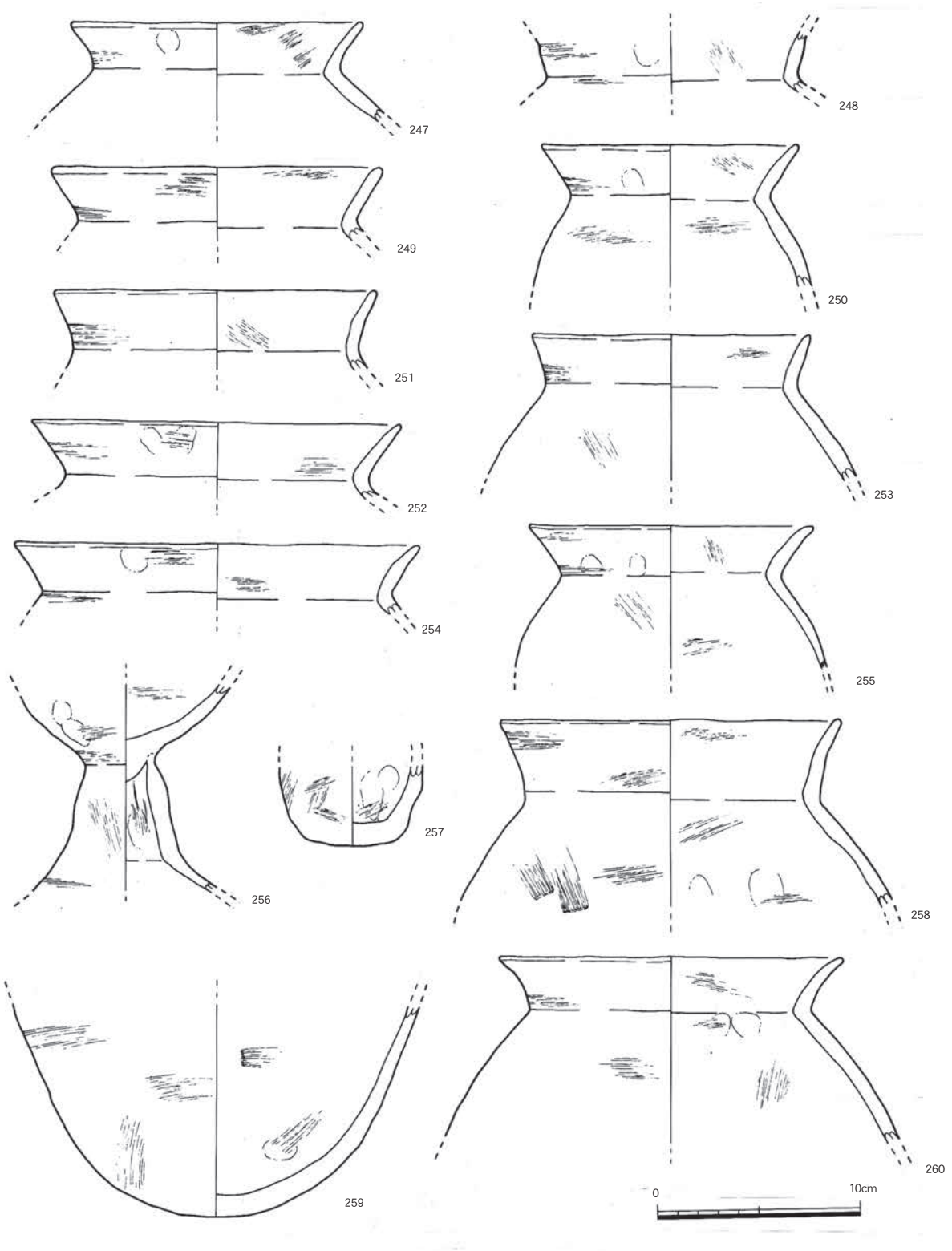
土器群 1 から 7 にかけての出土遺物は、甕、高坏、手づくね土器である。(図 III-8)247～255、258、260 は甕口縁部である。247 は体部から屈曲した口縁が短く外反して端部はまるくおさめる。体部最大径が胴部上半から肩部に存在するものと思われる。249、250、252 は頸部で屈曲したのち端部へ向かって直線的に伸びるもの、251、254 は屈曲も緩く外反ぎみに立ち上がるものである。255、260 の口縁は外反ぎみに立ち上がる。257 は手づくね土器である。小型の粗製品で、底部のみが残存する。内面には指頭圧痕が見られる。256 は高坏脚部である。裾部で緩く屈曲し外方へ伸びる。坏部は残存する形状から屈曲点を持たないタイプ



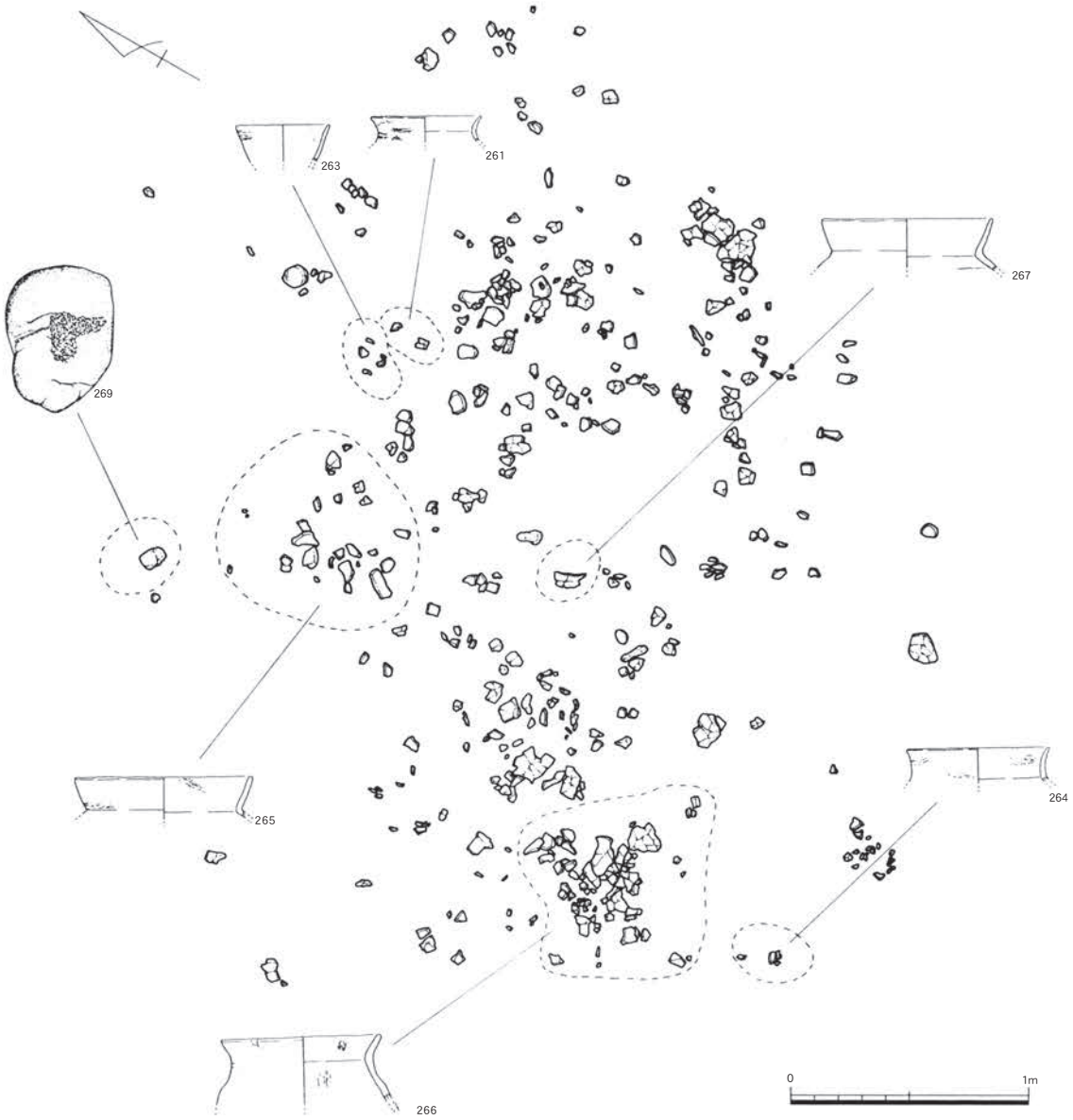
図Ⅲ –6　土器群 1・土器群 2 遺物出土状況図



図Ⅲ –7　土器群 3 遺物出土状況図



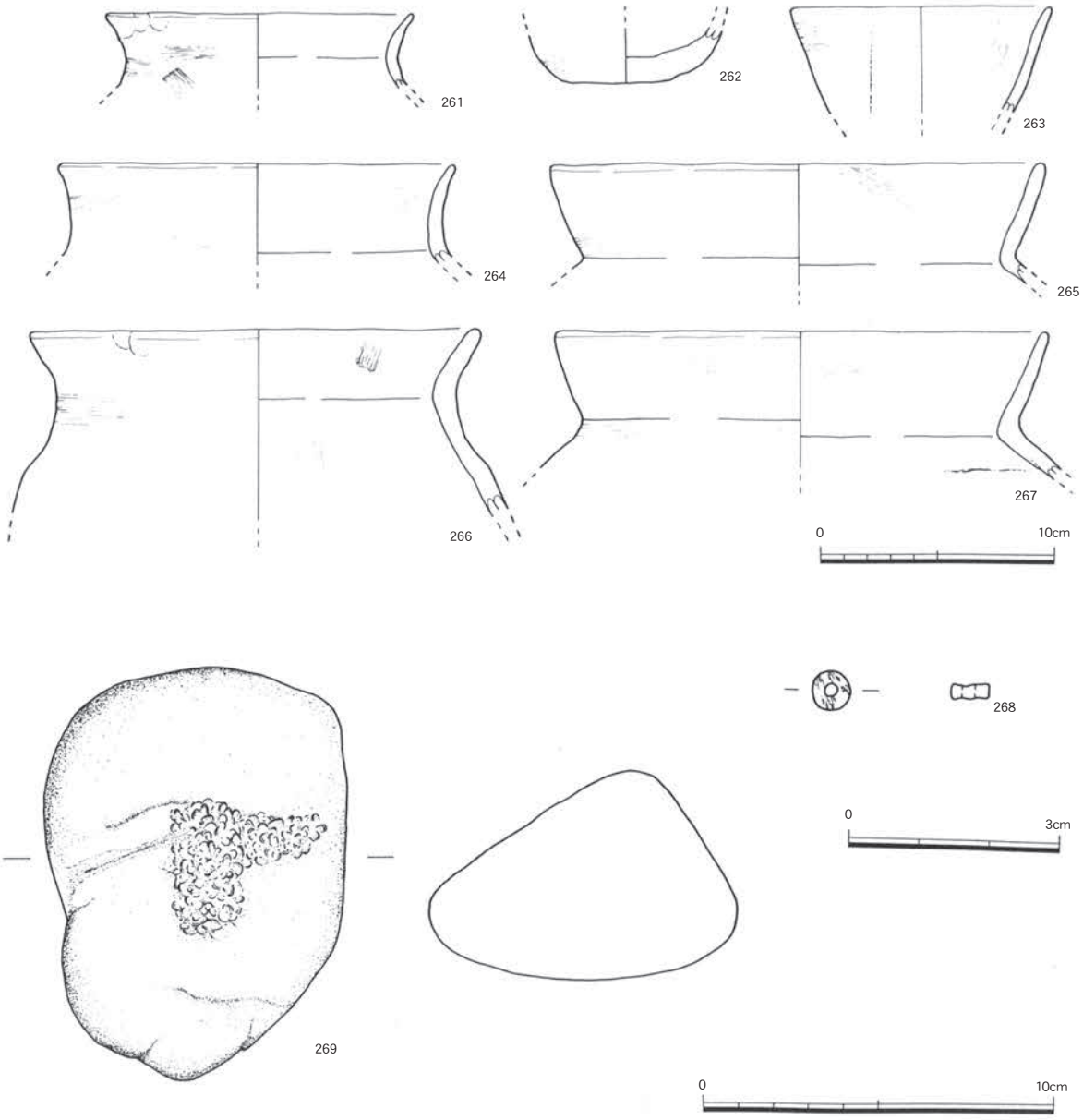
図Ⅲ –8　土器群 1 ～土器群 7 出土遺物



図Ⅲ –9　土器群 8 遺物出土状況図

のものと考えられる。脚部内面には絞り痕及びナデ調整がみられる。259 は丸底の甕底部である。胴部中央付近で最大径を持つものと思われ、内外面ともナデ調整で仕上げられる。

土器群 8 で出土する遺物は、甕、手づくね土器、壺、叩石、臼玉である。263 は端部に向かってやや外反ぎみに立ち上がる鉢と思われる。口縁径は 10.6cm を測る。261・264 ～ 267 は甕口縁部である。261・264 の端部は外反しつつ端部へ向かうが、265・267 はやや内湾して終わる。269 は叩石である。片面に敲打痕が残る。268 は臼玉である。直径　5.5mm、孔径 2mm を測る。262 は手づくね土器の底部である(図 III-10)。282 は高坏脚部である。脚部は短く、裾部分で大きく屈曲し外方へ伸びる。内面は絞り痕とナデ調整が確認される。285 は砥石である。表面中

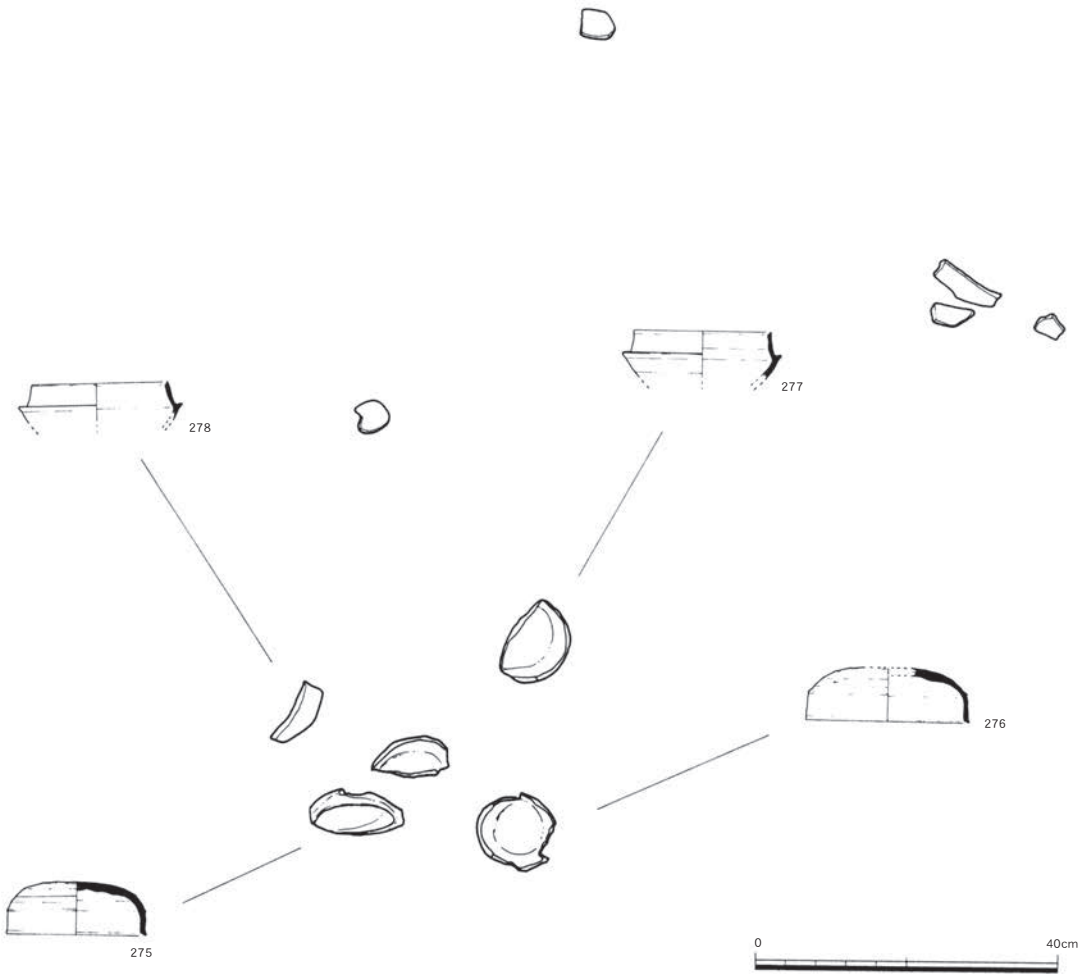


図Ⅲ –10　土器群 8 出土遺物

央部に擦痕が集中的に観察できる。また背面中央付近には敲打痕も確認できる。

土器群 9 では須恵器坏身及び坏蓋が出土する (図 III-12)。275・276は坏蓋である。276 の天井部は丸みをもち、天井部 1/2 まで回転ヘラ削り、稜部は断面三角形を呈し口縁端部はやや外反して終わる。275 も点上部は丸みを持ち、その 1/2 までヘラ削りが及ぶが、稜部からはやや内湾気味に端部へと向い、端部は浅い凹状をなす。277・278 は須恵器坏身である。277・278 ともに稜部は断面三角形を呈し、立上がりはやや内傾して上方へ伸び、端部は浅い凹状に仕上げられる。外面は底部から約 1/2 に回転ヘラ削りが施される。

土器群 10 では甕、鉢、高坏が出土する。270～272・274 は甕口縁部である。270・271 は肩

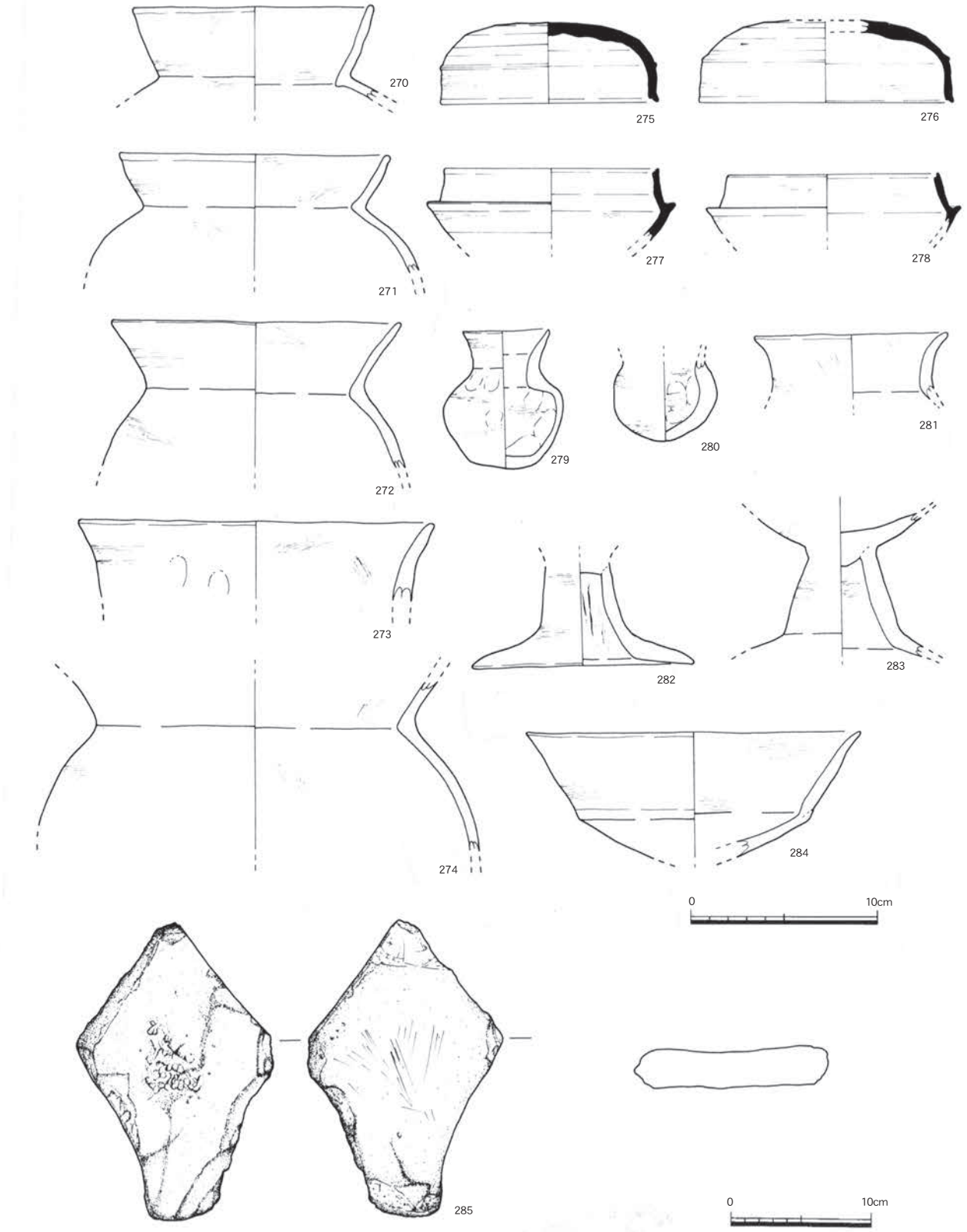


図Ⅲ –11　土器群９遺物出土状況図

部に最大径があるものと思われ、体部からくの字上に口縁部へ立ち上がりやや内湾して端部は丸くおさめる。272・274 の口縁は直線的に外反する。273 は鉢口縁部ではないかと想定される。残存する部位が少ないが直線的に端部へと立ち上がる。284 は高坏坏部である。坏部に屈曲部の段を持ち、口縁部は外方へ伸びる。283 は高坏脚部である。坏部は 284 のように屈曲部を持たず椀型をなすタイプに属するものと思われる。裾部は屈曲して外方へ伸びる。

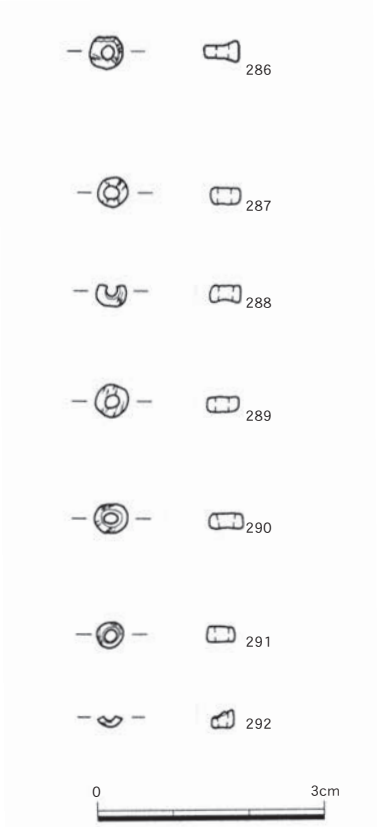
土坑１　調査区中央付近よりやや北西に位置する長軸 90cm ×短軸 70cm ほどのやや不定形の土坑である。遺構自体からの遺物出土量は少なく図示可能な遺物も確認されていないが、周辺で臼玉７点が確認されている。286～292 はいずれも類似した滑石製の臼玉であり、直径 4mm、孔径 2mm、厚み2～3mmを測る。288・292 は欠損品である (図 III-13)。

落ち１・２　調査区内の不定形の落ちから出土した遺物が図 III-14 である。甕、高坏、底部が出土している。293･294 は甕口縁部である。293 は緩やかに外反して端部を丸くおさめるもので、294 は体部から明確な屈曲部をなして口縁へやや内湾気味に立ち上がる。295 は高坏脚部である。296 は平底の底部で、底面に指頭圧痕が顕著に残る。

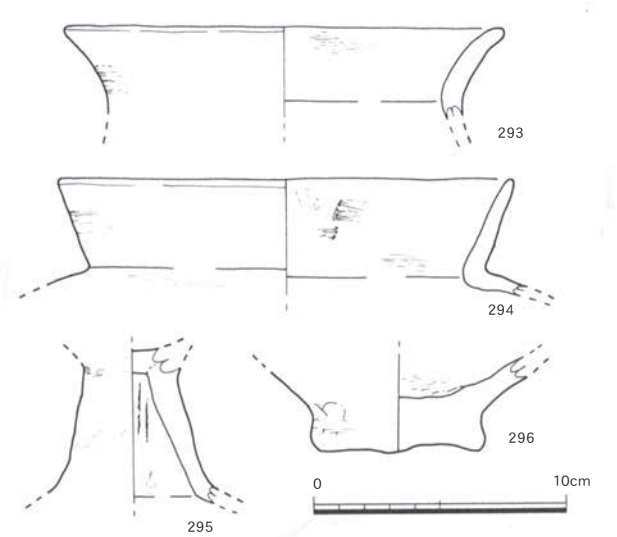


図Ⅲ –12　土器群 8 ～土器群 10 出土遺物

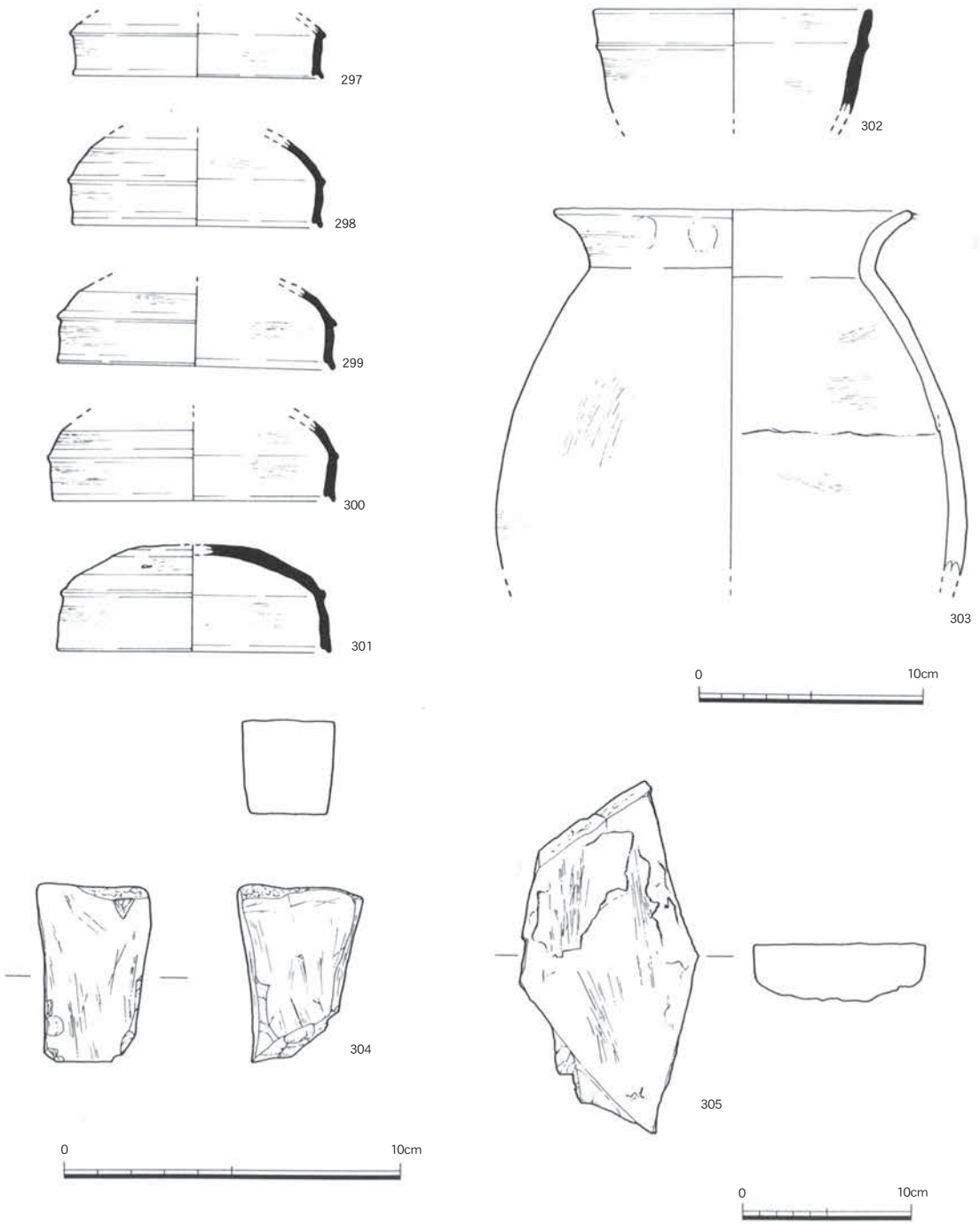
包含層出土遺物　第２次調査では基本層序の節でも述べたとおり９層から 12 層にかけて古墳時代の遺物が確認されている。包含層上部 (9 層) では甕、壺、高坏、鉢、器台、手づくね土器が出土する (図 III-15)。297 ～ 301 は須恵器坏蓋である。297 は稜部から直線的に端部へと向かい端部はやや深い凹状に仕上げられる。298 は稜部断面は三角形を呈しやや内傾ぎみに端部へと向かう。天井部 1/2 程度まで回転ヘラケズリが施される。299 は稜部は断面三角形をなしやや内湾ぎみに端部へつながる。端部はややひらき、凹状に仕上げられている。300 は内傾しつつ端部へ向かい端部は深い凹状に仕上げられる。301 は断面三角形を呈する稜部から外傾して端部へ続く。302 は須恵器椀口縁部である。端部よりやや下方に断面三角形の稜が形成されている。最大径は口縁部であり緩やかに底部へと続く。303・313・307 ～ 310 は甕口縁部である。303 は胴部下半分に体部最大径を持つ甕で、口縁は外反して端部は丸くおさめる。外面はハケ及びナデ調整で仕上げられており口縁部には指頭圧痕が顕著に観察できる。309 は胴部から明確な屈曲部を持たず大きく外反して端部へ向かう。313 は口縁部の短い甕で、最大径が胴部半ばにあるものと思われる。内外面ともハケ及びナデ調整で仕上げられる。308 も明確な屈曲部を持たずに大きく外反する口縁を持つ。307 は胴部から屈曲部を経て直線的に端部へとつながるが端部はややとがりながら外反して終わる。310 はくの字状の頸部を呈するが、端部及ぶ胴部へつながるパーツがなく、全体の形状を復元することは難しい。311 は器台脚部である。裾部は短く直線的に開き、端部は丸く仕上げられる。312 は手づくね土器である。上部は残存しない。314 は壺底部である。平底で底面に木葉文が施されている。315・316 は高坏脚部である。裾部で屈曲して外方へ広がる。内部では絞り痕や指頭圧痕、ナデ調整が顕著に観察される。304・305 は砥石である。304 は花崗岩を石材として四面各々に使用痕が認められる。表面は使用に伴って磨耗している。305 は亜角礫を石材とした長軸21.2cmを測る比較的大きな砥石である。片面のみを使用しており、表面には擦痕が集中する。



図Ⅲ –13　出土石製品

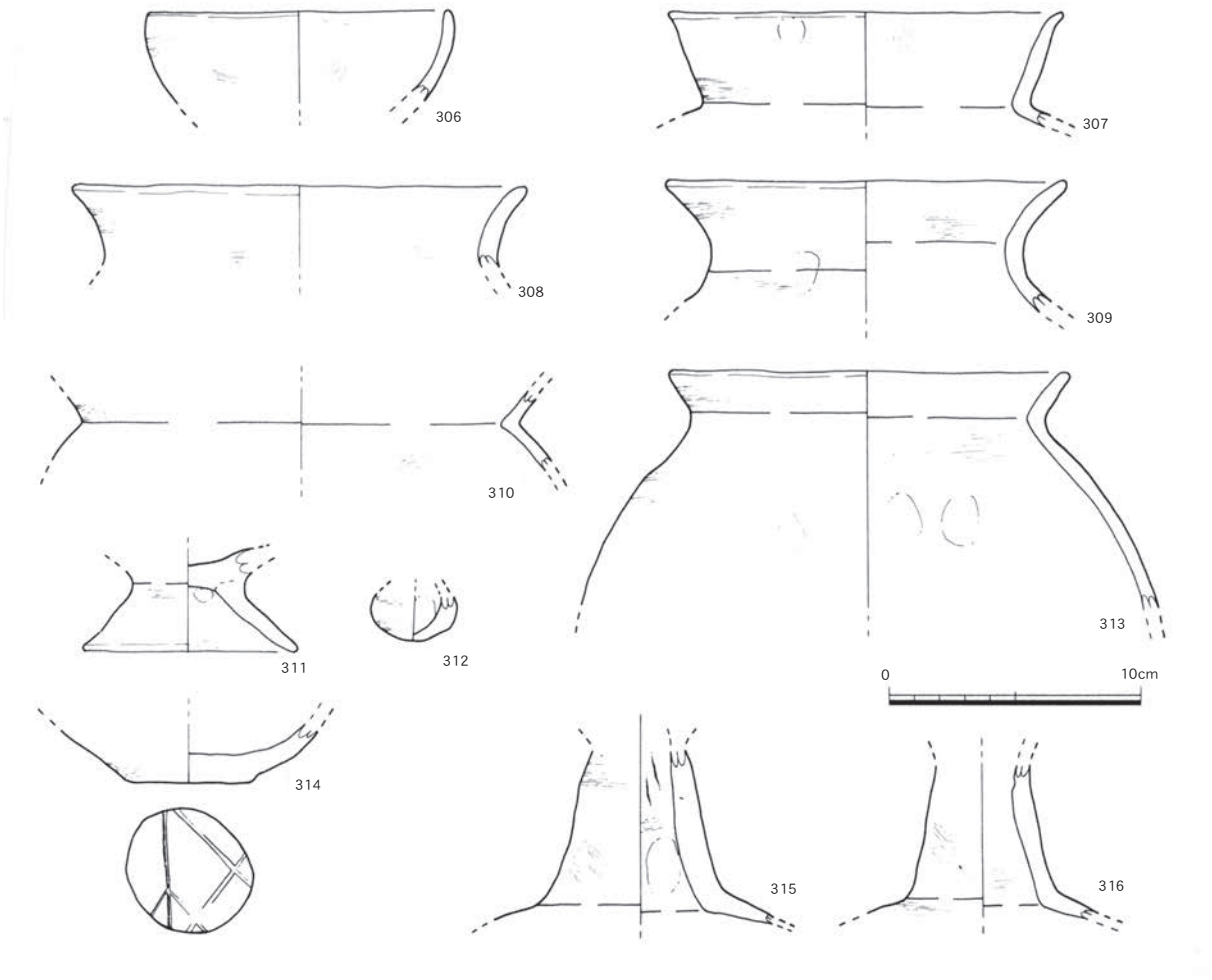


図Ⅲ –14　落ち１・落ち２出土遺物



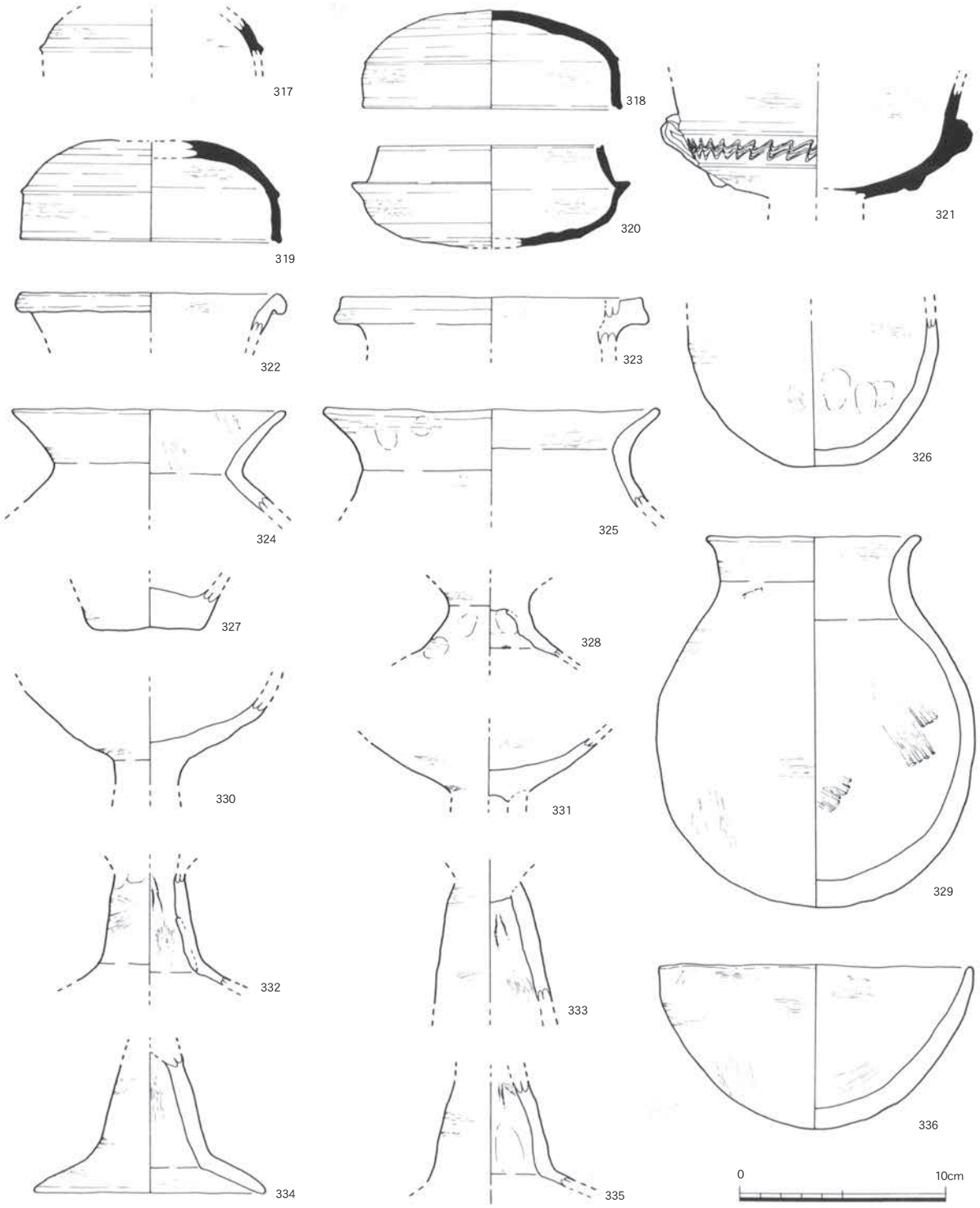
図Ⅲ –15　包含層上部出土遺物 1

包含層下部(10 層～12層) では甕、鉢、器台、高坏、坏身、坏蓋が出土している (図 Ⅲ-17)。317 ～ 319 は須恵器坏蓋である。317 は断面三角形の稜部が残存する。319 は天井部は丸みをもち、その 1/2 程度まで回転ヘラ削りが施される。稜部から直線的に端部へ下り端部は凹状に仕上げられる。320 は須恵器坏身である。断面三角形の受部から内湾しつつ立ち上がり、端部は凹状におさめる。坏部の 1/2 まで回転ヘラ削りが及んでいる。３２１は 須恵器、無蓋高坏で



図Ⅲ –16　包含層上部出土遺物２

ある。残存する坏部に把手が付属するが焼成時の自然釉によって孔部分は埋まっている。坏部下半に波状文を施文している。322・323 は土師器壺口縁部である。322 は口径12.5cmを測り端部は粘土帯を折り返して肥厚させている。323 は口縁端部が大きく外反し、端部はナデ調整によりやや窪む。328 は器台脚部である。内外面ともにナデ調整及び指頭圧痕が顕著に観察される。330 ～ 335 は高坏である。坏部と脚部の接合部のみが残存する。いずれも坏部に屈曲部を持たないタイプの高坏であろうと想定される。334 は高坏脚部である。裾部が屈曲して外方へ伸びる。333 も高坏脚部である。脚部の屈曲は弱く緩やかに下部へ伸びる。内面上部には絞り痕、指頭圧痕等が観察される。335 も高坏脚部であるがやや広がりながら裾部へ下り屈曲して外側へ向かう。332 も屈曲し外方へ伸びる脚部である。内面に粘土帯貼り付け痕が観察される。326・329 は甕である。326 は甕底部で底部に小さな面が形成される。内面ではナデ調整及び指頭圧痕が観察される。外面はナデ調整。336 は鉢である。口径 15.3cm をはかり底部は丸く端部も丸くおさめられる。327 は底部である。厚みのある直径 5.2cm の平底をなす。ミニチュア土器等の底部かと考えられる。



図Ⅲ –17　包含層下部出土遺物

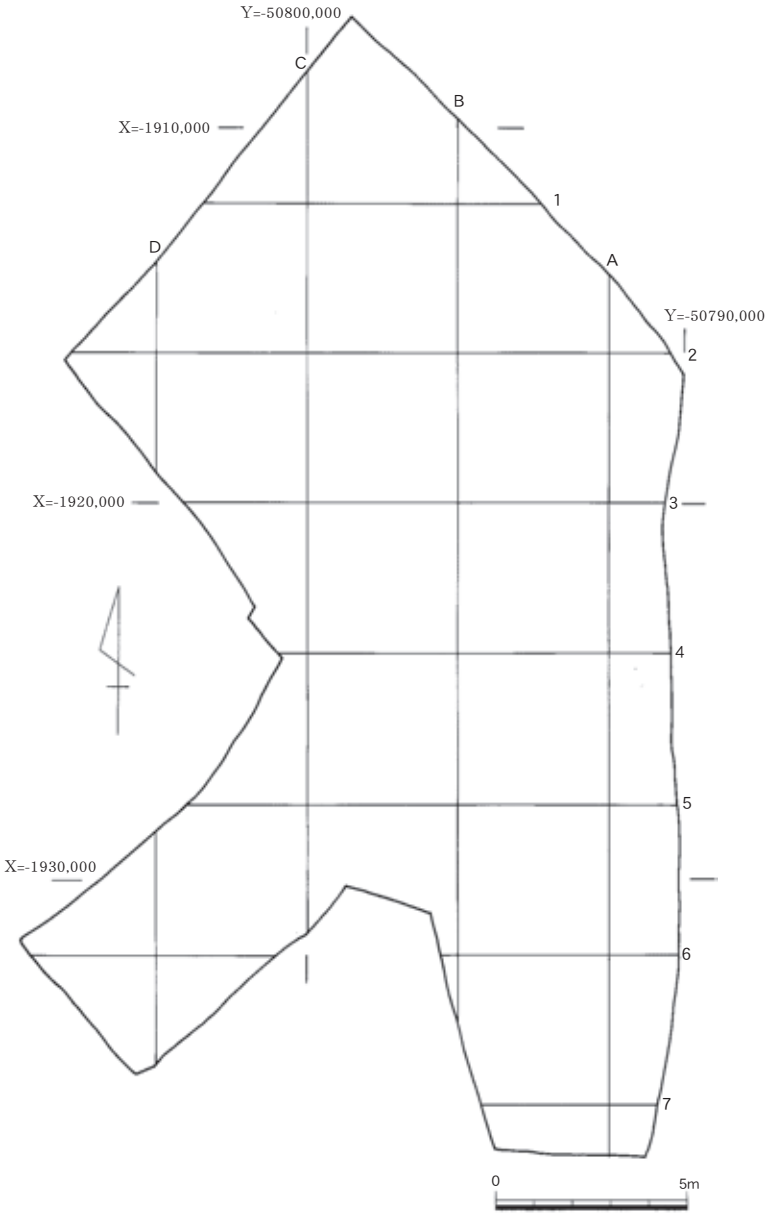
Ⅲ-4　第4次調査の成果

1. 第 4 次調査の経過

第 4 次調査は第 2 次調査に引き続き市道の延長工事に先立つ発掘調査である。平成 12 年 10 月 10 日から平成 13 年 1 月 18 日にかけて対象約 800m^2 に対して調査が実施された。また、現地での調査成果を広く周知するため平成 13 年 1 月 16 日に記者発表を行い、発掘調査成果の一部を公開した。

2. グリッドの設定

第 4 次調査のグリッドは公共座標の傾きにあわせて 4m の正方形を設定した。このグリッドの境界線に対して北から南に向かって1～7、東から西に向かってA～Dの呼称を割り当て、各境界線の北東隅の交点をそのグリッドの名称とした。各グリッドの名称と国土座標との関係は図 Ⅲ-18 のとおりである。なお、調査区の形状がいびつであるため調査時には区内をⅠ区、Ⅱ区に大別し、さらにⅡ区をA～Cに 3 分割して遺構名や遺物取上げの基準としている。



図Ⅲ–18　第 4 次調査グリッド設定図

3. 調査の成果

当該調査においても第 2 次調査と同じく主に古墳時代の遺構及び遺物を確認してい

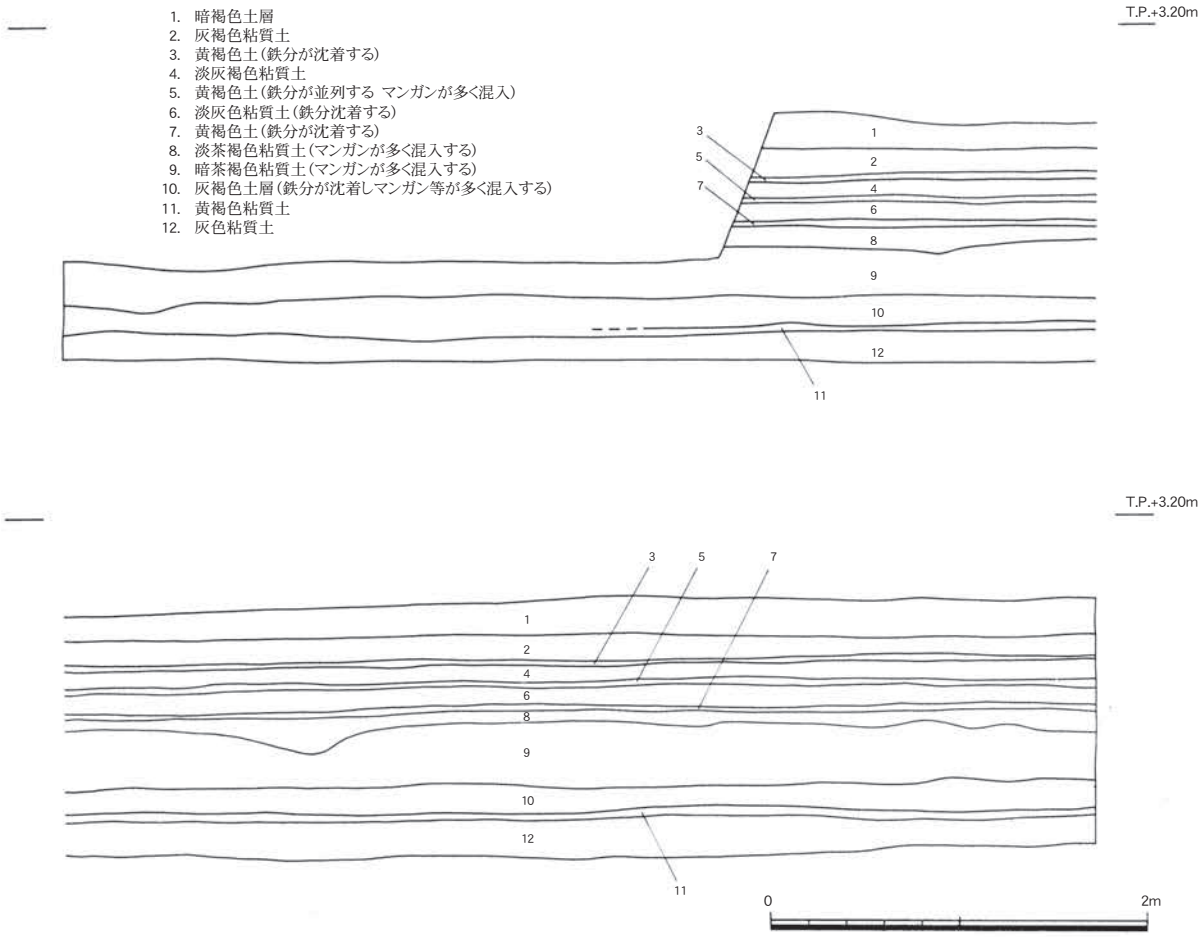


図 III-19　第 4 次調査北壁土層断面図

る。古墳時代の包含層へ到達するまでに、旧耕作土を除去した下層に堆積する 8 層から近世もしくは中世の陶磁器片及び須恵器が数点確認されている。(図 III-20)

337 は肥前産の染付椀である。外面に蝶の意匠及び縦方向の直線文で構成された虫篭文が施されている。内面の口縁直下と底部への屈曲点付近にそれぞれ一条の圏線がみられる。338 も同様の染付椀で外面には円の内側を斜線で埋める丸文、内面下部には圏線の染付けが施されている。いずれもいわゆるくらわんか手で、18 世紀末から 19 世紀初頭の所産と考えられる。しかし、同層から出土する須恵器甕（339）等の存在を勘案すると、8 層はやや時期的な幅がある層位か、包含層に混乱が生じているものと思われる。このような様相は第 2 次調査においても認められており、調査地点付近一帯で同様の状況が生じている可能性が指摘できよう。なお、主たる包含層は 9 層であり、11 層からもわずかながら遺物が確認される。当該調査では、先に述べたホウシボウ地区における包含層である大別層序 B に該当する層位は 9 層・11 層が相当する。

(1) 検出した遺構と遺物

第 4 次調査で確認された遺構は、柱穴のほか土坑 2 基及び土器群 9 箇所、竪穴状土坑 1 基である。

以下では必要に応じて個別にその詳細を述べることとする。

土坑１　調査区北端隅で確認された不定形の土坑である(図III-21)。形状が不安定でいびつな輪郭をもつ土坑で、長軸が約160cmを測る。東側で一旦平坦面を形成しさらに底部に向かって一段落ちる。形状の不安定さから植物等による侵食作用による土質の変化の結果である可能性も否定できないが、土坑１からはまとまって遺物が出土している(図III-22)。340、341は破片であるため円孔を確認することはできないが、須恵器瓶であると考えられる。体部から屈曲した短い頸部に波状文が施されている。340、341共に口縁部径が体部径を上回らない、類似する器形を想定できる。342は須恵器壺もしくは瓶である。体部中央よりやや上部に最大径を持ち、波状文が施文される。344、345は甕口縁部である。344は体部から緩く外反し、345は屈曲して緩く外反する。346、347は高坏脚部である。346は裾部で屈曲し外側へ伸びる。347は坏部に屈曲部を持たないタイプの高坏であろうと想定される。客部との接合部は粘土帯を充填させ、内部には絞り痕がみられる。裾部で屈曲し外方へ伸びる。343は甑底部である。尖り底を呈する底部に孔径約7mmの穿孔が施されている。348・349は叩石である。348は自然礫を打割して形状を整えており、４辺に剥離面が並ぶ。剥離面は腹面と上下辺に顕著に形成されている。腹面には剥離が深くおよんで自然礫面は残存しない。自然礫面とネガティブな面からのみ構成されていることから現象としては石核に分類されるものとも考えられるが、礫面に残る敲打痕を評価して叩石と考えたい。349は楕円形を呈する自然亜円礫の表裏中央

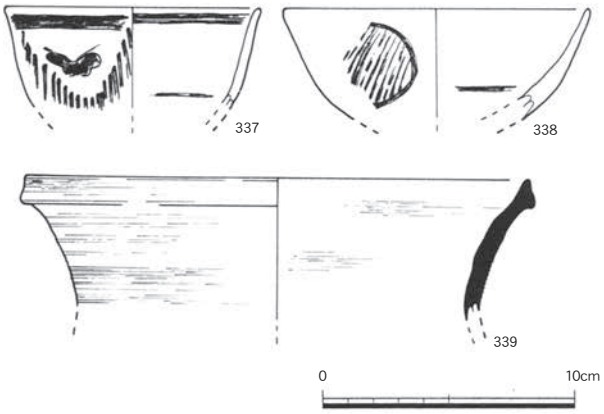


図 III-20　８層出土遺物

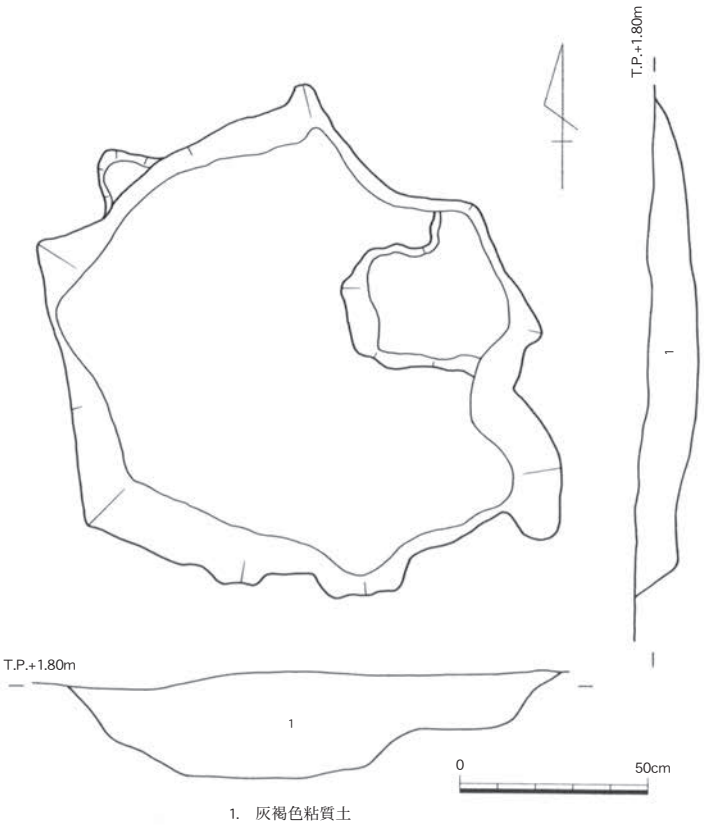


図 III-21　土坑１平面図

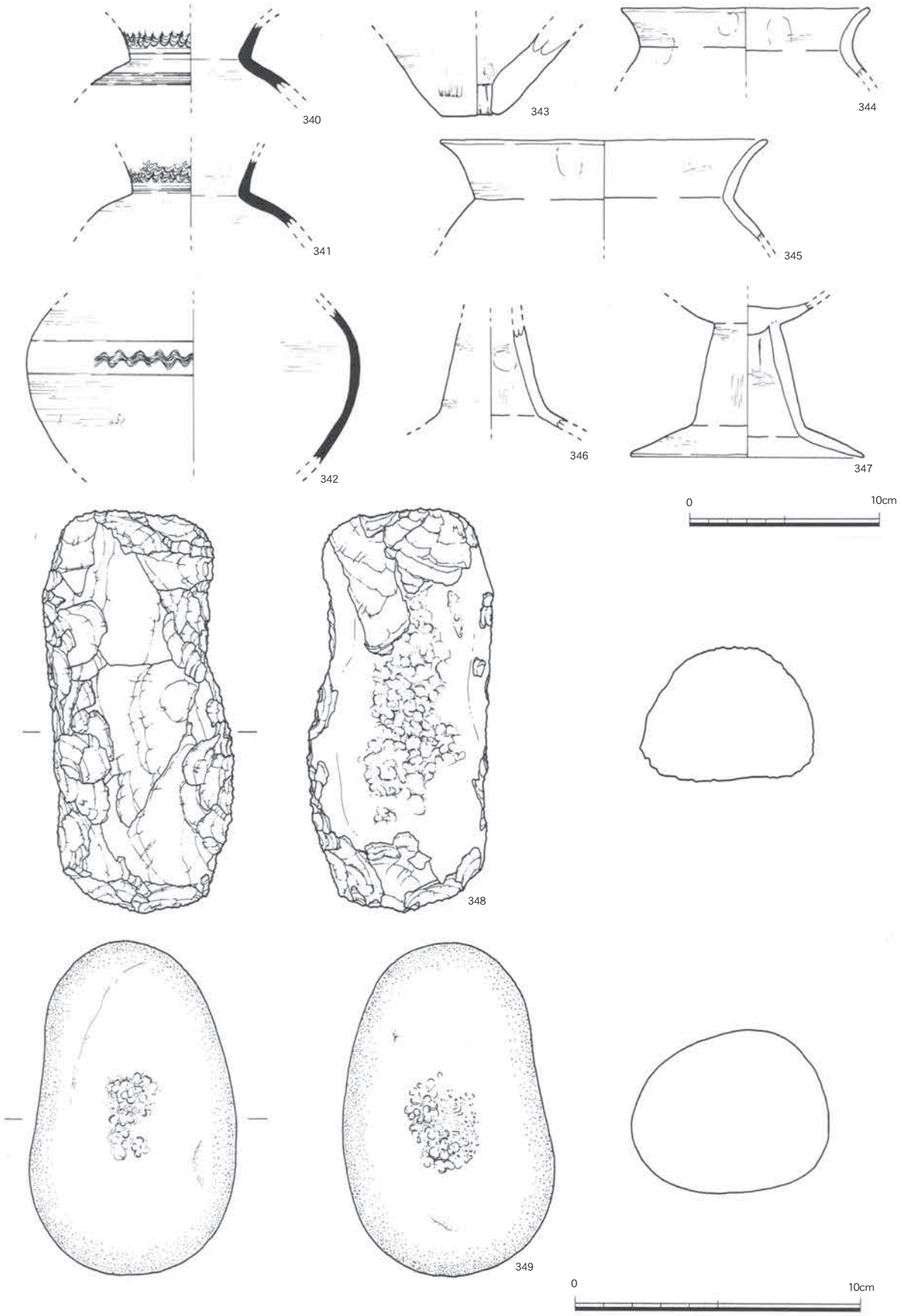


図 III-22　土坑 1 出土遺物

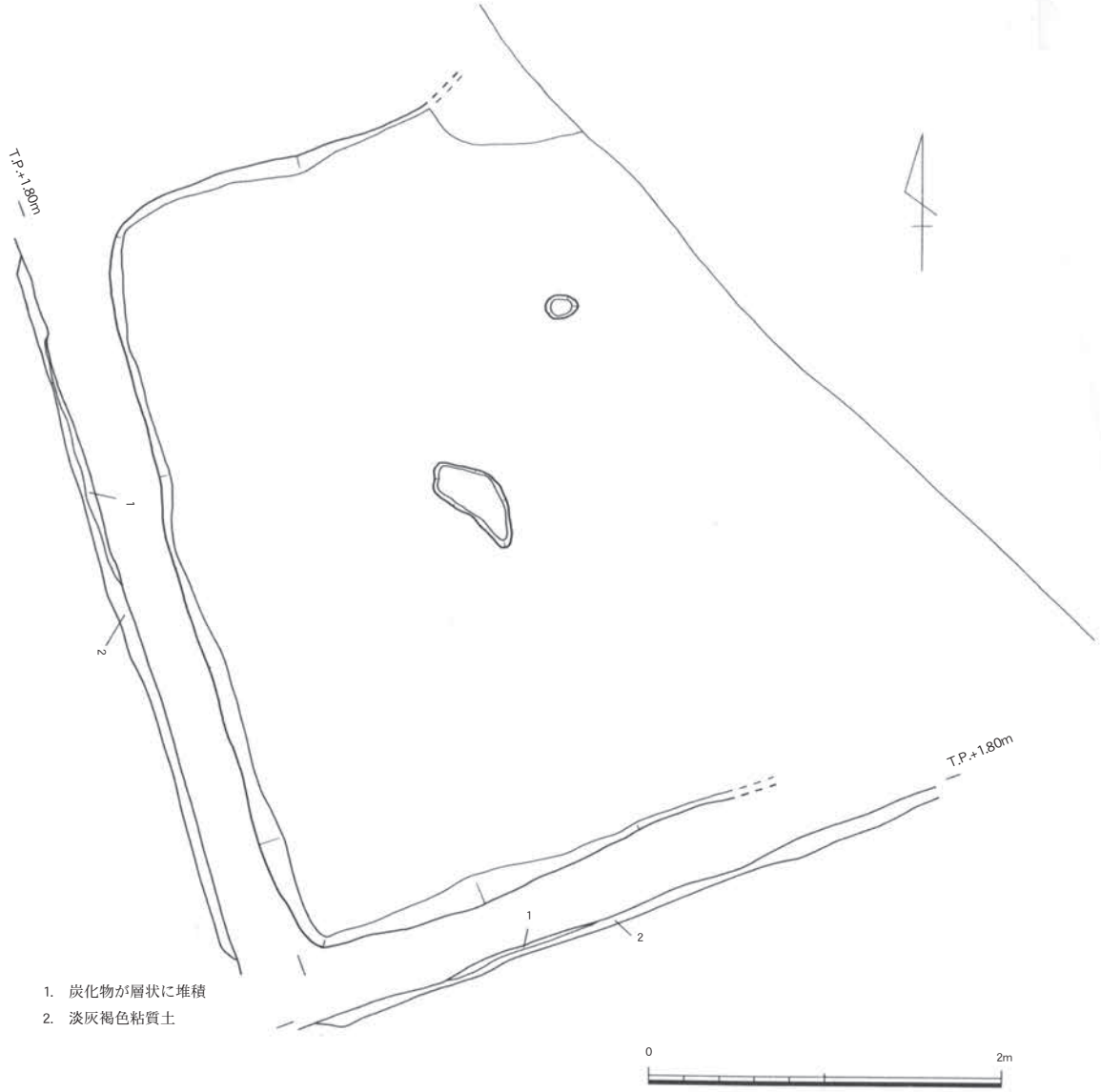


図 Ⅲ-23　竪穴住居 1 平面図

部に敲打痕が残る叩石である。最大長 11.7cm、最大幅 7.4cm を測る。古津賀遺跡群周辺ではもっとも一般的な叩石である。

竪穴住居 1　A - 1 区で確認された土坑である。一部調査区外へ伸びるため全体のプランを把握できてはいないが、検出している形状から一辺 4.6m ほどの隅丸方形をなすものと想定される。遺構中央付近には長軸 80cm ×短軸 20cm、深さ 6cm をはかる小土坑が存在する。平面プランから考えて竪穴式住居である可能性が高いものと考えられるが、周壁溝及び支柱穴は明らかではない。検出面からの深さは約 15cm をはかり、床面付近では炭化物が多く確認されている。

遺物は甕、高坏、椀、壺が出土する。350 は壺口縁部である。口縁端部は折り返して肥厚させている。352 は高坏坏部である。坏部下部で屈曲したのち直線的に立ち上がり端部はやや外反させて丸く仕上げている。353 は甕である。体部中央付近に最大径を持つものと思われ頸部はゆるく屈曲し外反ぎみに口縁へと向かう。351 は椀である。口径は 15.2cm を測り、やや丸底

図 III-24　竪穴住居 1 遺物出土状況図

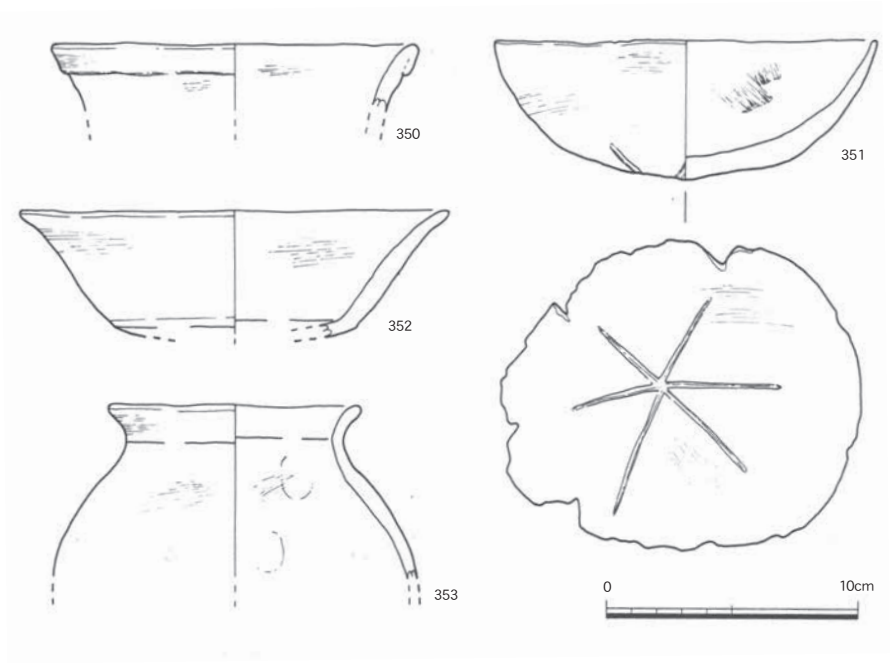


図 III-25　竪穴住居 1 出土遺物

を呈する。外面は剥落が著しく調整の観察は困難であるが内面ではハケ調整及びナデ調整が確認できる。なお底部には交差する三本のヘラ描き沈線が施されている。このほかにも復元は不可能であったが同遺構から甕一個体分の土器片が出土している。

土坑 2　調査区南東端で確認された 75cm× 65cm を測る深さ 10cm に満たない浅い落ちである。埋土には焼土及び炭化物が多量に混入する。当該調査では規模の大小はあるもののこのような浅い焼土の広がりが数箇所確認されているが、これらの焼土が有機的に関連づけられる遺構を確認し得てはいない。出土遺物の中で図示可能な遺物は、壺、高坏である。354 は貼付け口縁の壺である。頸部から大きく外反し、口縁端部は粘土帯を貼付けて肥厚させている。口縁部はナデ調整で仕上げられ、その他の施文はない。355 は須恵器無蓋高坏坏部である。緩やかに内湾する体部は口縁部で外反してのび、端部は尖り気味に終わる。体部には断面三角形の突帯がめぐり、突帯で区画された領域に波状文が施文される。

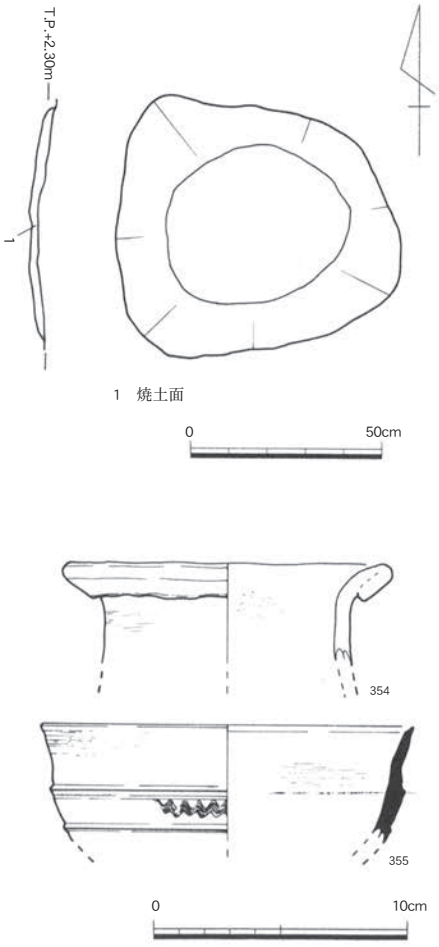


図 III-26　土坑 2 出土遺物

第 4 次調査においても第 2 次調査と同様遺物密度の高い範囲をⅠ区、Ⅱ区合わせて合計 14 箇所確認している。

土器群 1　北部で確認された 1.5m × 0.6m ほどの範囲に遺物が出土する (図 III-27)。出土する遺物は須恵器及び土師器甕、叩石である。356 は土師器甕口縁部である。口縁部のみであるが外傾して端部は丸くおさめられている。363 は自然礫を使用した叩石である。表面中央部に敲打痕が集中して窪むほか、側縁にもまばらながら連続した敲打痕が認められる。

土器群 2　北壁付近で確認された 2.5m × 2m ほどの範囲である (図 III-28)。範囲から出土した遺物の中で図示可能なものは甕である。362 は体部から稜をもって屈曲し端部付近で緩く外反する。最大径は体部上半から肩部にかけてであろうと思われる。358 は屈曲後直線的に外方へ伸び端部はやや尖らせて終わる。

土器群 3　B - 2 区で確認される 4.4m × 2.9m ほどの範囲に遺物がまとまって出土している (図 III-29・30)。遺物は破片が多く復元可能な遺物としては手づくね土器等が挙げられる。当該範囲にはまばらに炭化物が散見される。出土している遺物は手づくね土器、甕である。357 は甕口縁部である。緩く外傾して端部は丸く仕上げている。360、361 は小型の手づくね土器である。

土器群 4　A - 1 区で確認された遺物の出土範囲である (図 III-32・33)。当該範囲は竪穴住居 1 とほぼ同一の平面的な位置関係にある。現地調査時点では別遺構としてとらえられていたが、包含層の厚み及び検出面の高さなどを考慮すると竪穴住居 1 の埋没段階での埋土中の遺物である可能性もある。

出土遺物は須恵器坏蓋、瓹、甕、壺である (図 III-34～35)。368、369 は須恵器坏蓋である。368 は天井部はやや平坦になりヘラ削りも天井部 1/2 よりも上で終わる。稜部はやや甘くなり直線的に口縁部へ向かい端部は凹状に終わる。369 は天井部が丸く断面三角形の稜を持ち直線的に口縁へと向かう。端部は凹

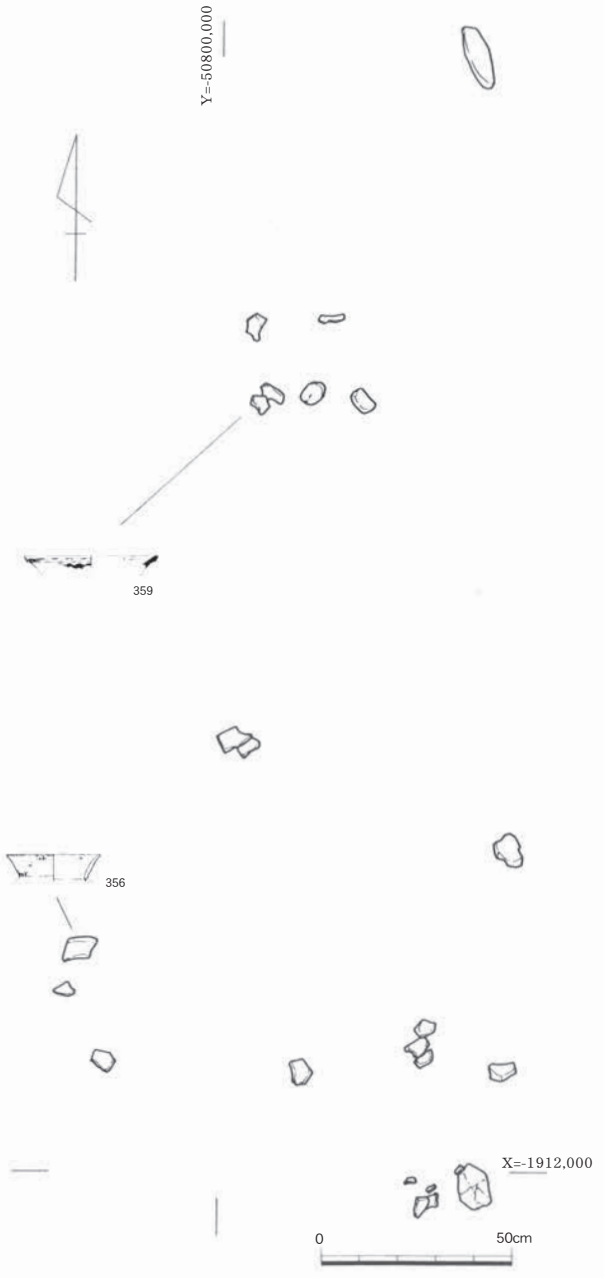


図 III-27　土器群 1 遺物出土状況図

図 III-28　土器群 2 遺物出土状況図

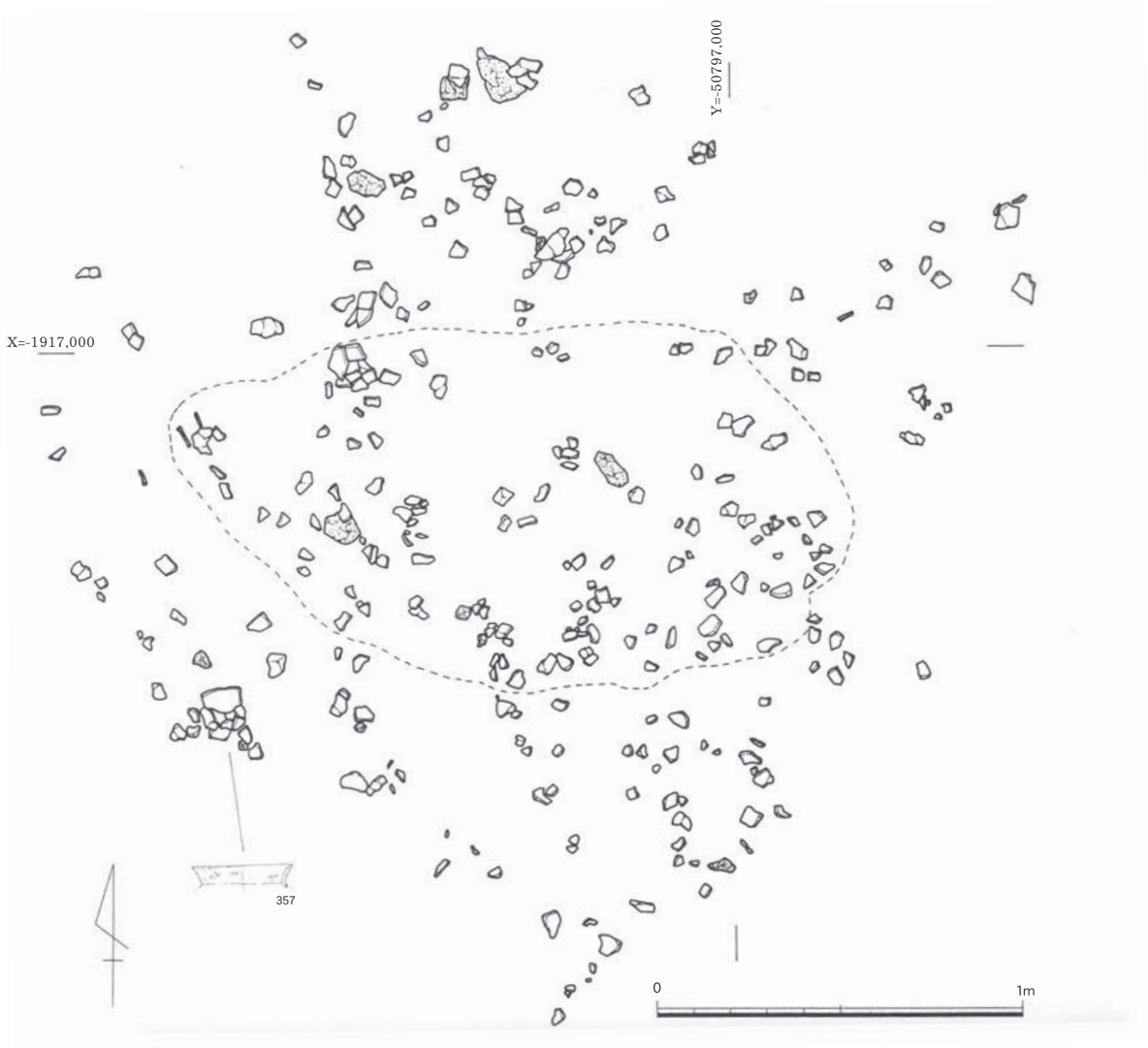


図 III-29　土器群 3 遺物出土状況図 1

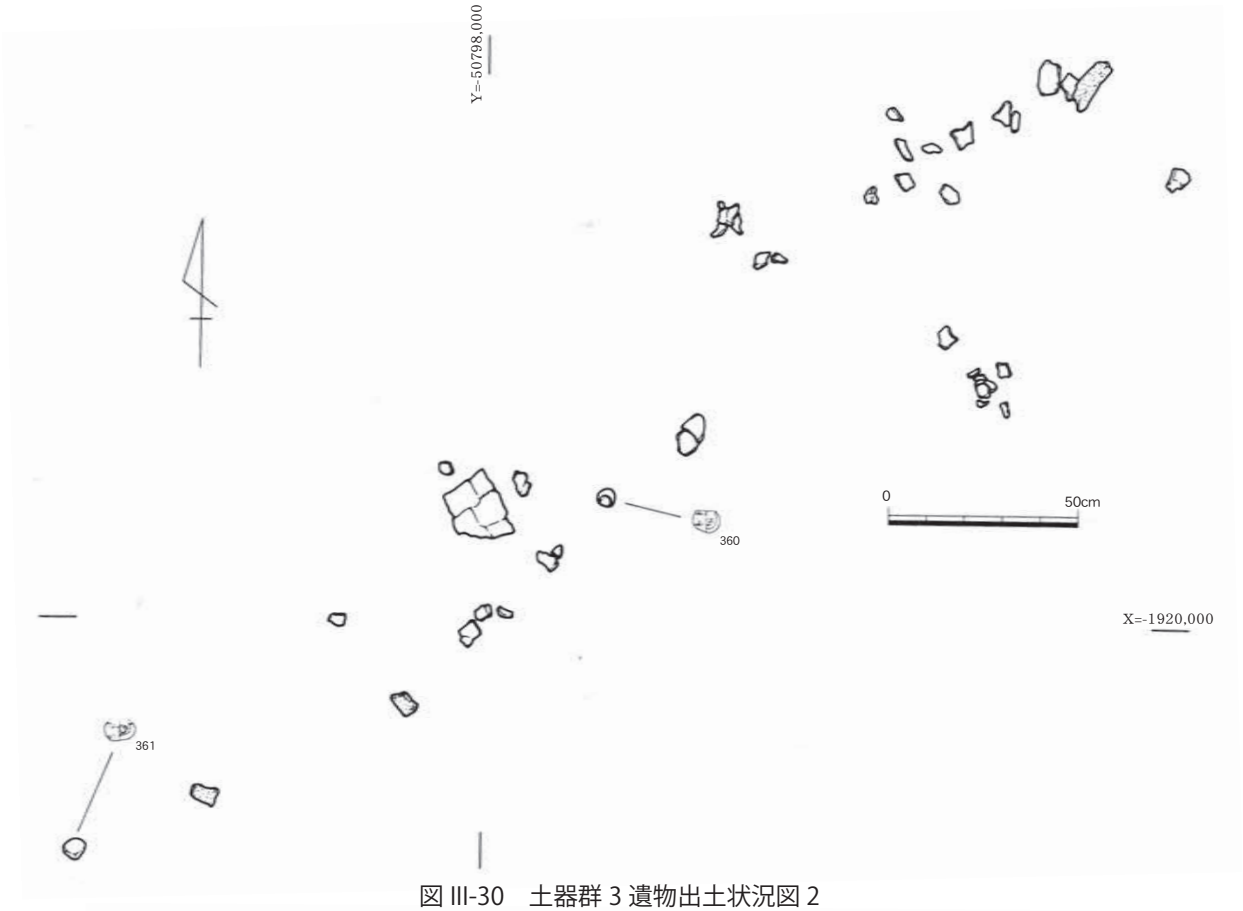


図 III-30　土器群 3 遺物出土状況図 2

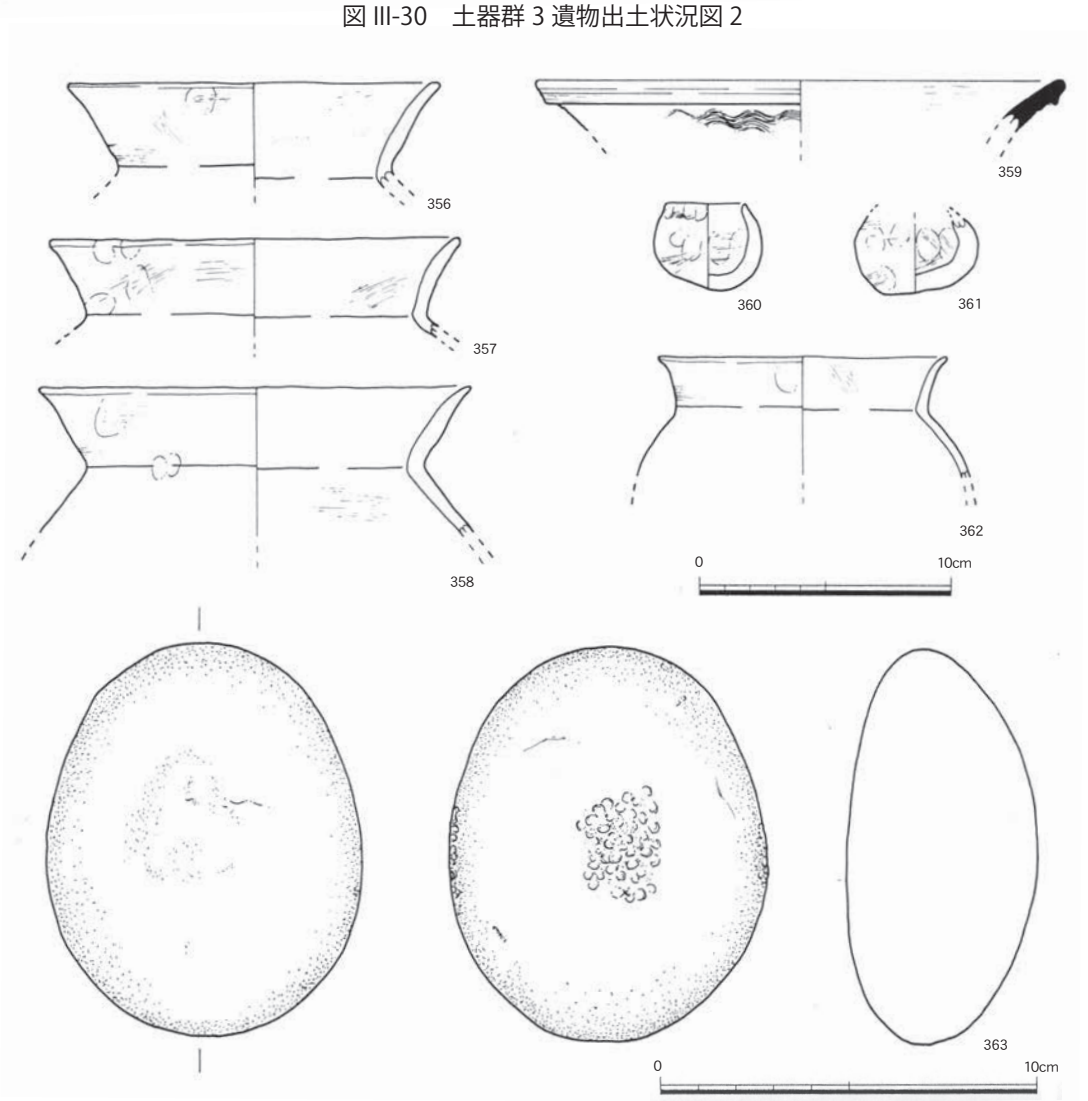


図 III-31　土器群 1～土器群 3 出土遺物

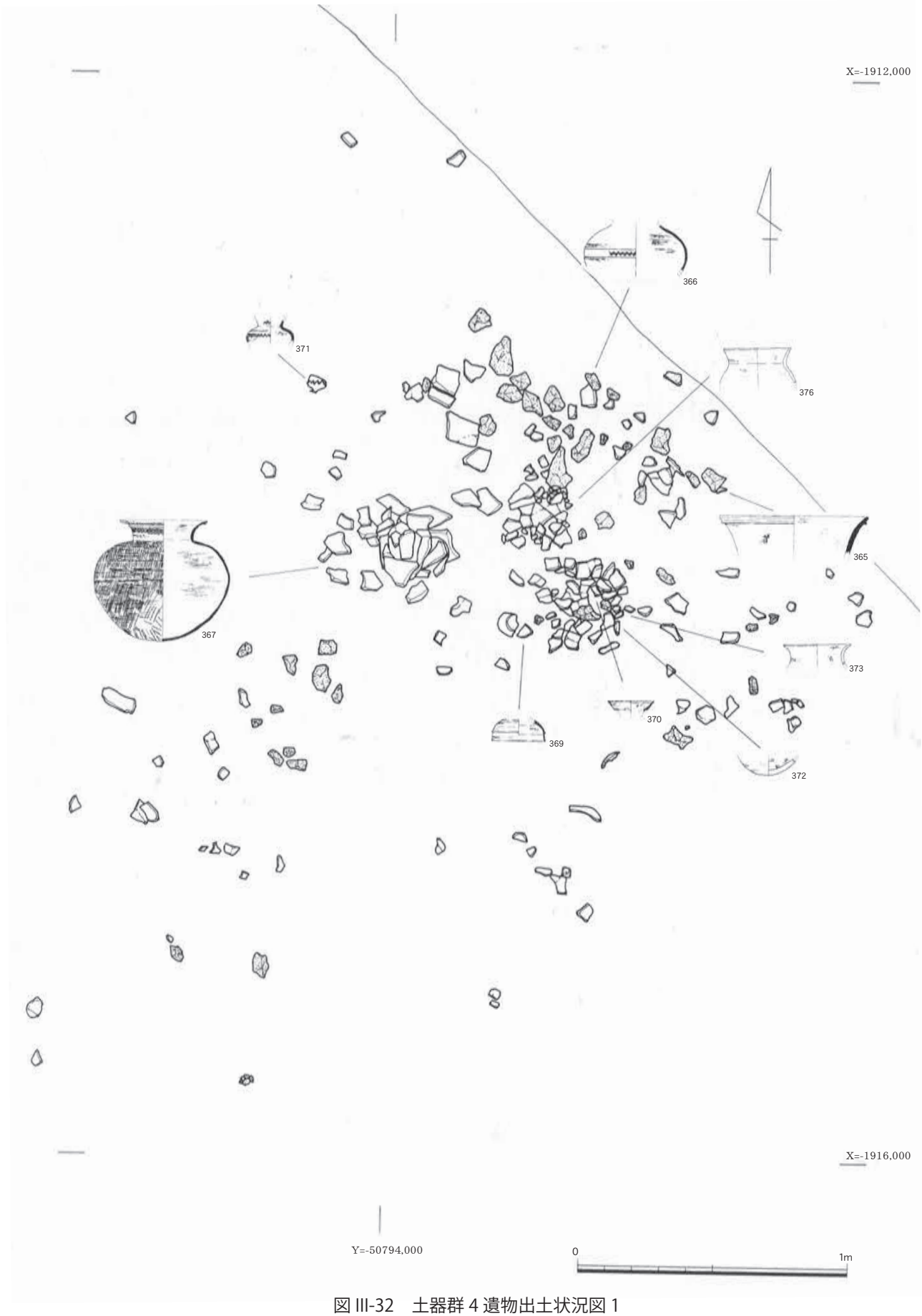


図 III-32　土器群 4 遺物出土状況図 1

図 III-33　土器群 4 遺物出土状況図 2

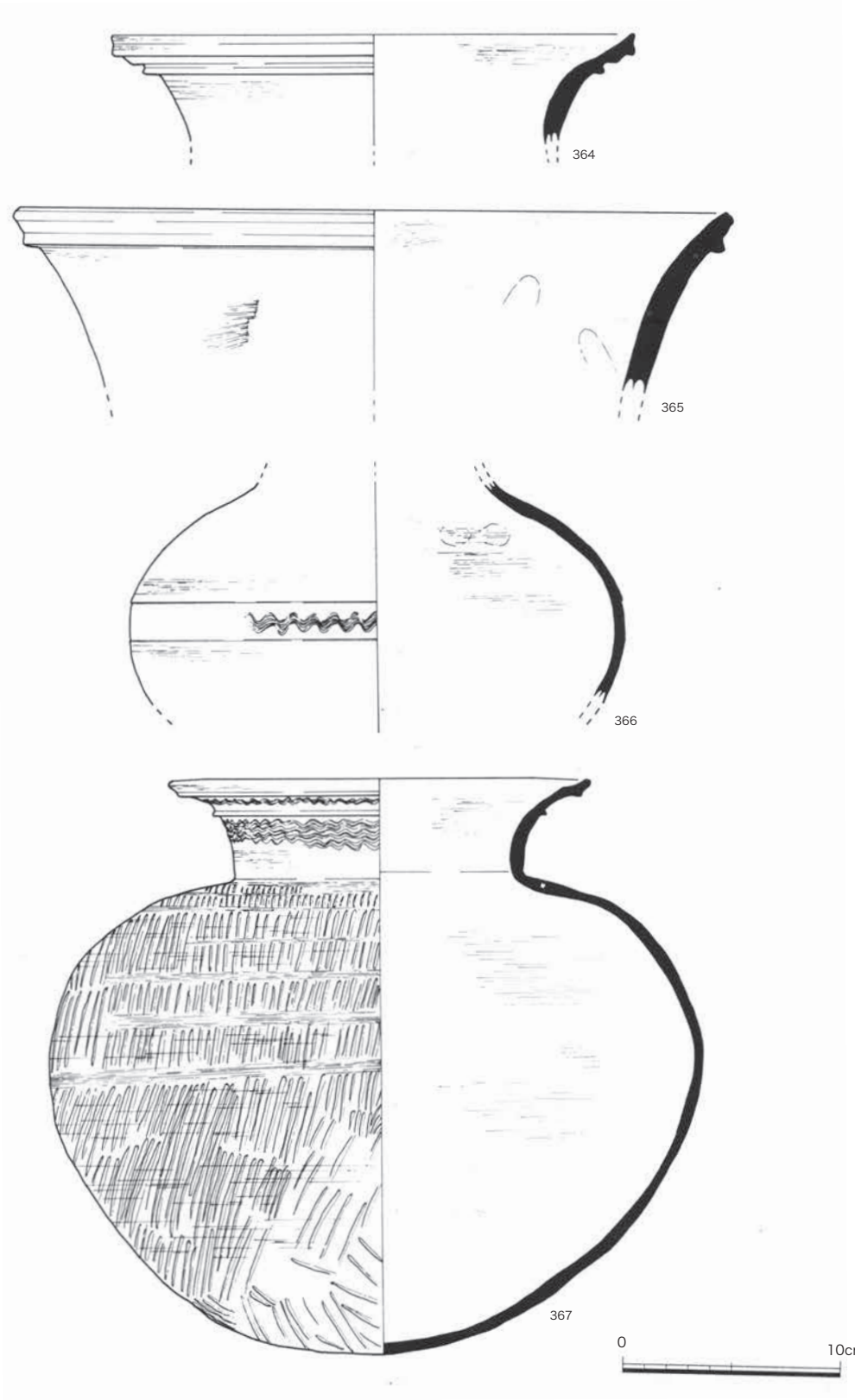


図 III-34　土器群 4 出土遺物 1

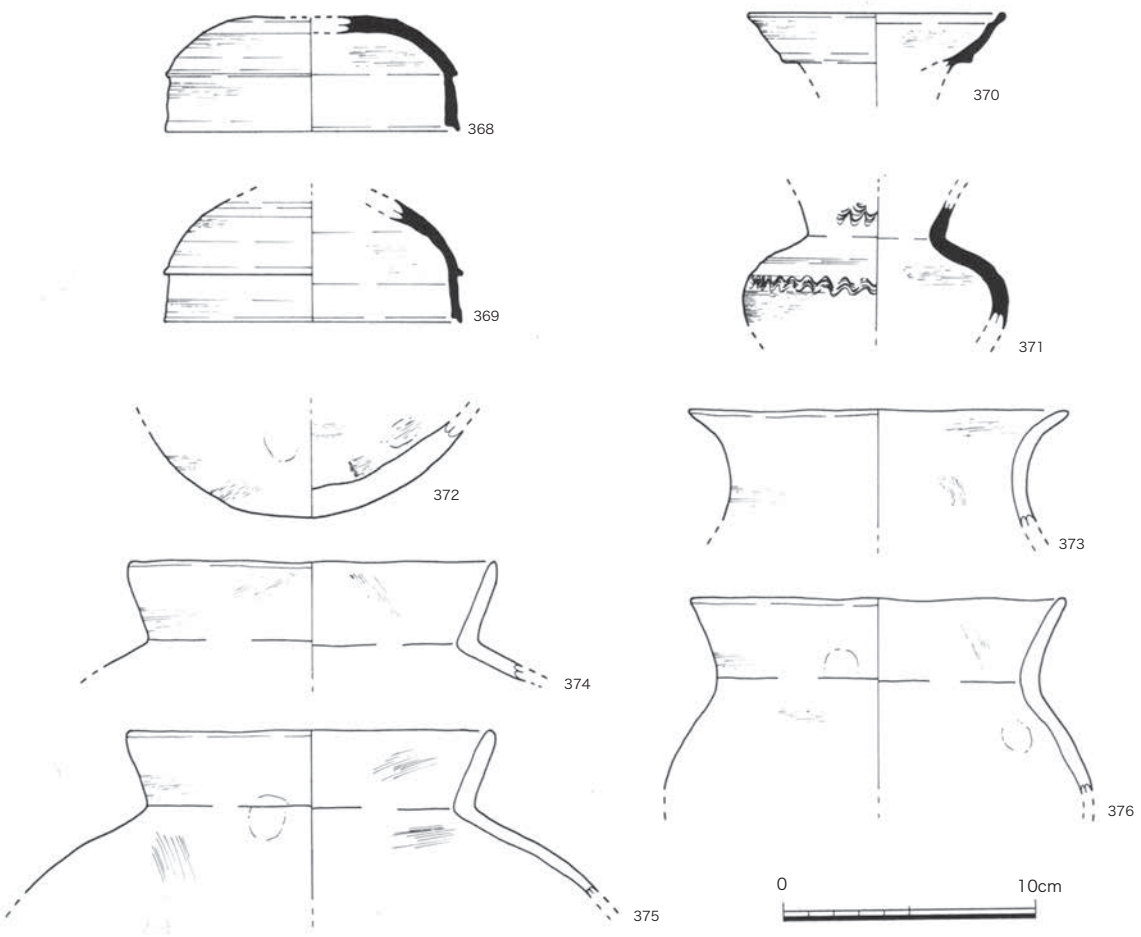


図 Ⅲ-35　土器群 4 出土遺物 2

状の段をなす。回転ヘラ削りは天井部の 1/2 程度まで及ぶ。370 は壺もしくは瓏の口縁部である。頸部から稜をなして口縁へつづき端部は丸く仕上げる。371 は壺もしくは瓏体部である。体部から細い口頸部が外反しつつ口縁へと向かう。頸部及び体部には波状文が施文される。372 は土師器甕底部である。373～376は甕口縁部である。374・375 は体部から屈曲し、短い口縁が直線的に外傾する。373 は明確な屈曲点をもたずに大きく外反して短部は丸く仕上げている。376 はゆるく屈曲し外傾ぎみに端部へ向かい、端部は丸く仕上げられる。364 は須恵器甕口縁部である。大型のもので端部に至る前に断面三角形の稜をなす突帯が貼り付けられる。端部は凹状に仕上げ

図 Ⅲ-36　土器群 5 遺物出土状況図

られる。365 は甕口縁部である。端部直下で断面三角形の突帯を有する。端部は丸くおさめている。366 は壺もしくは瓻の体部である。体部中央付近に低い稜を持つ突帯に区画された領域を持ち、区画内に波状文が施文される。367 は大型の甕である。体部から屈曲し、大きく外反しつつ口縁へと向かう。口縁に至るまでに断面三角形の突帯を 2 本有し、端部は丸くおさめている。体部全面に叩き目が残り、横方向のハケ調整で仕上げられる。

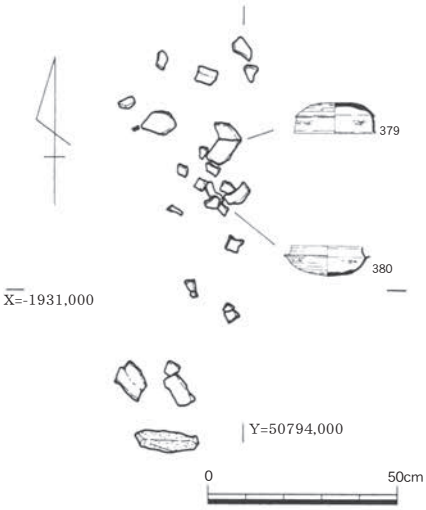


図 III-37　土器群 6 遺物出土状況図

土器群 5　D - 6 区隅で検出された1.8m × 0.8m 程の遺物群である。範囲も狭く出土量も多くはない。遺物は頸部から大きく外反して伸びる甕口縁部 (377) が出土する。

土器群 6　A-5 区で検出された1.2m × 0.7m 程の遺物群である。後述する土器群 9 と近い位置関係にある。須恵器坏と土師器甕が出土する。379 は坏蓋である。天井部はやや丸く、断面三角形の稜をもち端部は緩い凹状をなす。ヘラケズリは天井部 1/2 程度まで及ぶ。380 は須恵器坏身である。底部はやや尖り気味で立ち上がりは低く内傾したあと立ち上がる。受部との境は凹面をなし、端部は内側に段を有する。378 は土師器甕口縁部である。頸部で屈曲したのち外傾し端部は丸くおさめている。

土器群 7　B-4区北部で確認された小範囲の遺物の出土地点である。土器群13と近接する。出土遺物は甕 (384) 及び高坏 (385) である。385 は坏部下半で緩く屈曲し直線的に外傾する。脚部

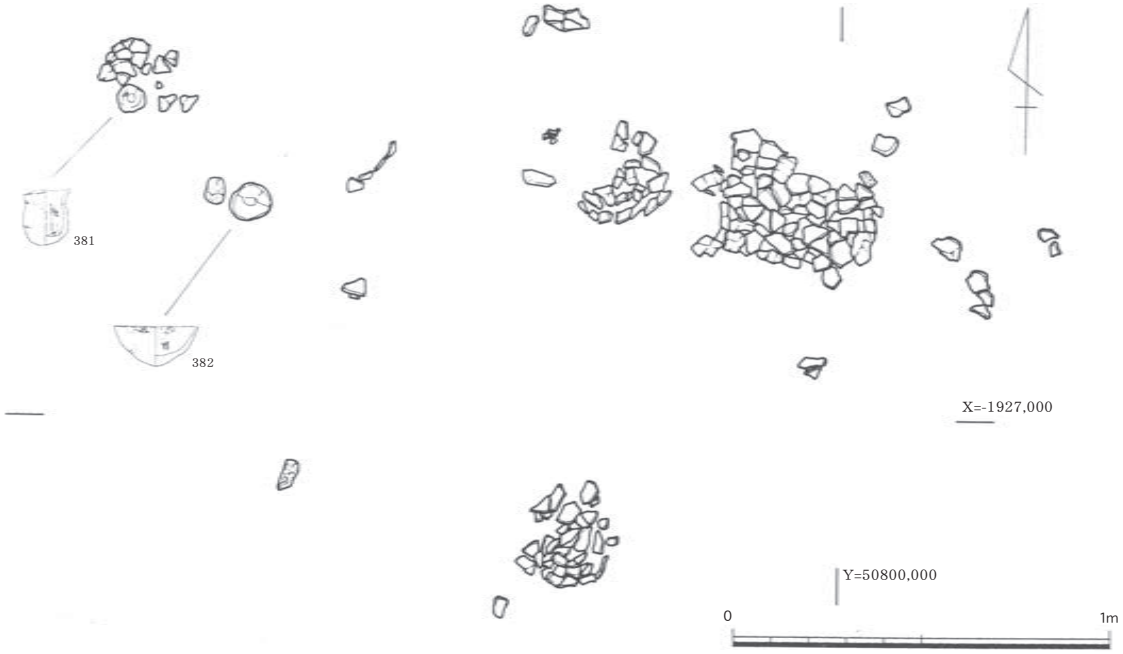


図 III-38　土器群 8 遺物出土状況図 1

との接合は粘土充填により、脚部内面は絞り痕及びナデ調整が観察される。

土器群8　C-4区で検出された遺物群である。2.3m × 1.5m ほどの範囲にまとまって遺物が出土している（図 III-38・39）。出土する遺物は手づくね土器 (381)、鉢 (382)、甕口縁部 (383) である。381は手づくね土器としては比較的大きなものである。体部がゆるく外反して口縁に至る。内面には指頭圧痕が顕著に残る。382 は底部の尖る鉢である内外面ともにナデ調整で仕上げている。383 はやや外反しながら外側へむかって開く土師器甕口縁部である。

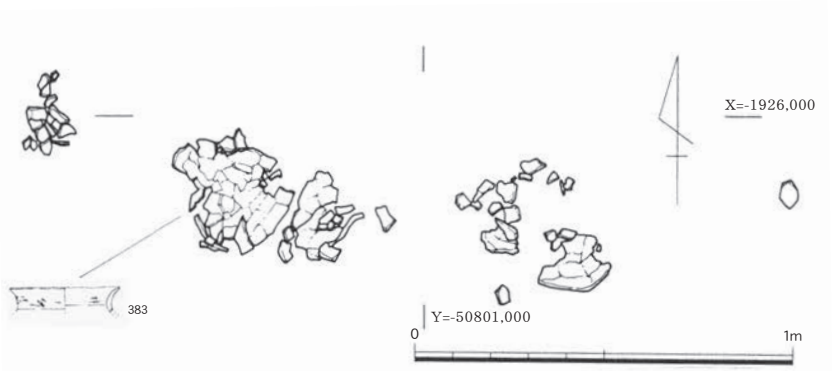


図 III-39　土器群 8 遺物出土状況図 2

土器群 9　A-6区で検出された隅丸方形状をなす遺物の出土地点である。3.5m × 2.9m 程度の範囲に比較的まとまった遺物が出土する。出土遺物は甕、高坏、坏、手づくね土器、叩石である。386 は甕口縁部である。体部から屈曲して外傾し端部はやや肥厚させて丸くおさめている。

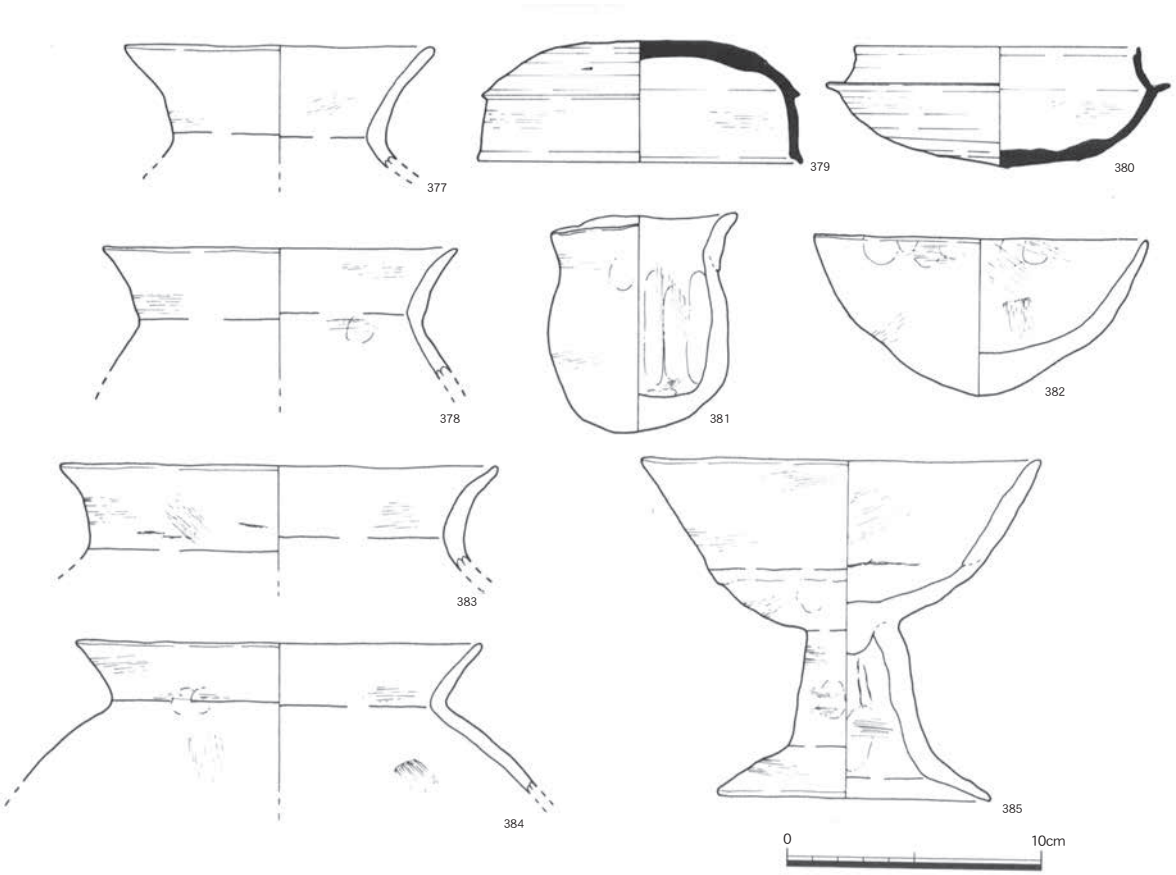


図 III-40　土器群5～8 出土遺物

図 III-41　土器群 9 遺物出土状況図

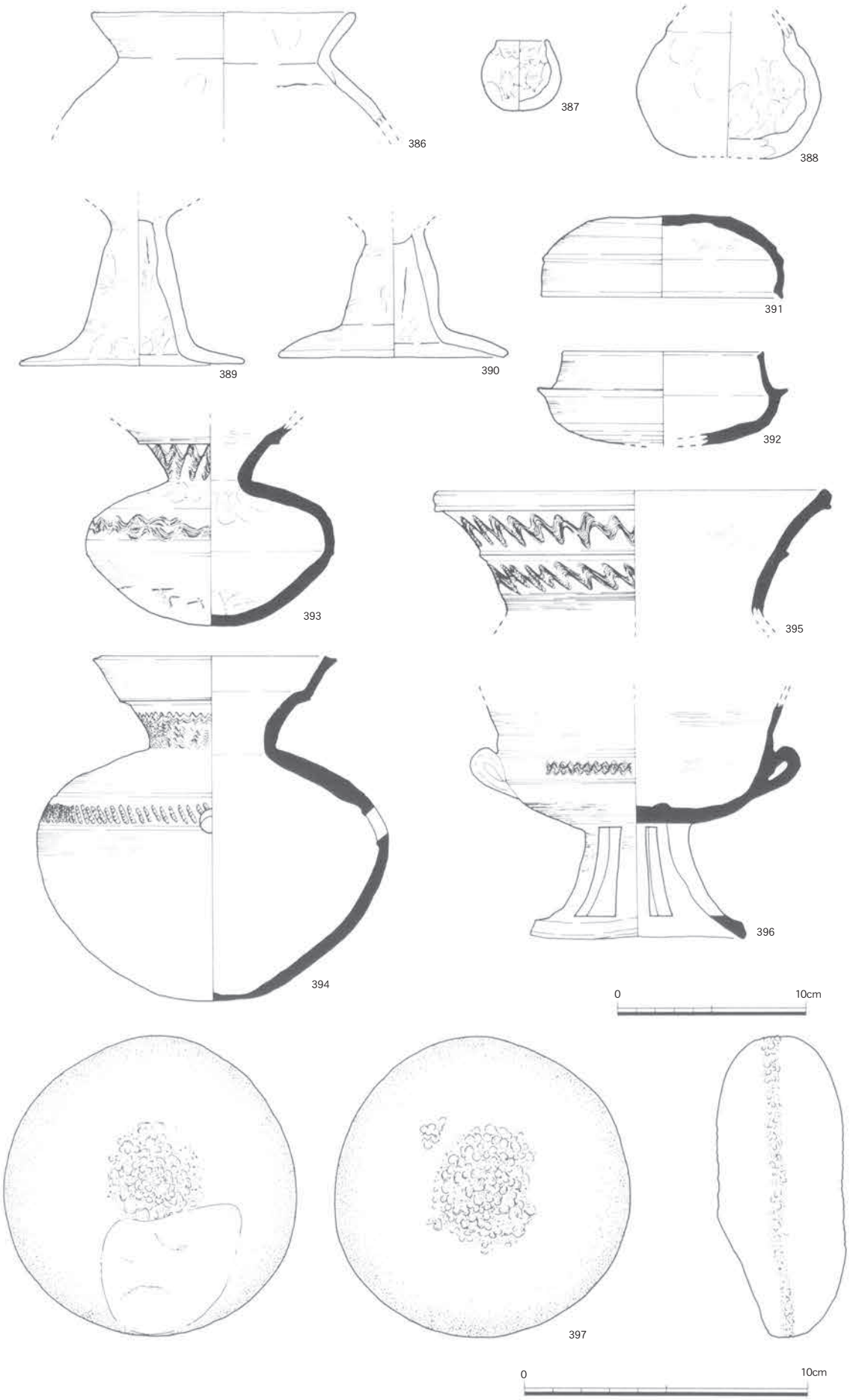


図 III-42　土器群 9 出土遺物

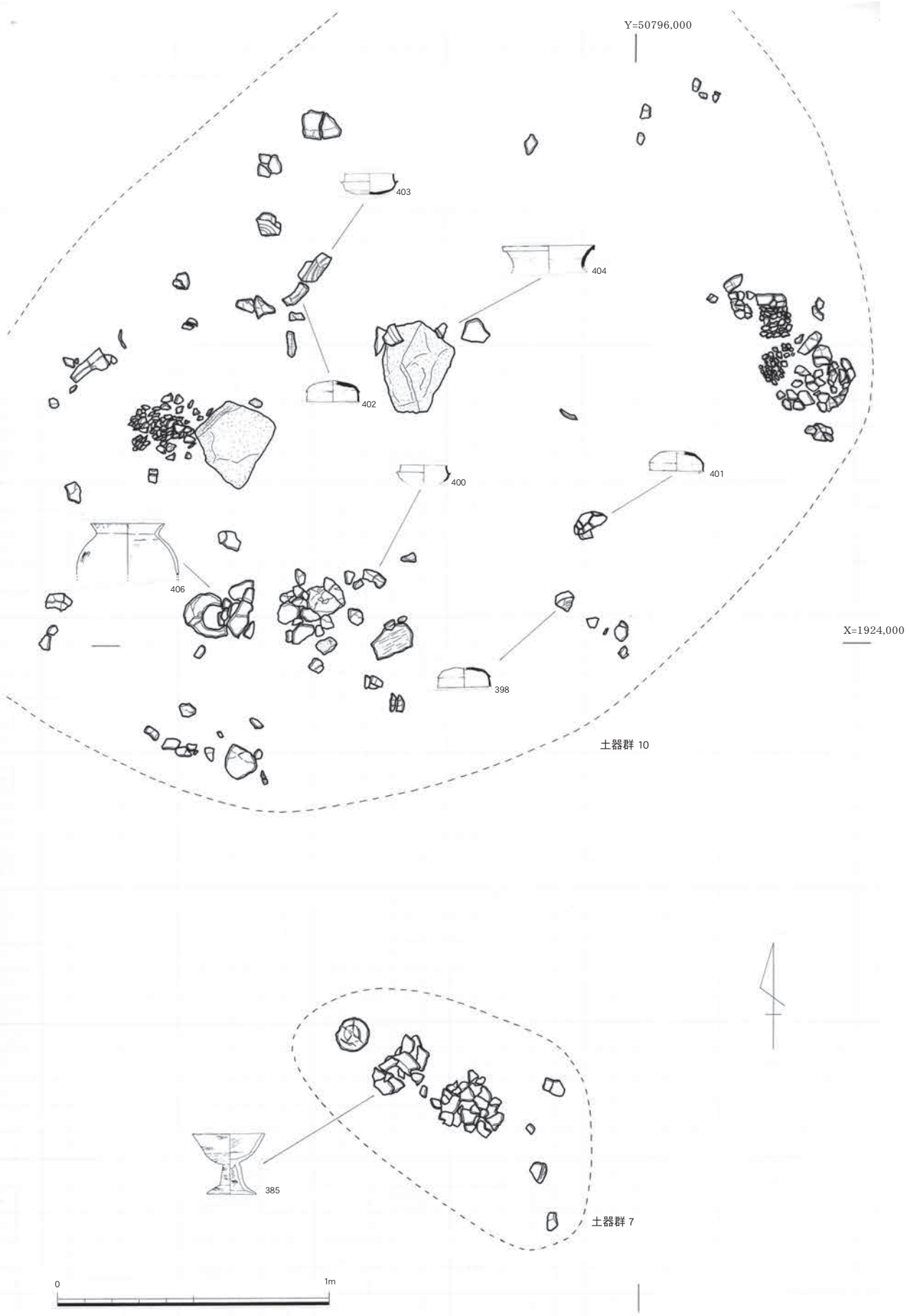


図 III-43　土器群 7・土器群 10 遺物出土状況図

387、388 は手づくね土器である。388 はやや器高が高い。389、390 は高坏脚部である。いずれも裾部で屈曲し外側へ直線的に延びる。内外面に指頭圧痕、ナデ調整がみられる。391、392 は須恵器坏蓋､坏身である。391 は天井部が平坦で稜部断面も鋭さを欠く。端部は緩い段をなす。392 は坏身である。立ち上がりは高く､わずかに内傾する。端部はわずかに内傾する段を有する。底部は丸く、受部は短く上方へ伸びて丸く仕上げている。393、394 は甕である。393 は頸基部から大きく外反し段を持つ。頸部及び体部には波状文からなる文様帯を有し､肩部が大きく張る。394 は 393 に比してやや大型で、器高 18.4cm を測るが類似する器形をなす。体部の文様帯は上下に沈線を配して区画され、内側には羽状文が施文される。395 は甕口縁部である。頸部に断面三角形の稜をもちその上下の区画に波状文を施文している。端部外面は凹面をなす。396は無蓋高坏である。坏部には稜で区画した内側に波状文を施文し、稜部に重なるように断面円形の把手を貼り付けている。脚部には長方形のスカシがみられる。397 は叩石である。両面に敲打痕が残り、さらに側縁にも使用痕が認められる。

土器群 10　B - 3 区で確認された遺物の出土地点である。3.2m × 2.1m ほどの範囲で須恵器坏、甕が出土する。398、399、401、402 は須恵器坏蓋である。398 は天井部が扁平で断面三角形の尖った稜をもち端部は内側に段を持つ。399 は稜の張り出しが小さくあまい。端部はやや外反ぎみになり端部は浅い段をなす。401 は天井部はやや丸くヘラケズリは天井部の 1/2 付近に及ぶ。ややあまい稜部から内湾ぎみに口縁部へとつづき、端部は内側に段をなす。402 は尖っ

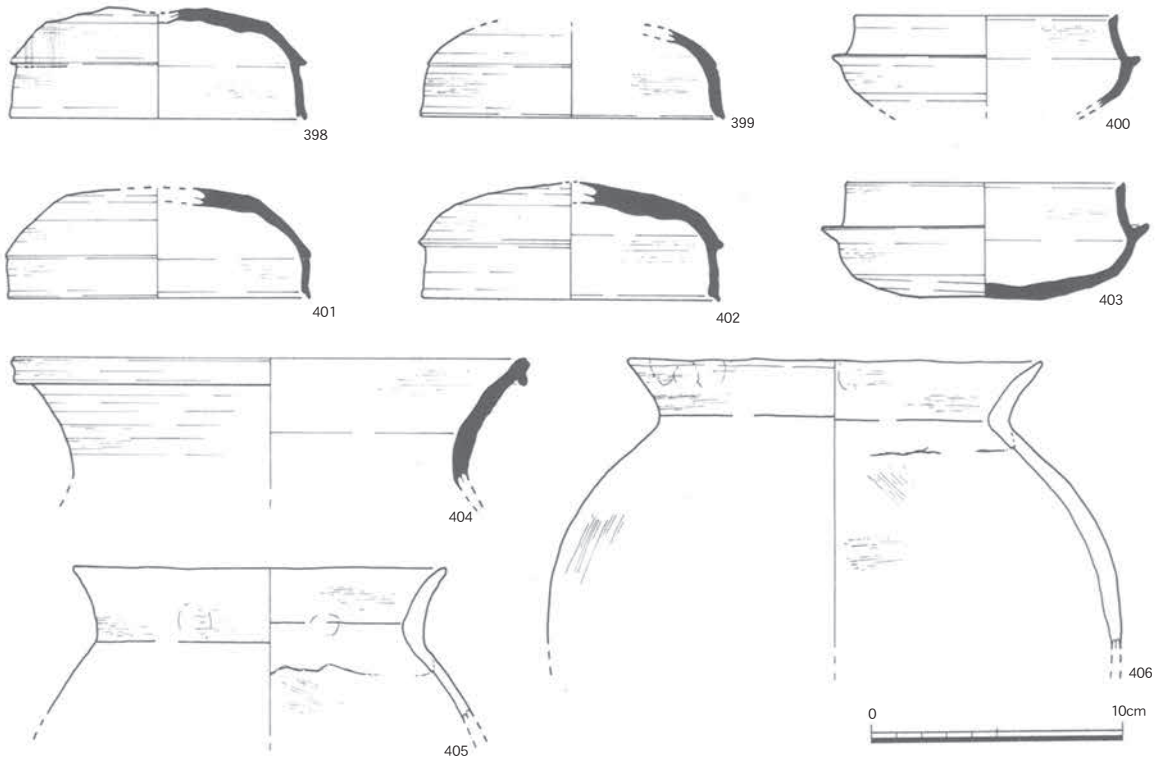


図 III-44　土器群 10 出土遺物

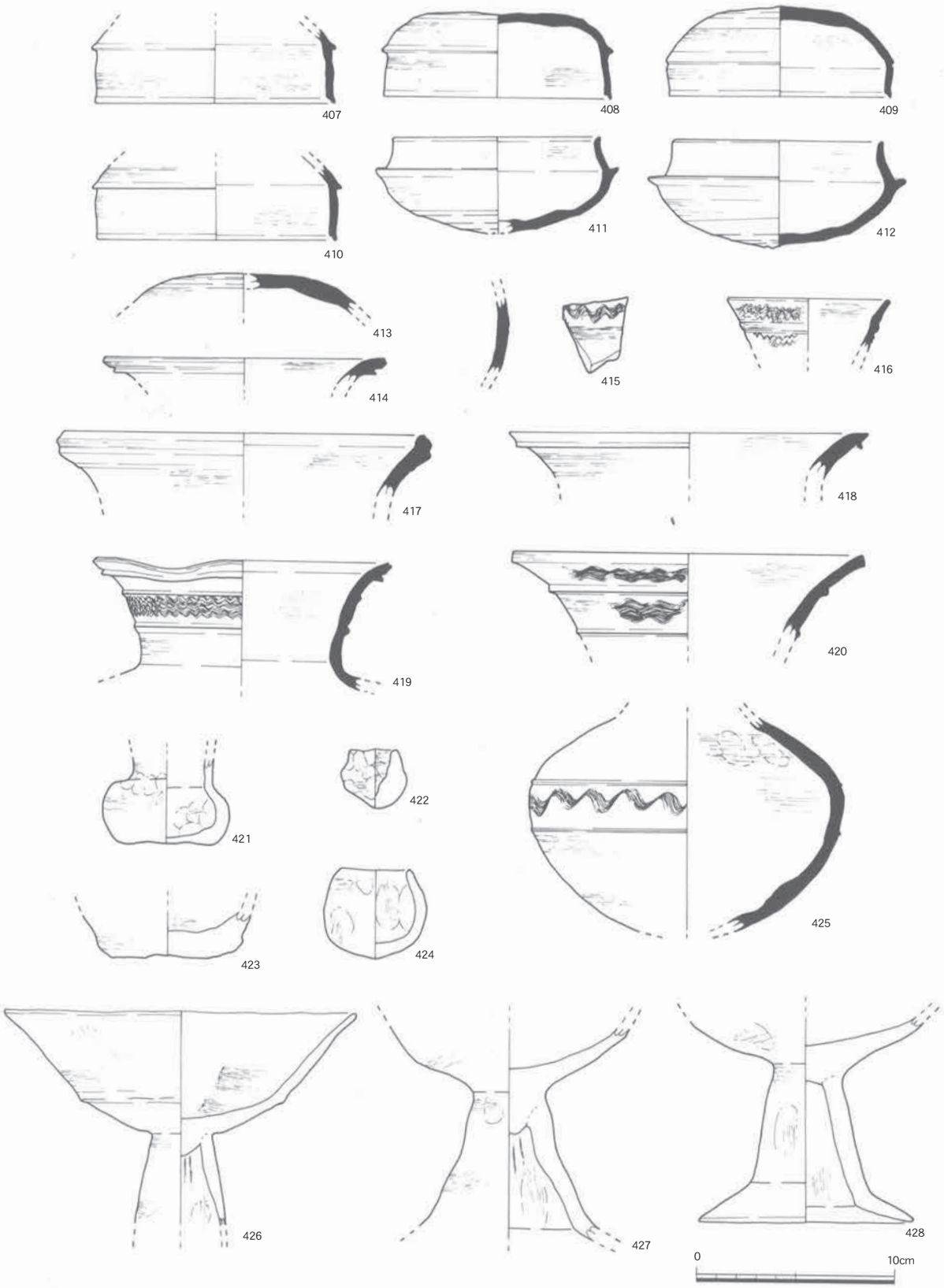


図 III-45　包含層出土遺物 1

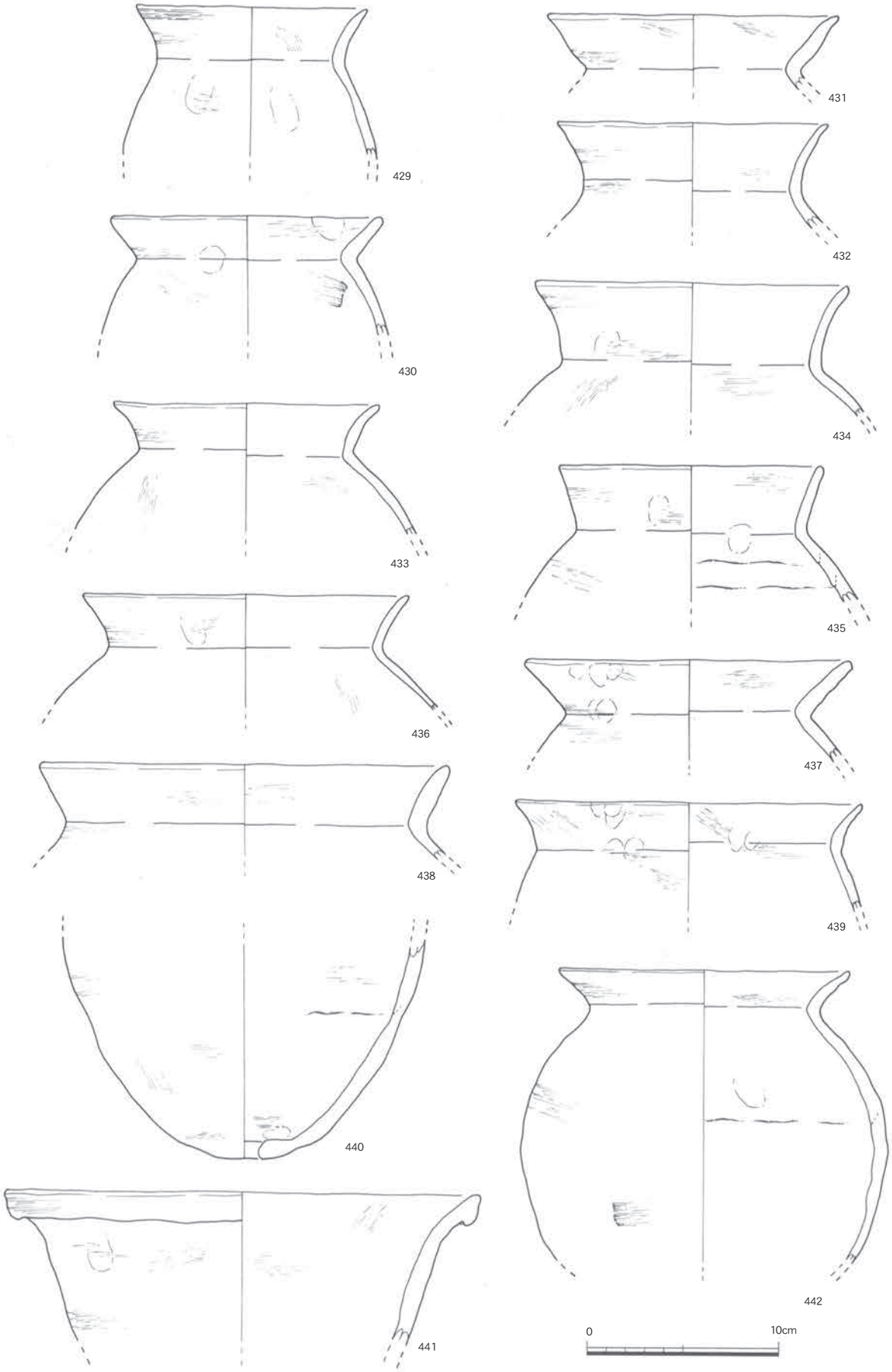


図 III-46　包含層出土遺物 2

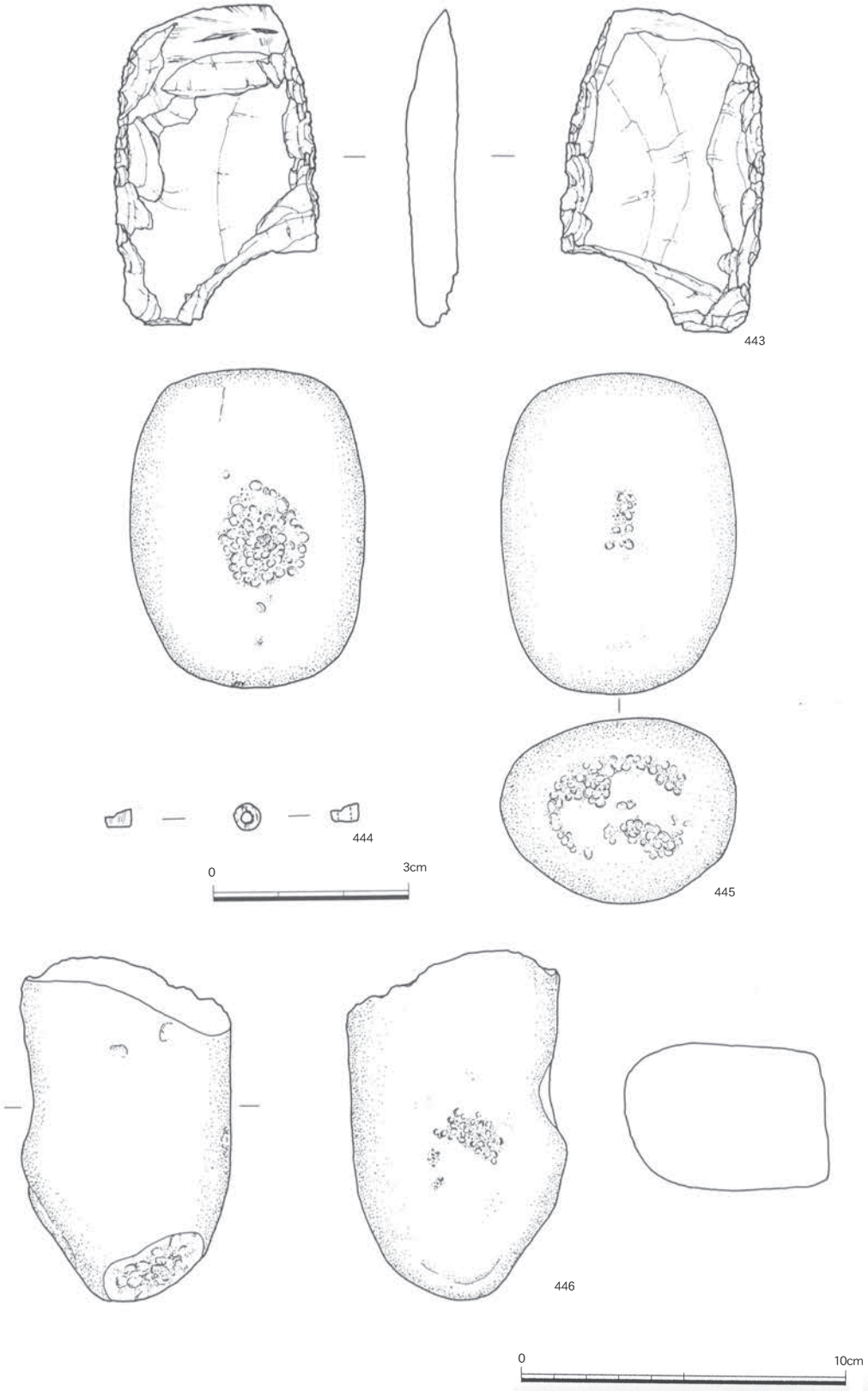


図 III-47　包含層出土遺物 3

た稜をもち口縁端部は内側に段をなす。400、403 は須恵器坏身である。400 は受部が短く斜め上方へ伸び、立ち上がりは内傾して端部には内傾する段を有する。403 は底部がやや扁平で、受部は短く上方へのびる。立ち上がりはわずかに内傾しつつ端部は凹状に仕上げられる。404 は須恵器甕口縁部である。大きく外反し口縁端部直下に断面三角形の凸線が巡る。端部外面はやや凹面をなす。405 は土師器甕である。緩く外反して端部は丸くおさめている。406 も甕である。体部から屈曲したのち外傾しつつ短くのびて端部はやや尖り気味に終わる。

(2) 包含層出土遺物

このほか包含層からも良好な遺物を多数確認している。出土するのは須恵器坏、甕、壺、土師

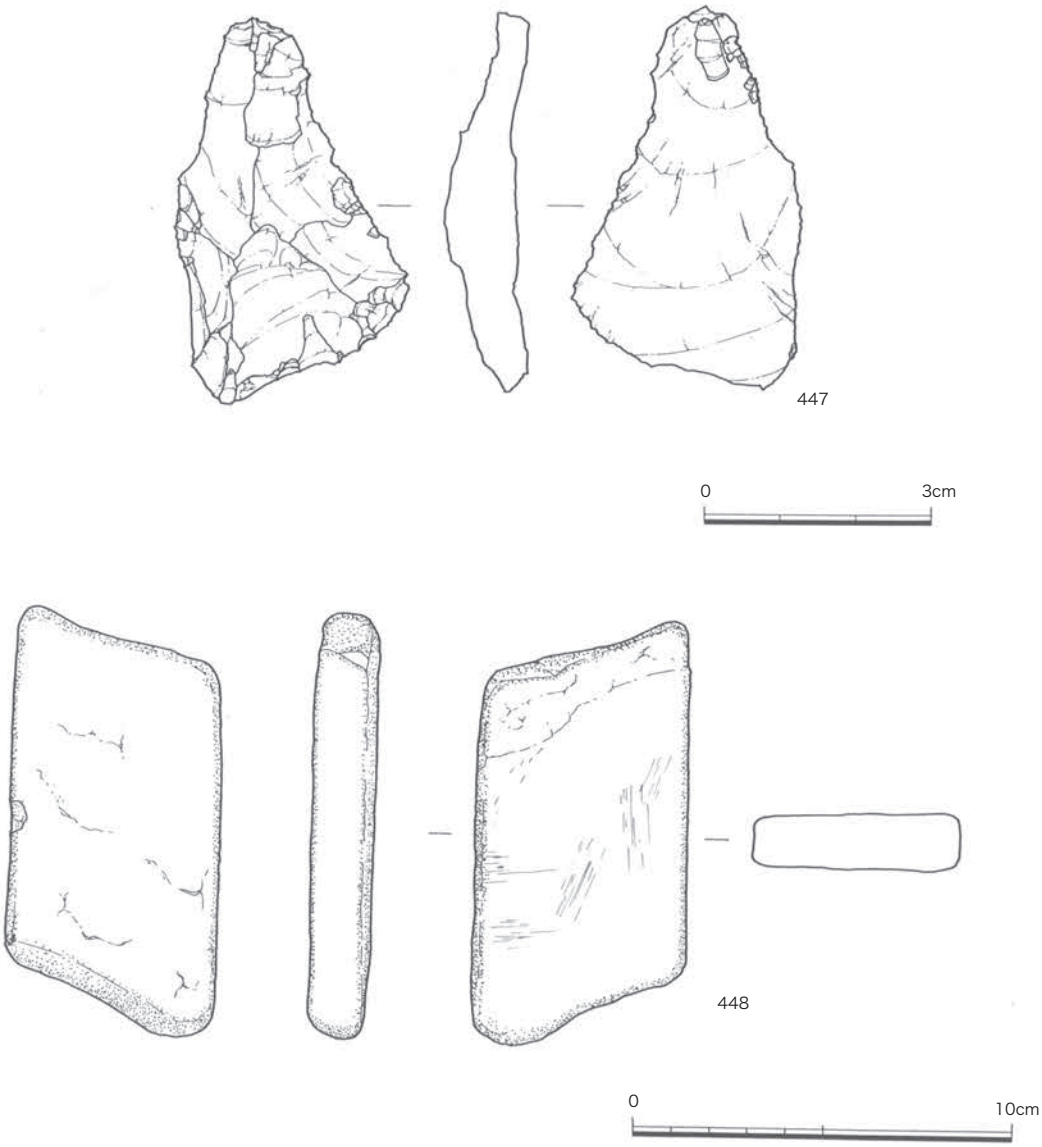
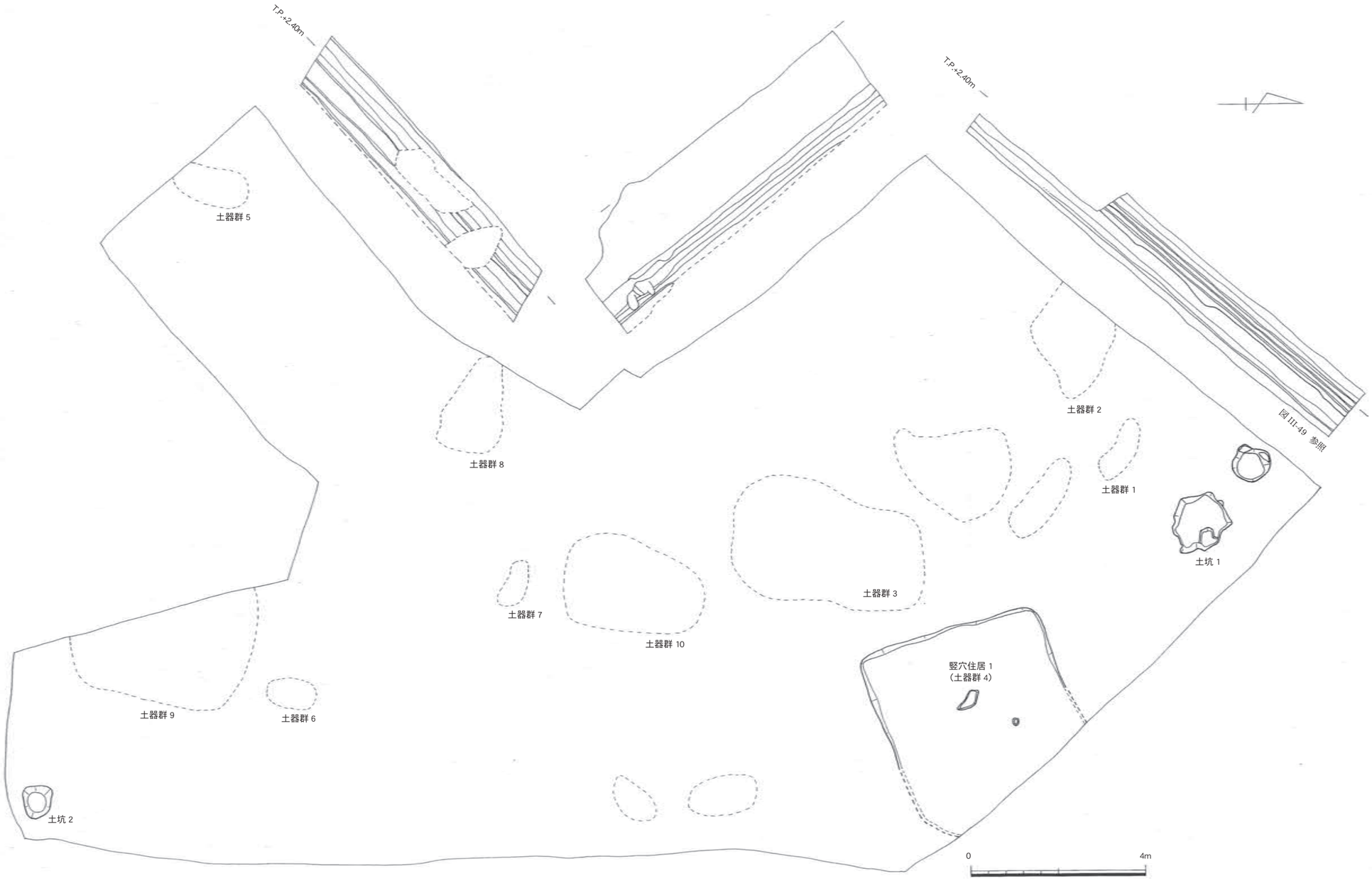


図 Ⅲ-48　包含層出土遺物 4

器甕、高坏、手づくね土器、叩石等である。407～410、413は須恵器坏蓋である。407 は断面三角形の稜をもち端部は内側に段をなす。408 は断面三角形の稜をもち外傾ぎみに口縁部へ向かう。端部は内側に段をなす。天井部は扁平で、1/2 ほどまで回転ヘラケズリが施されている。409 は天井部は丸く、ヘラケズリは 1/2 程まで及ばない。稜はあまく内傾して口縁部へ向かう。端部は内側に段をなす。410 は口縁部に向かってやや内傾し端部は内側に段をなす。413 は須恵器坏蓋の天井部である。411・412 は須恵器坏身である。411 は底部は丸く受部は上方へ短く伸びる。立ち上がりは緩く内傾し端部は丸くおさめている。412 も底部は丸く受部は外反ぎみに上方へ伸びる。立ち上がりは端部は丸く仕上げる。414、417～420は甕口縁部である。419は口頸部は外反し端部に至るまでに2本の凸線をもつ。凸線で区画された上下に波状文が施文され、口縁端部は平面的に仕上げる。414 は口縁端部内方に断面三角形の凸線をもつ。418 は口頸部が外反しさらに屈曲して外方へ伸びる。屈曲部付近に鋭い凸線を巡らせている。口頸部は外反し鋭さを欠く凸線が口縁端部下につく。端部は凹面をなす。416は壺口縁部である。口頸部半ばに稜のあまい凸線をもちその上下に波状文を施す。415は壺体部である。波状文が施文される。430、437、442、431、432、434、439、441、438 は甕口縁部である。明確に頚部で屈曲するものには直線的に外傾するもの (437・438) と緩く外反するもの (442・434・439)、緩く内湾気味に立ち上がるもの (430・431) がある。頚部から口縁部にかけての屈曲がゆるいもの (432・434・439) は端部がやや尖り気味に仕上げられるものが多い。421、422、424 は手づくね土器である。422、424 が丸底の椀状の器形を呈すのに対して 421 は胴部からいったんすぼまって壺状の器形をなしている。423 は底部である。粗製の小型底部であり安定感も乏しい。441 は甕の口縁部である。端部は粘土帯を折り返して肥厚させる。443 は磨製石斧欠損品である。残存する刃部は幅約 4.5cm をはかり擦痕が顕著に観察される。背面、腹面ともに研磨した面を切った大きな剥離がなされており、側縁はさらにそれに後出する左右両側からの連続した小さな剥離によって形状を整えている。下端は折れによって欠損している。刃部に後出する剥離が多いことから成品の形状を想定しづらいが、欠損品を再利用したものもしくは欠損後別用途に転用したものと考えられる。444 は滑石製の臼玉である。直径 4mm、孔径 1.5mm を測る。内外面に擦痕がみられる。445、446 は叩石である。445 は両面に敲打痕が残り、上下面にも同様の敲打痕が確認される。446 は敲打痕が明確に残るのは片面のみである。上端は折れが生じており、下端は加撃によって割れを生じている。447 は二次加工のある剥片に分類される。石材はサヌカイトで、打面は背面側からの剥離で失われているがバルバスカーが残る。背面側は不定方向からの加撃による剥離面が多数みられる。右上方に主要剥離面に後出する細かい剥離が見られる。448 は最大長 9.9cm、最大幅 5.7cm をはかる砥石である。砂岩製でやや不定な長方形を呈している。表裏両面にまばらに使用痕が残る。



図Ⅲ –49　第４次調査遺構全体図

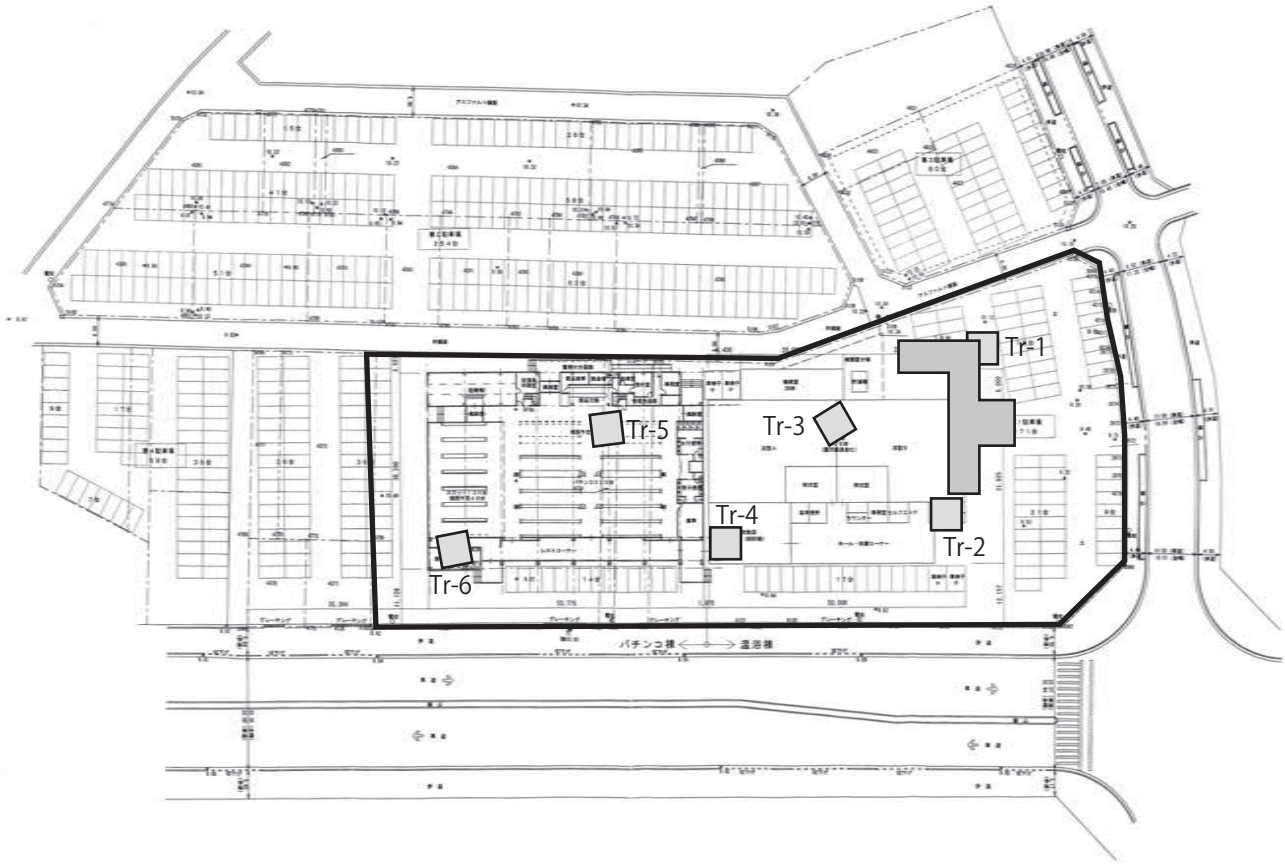
Ⅲ-5　第 6 次調査の成果

1.　第 6 次調査の経過

第 6 次調査は区画整理事業にかかる店舗の新設事業に先立って実施された発掘調査である。平成 15 年度に古津賀土地区画整理組合から発掘の届出が提出され、これを受けて市教育委員会が試掘確認調査を実施した。試掘確認調査の結果から開発範囲の一部で良好に埋蔵文化財が残存することが判明したため事業主及び区画整理組合との調整を行い、工事によって埋蔵文化財が損壊を受ける約 300m² に対して本発掘調査を実施する運びとなった 。発掘調査は平成 15 年 7 月 23日から同年 10 月 4 日まで実施された。

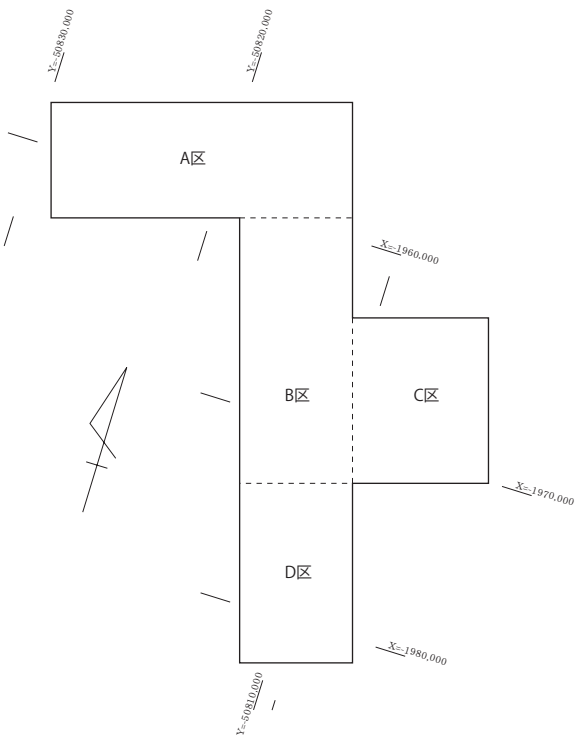
2.　グリッドの設定

このグリッドは調査区の形状に沿って北西から南にむかってA～Dの 4 つの区画を設定した。この区画は調査区の平面形に対して相対するように配慮され、国土座標に対しては任意の傾きを



図Ⅲ –50　第 6 次調査トレンチ配置図

持っている。調査区内の区画と国土座標の関係は図 III-51 に示している。



図Ⅲ –51　第６次調査グリッド設定図

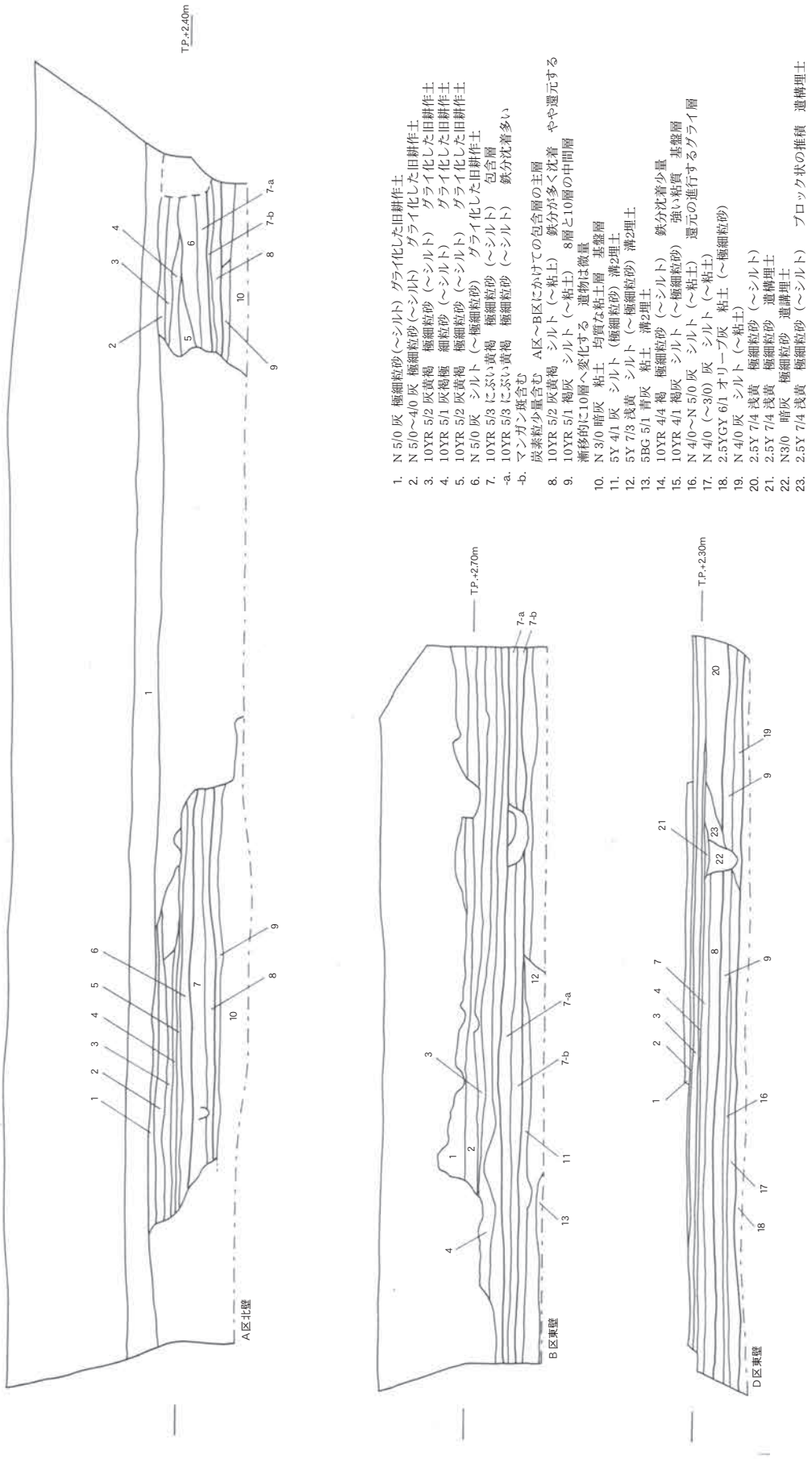
3.　調査の成果

(1) 試掘確認調査

試掘確認調査は平成 15 年 4 月 14 日から同年 5 月 2 日にかけて開発対象地約 16,787m² に対して実施された。調査対象地に対して任意に 6 箇所のトレンチを設定し、必要に応じて写真撮影、実測等を行って記録を作成した。試掘確認調査で遺物・遺構を確認したのは 6 箇所のうち Tr-1～Tr-4の4箇所である (図 III-50)。512 は須恵器坏蓋である。断面三角形の稜をもちゆるく外傾しつつ口縁部へ至り、端部は凹状に仕上げる。507・508 は高坏坏部で、507 は屈曲は緩く粘土帯の継ぎ目が判別できる程度である。口縁部直前からやや外反し、端部は丸くおさめる。５０８は坏部下半で屈曲し外側へひらく。514・515 は高坏脚部である。裾部で屈曲し、外側へ伸びる。511 は須恵器甕口縁部である。口縁端部は丸く直下に断面三角形の稜がめぐり、稜の直下から頸部にかけて波状文が施文される。509・510 は手づくね土器である。内外面ともに指頭圧痕が顕著で粗製。516 は壺口縁部である。頸部はゆるく外反しながら立ち上がり口縁部は粘土帯を付加している。肥厚させた口縁部外面には細い刻目をめぐらせて加飾する。 516は弥生時代後期の特徴を備えるものであり、他の遺物とは時期を異にする。出土する層位も古墳時代の遺物を出土する層位の直下から出土するため 2 時期の遺構が存在するものと想定された。

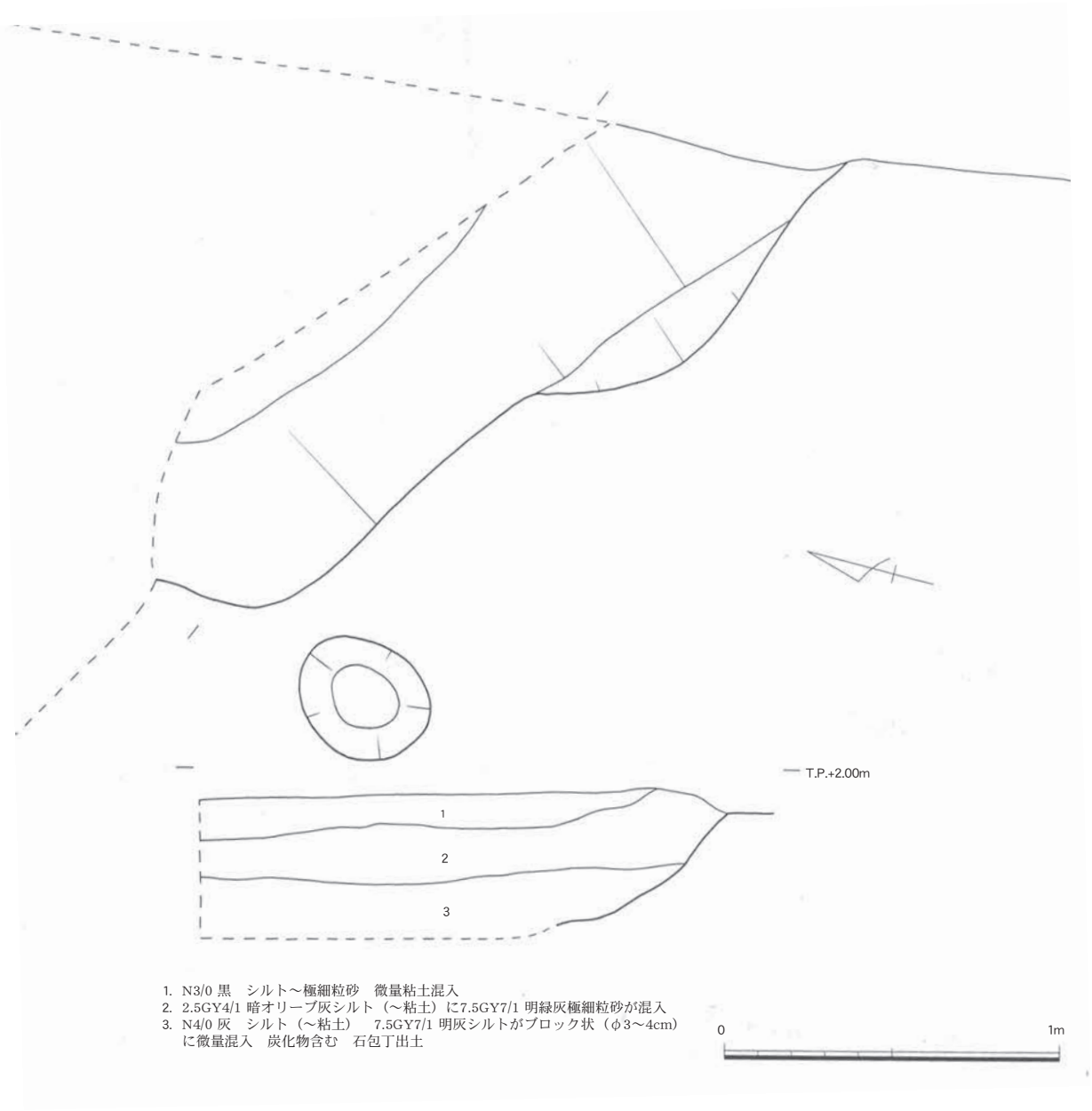
(2) 層位と遺構

本発掘調査では遺構検出が可能であった 9 層上面、10 層上面において精査を行い柱穴 95 基、土坑 30 基、溝 2 状を確認した。9 層上面から確認される遺構の埋土は褐色が強くマンガンを含むものが多いのに対して 10 層検出の遺構は粘質でしまった暗灰シルトがベースとなり青灰色シルトブロックや炭化物が混入する。古墳時代の遺構はおよそ包含層のある7～8層から掘り込まれているため 9 層上面ではすでに30～40cmほど掘り下げられている。これに呼応するかのように 9 層上面検出の遺構は10～30cmと浅いものが多い。これに対し 10 層検出の遺構群は、深いもので 80cm を測るなど残存状態が良好である。しかし9 層 上面での遺構の検出は埋土と 9 層



図Ⅲ –52　第 6 次調査壁面土層断面図

が類似しているため判別が難しく、遺構によっては９層以下に残存するものもあり、このような遺構においても９層・10 層付近では青灰色シルトブロックを埋土に含む暗灰シルトの埋土をもつため埋土や検出面の比高で時期を特定するには問題がある。ここで問題となるのが７～８層に対して9層が異なる時期の遺物を含む層位であるかである。9層は層厚が厚いところでも10cm程度であり遺物出土量も極めて少ない。層厚がないため８層との層理面で生じる遺物の混乱が層全体の現象として影響しやすい状況である。実際に包含層から遺物が取上げられる際にも８層と９層に別を明確にしがたいものが多くあった。後述する土坑２のように明らかに弥生時代の所産と思われる遺物を出土する遺構が存在するが、現状では埋土や検出面の違いから遺物の出土しない遺構群についてその時期を判別するには至っていない。



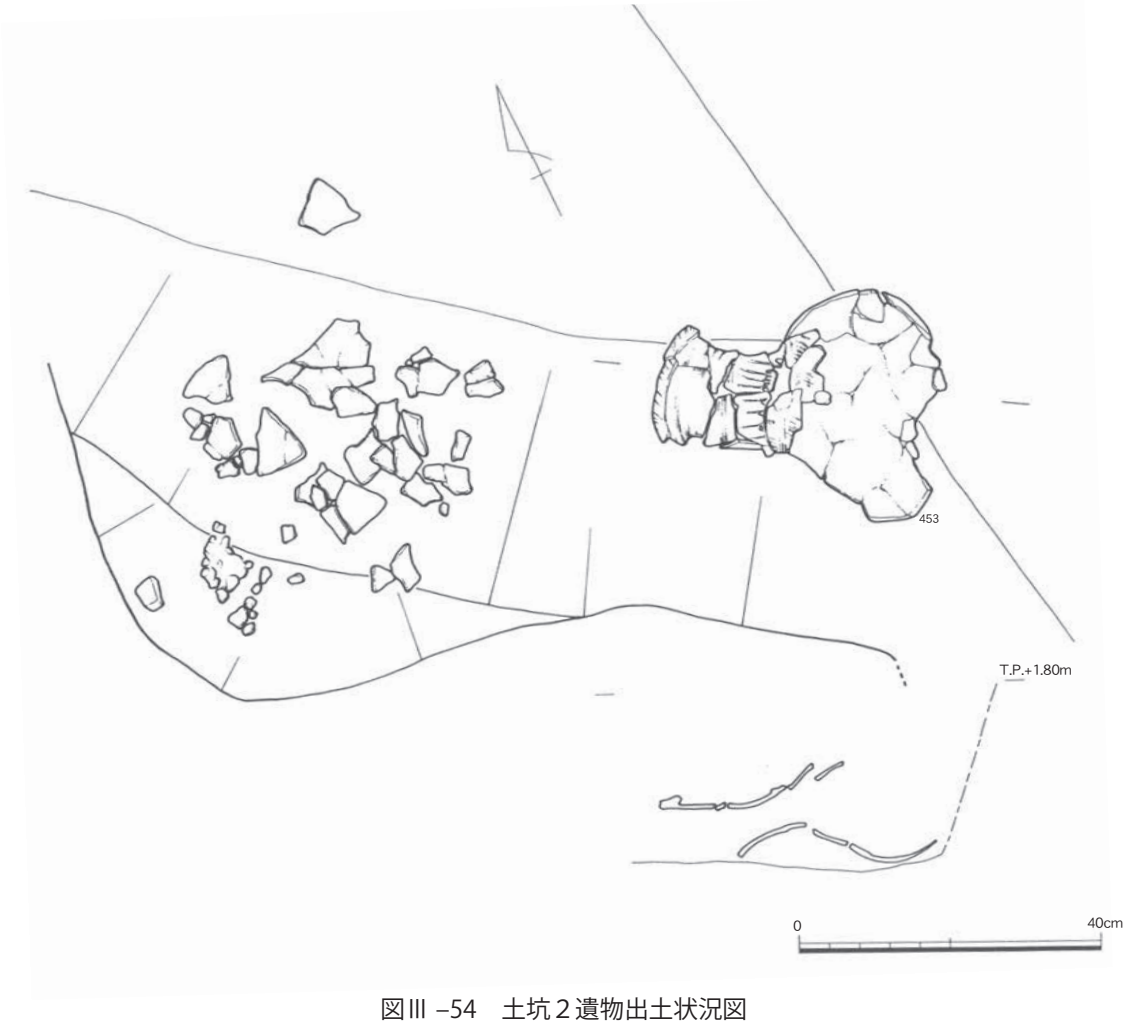
図Ⅲ –53　土坑２平面図

(3) 検出された遺構と遺物

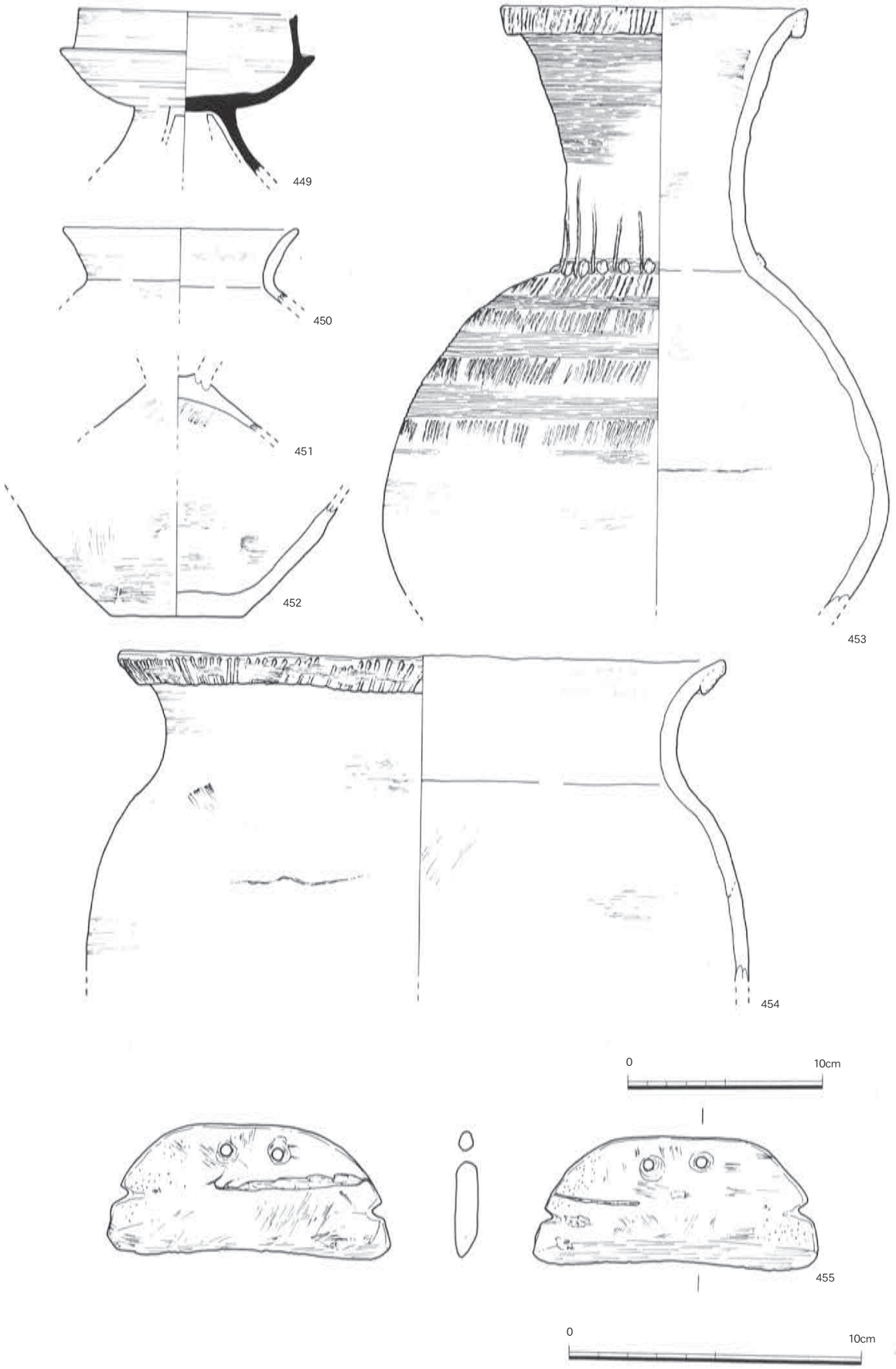
以下では特徴的なものを取り上げてその詳細を述べることとする。なお、調査区内には 6m 四方程度の撹乱が数箇所確認されている。付近の試掘確認調査においても同様の状況が見られるが、これは付近での聞き取り調査によって、当該地域において昭和初期頃まで瓦製造にかかる粘土採掘を行っていた際の粘土採掘孔であることが判明した。古津賀周辺の粘質シルト層は、旧来瓦等を製造数に適した粘土が多く採取されていたという。

柱穴１　B 区中央付近で確認された直径 60cm ほどの柱穴である。埋土から高坏脚部(460)が出土している。460は須恵器高坏脚端部である。内側に端部上方で段をなし内湾して端部は丸く仕上げている。

土坑１　B 区中央付近で確認された南北 1m、東西 80cm ほどの楕円形を呈する土坑である。すり鉢状になだらかに底に向かって傾斜しており、埋土中から須恵器高坏 (449) が出土する。449 は小型の有蓋高坏である。受部は断面三角形で上方へ伸び丸くおさまる。立ち上がりは内傾し、口縁部付近で緩く外反する。端部は内側に段をなす。脚基部は太く、脚は短い。長方形の



図Ⅲ –54　土坑２遺物出土状況図



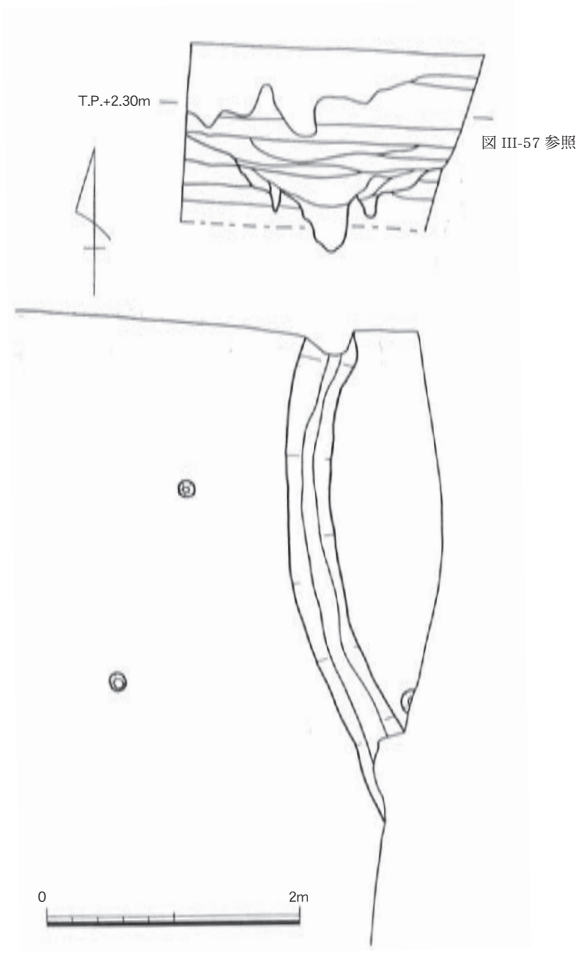
図Ⅲ –55　土坑１～土坑３　落ち１出土遺物

スカシ窓が施される。

土坑２　Ｃ区撹乱際で確認された土坑である。粘土採掘孔に撹乱され全体の形状は明らかでない。検出し得た範囲では遺構の底へ到達していないこと、調査区外へもさらに広がりをみせていることなどからやや規模の大きな土坑もしくは溝状の遺構であろうと推測される。土坑内ではやや下方で壺（453）がほぼ形状を保った状態で、壺よりやや西側の肩口で甕（454）が出土している。石包丁（455）は甕（454）の北側、土坑の残存する最下部で出土する。

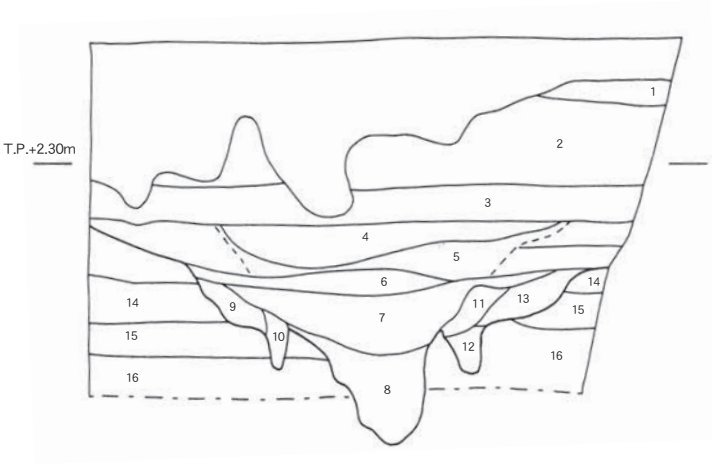
土坑２からは良好な遺物が確認されている (452～455)。454は甕である。体部から屈曲して頸部は外反しつつ口縁部へ向かう。口縁部は粘土帯を折り返して肥厚させ、太目の刻目を巡らせている。刻目の中央付近は施文後にナデられている。 452、453 は壺である。453は口径 15.5cm、残存する器高 30.9cm を測る長頸壺である。体部下半に最大径をもち、頸部は外反しながら口縁部へ向かう。口縁部は粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁部外面に細い刻目をめぐらせている。体部と頸部の境界付近には貼り付け後に両端を指でつまんで形状を整えた楕円形の浮文がみられ、浮文の間には縦方向の沈線が頸部半ば付近まで施文される。頸部上半は櫛描沈線が密に施されている。体部上半は連続した刻目が4段に巡り、その間を櫛描沈線が区画する。内面はハケ調整とナデ調整で仕上げられ、下半には指頭圧痕が散見される。452 は壺底部である。平底で内外面にナデ調整及びハケ調整を施す。455 は石包丁である。幅 9.8cm、高さ 4.4cm をはかり、上部に２つの穿孔を施す。腹面、背面共に敲打痕、擦痕が顕著に見られ、特に刃部には横方向の擦痕が観察される。両短辺に浅いえぐりが見られ、えぐり周縁は摩耗している。土坑２は出土する遺物から弥生時代後期前半代の所産と考えられるが、当該調査区内では明確な弥生時代の包含層は確認されておらず、先行する第２次調査、第４次調査でも弥生時代の遺構・包含層は確認されていないため関係する時期の遺構等については今後注意が必要である。

土坑３　Ｂ区西端で確認された直径約 50cm をはかる土坑で、器台脚部片 (451) が出土する。



図Ⅲ –56　溝２平面図

溝１　Ｃ区北東隅で検出された溝である。



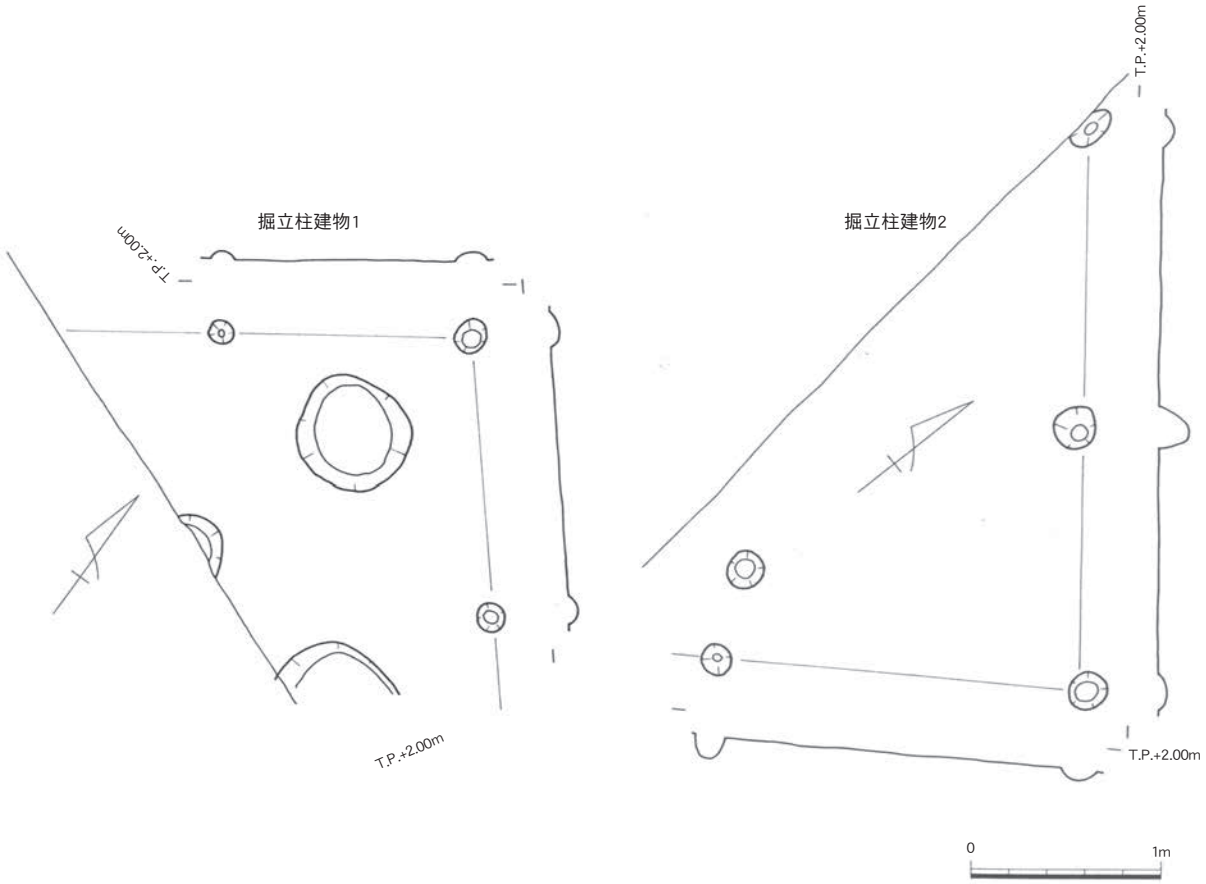
1. 10YR 4/4 褐極細粒砂に 10YR 5/1 褐灰極細粒砂が15%混入
2. 10YR 6/6 明黄褐極細粒砂　10YR 4/4 褐斑文が30%分布
3. 10YR 3/1 黒褐極細粒砂（～シルト）に 10YR 6/6 明黄褐極細粒砂が10～15%混入
4. 10YR 4/1 褐灰シルト（～極細粒砂）　10YR 4/4 褐斑文 15～20%分布
5. 10YR 7/6 明黄褐色極細粒砂（～シルト）に 10YR 6/1 褐灰シルトが15～20%混入 10YR 4/4 褐斑文20%混入　部分的に黄色が強い箇所有
6. 7.5Y 5/2 灰オリーブ粘土（～シルト）極細粒砂20%混入 10YR 4/4 褐斑文20%混入
7. N 4/0 灰シルト（～粘土）若干極細粒砂混入 2.5GY 7/1 灰オリーブφ20～5mmブロック混入
8. N 4/0 灰と2.5GY 7/1 明オリーブ灰極細粒砂（～シルト）のブロックが混合する粗い推積
9. N 4/0 灰シルト（～粘土）に青緑灰シルトブロック φ5～15mmが15%混入
10. N 4/0 灰シルト（～粘土）に青緑灰シルトブロック φ2～5mmが20～25%混入
11. N 4/0 灰シルト（～粘土）に青緑灰シルトブロック φ5～15mmが15%混入
12. N 4/0 灰シルト（～粘土）に青緑灰シルトブロック φ2～5mmが20～25mm混入
13. 9に似るがブロックの混入は少ない　5～10%程
14. 7.5Y 5/1～6/1 灰シルト～粘土
15. N 4/0 灰シルト～粘土
16. 7.5Y 6/1 灰粘土（～シルト）

図Ⅲ –57　溝２断面図

調査区外から撹乱に至る狭い範囲に残存しており、東側の肩も検出できていない。よって溝の方向性や性格を判別するには至らないが残存する幅だけでも 2m を超え、底付近で一段深く落ちる。堆積状況を観察すると部分的にではあるが一段落ちる付近で板材の痕跡かと考えられる堆積も看取される。

出土遺物は壺口縁（456）である。断面三角形の粘土帯を貼付け、口縁部外面に平坦面を形成している。外面の平坦面はナデ調整でしあげている。

溝２　A 区北東端で確認された溝である。調査区北壁から緩く弧を描いて東壁に向かって伸びている。8層～９層にかけての遺構検出時には不定形の輪郭が判別できるのみで明確な肩を確認し得ず土坑として扱っていたが、10 層上面において溝の最下段が明確に検出されたため、調査区を北側へ拡張しその状況を調査した。検出幅は一段落ちた部分であるため 40cm ほどであるが、壁面で確認する限り７層半ば付近から切り込んでおり、2m 近い幅のある溝であったものと想定される。さらに断面を観察すると一段落ちるまでにやや傾斜が緩くなり、その付近から細い杭状の柱穴痕が存在することがわかる。これは平面的にも溝２に沿うように小さな柱穴が密に並んでいることを確認することができる。なお、試掘確認調査実施時に Tr-1 においても同規模で、東西方向へ伸びる溝を一条確認している。Tr-1 は図Ⅲ -50 でも明らかなように溝２に近接する位置に設定されたトレンチである。試掘調査で検出した溝も溝２と同様に下部で一段深く掘り込まれており、溝断面の観察では板状の土留めらしき痕跡を確認している。規模・断面の形状、埋土の堆積状況等から両者は同一の遺構である可能性が高いものと思われるが、試掘調査で確認した溝は溝２とやや方向を異にしており、溝２がこの溝と同一のものであるとするならば、



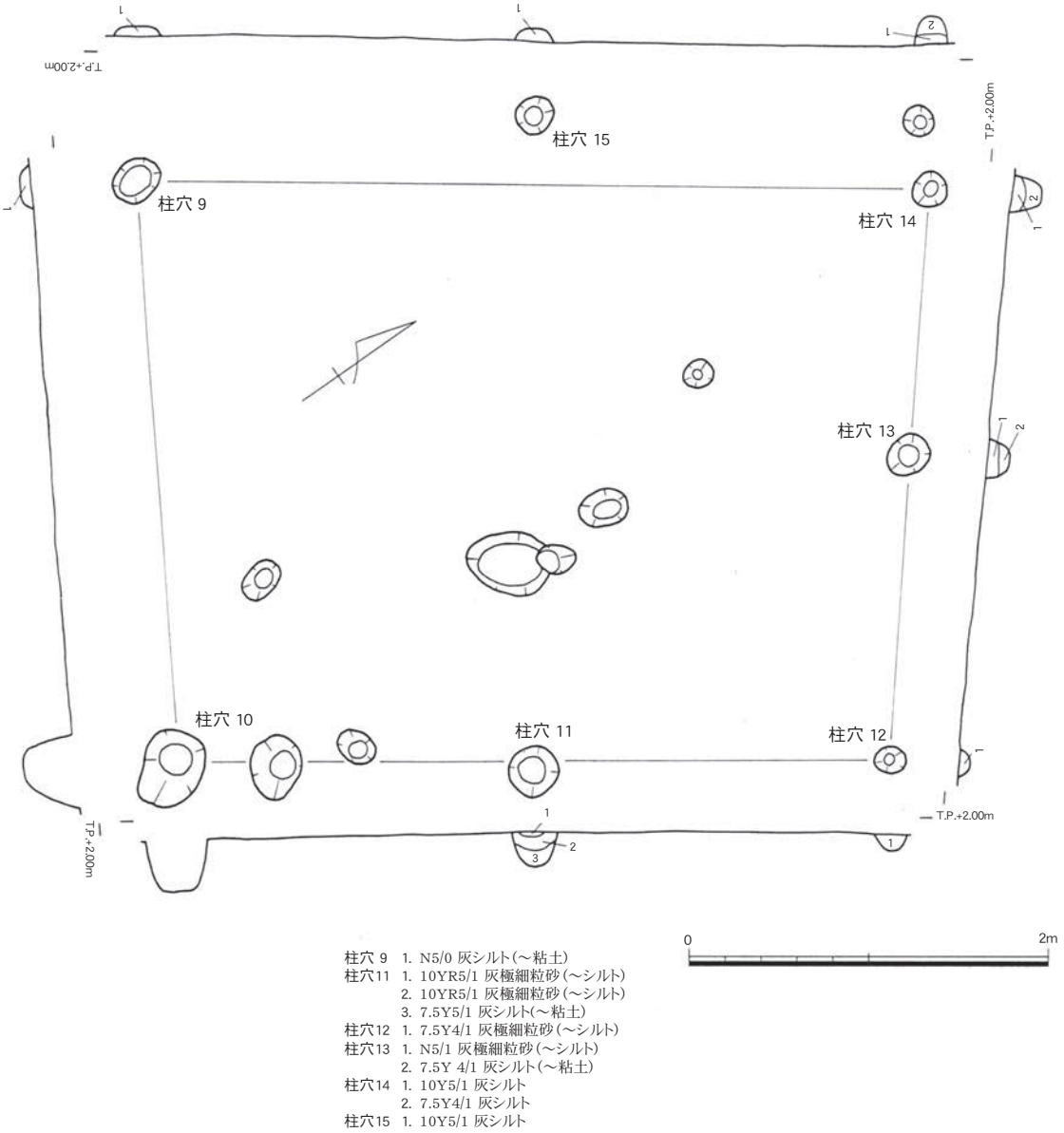
図Ⅲ –58　掘立柱建物 1・掘立柱建物 2 平面図

調査区外で方向を変えるものと考えねばなるまい。また、C 区で確認されている溝 1 についても形状、埋土等は類似しており、出土遺物には時期差が感じられるものの注意が必要であろう。これらがいずれにしても杭や板等を用いて溝を保持しようとしていることからも溝 1、溝 2 は長期的に利用する施設であったものと思われる。

出土する遺物は土師器甕、鉢である。464、468 は甕である。468 は体部中央付近に最大径をもち、屈曲して口縁へ向かう。端部はゆるく外反させ尖り気味におわる。内外面はハケとナデ調整。464 は屈曲後直立気味に外傾し端部は丸くおさめる。466・467 は丸底の底部である。465 は椀底部と思われる。丸底で内湾しつつ口縁へ続くものと想定される。

落ち 1　A 区東端で検出された不定形の大型の浅い落ちである。明確な掘りかたを持たず緩く広範囲に落ちる。埋土は赤褐色もしくは黒褐色の極細粒砂で炭化物が部分的にみられ、周囲の基盤層に比して堅緻な堆積である。落ち 1 掘削後にその下部より溝 2 を検出しているが、両者に前後関係があるというよりは、溝 2 の埋没段階で肩口の曖昧な堆積が広がったような印象を受ける。遺物は須恵器、土師器ともに細片が出土しているが図示できたものは須恵器坏蓋 (459) のみである。天井端部に沈線をめぐらせて稜を形成している。稜からは内湾しつつ外側へ伸び、口縁端部は内側に段を残す。他の出土遺物に比してやや新しい様相を呈する。

掘立柱建物は調査区の制限もあり全体の規模や柱穴の構成を明らかにできたものは少ない。本報告では合計 4 棟を復元案として提示している。柱間のばらつきや柱通りなど復元に際して恣

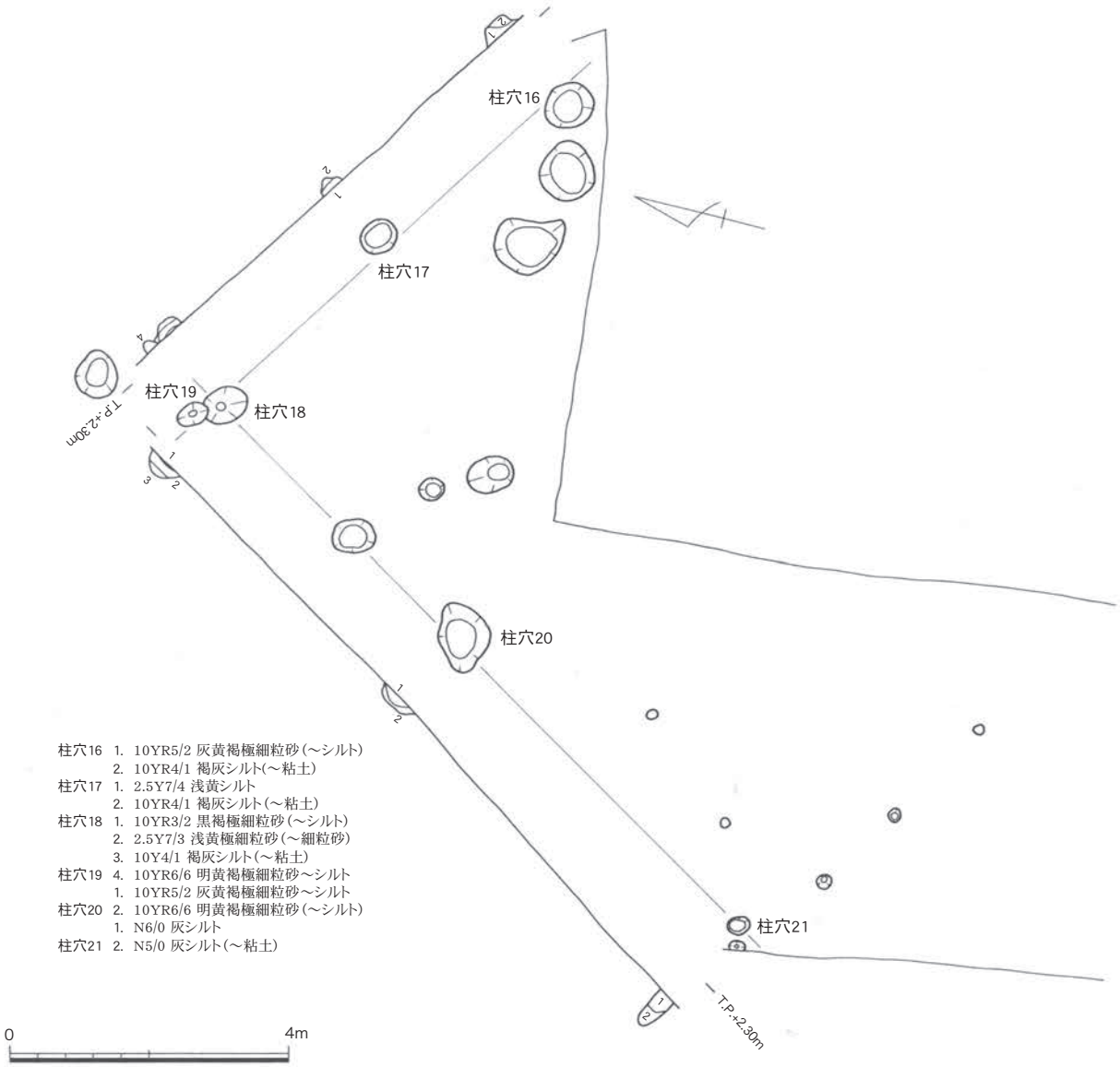


図Ⅲ –59　掘立柱建物３平面図

意的な部分があることも否めないが、以下復元した４棟について述べることとする。

掘立柱建物１　調査区南隅で確認されたもので、南北２間以上、東西２間以上の規模を持つものと思われる。１間の間隔は南北で 1.4m、東西方向は 1.3m を測る。両軸とも調査区外へ延びるため規模を正確に把握することはできない。柱穴は直径15～20cmで残存する深さは 10cm 足らずであるが、柱穴が浅いのは包含層中から存在した遺構を 10 層上面で確認したことによる。

掘立柱建物２　調査区南西で確認された２間以上× １間以上の掘立柱建物である。柱間は南北方向で 2m、東西方向で1.4m～1.5mを測る。柱穴は直径 20cm 程度のもので構成される。調査区外へ延びるため規模を明らかにすることはできない。

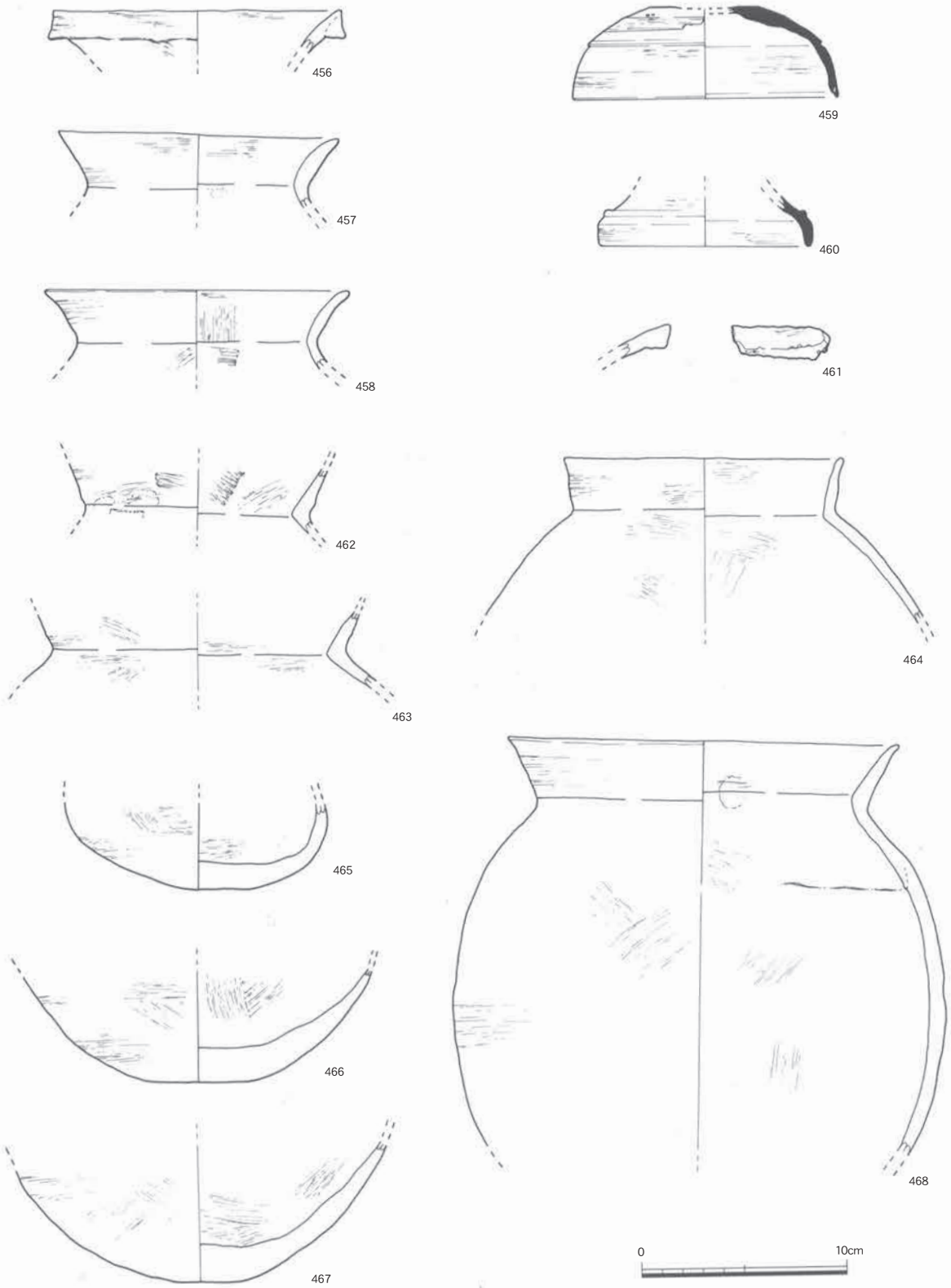


図Ⅲ –60　掘立柱建物４平面図

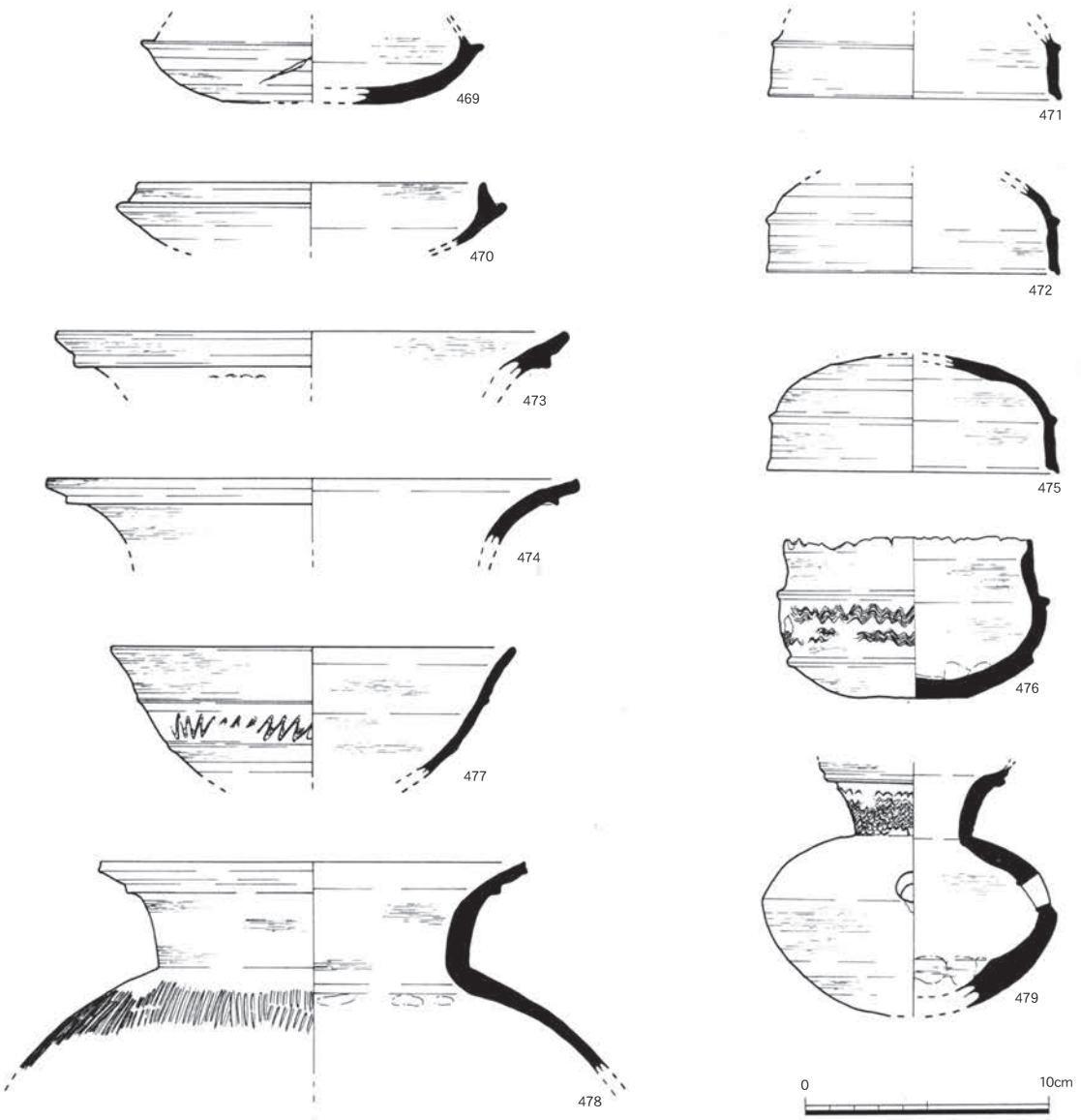
掘立柱建物３　Ｃ区で確認された２間×２間の掘立柱建物である。柱間は南北方向で 1.9m、東西方向で1.5～1.7mを測る。構成する柱穴の直径は15cm～40cm、深さ10cm～30cmとややばらつきがある。建物の方位は掘立柱建物２とほぼそろう。

掘立柱建物４　Ｃ区で確認された２間×２間以上の掘立柱建物である。柱間は南北方向で 4.5～5m、東西方向 3.3m を測る。南北方向は柱間の間隔が広いため中間に柱穴が存在した可能性もある。

包含層出土遺物　包含層からは土師器甕、壺、鉢、高坏、手づくね土器、器台、須恵器坏、鉢、瓮、甕、高坏、叩石、砥石が出土する。前述したように7～8層出土の遺物が圧倒的に多く、９層から出土したことが明確な遺物はない。471、472、475 は須恵器坏蓋である。471 は天井部が欠損しているが、稜は断面三角で端部直前に外反し端部は内側に段をなす。472・475 も天井部の

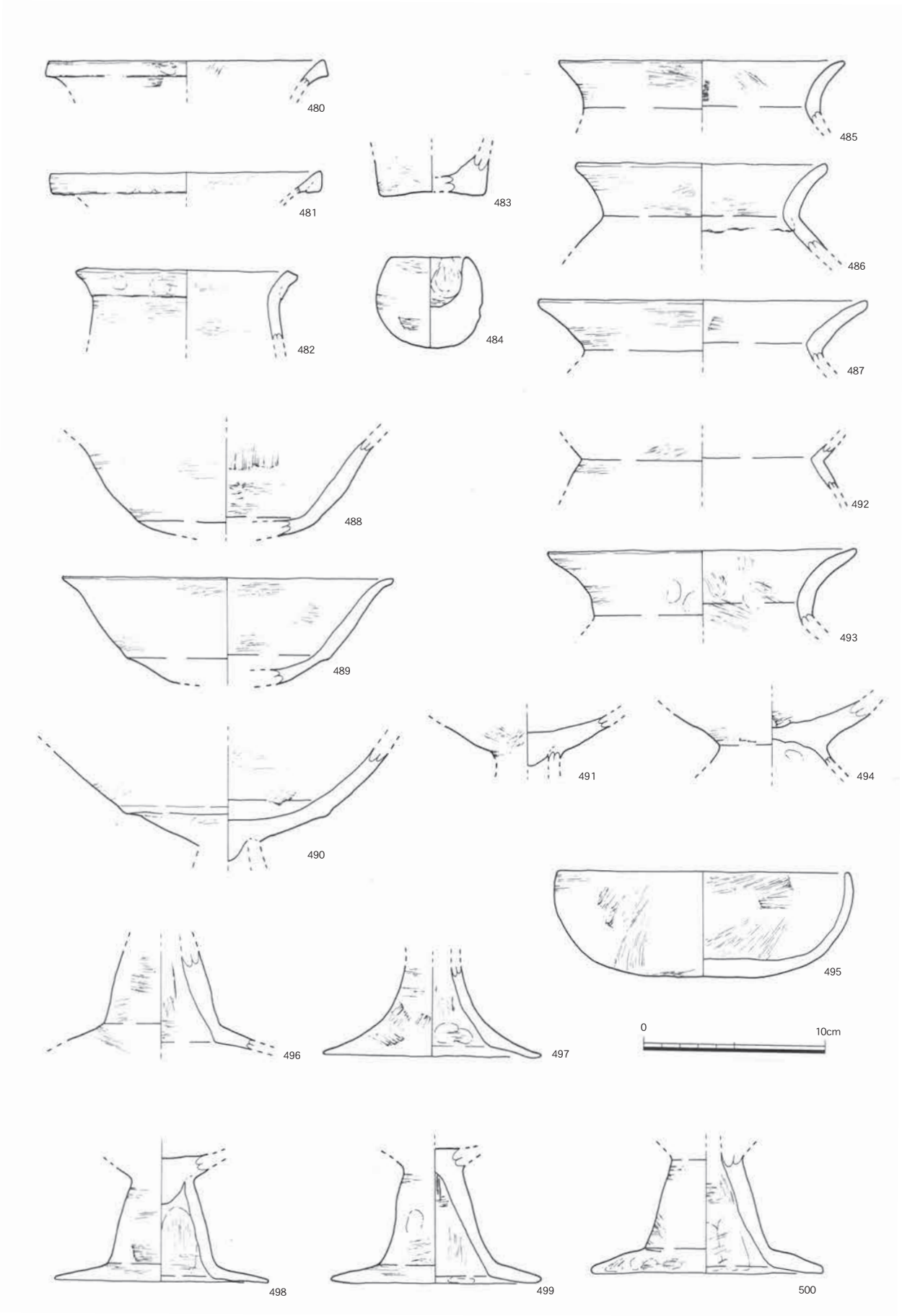


図Ⅲ –61　遺構・包含層出土遺物１

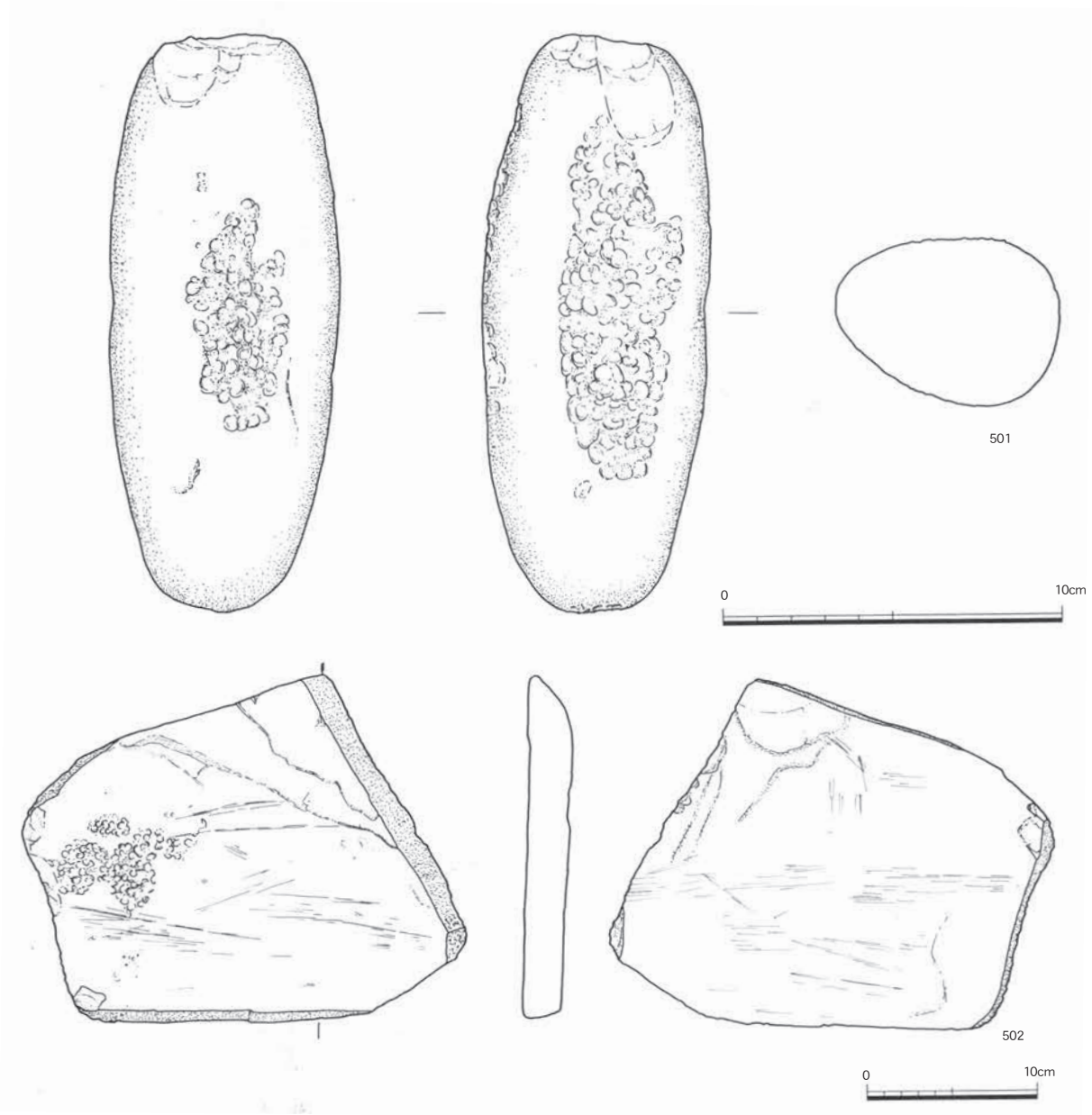


図Ⅲ –62　包含層出土遺物 2

一部が欠損するが、ヘラケズリは 1/2 ほどまで及び断面三角形の稜が巡る。端部は内側に段をなす。469、470 は須恵器坏身である。469 は底部はやや扁平で端部は丸く上方へ短く伸びる。立ち上がりは内傾して口縁部へむかう。470 は破片であるが端部は丸く、立ち上がりは短く内傾して端部には段をもたない。469、470 ともに 7 層出土のものであり他の遺物に比して新しい時期の特徴を持つ。473、474、478 は甕口縁部である。473 は口縁端部がやや内湾気味におわる。端部直下に断面三角形の凸線を巡らせている。474 は頚部から大きく外反し、さらに端部直前で屈曲して外方へ伸びて端部は平坦に仕上げている。屈曲点付近に鋭利な稜をもつ凸線が巡る。478 は体部から屈曲して頚部がゆるく外傾し、凸線から口縁部にむかって外反する。端部



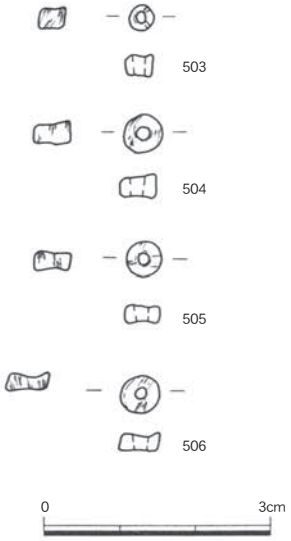
図Ⅲ –63　包含層出土遺物 3



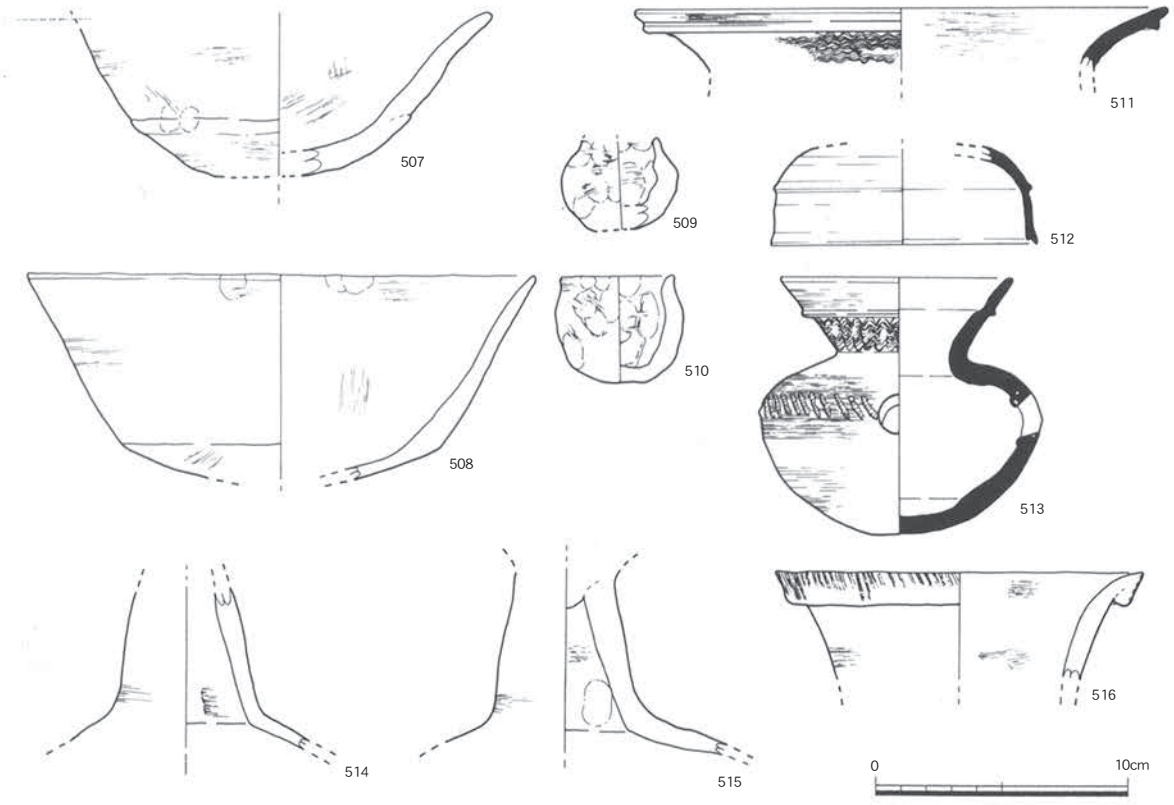
図Ⅲ –64　出土石器

は平坦である。476 は椀である。体部下半と口縁部との境界に断面三角形の稜を有し波状文を 2 条施文する。端部は内傾し内側に段をなす。端部は丸い。479 は甕である。底部と口縁部は欠損している。体部上方に穿孔し、頸部は太く短い。頸部は口縁に向かって外反し稜を巡らせている。頸部には波状文が施文される。457、458、462、463、485 ～ 487、492、493 は土師器甕である。甕口縁部は屈曲し口縁に向かって外反するもの (457・458・485・486・487・493) と内湾ぎみに立ち上がるもの (462・492) がみとめられる。487 は屈曲が強く、大きく外反し端部は丸くおさめる。462 は口縁部に粘土帯接合の段が残る。概ね外反するものは体部から口縁部にかけての屈曲がゆるく、内湾するものは屈曲が明瞭である。488 ～ 491 は高坏坏部である。491 は坏部の残りが少なく判別できないが他の坏部については下半で屈曲し内湾するもの (488・

490) と屈曲後外反し端部付近でさらに外側へ伸びるもの (489) がある。496 ～ 500 は高坏脚部である。497 は脚部から裾部にかけてなだらかに外反し端部は薄く細めにしあげる。496、498、499、500 は裾部で屈曲し外方へ伸び、端部を丸くおさめる。494 は器台である。脚基部は太く外側へ大きく開くものと想定される。495 は椀である。丸底でゆるく内湾し端部は丸くおさめる。内外面ともハケ調整及びナデ調整で仕上げる。483 はミニチュア土器底部、484 は手づくね土器である。480、481、482 は弥生土器甕口縁部である。口縁端部を粘土帯の貼り付けによって肥厚させ端部外面はナデ調整により平坦に仕上げている。501 は叩石である。両面共に敲打痕が確認でき、側縁にも部分的に使用痕が残る。上辺には敲打痕に後出する剥離がみられる。502 は砥石である。砂岩を利用し表裏両面に使用痕が残る。なお、出土地点は柱穴 22 の底部であることから礎石への転用品である可能性もある。この他に滑石製の臼玉 4 点が出土している。503 は直径 3.5mm、孔径 1mm のやや小さめの製品であるが、504、505、506 は直径4.5mm～5mm、孔径 1mm～1.5mmで同規格の製品である。



図Ⅲ –65　石製品



図Ⅲ –66　試掘確認調査出土遺物

第 2 次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層位	器種	法量（cm） 口径	器高	色調 内面	外面	断面	特徴
247	8	土器群 6	甕	(14.4)	(4.9)	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。指頭圧痕。
248	8	土器群 7	甕	-	(3.0)	5YR 7/6 橙	2.5YR 6/6 橙	N 2/0 黒	内外面ナデ。
249	8	土器群 7	甕	(16.4)	(3.6)	5YR 6/6 橙	5YR 7/6 橙	5Y 6/1 灰	内外面ナデ。
250	8	土器群 6	甕	(12.6)	(7.0)	7.5YR 6/2 灰褐	5YR 7/8 橙	7.5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ。
251	8	土器群 7	甕	(15.7)	(3.9)	5YR 7/8 橙	5YR 6/6 橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。
252	8	土器群 2	甕	(18.1)	(3.4)	5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。
253	8	土器群 6	甕	(13.6)	(7.2)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。外面にハケ。
254	8	土器群 7	甕	(11.0)	(3.4)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 7/6 橙	10YR 5/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。
255	8	土器群 4	甕	(14.0)	(7.0)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。
256	8	土器群 5	高坏	-	(10.4)	5YR 6/8 橙	2.5YR 6/8 橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ、指頭圧痕。
257	8	土器群 7	手づくね	7.0	(3.9)	5YR 5/6 明赤褐	5YR 5/4 にぶい赤褐	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
258	8	土器群 7	甕	(16.7)	(9.2)	5YR 8/3 淡橙	5YR 5/8 明赤褐	5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ。胴部外面ハケ。内面に指頭圧痕。
259	8	土器群 2	甕	-	(10.4)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/8 橙	N 7/0 灰白	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
260	8	土器群 1	甕	(17.0)	(8.9)	5YR 7/6 橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
261	10	土器群 8	甕	(13.2)	(3.2)	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 4/1 褐灰	外面にナデ、ハケ、指頭圧痕。
262	10	土器群 8	手づくね	(8.2)	(2.3)	5YR 7/4 にぶい橙	2.5YR 6/6 橙	10YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。
263	10	土器群 8	鉢？	(11.0)	(4.6)	7.5YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	内外面ナデ。
264	10	土器群 8	甕	(17.0)	(4.1)	7.5YR 7/3 にぶい橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。剥落著しい。
265	10	土器群 8	甕	(21.0)	(5.1)	7.5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	2.5YR 7/2 灰黄	内外面ナデ。剥落著しい。
266	10	土器群 8	甕	(19.2)	(8.5)	5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。口縁外面に指頭圧痕。内面にハケ。
267	10	土器群 8	甕	(21.2)	(6.3)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。剥落著しい。
270	12	土器群 10	甕	(12.0)	(4.8)	10YR 8/3 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。剥落著しい。
271	12	土器群 10	甕	(13.2)	(6.0)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/8 黄橙	7.5YR 7/8 黄橙	内外面ナデ。剥落著しい。
272	12	土器群 10	甕	(15.1)	(7.1)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/8 黄橙	7.5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ。剥落著しい。
273	12	土器群 10	鉢	(18.0)	(4.0)	7.5YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 7/6 橙	N 6/0 灰	内外面ナデ。
274	12	土器群 10	甕	-	(9.0)	7.5YR 8/8 黄橙	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/6 黄橙	内外面ナデ。剥落著しい。
275	12	土器群 9	坏蓋	(11.2)	4.2	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
276	12	土器群 9	坏蓋	(13.0)	4.2	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	内外面ナデ。
277	12	土器群 9	坏身	(11.0)	(3.7)	N 6/0 灰	N 5/0 灰	7.5R 4/2 灰赤	内外面ナデ。
278	12	土器群 9	坏身	(10.9)	(3.0)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
279	12	土器群 8	小型壺	(4.4)	7.0	2.5Y 8/1 灰白	5YR 8/3 淡橙	2.5Y 8/4 淡黄	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
280	12	土器群 8	手づくね	-	4.1	5YR 6/6 橙	5YR 6/8 橙	2.5Y 5/2 暗灰黄	内面に指頭圧痕。
281	12	土器群 8	甕	(10.0)	(3.4)	7.5YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/3 浅黄橙	内外面ナデ。剥落著しい。
282	12	土器群 8	高坏	-	(5.3)	5YR 7/8 橙	5YR 7/6 橙	5YR 7/8 橙	内外面ナデ。内面に絞り痕。
283	12	土器群 10	高坏	-	(7.3)	5YR 6/8 橙	5YR 6/8 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。
284	12	土器群 10	高坏	(17.2)	(6.5)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。
293	14	北側サブトレンチ	甕	(17.4)	(3.7)	7.5YR 7/6 橙	5YR 6/6 橙	5Y 5/2 灰オリーブ	内外面ナデ。

表Ⅲ –1　出土遺物観察表 1

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器　種	法量（ｃｍ）		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
294	14	落ち２	甕	(18.0)	(4.6)	5Y 7/1 灰白	5Y 6/1 灰	5Y 6/3 オリーブ黄	内外面ハケ。
295	14	北側サブトレンチ	高坏	-	(6.2)	5YR 6/8 橙	7.5YR 7/6 橙	N 7/0 灰白	内外面ナデ。内面に絞り痕。
296	14	落ち１	底部	-	(3.8)	5YR 7/8 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ、指頭圧痕。
297	15	９層	坏蓋	(11.1)	(2.4)	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
298	15	９層	坏蓋	(11.0)	3.9	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
299	15	９層	坏蓋	(12.4)	(3.6)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
300	15	８～９層	坏蓋	(12.5)	(3.5)	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
301	15	９層	坏蓋	(12.1)	4.7	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
302	15	９層	椀	(12.4)	(4.6)	N 5/0 灰	N 4/0 灰	5R 5/1 赤灰	内外面ナデ。外面に微隆起突帯。
303	15	８層	甕	(16.0)	(18.0)	5Y 6/2 灰オリーブ	5YR 6/6 橙	5Y 5/3 灰オリーブ	内外面ナデ。
306	16	９層	鉢	(12.0)	(3.6)	5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	内外面ナデ。
307	16	９層	甕	(15.6)	(4.5)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 7/6 橙	5Y 6/1 灰	内外面ナデ。
308	16	９層	甕	(18.0)	(3.2)	7.5YR 7/8 黄橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。
309	16	９層	甕	(15.6)	(5.1)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。
310	16	９層	甕	-	(3.2)	10YR 8/3 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。剥落著しい。
311	16	９層	器台	-	(4.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	N 4/0 灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
312	16	９層	手づくね	3.0	1.8	5YR 7/8 橙	5YR 7/6 橙	10YR 6/3 にぶい黄橙	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
313	16	９層	甕	(15.6)	(9.3)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。剥落著しい。
314	16	９層	壺	-	(2.4)	5YR 8/4 淡橙	5YR 8/4 淡橙	N 7/0 灰白	外面ナデ。底面に木葉文。
315	16	９層	高坏	-	(6.9)	5YR 7/8 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
316	16	９層	高坏	-	(6.1)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
317	17	10 層	坏蓋	-	(1.8)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	5GY 5/1 オリーブ灰	内外面ナデ。
318	17	包含層下部	坏蓋	12.4	4.7	N 6/0 灰	N 6/0 灰	―	内外面ナデ。
319	17	包含層下部	坏蓋	12.5	4.8	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
320	17	包含層下部	坏身	10.8	4.9	N 6/0 灰	N 6/0 灰	10 R 6/2 灰赤	内外面ナデ。
321	17	包含層下部	無蓋高杯	-	(5.7)	7.5Y 7/1 灰白	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	外面に波状文。
322	17	12 層	壺	(12.5)	(2.0)	5YR 6/ 4 にぶい橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。剥落著しい。
323	17	10 層	壺	-	(2.3)	10YR 3/3 明褐	2.5YR 5/8 明赤褐	2.5YR 5/8 明赤褐	外面ナデ。内面剥落。
324	17	12 層	甕	(13.1)	(4.6)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。
325	17	10 層	甕	16.2	(4.4)	5YR 6/8 橙	5YR 5/6 明赤褐	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。
326	17	10 層	甕	(12.0)	(7.0)	7.5YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 7/4 にぶい橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
327	17	包含層下部	底部	-	(2.0)	2.5YR 4/1 赤灰	10R 6/2 灰赤	5YR 3/1 黒褐	内外面ナデ。剥落著しい。
328	17	11～12 層	器台	-	(3.2)	2.5YR 6/6 橙	5YR 6/4 にぶい橙	5YR 5/1 褐灰	内外面ナデ、指頭圧痕。
329	17	10 層	甕	(10.4)	17.9	5YR 6/6 橙	5YR 7/8 橙	7.5Y 7/1 灰白	内面ハケ。外面剥落。
330	8	10～11 層	高坏	-	(5.0)	5YR 4/4 にぶい赤褐	5YR 5/6 明赤褐	10YR 6/1 褐灰	内外面ナデ。
331	17	11～12 層	高坏	-	(3.0)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 7/8 黄橙	7.5Y 5/2 灰オリーブ	内外面ナデ。
332	17	包含層下部	高坏	-	(5.2)	5YR 6/8 橙	2.5YR 7/3 淡赤橙	5YR 6/8 橙	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。内面に絞り痕。
333	17	11～12 層	高坏	-	(5.9)	5YR 6/8 橙	7.5YR 5/8 明褐	7.5YR 5/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕、絞り痕。

表Ⅲ –2　出土遺物観察表２

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器　種	法量（cm）		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
334	17	12 層	高坏	-	(6.7)	5YR 7/8 橙	5YR 6/6 橙	5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
335	17	包含層下部	高坏	-	(5.1)	5YR 6/6 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/1 明褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
336	17	10 層	鉢	15.2	7.9	5YR 5/8 明赤褐	2.5YR 6/8 橙	―	外面ナデ。内面剥落。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　種	法　量 (mm/g)				石　材	特　徴
				最大長	最大幅	最大厚	重量		
268	10	土器群 8	臼玉	5.5	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。
269	10	土器群 8	叩石	117.0	86.0	59.0	730	砂岩	主面中央に敲打痕。
285	12	土器群 8	砥石	202.0	134.0	26.0	900	砂岩	主面中央に敲打痕。背面と側面に擦痕。
286	13	土坑 1 付近	臼玉	4.0	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。
287	13	土坑 1 付近	臼玉	4.0	-	2.0	-	滑石	擦痕。
288	13	土坑 1 付近	臼玉	4.0	-	2.0	-	滑石	欠損品
289	13	土坑 1 付近	臼玉	4.0	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。
290	13	土坑 1 付近	臼玉	4.5	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。
291	13	土坑 1 付近	臼玉	3.5	-	2.0	-	滑石	擦痕。
292	13	土坑 1 付近	臼玉	(3)	-	(2)	-	滑石	欠損品擦痕。
304	15	9 層	砥石	53.0	37.5	28.0	77.9	花崗岩	擦痕。
305	15	8 層	砥石	212.0	104.0	35.0	1000	不明	片面に擦痕。

第 4 次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器種	法量（cm）		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
337	20	8 層	染付椀	(10.0)	(4.1)	N 8/0 灰白	N 8/0 灰白	N 8/0 灰白	肥前産　くらわんか手 虫篭文
338	20	8 層	染付椀	(12.1)	(4.2)	N 8/0 灰白	N 8/0 灰白	N 8/0 灰白	肥前産　くらわんか手 丸文
339	20	8 層	甕	(20.0)	(5.4)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
340	22	土坑 1	甕？	-	(3.7)	N 5/0 灰	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。頸部に波状文。
341	22	土坑 1	甕？	-	(3.6)	N 5/0 灰	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。頸部に波状文。
342	22	土坑 1	壺・甕	-	(6.2)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に波状文。
343	22	土坑 1	甑	-	(4.8)	2.5YR 6/6 橙	5YR 5/4 にぶい赤褐	7.5YR 5/1 褐灰	内外面板状工具によるナデ。孔の部分に工具痕。
344	22	土坑 1	甕	(13.0)	(3.6)	7.5YR 8/2 灰白	5YR 7/4 にぶい橙	N 5/0 灰	内外面ナデ。
345	22	土坑 1	甕	(17.2)	(5.3)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 6/8 橙	7.5Y 5/1 灰	内外面ナデ。
346	22	土坑 1	高坏	-	(5.4)	7.5YR 6/6 橙	5YR 7/8 橙	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。指頭圧痕。
347	22	土坑 1	高坏	-	(7.9)	10YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	7.5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。
350	25	竪穴住居 1	甕	(14.2)	(2.8)	5YR 5/8 明赤褐	10YR 5/3 にぶい黄橙	5YR 5/8 明赤褐	内外面剥落。
351	25	竪穴住居 1	椀	(15.2)	(5.6)	2.5Y 8/2 灰白	2.5Y 8/3 淡黄	2.5Y 8/3 淡黄	
352	25	竪穴住居 1	高坏	(16.9)	(5.0)	7.5YR 7/6 橙	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 7/3 にぶい黄橙	内面板状工具によるナデ。
353	25	竪穴住居 1	甕	(9.8)	(6.8)	5Y 4/1 灰	5Y 5/1 灰	5Y 5/1 灰	内外面ナデ。
354	26	土坑 2	壺	(12.2)	(4.0)	2.5Y 5/2 暗灰黄	10YR 6/3 にぶい黄橙	5Y 4/1 灰	内外面ナデ。
355	26	土坑 2	無蓋高杯	(14.7)	(4.6)	2.5Y 6/2 灰黄	2.5Y 6/1 黄灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に微隆起突帯 2 条、波状文。
356	31	土器群 1	甕	(14.6)	(4.2)	7.5YR 5/4 にぶい褐	5YR 6/6 橙	5Y 5/1 灰	口縁外部に微隆起突帯。波状文。
357	31	土器群 3	甕	(16.0)	(3.9)	10YR 8/1 灰白	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 8/1 灰白	外面指頭圧痕。
358	31	土器群 2	甕	(17.0)	(5.8)	7.5YR 6/1 褐灰	5YR 6/6 橙	7.5YR 5/1 褐灰	内外面剥落。
359	31	土器群 1	甕	(21.0)	(2.0)	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ハケ。

表Ⅲ –3　出土遺物観察表 3

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量（ｃｍ）		色　　調			特　　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
360	31	土器群３	手づくね	3.15	3.45	N 4/0 灰	N 4/0 灰	5Y 6/2 灰オリーブ	内外面指頭圧痕。
361	31	土器群３	手づくね	-	3.1	5YR 7/6 橙	5YR 7/8 橙	5Y 8/1 灰白	内面指頭圧痕。
362	31	土器群２	甕	(16.5)	(4.9)	10YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。
364	34	土器群４	甕	(24.0)	(5.1)	5YR 7/4 にぶい橙	10R 6/2 灰赤	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。口縁外部に微隆起突帯２条。
365	34	土器群４	甕	(32.6)	(8.3)	N 7/0 灰白	N 4/0 灰	N 7/0 灰白	外面板状工具によるナデ。内面ナデ、指頭圧痕。
366	34	土器群４	壺・鼎	-	(10.1)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に波状文。内面に指頭圧痕。
367	34	土器群４	甕	19.0	26.5	N 4/0 灰	N 5/0 灰	5YR 5/3 にぶい赤褐	波状文。内面に自然釉。
368	35	土器群４	坏蓋	(11.6)	4.5	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
369	35	土器群４	坏蓋	(11.8)	(4.8)	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	内外面ナデ、指頭圧痕。内面に絞り痕。
370	35	土器群４	壺・鼎	(10.2)	(2.4)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。頸部・胴部に波状文。
371	35	土器群４	壺・鼎	-	(5.1)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
372	35	土器群４	甕	-	(3.8)	7.5YR 7/6 橙	2.5YR 6/8 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
373	35	土器群４	甕	(15.0)	(4.6)	5YR 7/6 橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。外面に微隆起突帯。
374	35	土器群４	甕	(14.4)	(4.7)	10YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/8 橙	10YR 8/3 浅黄橙	内外面ナデ。
375	35	土器群４	甕	(14.2)	(6.7)	10YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/6 橙	10YR 8/4 浅黄橙	外面ナデ。
376	35	土器群４	甕	(14.8)	(7.8)	7.5YR 5/4 にぶい褐	7.5YR 4/6 褐	N 8/0 灰白	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
377	40	土器群５	甕	(12.2)	(4.8)	5YR 6/8 橙	7.5YR 6/6 橙	5Y 6/2 灰オリーブ	貼付口縁。内外面ナデ。
378	40	土器群６	甕	(14.0)	(5.2)	7.5YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/1 灰白	10YR 8/1 灰白	内外面ナデ。
379	40	土器群６	坏蓋	12.8	4.8	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。
380	40	土器群６	坏身	11.1	4.8	N 6/0 灰	N 6/0 灰	5R 4/1 暗赤灰	内外面ナデ。
381	40	土器群８	手づくね	7.3	8.8	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	N 8/0 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。
382	40	土器群８	鉢	13.0	6.3	10YR 6/6 明黄褐	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	外面ナデ、指頭圧痕。
383	40	土器群８	甕	(17.2)	(3.8)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	外面ナデ、指頭圧痕。内面指頭圧痕。
384	40	土器群７	甕	(16.0)	(5.6)	10YR 6/2 灰黄褐	5YR 6/6 橙	10YR 6/2 灰黄褐	内外面ナデ。指頭圧痕。
385	40	土器群７	高坏	15.7	13.4	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/6 橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。指頭圧痕。脚部に絞り痕。
386	42	土器群９	甕	(13.8)	(6.0)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。
387	42	土器群９	手づくね	2.8	3.7	7.5YR 7/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
388	42	土器群９	手づくね	(6.0)	(7.1)	5YR 6/6 橙	2.5YR 6/6 橙	2.5Y 5/1 黄灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
389	42	土器群９	高坏	-	(8.3)	5YR 7/8 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/3 にぶい橙	波状文。胴部叩目。
390	42	土器群９	高坏	-	(6.9)	7.5YR 7/8 黄橙	5YR 6/8 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。内面に絞り痕痕。
391	42	土器群９	坏蓋	12.7	4.4	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	内外面ナデ。
392	42	土器群９	坏身	(10.6)	4.9	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	内外面ナデ。
393	42	土器群９	鼎	-	(10.7)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	内外面ナデ。頸部・体部に波状文
394	42	土器群９	鼎	11.9	18.4	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/2 灰黄褐	波状文、沈線２条、羽状文。
395	42	土器群９	甕	(20.4)	(6.6)	N 5/0 灰	N 4/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。外面に波状文２条。
396	42	土器群９	高坏	-	12.4	N 6/0 灰	5Y 7/1 灰白	N 7/0 灰白	頸部と胴部に波状文。内外部ナデ。
398	44	土器群 10	坏蓋	(11.8)	4.2	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
399	44	土器群 10	坏蓋	(12.1)	3.5	N 6/0 灰	10R 5/3 赤褐	N 5/0 灰	内外面ナデ。

表Ⅲ –4　出土遺物観察表４

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量（cm）		色　調			特　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
360	31	土器群 3	手づくね	3.15	3.45	N 4/0 灰	N 4/0 灰	5Y 6/2 灰オリーブ	内外面指頭圧痕。
361	31	土器群 3	手づくね	-	3.1	5YR 7/6 橙	5YR 7/8 橙	5Y 8/1 灰白	内面指頭圧痕。
362	31	土器群 2	甕	(16.5)	(4.9)	10YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。
364	34	土器群 4	甕	(24.0)	(5.1)	5YR 7/4 にぶい橙	10R 6/2 灰赤	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。口縁外部に微隆起突帯２条。
365	34	土器群 4	甕	(32.6)	(8.3)	N 7/0 灰白	N 4/0 灰	N 7/0 灰白	外面板状工具によるナデ。内面ナデ、指頭圧痕。
366	34	土器群 4	壺・甕	-	(10.1)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に波状文。内面に指頭圧痕。
367	34	土器群 4	甕	19.0	26.5	N 4/0 灰	N 5/0 灰	5YR 5/3 にぶい赤褐	波状文。内面に自然釉。
368	35	土器群 4	坏蓋	(11.6)	4.5	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
369	35	土器群 4	坏蓋	(11.8)	(4.8)	N 5/0 灰	N 5/0 灰	N 5/0 灰	内外面ナデ、指頭圧痕。内面に絞り痕。
370	35	土器群 4	壺・甕	(10.2)	(2.4)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。頸部・胴部に波状文。
371	35	土器群 4	壺・甕	-	(5.1)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
372	35	土器群 4	甕	-	(3.8)	7.5YR 7/6 橙	2.5YR 6/8 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
373	35	土器群 4	甕	(15.0)	(4.6)	5YR 7/6 橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。外面に微隆起突帯。
374	35	土器群 4	甕	(14.4)	(4.7)	10YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/8 橙	10YR 8/3 浅黄橙	内外面ナデ。
375	35	土器群 4	甕	(14.2)	(6.7)	10YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/6 橙	10YR 8/4 浅黄橙	外面ナデ。
376	35	土器群 4	甕	(14.8)	(7.8)	7.5YR 5/4 にぶい褐	7.5YR 4/6 褐	N 8/0 灰白	外面ナデ。内面に指頭圧痕。
377	40	土器群 5	甕	(12.2)	(4.8)	5YR 6/8 橙	7.5YR 6/6 橙	5Y 6/2 灰オリーブ	貼付口縁。内外面ナデ。
378	40	土器群 6	甕	(14.0)	(5.2)	7.5YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/1 灰白	10YR 8/1 灰白	内外面ナデ。
379	40	土器群 6	坏蓋	12.8	4.8	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。
380	40	土器群 6	坏身	11.1	4.8	N 6/0 灰	N 6/0 灰	5R 4/1 暗赤灰	内外面ナデ。
381	40	土器群 8	手づくね	7.3	8.8	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	N 8/0 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。
382	40	土器群 8	鉢	13.0	6.3	10YR 6/6 明黄褐	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	外面ナデ、指頭圧痕。
383	40	土器群 8	甕	(17.2)	(3.8)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	外面ナデ、指頭圧痕。内面指頭圧痕。
384	40	土器群 7	甕	(16.0)	(5.6)	10YR 6/2 灰黄褐	5YR 6/6 橙	10YR 6/2 灰黄褐	内外面ナデ。指頭圧痕。
385	40	土器群 7	高坏	15.7	13.4	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/6 橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。指頭圧痕。脚部に絞り痕。
386	42	土器群 9	甕	(13.8)	(6.0)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ、指頭圧痕。
387	42	土器群 9	手づくね	2.8	3.7	7.5YR 7/6 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
388	42	土器群 9	手づくね	(6.0)	(7.1)	5YR 6/6 橙	2.5YR 6/6 橙	2.5Y 5/1 黄灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
389	42	土器群 9	高坏	-	(8.3)	5YR 7/8 橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/3 にぶい橙	波状文。胴部叩目。
390	42	土器群 9	高坏	-	(6.9)	7.5YR 7/8 黄橙	5YR 6/8 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。内面に絞り痕痕。
391	42	土器群 9	坏蓋	12.7	4.4	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	内外面ナデ。
392	42	土器群 9	坏身	(10.6)	4.9	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	内外面ナデ。
393	42	土器群 9	甕	-	(10.7)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	内外面ナデ。頸部・体部に波状文
394	42	土器群 9	甕	11.9	18.4	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/1 褐灰	10YR 6/2 灰黄褐	波状文、沈線２条、羽状文。
395	42	土器群 9	甕	(20.4)	(6.6)	N 5/0 灰	N 4/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。外面に波状文２条。
396	42	土器群 9	高坏	-	12.4	N 6/0 灰	5Y 7/1 灰白	N 7/0 灰白	頸部と胴部に波状文。内外部ナデ。
398	44	土器群 10	坏蓋	(11.8)	4.2	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
399	44	土器群 10	坏蓋	(12.1)	3.5	N 6/0 灰	10R 5/3 赤褐	N 5/0 灰	内外面ナデ。

表Ⅲ –5　出土遺物観察表 5

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (c m) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　　徴
438	46	8 層 中層	甕	(21.0)	(4.7)	7.5YR 7/4 にぶい橙	5YR 7/4 にぶい橙	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。
439	46	包含層	甕	(18.0)	(5.7)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
440	46	検出面	甑	-	(11.5)	5YR 6/8 橙	5YR 7/6 橙	10Y 4/1 灰	内外面ナデ。指頭圧痕。
441	46	包含層	甕	(24.6)	(7.9)	5YR 6/4 にぶい橙	10YR 6/2 灰黄褐	2.5Y 5/ 黄灰	内外面ナデ。
442	46	包含層	甕	(15.0)	(15.3)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	内外面ナデ。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　　種	法　量 (mm/g) 最大長	最大幅	厚さ	重量	石　材	特　　徴
348	22	土坑 1	叩石	139.0	62.0	46.0	590	砂岩	両面中央部に敲打痕。
349	22	土坑 1	叩石	117.0	74.0	57.0	620	砂岩	中央部に敲打痕。
363	31	土器群 1	叩石	104.0	84.5	48.0	560	凝灰岩	中央、側面一部に敲打痕。
397	42	土器群 9	叩石	106.0	104.5	45.0	800	凝灰岩	中央、側面に敲打痕。
443	47	検出面	磨製石斧欠損品	95.5	63.0	15.0	125.5	不明	両面剥離。刃部に研磨痕。
444	47	9 層中層	臼玉	4.0	-	3.0	-	滑石	擦痕。
445	47	検出面	叩石	100.0	72.0	58.0	600	砂岩	両中央、側面に敲打痕。
446	47	9 層下層	叩石	106.0	63.0	45.0	520	砂岩	中央・側面の一部に敲打痕。
447	48	包含層	二次加工のある剥片	49.0	30.0	9.5	9.6	サヌカイト？	
448	48	包含層	砥石	99.0	57.0	16.0	156.5	砂岩	

第 6 次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (cm) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　　徴
449	54	土坑 1	有蓋高杯	11.1	(8.2)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	
450	54	落ち 1	甕	(12.0)	(3.8)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	5Y 6/1 灰	内外面ナデ。
451	54	土坑 3	器台	-	(3.0)	10YR 6/1 灰	7.5YR 6/6 橙	10YR 6/1 褐灰	外面ナデ。内面板状工具によるナデ。
452	54	土坑 2	壺	-	(6.0)	7.5YR 7/3 にぶい橙	5YR 7/2 明褐灰	N 4/0 灰	内外面ナデ。
453	54	土坑 2	長頸壺	(15.5)	(30.9)	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	2.5Y 5/1 黄灰	口縁部刻目。櫛描文。浮文、沈線、内面ナデ。
454	54	土坑 2	甕	(31)	(15.5)	5YR 7/3 にぶい橙	N 5/0 灰	N 5/0 灰	口縁部刻目。内外面ナデ。
456	61	溝 1	壺	(14)	(2.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	5YR 7/4 にぶい橙	N 6/0 灰	内外面ナデ。
457	61	各層位	甕	(13.6)	(3.4)	5Y 6/1 灰	7.5YR 7/4 にぶい橙	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
458	61	各層位	甕	(14.8)	(3.8)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ。
459	61	落ち 1	坏蓋	(12.8)	4.35	N 7/0 灰白	N 4/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
460	61	柱穴 1	高坏脚部	-	(2.45)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
461	61	落ち 1	甕	-	(1.6)	10YR 6/4 にぶい黄橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	内外面ナデ。
462	61	8 層	甕	(12.5)	(3.15)	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	5YR 7/4 にぶい橙	内外面ナデ。外面に指頭圧痕、工具痕。
463	61	8 層	甕	(15.6)	(3.75)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	10YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。
464	61	溝 2	甕	(13.4)	(8.0)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	N 5/0 灰	
465	61	溝 2	椀	-	(4.2)	5YR 6/6 橙	5YR 6/4 にぶい橙	10YR 5/2 灰黄褐	内外面ナデ。
466	61	溝 2	底部	-	(5.4)	10YR 5/3 にぶい黄褐	7.5YR 7/4 にぶい橙	N 4/0 灰	内外面ナデ。
467	61	溝 2	甕	-	(6.6)	2.5Y 5/2 暗灰黄	7.5YR 6/6 橙	N 5/0 灰	内外面ナデ。
468	61	溝 2	甕	(18.9)	(19.9)	10YR 5/3 にぶい黄褐	7.5YR 6/6 橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ。

表Ⅲ –6　出土遺物観察表 6

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量 (cm) 口径	器高	色　調 内　面	外　面	断　面	特　徴
469	62	7 層	坏身	-	(2.3)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。
470	62	7 層	坏身	(14.2)	(2.6)	N 6/0 灰	N 6/0 灰	N 5/0 灰	内外面ナデ。
471	62	7 ～ 8 層	坏蓋	(12.0)	(2.7)	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
472	62	7 ～ 8 層	坏蓋	(12.0)	(3.7)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。。
473	62	7 ～ 8 層	甕	(20.8)	(1.9)	N 6/0 灰	N 5/0 灰	N 6/0 灰	内外面ナデ。波状文。
474	62	7 ～ 8 層	甕	(21.8)	(2.7)	N 7/0 灰白	N 5/0 灰	10R 6/2 灰赤	内外面ナデ。口縁外部に微隆起突帯。
475	62	7 ～ 9 層	坏蓋	(12.0)	4.7	N 7/0 灰白	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	内外面ナデ。
476	62	9 ～ 10 層	椀	10.1	6.5	N 6/0 灰	N 6/0 灰	5R 6/1 赤灰	外面に微隆起突帯、波状文。内外面ナデ。
477	62	7 ～ 8 層	高坏	(16.4)	(5.3)	N 5/0 灰	N 4/0 灰	5R 5/1 赤灰	内外面ナデ。外面に波状文。
478	62	9 ～ 10 層	甕	17.4	(8.6)	N 5/0 灰	N 3/0 暗灰	10R 5/3 赤褐	口縁外部に微隆起突帯。胴部外面叩目。内面ナデ、指頭圧痕。
479	62	9 ～ 10 層	甕	(7.8)	10.4	N 6/0 灰	5RP 6/1 紫灰	5RP 6/1 紫灰	口縁外部に微隆起突帯。頸部に波状文。内面に指頭圧痕。
480	63	7 ～ 8 層	小型甕	(15.2)	(1.4)	5Y 5/1 灰	10YR 7/4 にぶい黄橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。
481	63	7 ～ 8 層	甕	(14.9)	(1.2)	7.5YR 7/2 明褐灰	7.5YR 7/4 にぶい橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ。口縁外部に刻目？
482	63	落ち 1	甕	(11.0)	(3.8)	7.5YR 8/4 浅黄橙	5YR 7/3 にぶい橙	N 3/0 暗灰	内外面ナデ。外面に指頭圧痕。
483	63	7 ～ 8 層	底部	-	(2.1)	10YR 6/1 褐灰	10YR 7/1 灰白	5Y 4/1 灰	内外面ナデ。
484	63	9 ～ 10 層	手づくね	4.2	4.9	5YR 6/3 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	―	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
485	63	7 ～ 9 層	甕	(15.7)	(3.45)	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	5Y 6/1 灰	内外面ナデ。内面に工具痕。
486	63	7 ～ 9 層	甕	(13.5)	(4.65)	7.5YR 7/3 にぶい橙	5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/3 にぶい橙	内外面ナデ。胴部内面に粘土帯継ぎ目。
487	63	7 ～ 9 層	甕	(18.0)	(3.35)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 6/2 灰黄	5Y 5/1 灰	内外面ナデ。
488	63	7 ～ 8 層	高坏	-	(5.3)	5YR 6/6 橙	5YR 5/4 にぶい赤褐	N 4/0 灰	内外面ナデ。
489	63	7 ～ 9 層	高坏	(18.2)	(5.8)	5YR 7/1 橙	5YR 7/1 橙	5Y 7/1 灰白	内外面ナデ。
490	63	7 ～ 9 層	高坏	-	(6.35)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/6 橙	10YR 5/1 褐灰	外面ナデ。内面板状工具によるナデ。
491	63	7 ～ 8 層	高坏	-	(2.8)	5Y 5/1 灰	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	内外面ナデ。
492	63	7 ～ 9 層	甕	-	(2.5)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	2.5Y 5/1 黄灰	内外面ナデ。
493	63	7 ～ 9 層	甕	(16.8)	(4.2)	7.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	5Y 5/1 灰	内外面ナデ、指頭圧痕。
494	63	7 ～ 8 層	器台	-	(3.55)	5YR 7/4 にぶい橙	5YR 6/6 橙	7.5Y 5/1 灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。外面に工具痕
495	63	9 ～ 10 層	椀	16.0	5.8	7.5YR 7/3 にぶい橙	7.5YR 6/6 橙	N 6/0 灰	内外面ナデ。
496	63	7 ～ 9 層	高坏	-	(5.4)	5YR 6/6 橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	10YR 5/4 にぶい黄褐	内外面ナデ。内面に絞り痕。
497	63	9 ～ 10 層	高坏	-	(4.95)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/6 橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
498	63	7 ～ 8 層	高坏	-	(7.0)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
499	63	7 ～ 9 層	高坏		(7.4)	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
500	63	7 ～ 9 層	高坏	-	(6.7)	5YR 5/8 明赤褐	5YR 5/6 明赤褐	7.5YR 7/4 にぶい橙	内外面ナデ、指頭圧痕。外面に工具痕。

表Ⅲ –7　出土遺物観察表 7

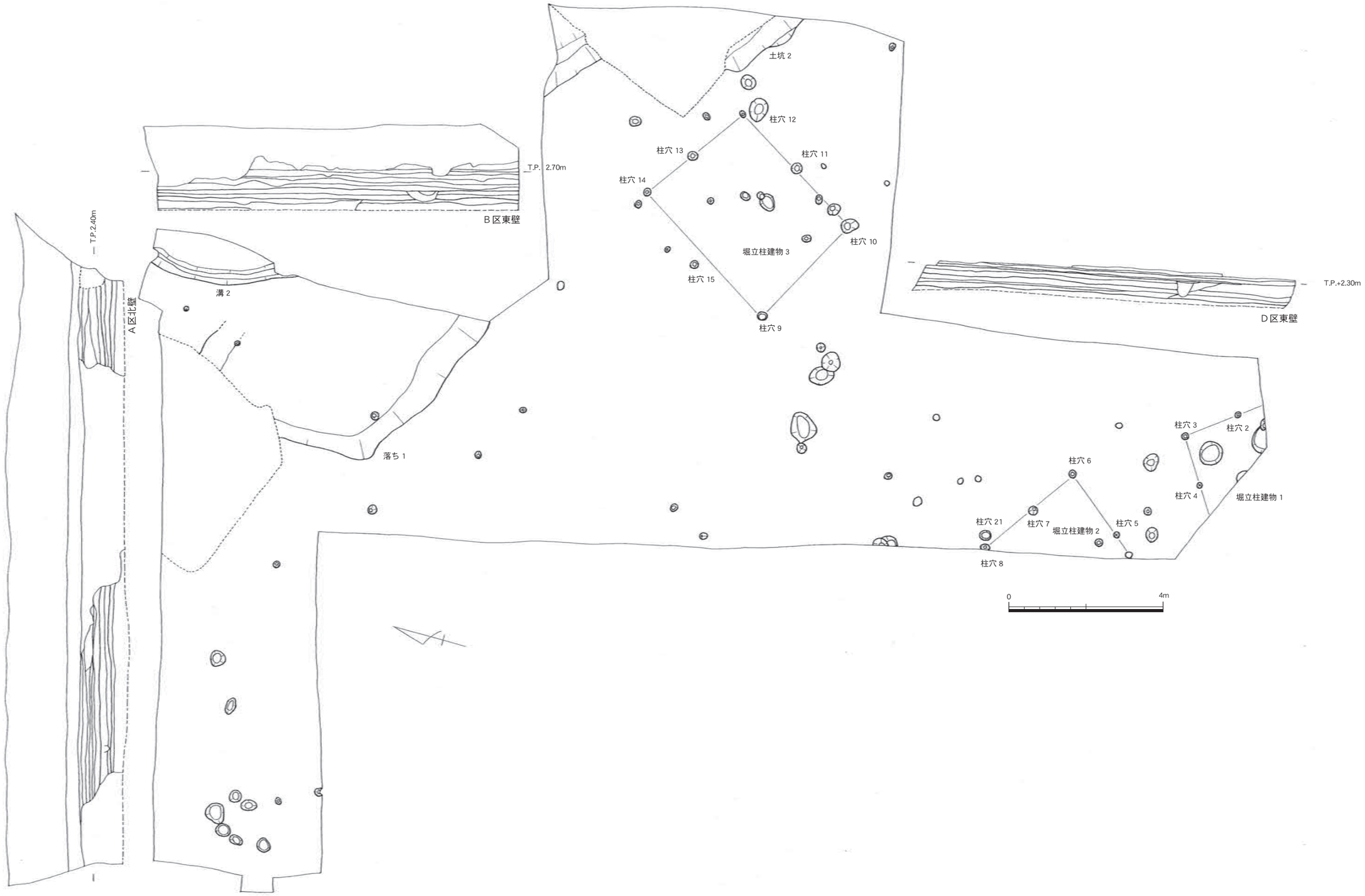
図番号	図版番号	出土地点・層位	器　　種	法　量 (mm/g)				石　材	特　　徴
				最大長	最大幅	厚さ	重量		
455	54	土坑 2	石包丁	44.0	98.0	7.0	52.1	不明	穴に穿孔痕。刃部に研磨痕。
501	64	7 ～ 8 層	叩石	169.0	67.0	49.0	760	砂岩	両主面中央部、側面一部に敲打痕。
502	64	柱穴 22	砥石	201.0	234.0	27.0	2000	砂岩	両主面に擦痕。一方の主面一部に敲打痕。
503	65	7 ～ 8 層	臼玉	3.5	-	29.0	-	滑石	擦痕。
504	65	7 層	臼玉	5.0	-	3.0	0.1	滑石	擦痕。
505	65	7 ～ 8 層	臼玉	4.5	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。
506	65	柱穴 19	臼玉	5.0	-	2.0	0.1	滑石	擦痕。

第 6 次調査　試掘遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器種	法量 (cm)		色　　調			特徴
				口径	器高	内面	外面	断面	
507	66	Tr-2　4 層	高坏	16.5	(6.6)	5YR 6/6 橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/6 橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
508	66	Tr-1　4 ～ 5 層	高坏	(20.0)	(8.05)	5YR 6/8 橙	5YR 6/6 橙	N 6/0 灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
509	66	Tr-4　9 層	手づくね	3.0	3.6	2.5YR 6/6 橙	5YR 6/6 橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	内外面ナデ、指頭圧痕。
510	66	Tr-4　4 層	手づくね	-	(4.2)	2.5YR 6/6 橙	5YR 6/8 橙	10YR 5/2 灰黄褐	内外面ナデ、指頭圧痕。
511	66	Tr-1　4 ～ 5 層	甕	(21.0)	(2.5)	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。外面に波状文。
512	66	Tr-1　4 ～ 5 層	坏蓋	(10.5)	(3.8)	N 6/0 灰	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	内外面ナデ。ケズリ。
513	66	Tr-2　4 層	甕	9.1	10.1	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	N 7/0 灰白	頸部下方に波状文。胴部に羽状文。
514	66	Tr-3　7 ～ 9 層	高坏	-	(6.4)	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	内外面ナデ。
515	66	Tr-4　9 層	高坏	-	(7.3)	5YR 7/6 橙	2.5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。
516	66	Tr-3　10 層	壺	(14.6)	(4.3)	N 6/0 灰	5YR 8/3 淡橙	N 6/0 灰	内外面ナデ。口縁外部に刻目。

表Ⅲ –8　出土遺物観察表 8

図Ⅲ –67　第６次調査遺構平面図（９層）



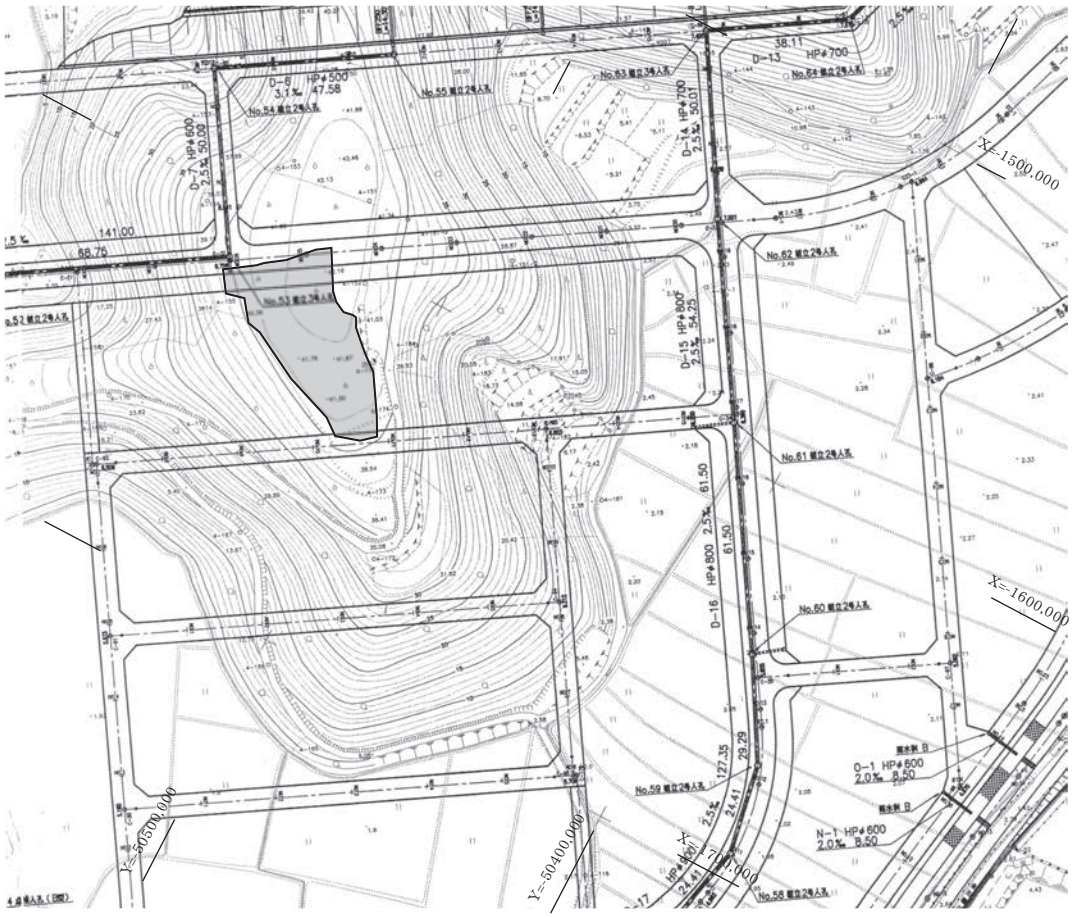
図Ⅲ –68　第６次調査遺構平面図（10層）

第Ⅳ章　東ナルザキ地区の調査

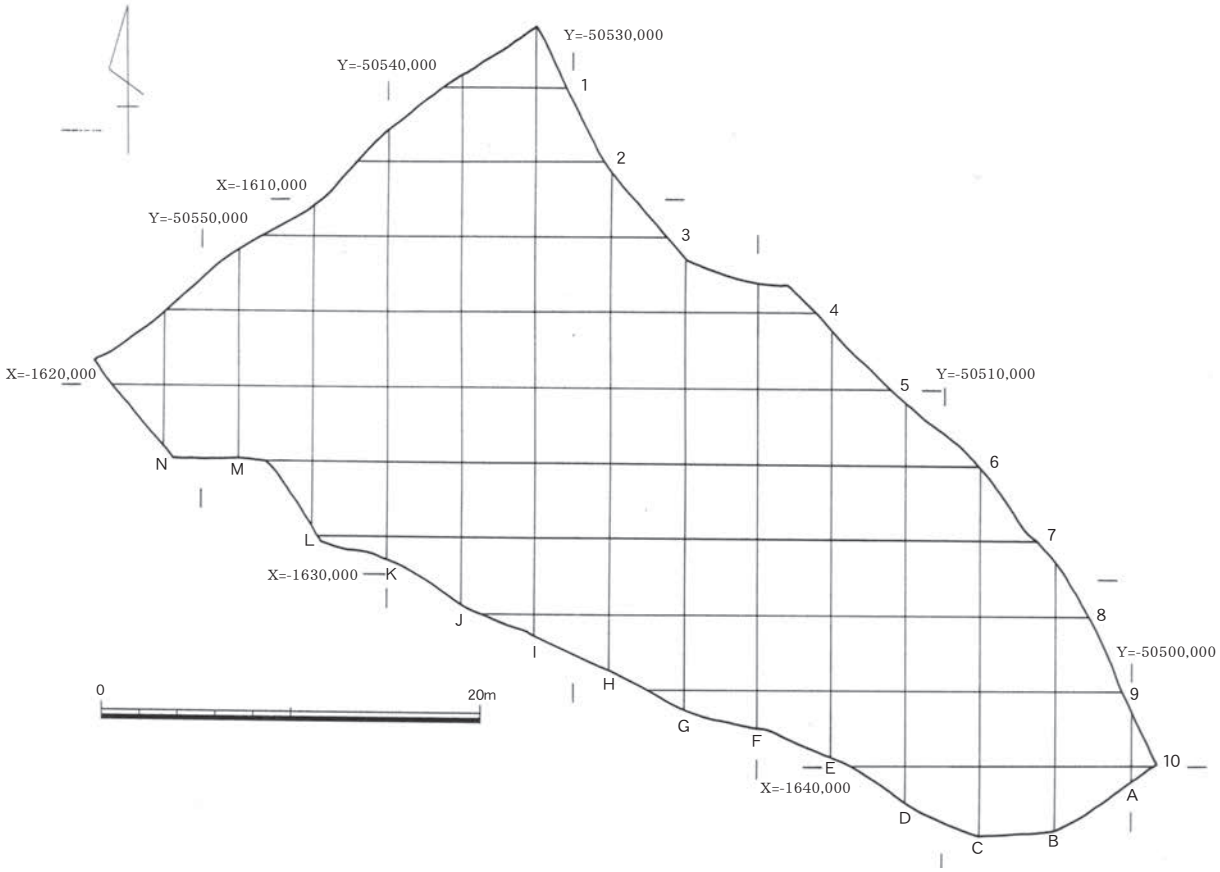
Ⅳ-1　調査に至る経緯と経過

1.　調査に至る経緯と経過

古津賀土地区画整理組合は古津賀地区の区画整理事業に伴い、古津賀東ナルザキの丘陵部分について切土、造成工事を計画していた。当該地点は周知の埋蔵文化財包蔵地古津賀遺跡群の範疇にあるため、四万十市教育委員会は工事に先立ってカドノハナ地区及び東ナルザキ地区について平成11年度に試掘確認調査を実施した。試掘確認調査の結果東ナルザキ丘陵頂上部に良好な遺構・遺物が残存していることが明らかとなったため、古津賀土地区画整理組合との協議を経て工事において損壊を受ける 1,500m² を対象に平成 12 年 4 月 10 日から同年 7 月 26 日にかけて本発掘調査を実施するはこびとなった。なお、現地調査時には調査成果を広く周知・活用す



図Ⅳ –1　第 3 次調査地点位置図



図Ⅳ –2　第 3 次調査グリッド設定図

るために 7 月 21 日に記者発表を行い、同月 23 日に現地説明会を実施した。

2.　調査の方法

各調査では調査区を国土座標の傾きにあわせたグリッドを設定し、遺物の取上げ及び測量等の基準とした。第 3 次調査のグリッドは公共座標の傾きにあわせて 4m の正方形を設定した。このグリッドの境界線に対して北から南に向かって1～10、東から西に向かってA～Nの呼称を割り当て、各境界線の北西隅の交点をそのグリッドの名称とした。各グリッドの名称と国土座標との関係は図 Ⅳ-2 のとおりである。

発掘調査は重機による機械掘削の後に人力によって遺物包含層を掘削し、必要に応じて遺構の精査を行った。出土した遺物・遺構についてはその都度写真撮影および図面の作成を行い記録にとどめた。調査区内の層位の堆積状況は必要箇所の壁面において観察し、その関係を記録した。

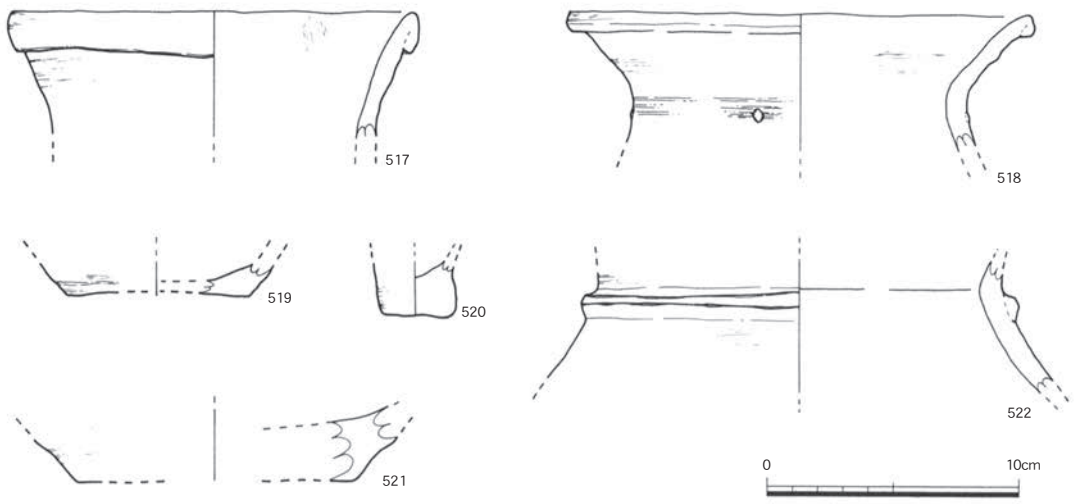
図Ⅳ –3　第３次調査北壁土層断面図

Ⅳ-2　第 3 次調査の成果

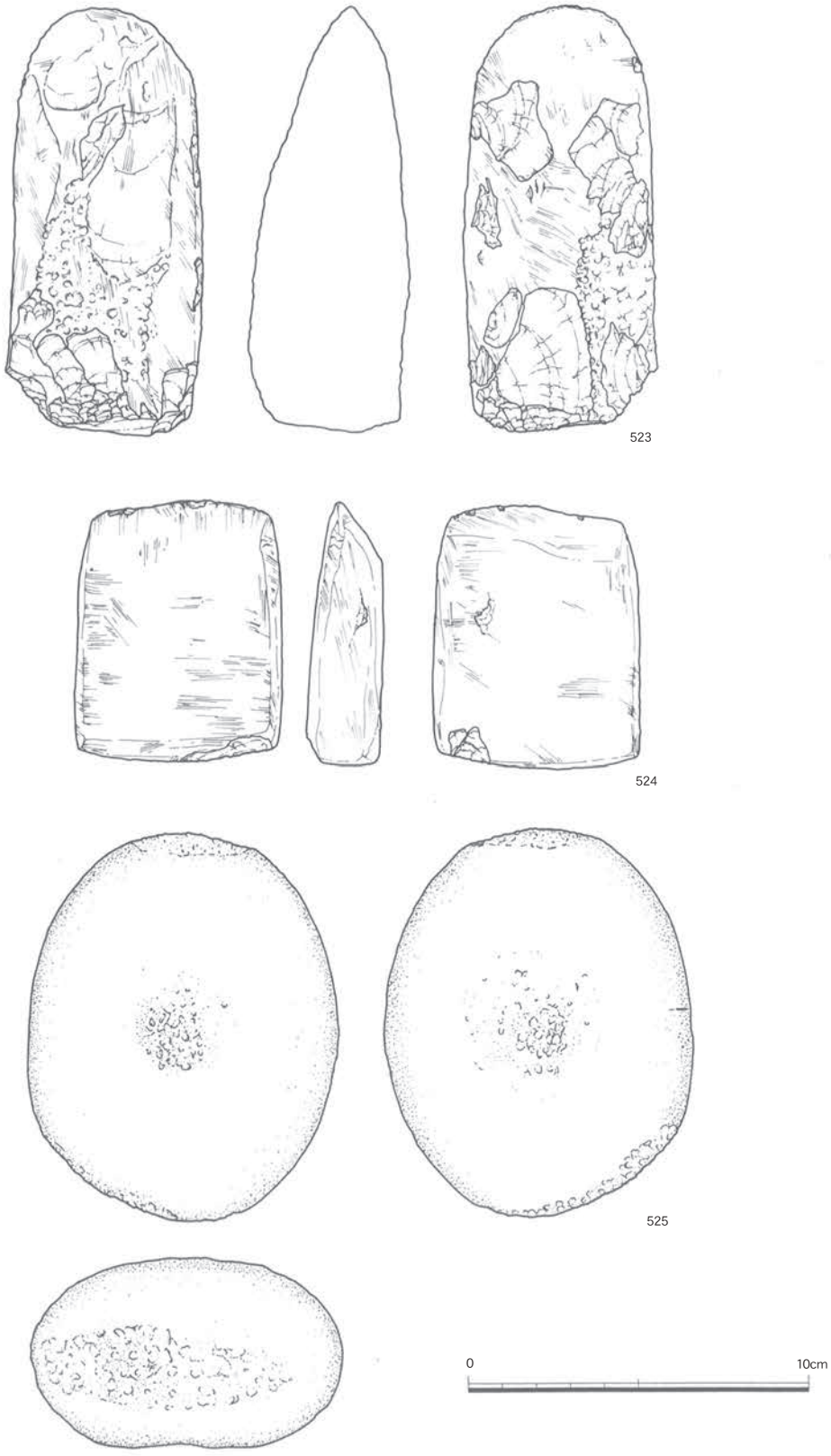
1.　試掘確認調査

平成 11 年 11 月 24 日から平成 12 年 1 月 8 日にかけてカドノハナ・東ナルザキ地区合計 7,000m² について国庫補助事業の一環として試掘確認調査を実施した。現地は近年まで畑地として利用されていたが、丘陵上であり堆積自体は浅く、基盤層までの深さは 20cm～50cm 程度である。丘陵上であるため斜面堆積の状況がわかるよう長めのトレンチを 10 箇所設定した。

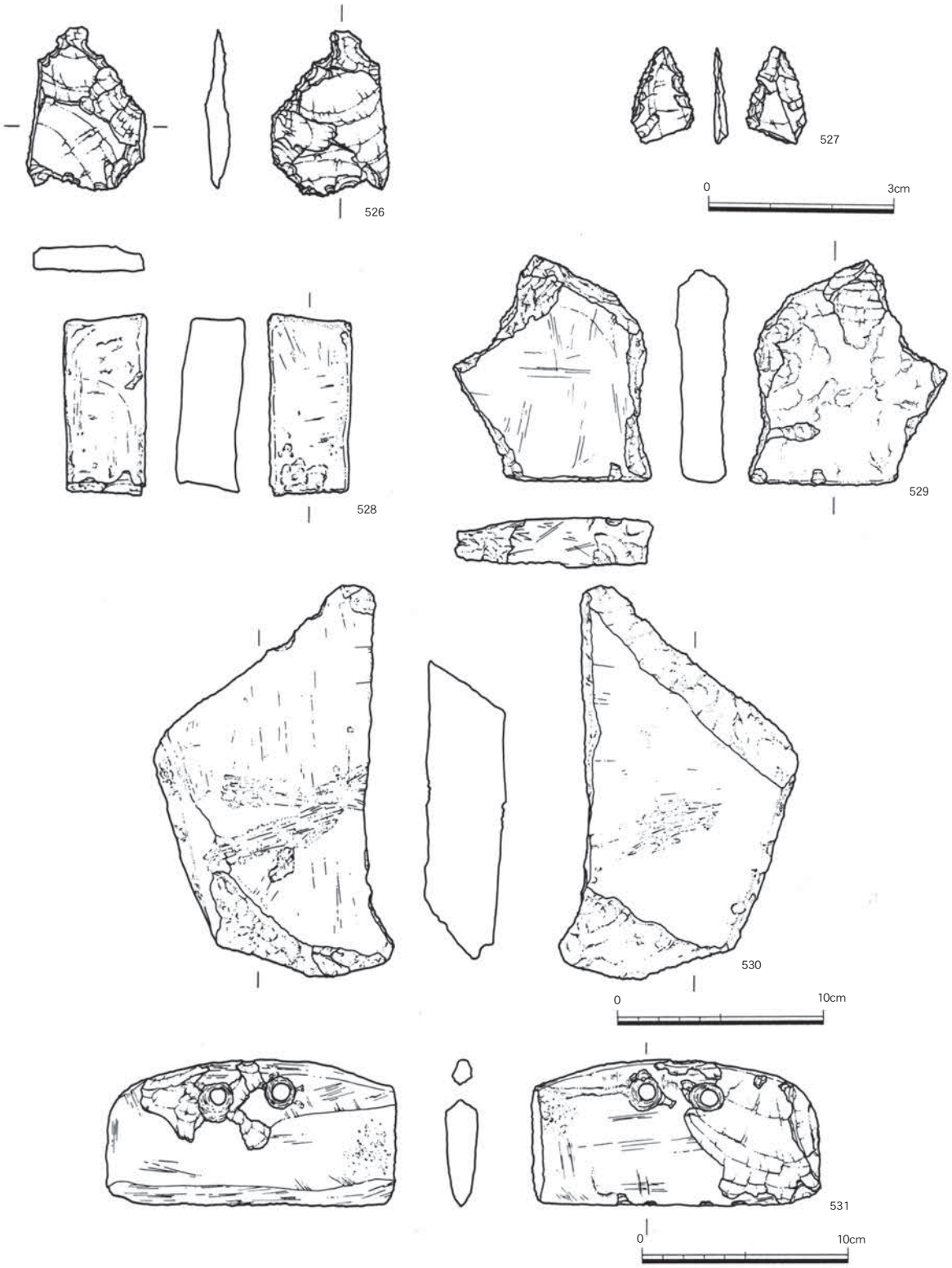
試掘確認調査で出土した遺物は甕、壺、ミニチュア土器、石鏃、砥石、叩石、石包丁である。517、518 は弥生土器甕口縁部である。517 は頸部から緩く外傾し、粘土帯を口縁部に貼付けて肥厚させている。口縁端部外面は無文でナデ調整。518 は頸部から大きく外傾し口縁部は粘土帯貼付口縁である。頸部の屈曲点付近に楕円形の浮文を貼り付けている。522 は壺である。体部と頸部の境界に断面台形の突帯を巡らせている。519、521 は底部である。残存率が悪いが、平底で体部に向かって大きく開く器形が想定される。520 は手づくね土器の底部である。粗製で底部は厚い。526 は二次加工のある剥片である。腹面右側は折れが生じているが、左辺縁には器形を整える細かい剥離が連続して観察される。上部は連続する剥離で基部を思わせる形状を作っている。527 は石鏃未製品である。長軸 1.5mm をはかる小型の製品である。基部加工を行う前段階で廃棄されたものであろう。526、527 ともに赤色のチャートを石材とする。528、529、530 は砥石である。528 は角の丸い角柱状の砥石で 4 面に使用痕が残る。529 は背面に使用痕が顕著に残る。腹面には使用痕は見られず、剥離面がそのまま残る。腹面、背面に剥離



図Ⅳ –4　試掘確認調査出土遺物 1



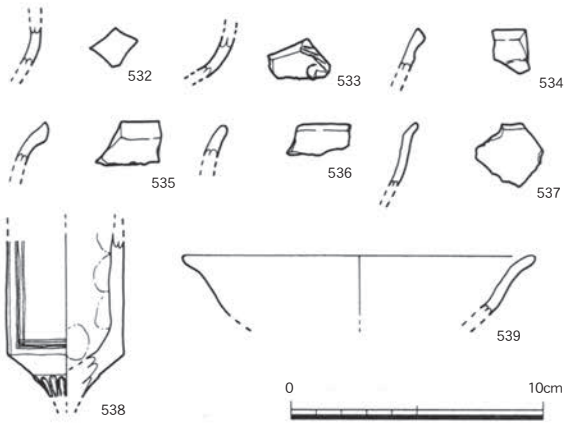
図Ⅳ –5　試掘確認調査出土遺物 2



図Ⅳ –6　試掘確認調査出土遺物 3

図Ⅴ－7　第３次調査遺構平面図

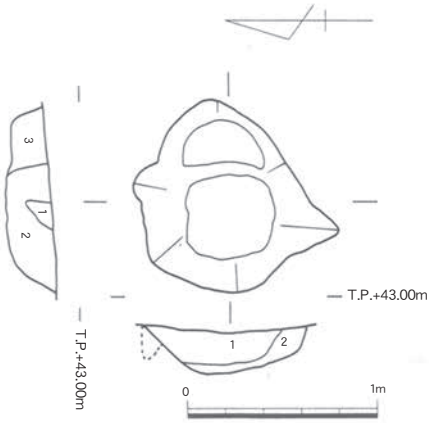
面が見られるが、使用痕に後出する剥離も見られることから転用品の可能性もある。530 は背面､腹面ともに使用痕が残る砥石である。背面側には使用痕のほか敲打痕に近いものも見られる。531 は磨製の石包丁欠損品である。上部に 2 つの穿孔をもつ。左側縁で折れが生じており、右側縁にも剥離が観察される。523、524 は石斧である。523 は刃部を研磨によって形成した磨製伐採斧である。刃部は丁寧に研磨されているが、その他の部分は粗い仕上げとなっており一部自然礫面が残存する。刃部を切る剥離が見当たらないことから打撃によって粗く整形したのちに研磨にて仕上げたものと考えられるが、表面の研磨が粗雑であるため整形時の剥離面と擦跡を観察することができる。基部は周囲を一巡する剥離によって形状を整えており、最下部は平坦に仕上げられている。側縁はまばらに剥離を行ったあと、研磨して整えているため擦痕が顕著に残る。524 は扁平片刃石斧である。蛇紋岩製で、刃部の長さは約 5.1cm をはかる。全面が丁寧な磨きによって仕上げられている。525は叩石である。長軸11.4cm､短軸 9cm の自然楕円礫を使用する。両面中央付近に敲打痕が残り、上下辺縁にも敲打痕が顕著に残っている。試掘確認調査における遺物の出土の状況から石器の占める比率が高いことが指摘できる。



図Ⅳ –8　包含層出土遺物

2. 調査の成果

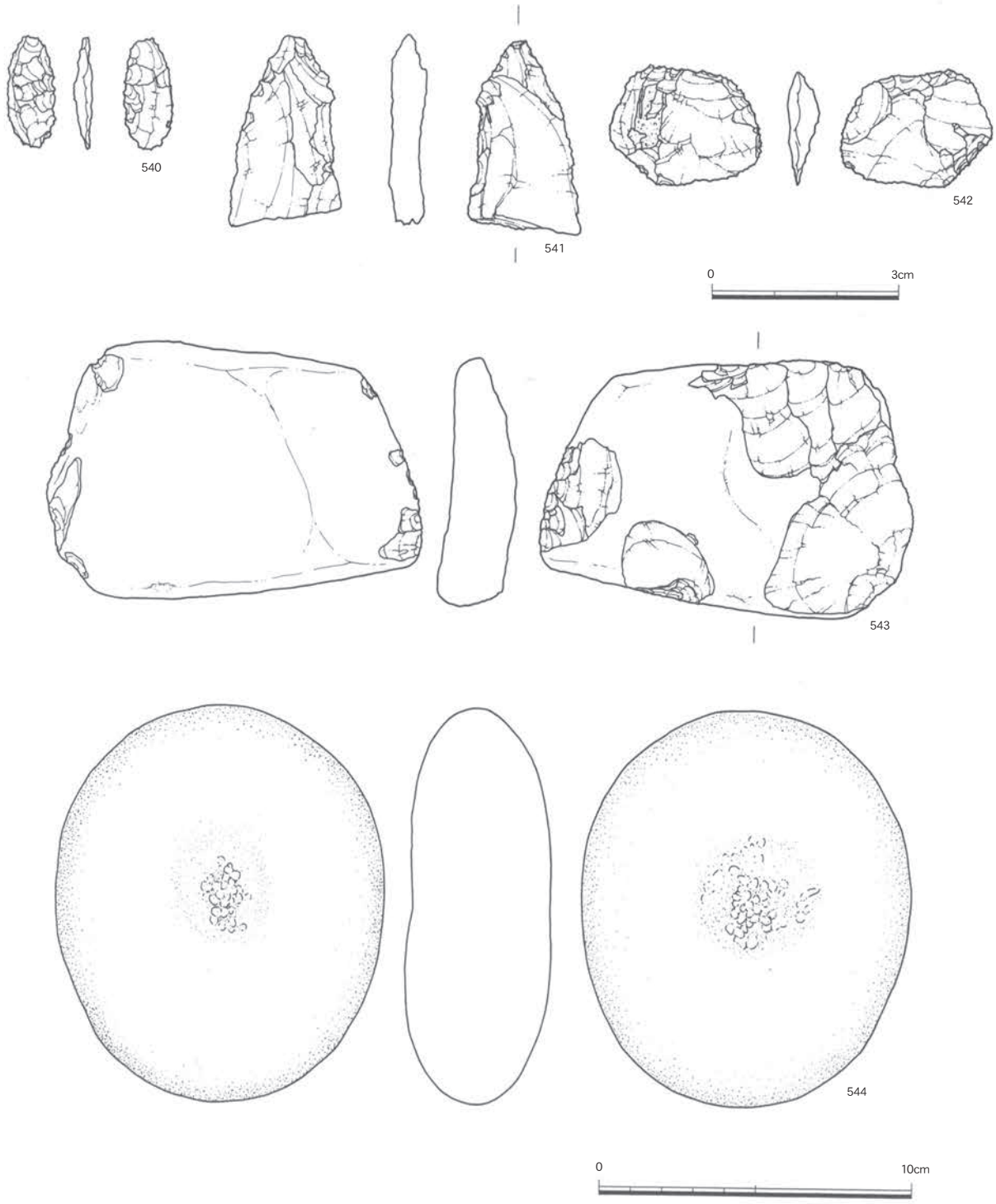
第 3 次調査は丘陵頂上付近に位置し堆積層が薄いことから現耕作土を除去すると大部分で基盤層に達する。したがって基盤層上面においては各期にわたる遺物が出土しており、とくに遺構の時期とは大きく離れていると思われるものを図 Ⅳ-8 に示した。532 は白色の胎土の破片である。533 は稜花皿の体部片であろうと思われる。内面に草花文が施される。15 世紀後半代の所産と考えられる。534 は口縁端部直前でゆるく段をなし端部は稜をもって平坦に仕上げている。胎土は白色を呈すが器種等は明らかでない。535 は灰色の釉が施された磁器片であるが、器種は不明。536 は建窯産天目茶碗口縁である。端部は軽く外反して丸くおさめており、胎土は砂粒が少なく灰色を呈している。全体に鉄釉がかかる。537 は白色と黒褐色の釉がかかる。端部には釉は付着しない。538 は赤色の胎土で角柱状をなす。外



図Ⅳ –9　土坑 1 平面図

面には沈線が２条巡る。器種は不明。539 は中国産天目茶碗口縁端部である。表裏に鉄釉がかかる。532、534、535、537、538 は近代以降の所産であろうと思われる。

このほか調査区北部の基盤層上面で東西方向に伸びる６条の溝を確認したが、地元での聞き取り等から近現代の耕作に伴う溝であることが判明している。



図Ⅳ –10　土坑１・土坑２出土遺物

第３次調査では竪穴住居５棟、掘立柱建物１棟、土坑６基を検出した。以下では必要に応じて個別の遺構について詳述する。

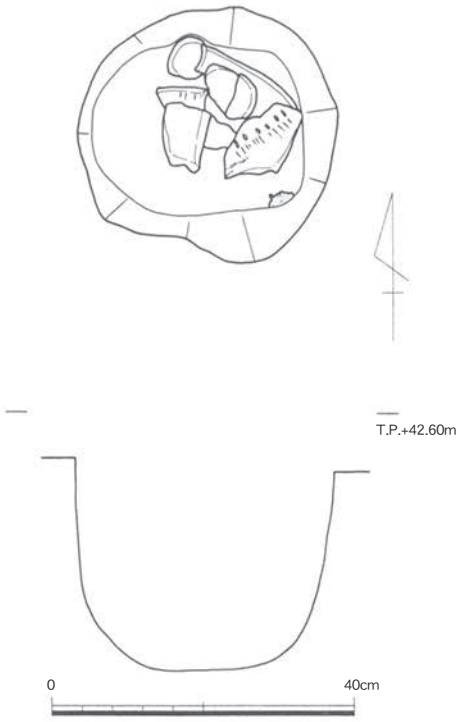
土坑１　調査区北東隅で確認された径約 1m を測る不定な楕円形を呈する土坑である (図 Ⅳ-9)。深さは 25cm を測る。埋土より石鏃 (541)、二次加工のある剥片 (542)、石核 (543) が出土する。541 は石鏃未製品である。左右の辺縁に連続する細かい剥離がみられ石鏃を志向する調整が行われていたものと想定できる。542 は上下方向からの剥離が辺縁に集中することから楔形石器と呼称するべきものとも考えられる。543 は自然礫に数箇所の剥離が見られるものである。現象的にはネガティブな面のみから構成されているため石核と呼ぶべきであろうか。

土坑２　調査区西際で確認された不定形の土坑である。最大径が 70cm を測る。残存する深さは約 30cm をはかり、一部植物の根による撹乱をを受けているため形状が判別しづらい。

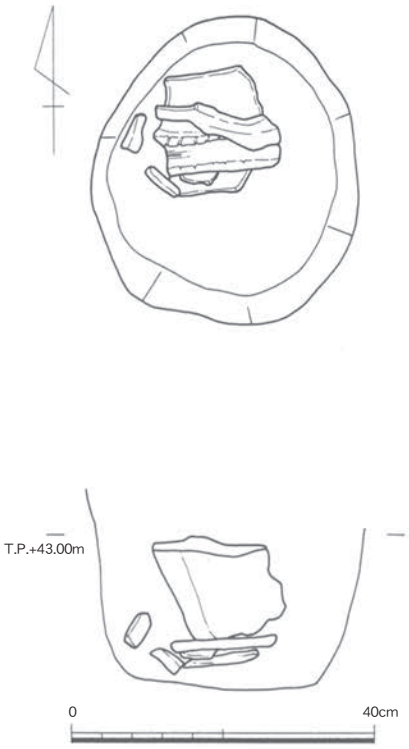
出土する遺物は叩石(544)である。544は自然円礫を使用する叩石で表裏に敲打痕が集中する。

柱穴１　調査区北部で確認された遺構である。直径 34cm、平面形は円形を呈する (図 Ⅳ-11) 。残存する深さは 28cm をはかり、埋土中から多数の遺物が確認されている。

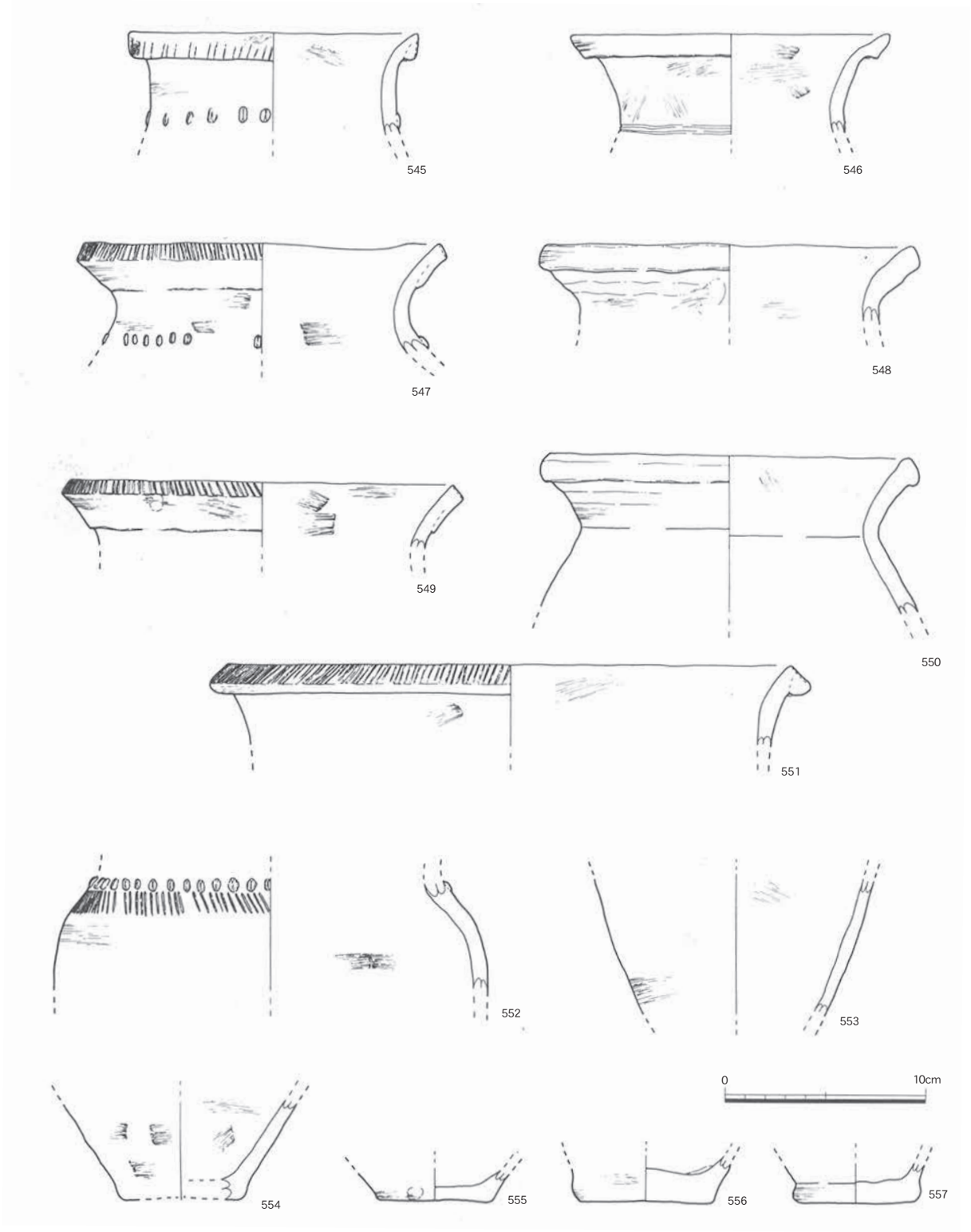
出土する遺物は甕、壺である。551、548、550、549、545 は甕口縁部である。545 は直立ぎみの頚部が端部直前で外反し断面三角形の粘土帯を口縁に貼り付ける。口縁復元径は 14.4cm を測る。口縁端部外面は細い刻目を施し加飾し、頸基部には左右両端からつまみを施した楕円形の浮文を貼り付けている。546 の頚部は外傾し、端部付近で外反する。口縁部は粘土帯貼付口縁である。端部外面は無文でナデ調整で仕上げられて



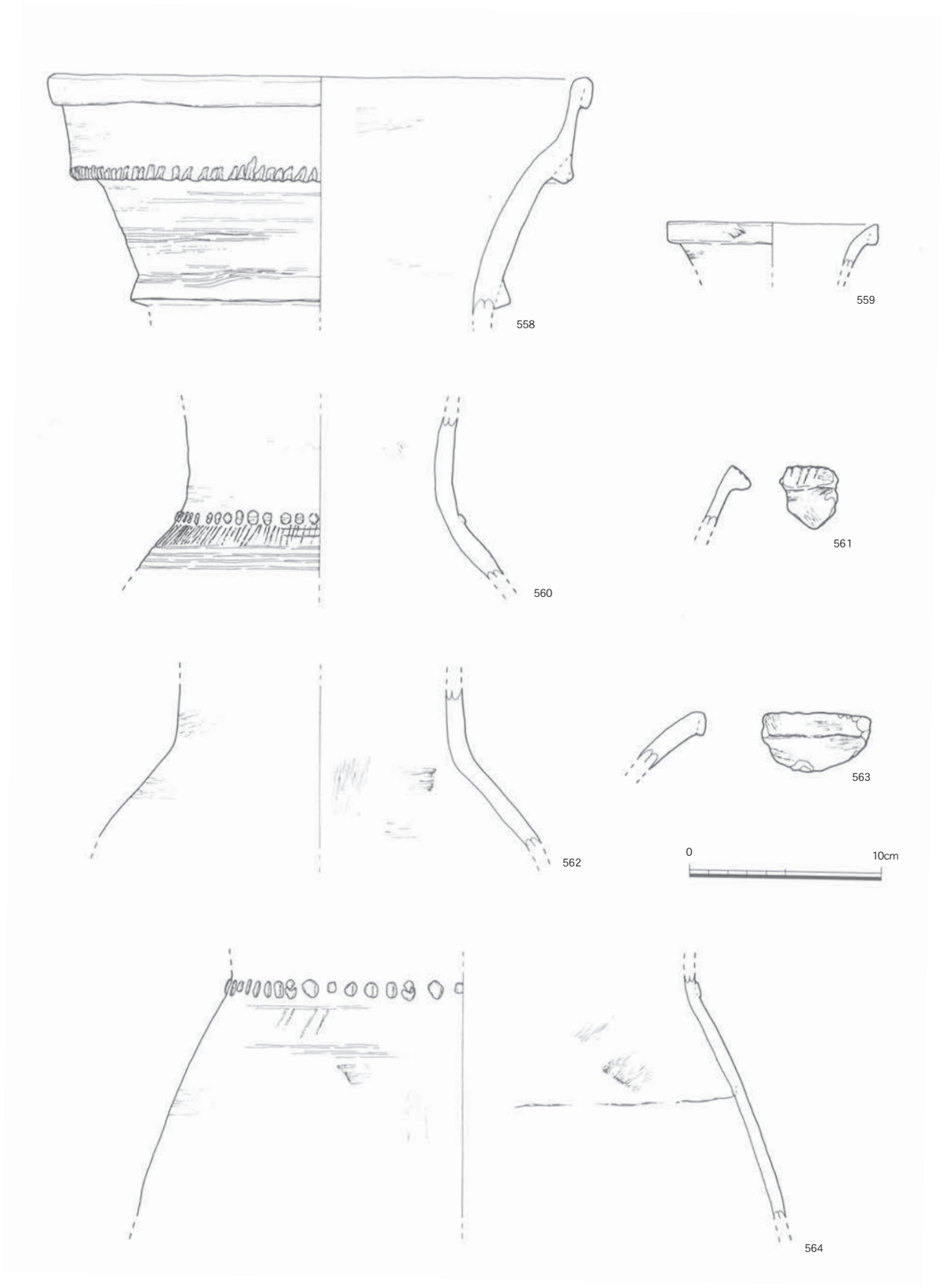
図Ⅳ –11　柱穴 1 平面図



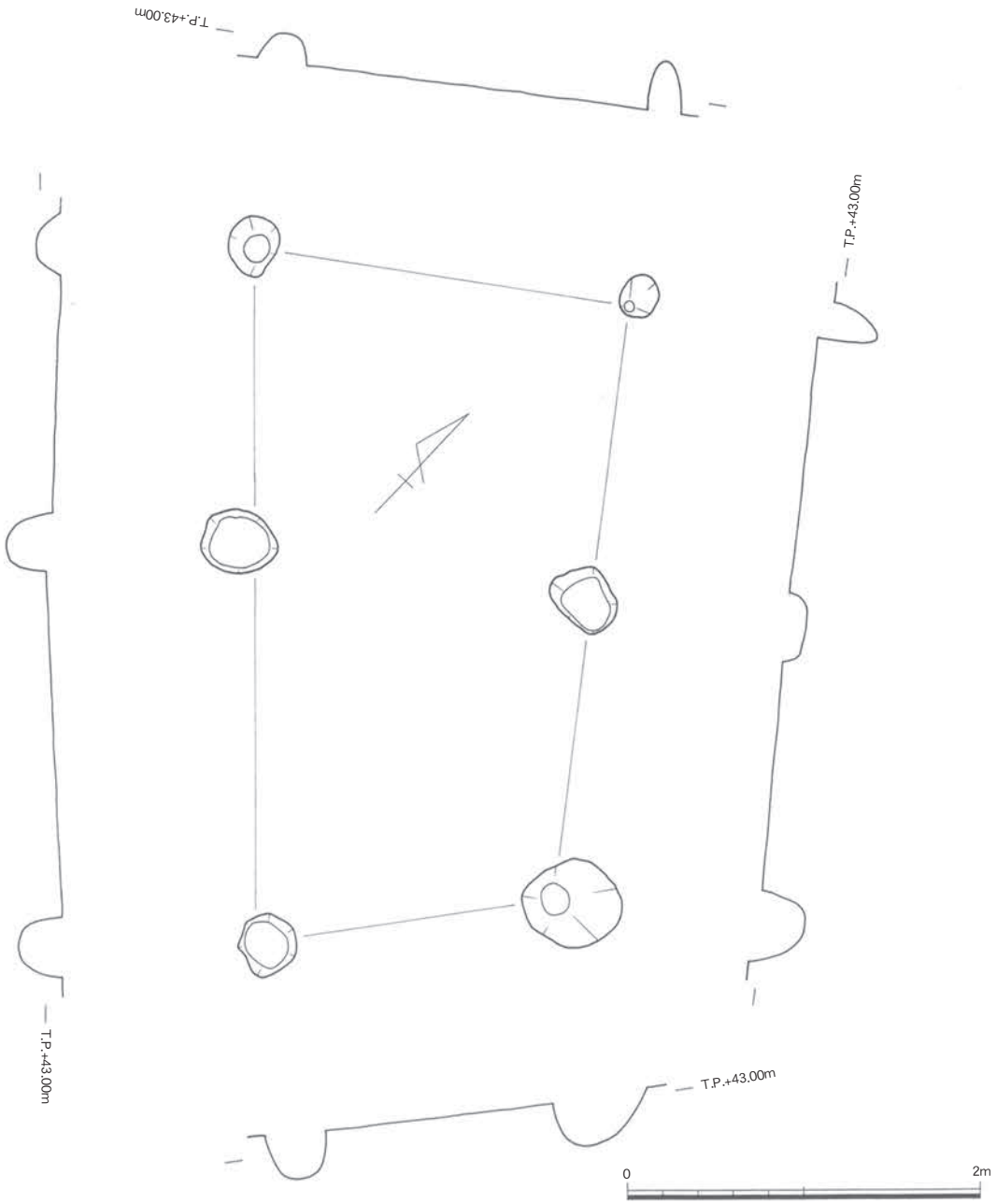
図Ⅳ –12　柱穴 2 平面図



図Ⅳ –13　柱穴１出土遺物



図Ⅳ –14　柱穴 2 出土遺物



図Ⅳ –15　掘立柱建物１平面図

いる。頚部と体部の境界付近には２条のヘラ描き沈線が巡る。547 は体部から短い頚部が外反して立ち上がり、口縁端部は粘土帯を貼り付けて肥厚させる。端部は平坦に仕上げ、口縁外面は細い刻目を斜め方向に施文する。頚部と体部の境界付近にはつまみを施す浮文が貼り付けられる。548 は大きく外側へ伸びる粘土帯貼付口縁を持ち、端部は平坦に仕上げる。口縁部に施文はな

い。550 は頸部の屈曲はきつく外側へ伸び、粘土帯貼付口縁をもつ。端部は丸く肥厚させるが、施文などはみられない。551 はやや大型の甕が想定される。ゆるく外傾する頸部に断面三角形の粘土帯が貼り付けられ、細い刻目を施す。552 は甕体部である。頸部から屈曲し、体部は肩が張る。頸部との境界につまみを施した浮文が巡らされ、浮文下には刻目が斜めに施文される。553 は壺もしくは鉢の体部である。554～557は底部である。554 ～ 556 は平底で底部がやや凹む。557 は底部が肥厚し稜をなして体部へとむかう。

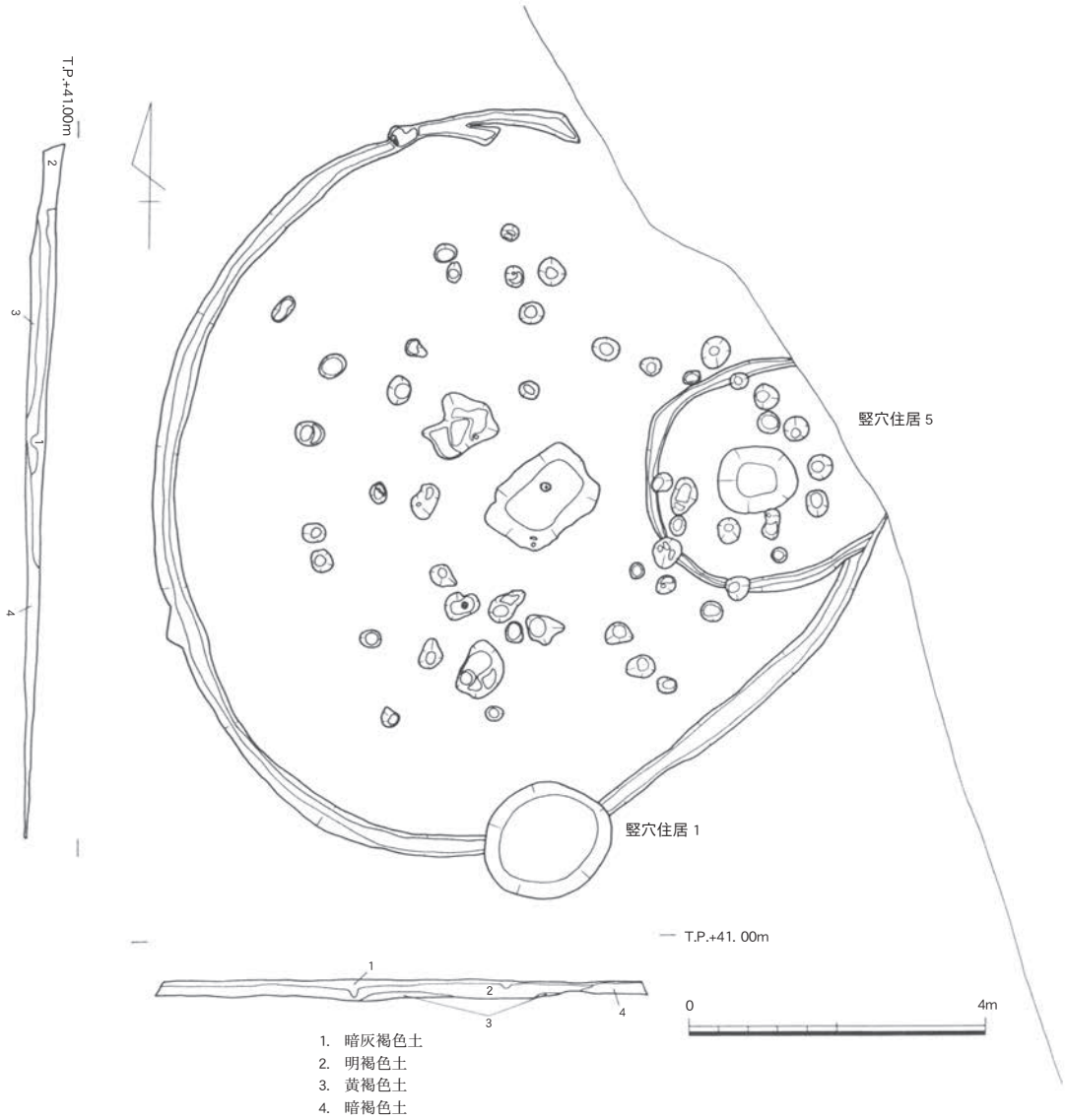
柱穴 2　柱穴 1 の南に位置する平面は 40cm × 35cm の楕円形をなす遺構である。残存する深さは 25cm を測り、埋土中に遺物が多く含まれる。

出土する遺物は壺、甕である。558は大型の複合口縁壺である 。外傾する頸部は断面台形の粘土帯貼付を施す付近からやや直立気味に立ち上がり口縁端部に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。端部外面は無文であるが断面台形の粘土帯には刻目を施文する。頸部下半にも断面三角形の突帯をめぐらせて加飾している。突帯から複合口縁接合部までの間は櫛描文が観察される。559 は端部に断面三角形の粘土帯を貼り付ける甕口縁部である。端部直前に外側に向かって外反する。560 は壺もしくは甕頸部である。頸部は体部から直立気味に外傾する。頸部と体部の境界付近には上下方向からつまみを施す楕円形の浮文がみられる。浮文下には刻目が巡り、その直下に沈線が 4 条巡る。561 は断面三角形の粘土帯を貼り付けた甕口縁端部である。端部は平坦で、刻目を施している。562 は甕もしくは壺の体部である。頸部は直立気味に立ち上がり、施文はない。563 は粘土帯貼付口縁の甕端部である。端部は平坦で無文である。564 は甕もしくは壺の体部である。体部最大径が胴部下半にあるものと思われ、頸部にむかってゆるく内湾する。頸部との境界には磨耗を受けて形状がわかりづらいが浮文が貼り付けられている。

掘立柱建物 1　前述の柱穴 1、柱穴 2 を含めて復元される 1 間× 1 間の掘立柱建物である (図 Ⅳ-15)。南北 4m、東西 2m の小規模な掘立柱建物である。直径 20cm～30cm程度の柱穴により構成され柱間は約 2m を測る。柱穴 1、柱穴 2 において明確な柱の痕跡は確認しておらず、柱穴 1・柱穴 2 の遺物出土状況等を考慮すると恣意的な復元であることは否めない。

竪穴住居 1　調査区南東際で検出した直径 10m 前後を測る円形の竪穴住居である (図 Ⅳ-16)。壁際には幅 30～35cm、深さ 15cm を測る周壁溝がめぐり、住居内部は残存状態のよい北側で検出面から約 20cm 残存する。中央部には長さ 1.5m、幅 1m、残存する深さ 20cm ほどの土坑が検出されておりその周囲には柱穴が存在しない。柱穴は竪穴住居床面に同心円を志向するように多数確認されている。明確な支柱穴を特定するには至らないが、周囲の遺構の分布に比して竪穴住居内の柱穴数は特に多いことからこれらのうちのいずれかが支柱穴であるか、もしくは多数の柱で上部構造を支える構造をとっていたものではないかと推測される。

出土する遺物は甕、底部、石鏃、剥片である (図 Ⅳ-18)。565 は粘土帯貼付口縁の甕である。器面の剥落が著しく調整は観察しづらいが、端部外面は無文である。566・568 は底部である。566 は平底で、小型の底部である。568 は底部からの立ち上がりから小型の器種が想定される。



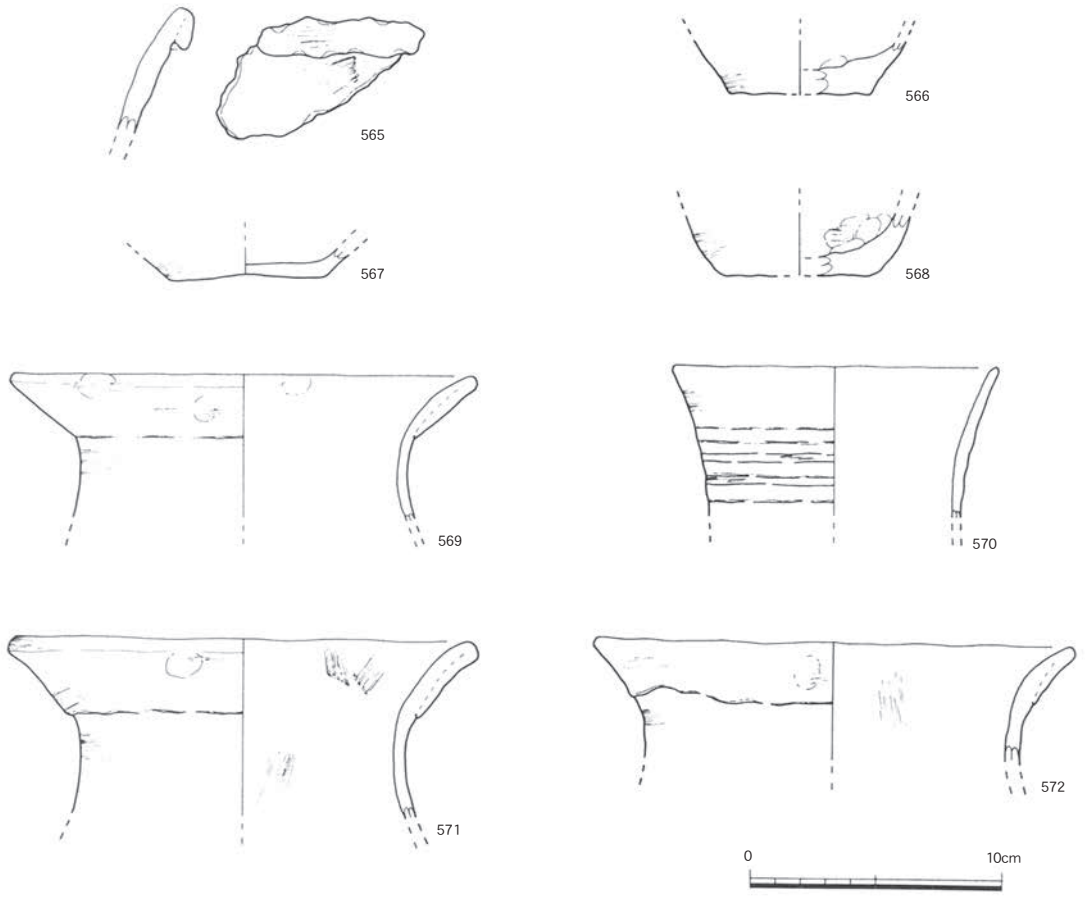
図Ⅳ –16　竪穴住居 1 平面図

573、574、576 は打製石鏃である。573 は基部を凹状に仕上げる石鏃で側縁部に細かな剥離面が連続しややいびつであるが形状を整えている。背面側の調整は浅く中央部まで至らない。574 は基部をやや凹ませる石鏃である。基部は明瞭に凹状をなさないものの、基部付近には側縁の剥離に比して大きな剥離面が形成される。側縁は細かい剥離が連続し、腹面側の剥離は中央付近まで至らない。575 は基部の凹む磨製石鏃である。腹面、背面ともに刃部を研磨して形成している。作用部は緩いカーブを描いて逆刺に続き、逆刺は短く丸く仕上げられている。576 は基部が突出する石鏃で、作用部側縁は直線的に基部に向かって広がっている。腹面、背面ともに辺縁の剥離が浅く中央付近に及ばない。577～579は二次加工のある剥片である。577 は上辺に自然礫面を切る剥離が並び、腹面についても上部に主要剥離面に後出する剥離が認められる。578 は上下両極から加撃され上下辺に大小の剥離が観察される。腹面側の左右側縁には細かい剥離が連続する。579 は四辺に細かい剥離が巡る。上下辺の剥離に比して左右辺縁の剥離はやや剥離

図Ⅳ –17　竪穴住居 2 平面図

面が大きい傾向がある。580 ～ 585 は砥石である。580 は扁平な四角形を呈し、下部で折れを生じて欠損しているが、その他の 5 面すべてに擦痕が残っている。581 は表裏と側縁の一部に擦痕が残るが、それに後出する剥離が左右の辺縁に連続している。砥石表面を観察すると裏面側は自然礫面ではなく、一度層理状に剥がれた面であろうと考えられる。この面にも擦痕は残っており、欠損した面も砥石として利用したものと思われる。後出する剥離は欠損後に形状を整えたものであろうか。582 は砥石破損品である。砥石の表面部分が剥がれたものであろう。裏面は礫面がみられる。583 は表裏に擦痕が残るが、側縁 3 辺に割れが生じている。もっとも短い側縁にも擦痕が残る。584 は角柱状の砥石である。表裏を含む 4 面に使用痕が残る。短辺側の片方が欠損している。585 も角柱状の砥石である。4 面に擦痕が残り、上下端が割れを生じて欠損する。剥離による形成後に砥石として使用されているためリング、フィッシャーは明瞭でない。586 は台石もしくは砥石である。長軸 26.7cm、最大幅 18.3cm、重量 6kg 強を測る大型の製品で、中央部が擦痕や敲打痕等の使用痕で凹みが生じている。このほか図示はできなかったが姫島産と考えられる黒曜石の剥片及び、チップなどが出土している。

竪穴住居 2　調査区北辺中央付近で検出された竪穴住居である (図 IV-17)。一部が調査区外へ延びるため正確なプランは判明していないが、周壁溝の形状から円形のプランが想定される。復



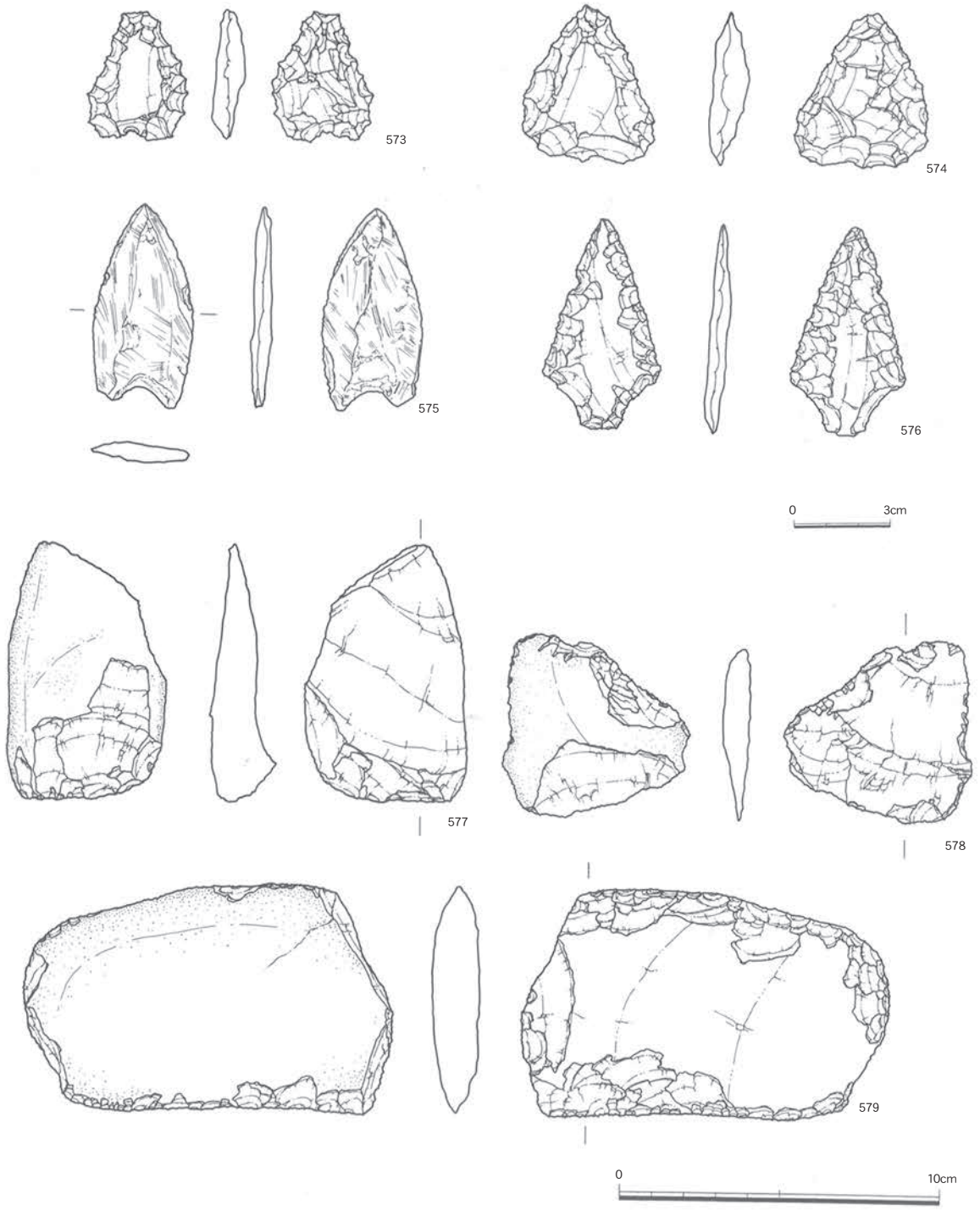
図Ⅳ –18　竪穴住居 1・竪穴住居 2 出土遺物 1

元される径は約3～4mほどである。住居址の東側は耕作を行うための私道で削平を受けている。遺構内に柱穴は確認されず周壁溝も植生などによる撹乱を受けている。

出土遺物は、甕、壺である。569 は貼付口縁の甕である。頸部は大きく外反し、口縁端部は丸くおさめる。粘土帯の貼り付けによって頸部と口縁部の境界付近に低い段が形成されている。口縁端部は無文である。571 も貼付口縁甕である。外反する頸部に粘土帯が貼り付けられ段を形成している。端部は平坦に仕上げられるが施文はない。572 も貼付口縁の甕であるが569、571ほど明瞭な段を形成せず、短めに外反する。端部は丸くおさめ無文である。570 は 壺口縁部で、復元径が 12.8cm を測る。595 は黒曜石を石材とした二次加工のある剥片である。

竪穴住居 3　調査区北東部に位置する竪穴住居址である (図 Ⅳ-21)。竪穴住居 1 に隣接する竪穴住居であるが、検出し得たのは北半のみで南側については明確な掘りかたを確認していない。住居北半には周壁溝が巡り、住居内には柱穴が 11 基確認されている。

出土遺物は、土師器小片が多く、図示可能なものは楔形石器 (593)1 点である。上下両極から

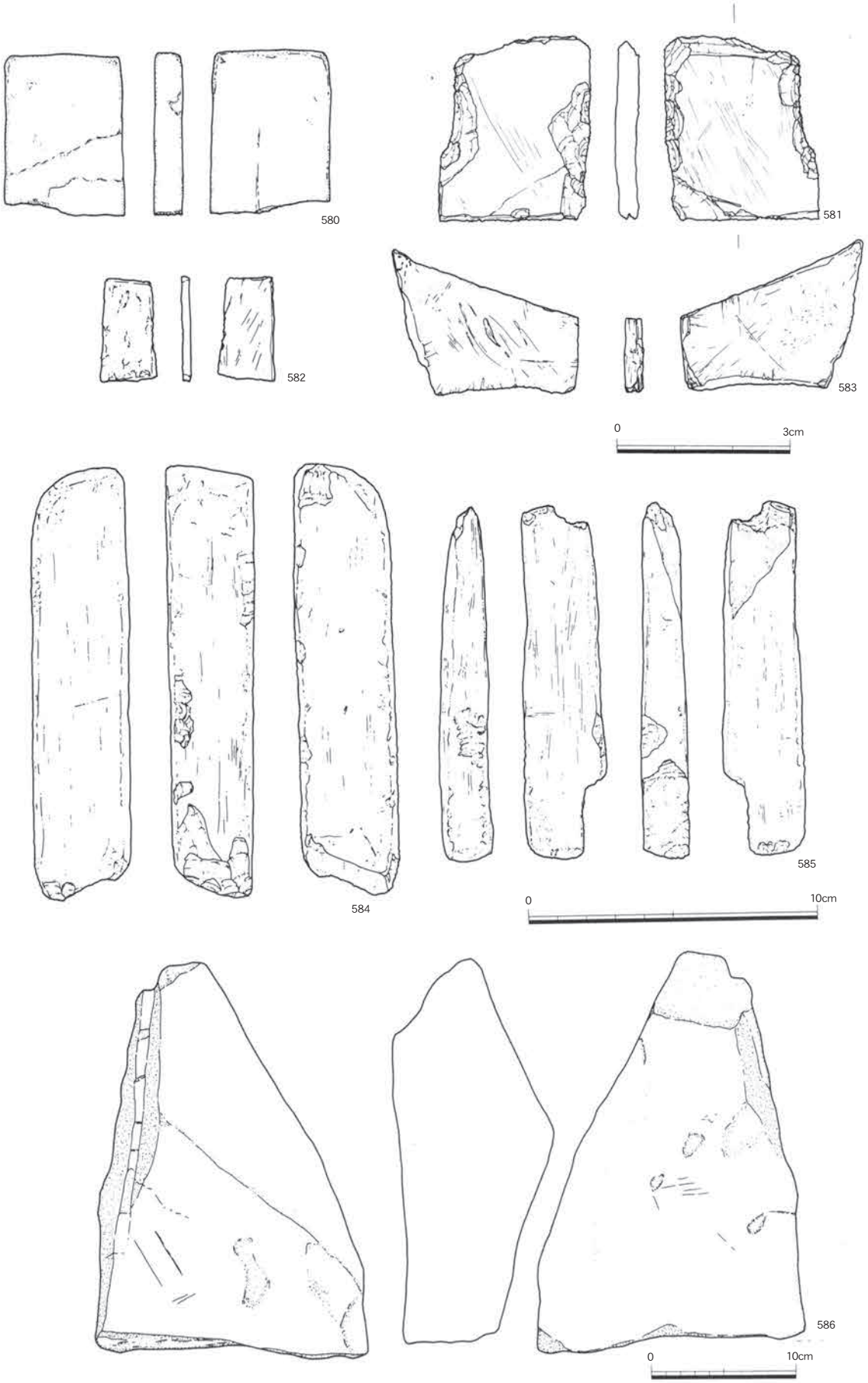


図Ⅳ –19　竪穴住居 1 出土遺物 2

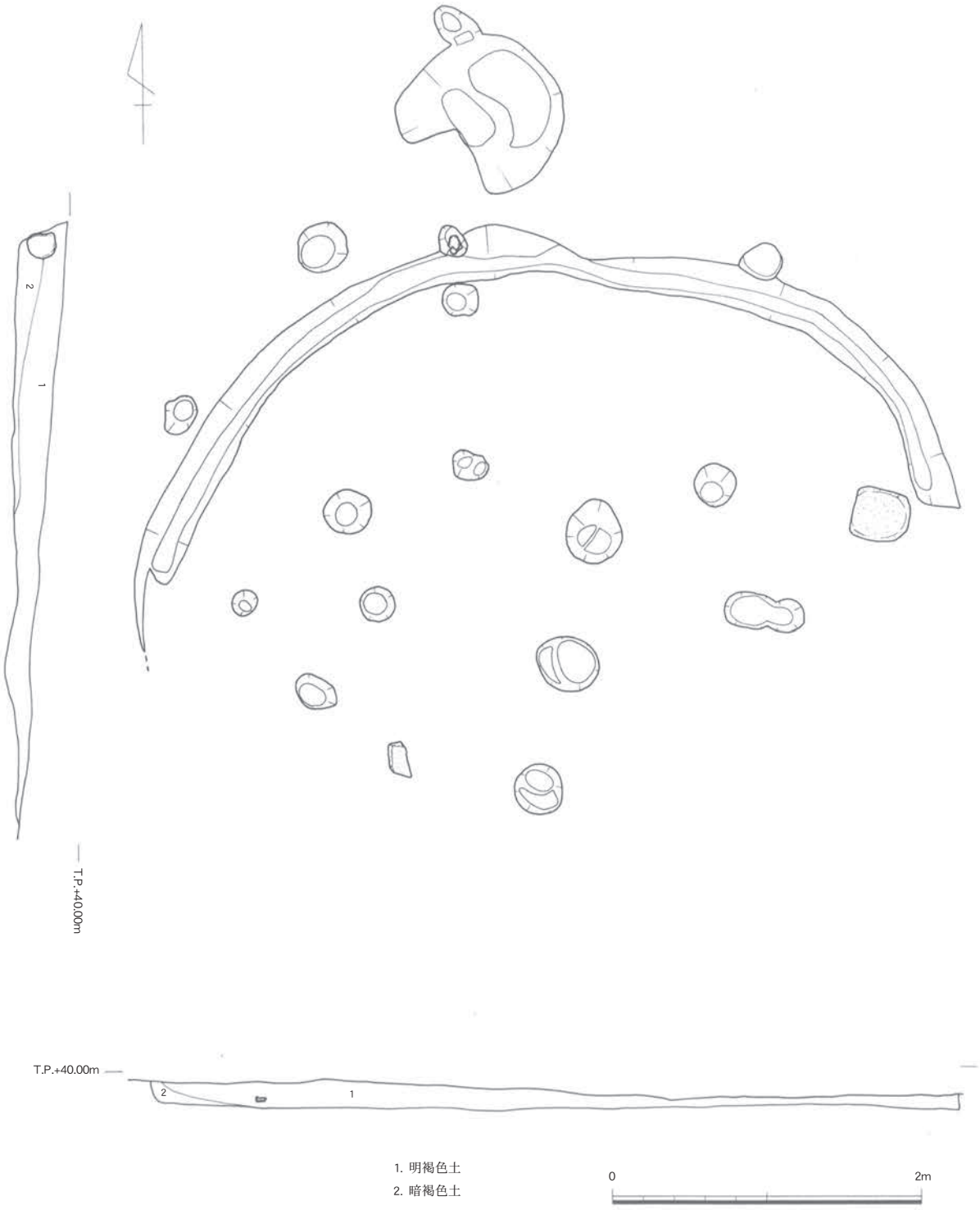
の複数回にわたる加撃によって複雑な剥離面が形成されている。石材は赤色のチャート。

竪穴住居 4　調査区南東で確認された竪穴住居である (図 Ⅳ-22)。平面プランは隅丸の方形を呈する。幅 22cm ほどの周壁溝が周囲を巡り、住居内には柱穴が散在する。

遺物は甕、叩石が出土する。592 は甕頸部である。頸部との境界に微隆起突帯が巡り、楕円

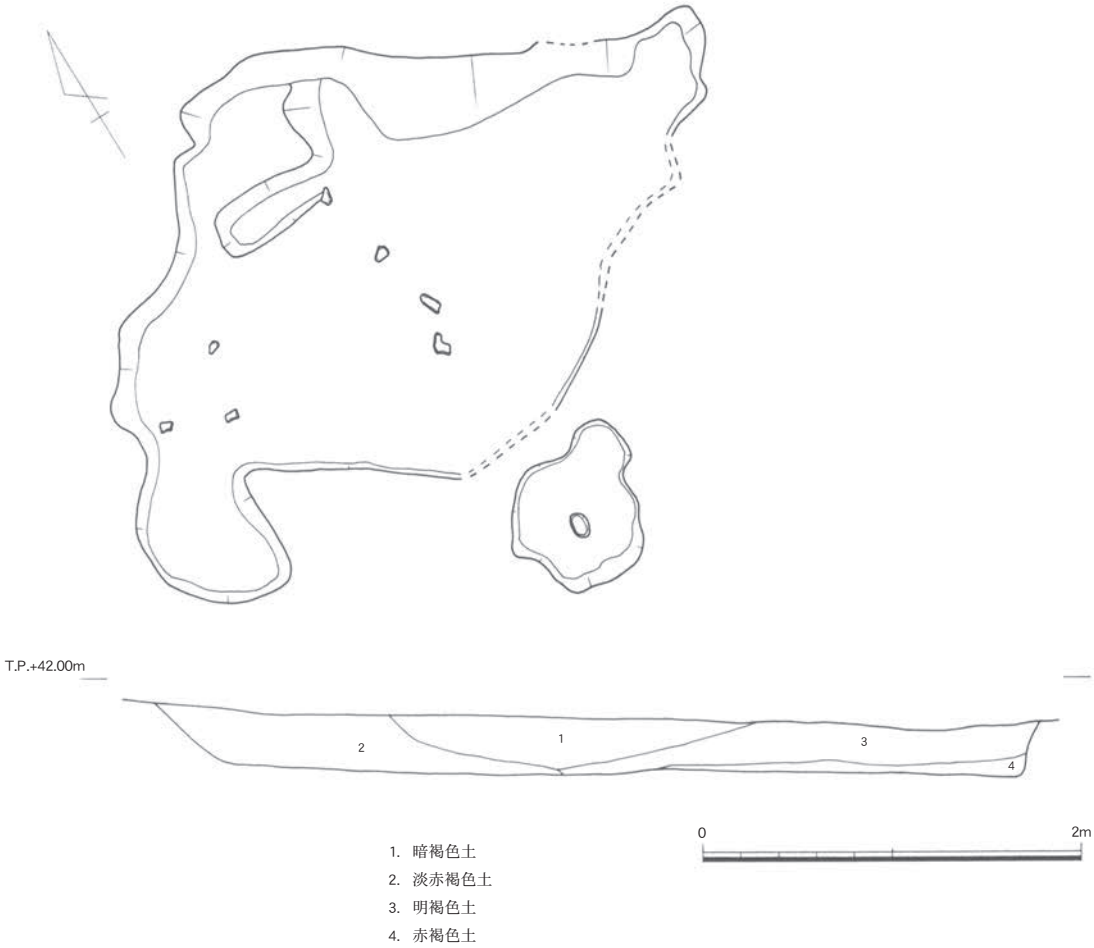


図Ⅳ –20　竪穴住居 1 出土遺物 3

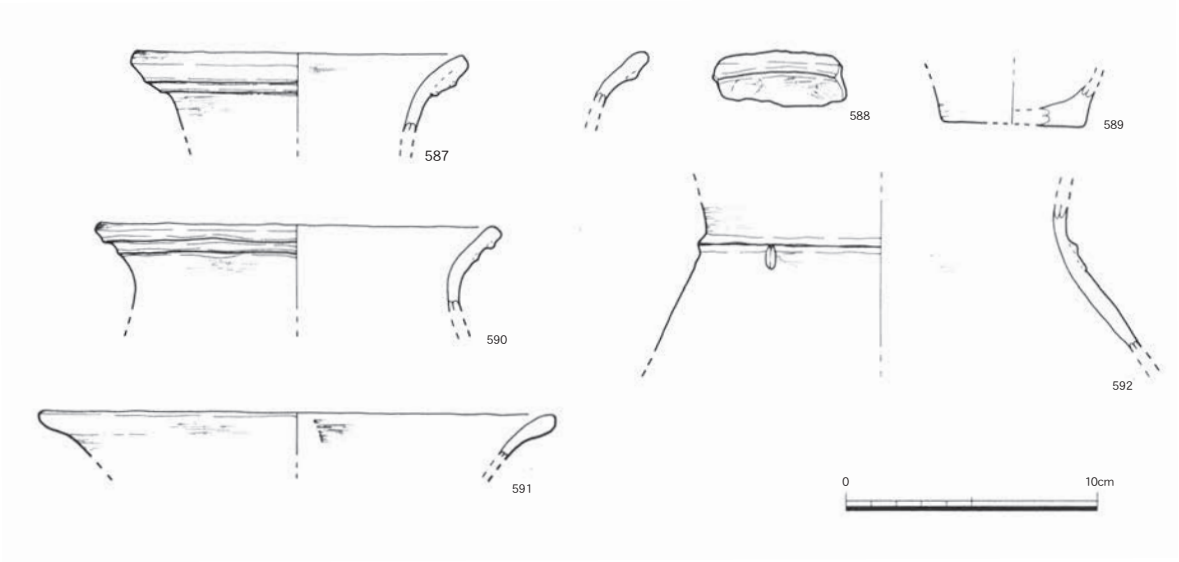


図Ⅳ –21　竪穴住居 3 平面図

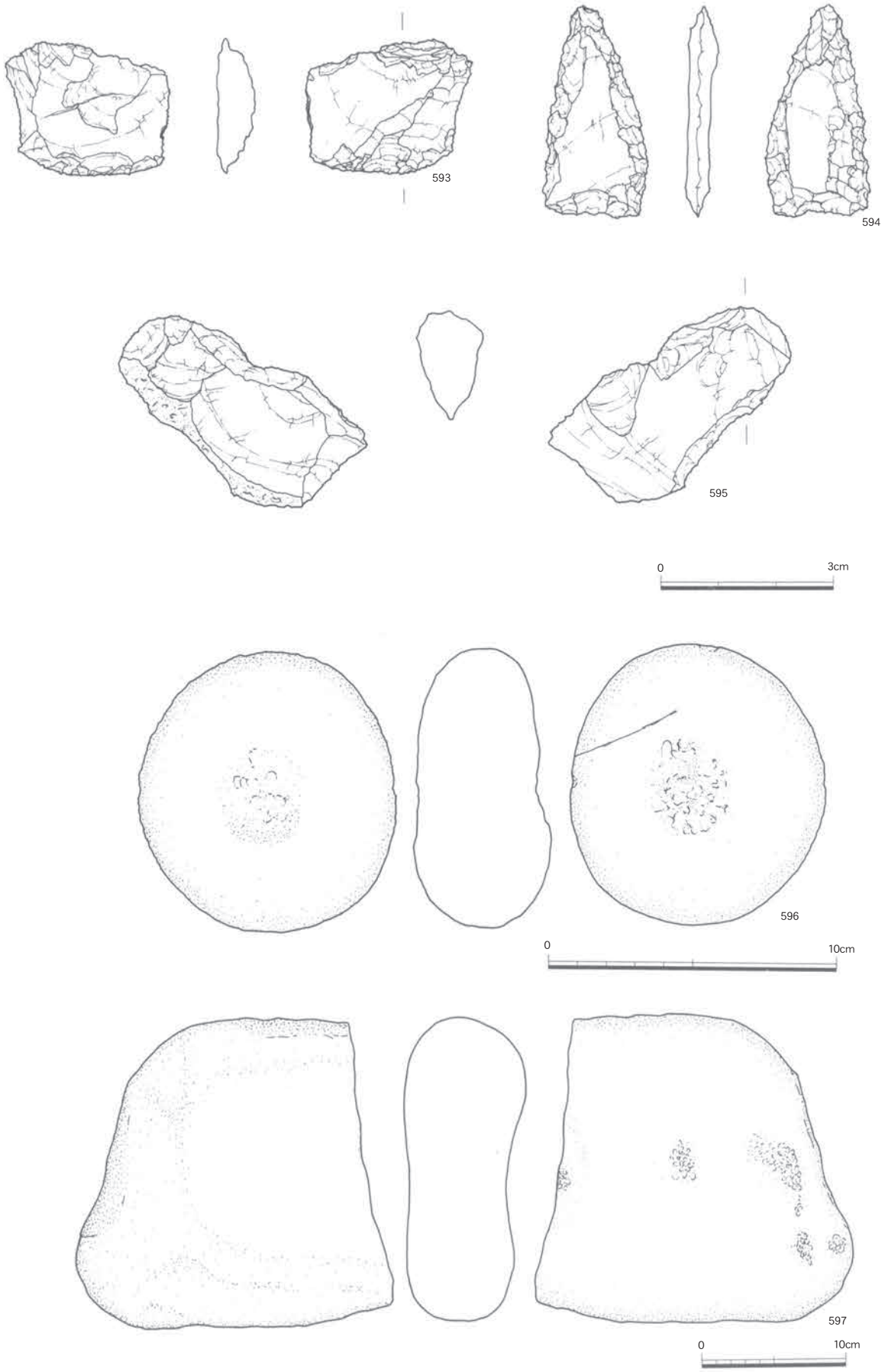
図Ⅳ –22　竪穴住居 4 平面図



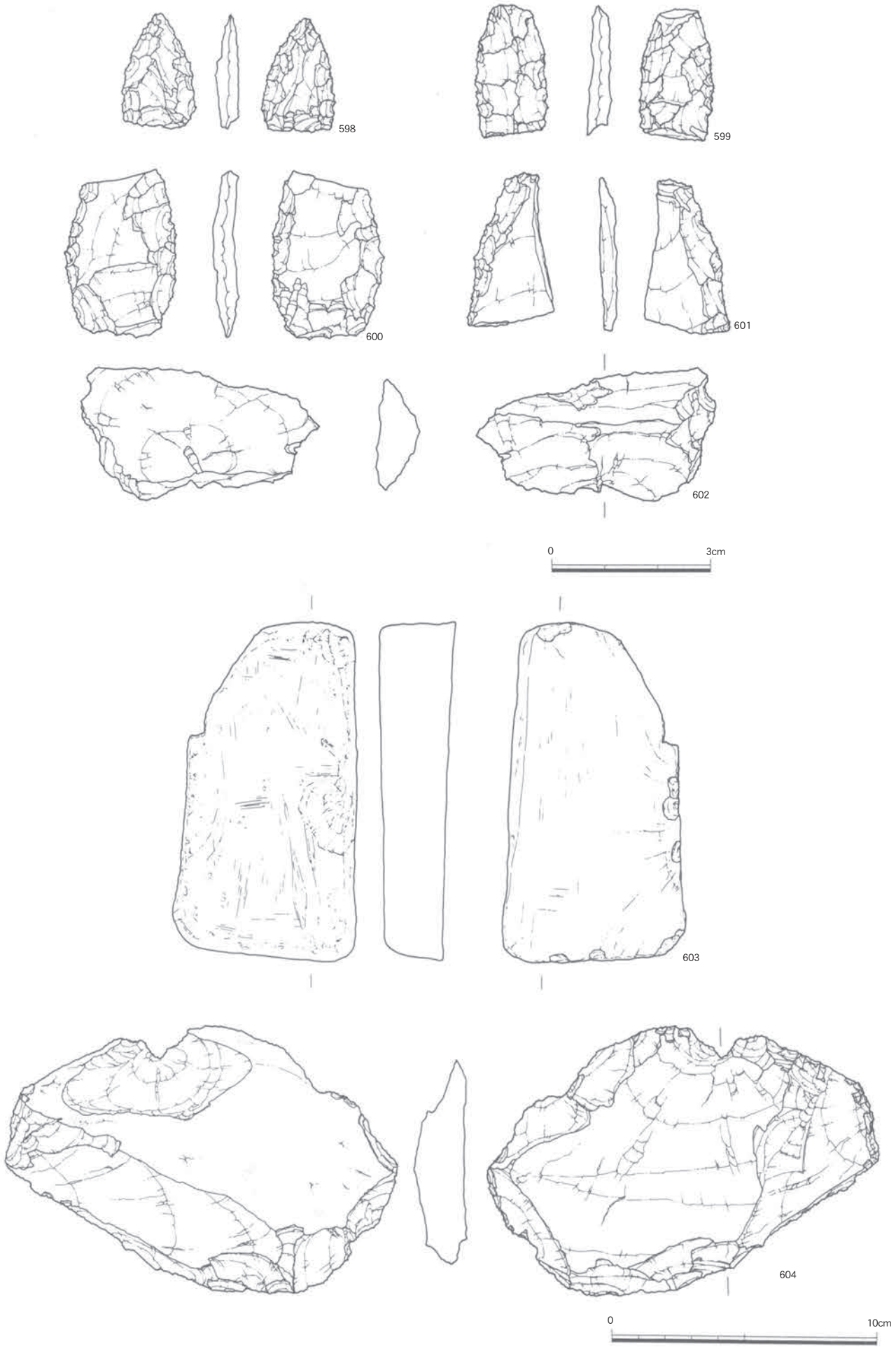
図Ⅳ –23　土坑 3 平面図



図Ⅳ –24　竪穴住居・土坑 3 出土遺物 1



図Ⅳ –25　竪穴住居・土坑 3 出土遺物 2



図Ⅳ –26　包含層出土遺物

形の浮文が貼り付けられている。596・597 は叩石である。596 は表裏中央部に敲打痕が集中する。597 は大型の製品で敲打により中央部が凹む。底面は使用痕がなく、自然礫面が観察される。

土坑 3　調査区南中央部にある不定形の土坑である (図 Ⅳ-23)。最大長 2.2m をはかり深さは 30cm 程度残存する。形状は不安定ながら良好な遺物を出土する遺構である。

出土遺物は甕である。587、590、591 は甕口縁部である。587 は粘土帯貼付口縁であり、貼り付けられた粘土帯部分に 2 条の微隆起突帯が巡る。端部はナデ調整によってやや凹面をなす。590 も貼付口縁甕である。口縁外面に微隆起突帯が 2 条巡る。頸部はゆるく外反する。591 は大きくひらく貼付口縁甕である。口縁部は無文で貼付部に低い段が生じている。588 は甕口縁端部であろうと考えられる。口縁端部直下に微隆起突帯を貼り付けている。

竪穴住居 5　竪穴住居 1 の内側に存在する小型の住居址である (図 Ⅳ-16)。平面プランは円形で、直径は 3m ほどをはかる。住居内側には周壁溝が巡り、プランの中央部に楕円形の土坑が存在する。柱穴は土坑の周囲に 11 基確認されている。竪穴住居 1 との前後関係は、周壁溝の切り合いから竪穴住居 5 が後出であることがわかるが、両遺構の時期差を示す遺物は出土していない。

遺物は赤色チャート製の石鏃 (594) が 1 点出土する。594 は基部を凹状に仕上げる石鏃である。作用部側縁を細かな連続する剥離で調整する。作用部はややいびつで左右がシンメトリーな関係にない。腹面、背面ともに辺縁の剥離が浅く中央付近にまで及んでいない。

包含層出土遺物　包含層からは石鏃、剥片、砥石が出土している (図 Ⅳ-26)。598 ～ 601 は石鏃である。598 は基部が平坦なタイプで連続する剥離で鋭利な切っ先を形成している。緩いカーブを描きつつ基部へ向かい、逆刺は明確でない。599、600 は石鏃欠損品である。共に先端部に折れが生じている。形状は基部が平坦におわるタイプである。ともに緩いカーブを描いて基部へ向かっており最大幅は作用部中央付近にある。600 は調整の剥離が浅く中央部まで及ばない。601 は石鏃未製品である。腹面右側の辺縁のみに細かい剥離が連続しており左側縁は調整が及んでいない。整形時に折れが生じたものと考えられる。602 はサヌカイトを石材とする剥片である。中央付近に打点及びバルバスカーが残る。603 は砥石である。表裏と側面の一部に擦痕がみられる。側面には擦痕のほかに敲打痕が観察される。604 は用途不明、大型の二次加工のある剥片である。打面を不定方向に移転させながら背面、腹面両側から剥離を行っている。剥離は素材剥片をほぼ全周する。

第 3 次調査試掘遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量（cm）		色　調			特　　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
517	4	試掘　包含層	甕	(16.0)	(5.0)	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 4/1 褐灰	貼付口縁ナデ。
518	4	試掘　包含層	甕	(18.2)	(5.4)	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 4/1 褐灰	貼付口縁。頚部に円形浮文。ナデ。
519	4	試掘　包含層	底部	-	(1.3)	10YR 8/2 灰白	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/1 灰白	内外面ナデ。
520	4	試掘　包含層	手づくね	-	(2.0)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	剥落著しい
521	4	試掘　包含層	底部	-	(2.7)	N 2/0 黒	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/3 浅黄	外面ナデ。内面剥落著しい。
522	4	試掘　包含層	壺	-	(4.2)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 3/1 黒褐	断面台形状の貼付突帯あり。ナデ。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (mm/g)				石材	特徴
				最大長	最大幅	厚さ	重量		
523	5	包含層	磨製伐採斧	12.4	5.5	4.5	430.0	不明	両主面に剥離、敲打痕、研磨痕。
524	5	Tr-10	扁平片刃石斧	7.7	6.0	2.2	191.5	蛇紋岩？	研磨痕あり。
525	5	Tr-10 SX-5	叩石	11.4	9.0	5.5	860.0	不明	両主面中央、側面一部に敲打痕。
526	6	包含層	二次加工のある剥片	2.6	1.9	0.4	2.2	チャート	
527	6	Tr-5	石鏃 未製品	1.5	1.0	0.3	0.2	チャート	
528	6	包含層	砥石 破損品	5.9	2.6	2.0	63.3	不明	
529	6	Tr-10 SX-5	砥石 破損品	7.3	6.1	1.6	310.0	不明	
530	6	表採	砥石 破損品	12.6	7.0	2.5	103.8	砂岩	
531	6	Tr-3	石包丁 破損品	3.6	7.0	0.8	27.1	粘板岩	

第 3 次調査遺物観察表

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量（cm）		色　調			特　　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
532	8	検出面	不明	-	(1.5)	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 4/1 褐灰	
533	8	検出面	皿	-	(1.9)	10Y 6/2 オリーブ灰	10Y 6/2 オリーブ灰	2.5Y 8/2 灰白	稜花皿
534	8	検出面	不明	-	(1.7)	10YR 8/2 灰白	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/1 灰白	
535	8	検出面表採	不明	-	(1.7)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	
536	8	検出面表採	天目茶碗	-	(1.2)	N 2/0 黒	2.5Y 7/3 浅黄	2.5GY 6/1 オリーブ灰	建窯産　鉄釉
537	8	検出面表採	不明	-	(2.5)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 3/1 黒褐	
538	8	検出面	不明	-	(6.5)	10R 5/4 赤褐	10R 4/6 赤	10R 5/4 赤褐	
539	8	検出面表採	天目茶碗	(14.0)	(2.4)	N 2/0 黒	N 2/0 黒	2.5GY 6/1 オリーブ灰	鉄釉
545	13	柱穴 1	甕	(14.4)	(4.6)	10YR 7/4 にぶい黄橙	2.5YR 5/6 明赤褐	10YR 8/6 黄橙	口縁外部に刻目。浮文あり。内外面ナデ。
546	13	柱穴 1	甕	(15.5)	(4.9)	5Y 3/1 オリ - ブ黒	10YR 5/2 灰黄褐	7.5YR 6/4 にぶい橙	内外面ナデ。外面に沈線。
547	13	柱穴 1	甕	17.8	(5.4)	10YR 7/4 にぶい黄橙	7.5YR 7/6 橙	10YR 7/6 明黄橙	貼付口縁。口縁外部に刻目。浮文あり。内外面ナデ。
548	13	柱穴 1	甕	(18.0)	(3.9)	10YR 6/4 にぶい黄橙	5YR 6/4 にぶい橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。剥落著しい。
549	13	柱穴 1	甕	(19.0)	(3.2)	10Y 3/1 オリ - ブ黒	7.5Y 4/1 灰	10Y 3/1 オリ - ブ黒	内外面ナデ。口縁外部に刻目、指頭圧痕あり。
550	13	柱穴 1	甕	(17.8)	(7.8)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 8/6 黄橙	5Y 5/2 灰オリーブ	内外面ナデ。
551	13	柱穴 1	甕	(28.2)	(4.1)	10YR 6/4 にぶい黄橙	7.5YR 7/8 黄橙	5YR 6/8 橙	口縁外部に刻目。
552	13	柱穴 1	甕	-	(5.7)	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	外面に刻目、浮文あり。内外面ナデ。
553	13	柱穴 1	壺・鉢？	(13.8)	(6.7)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	内外面ナデ。

表Ⅳ –1　出土遺物観察表 1

図番号	図版番号	出土地点 層　位	器 種	法量（cm）		色　調			特　　徴
				口径	器高	内　面	外　面	断　面	
554	13	柱穴１	底部	-	(6.5)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 5/3 にぶい黄褐	外面板状工具によるナデ。
555	13	柱穴１	底部	-	(1.6)	2.5YR 6/6 橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 7/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。
556	13	柱穴１	底部	-	(2.4)	10R 6/6 赤橙	10R 6/6 赤橙	10YR 8/6 黄橙	内外面ナデ。
557	13	柱穴１	底部	-	(1.9)	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 6/6 橙	内外面ナデ。
558	14	柱穴２	壺	(27.8)	(12.4)	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/6 黄橙	10YR 5/6 黄褐	外面に突帯、刻目。胴部に沈線。櫛描文？
559	14	柱穴２	甕	(11.0)	(2.3)	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 5/3 にぶい黄褐	内外面ナデ。
560	14	柱穴２	甕・壺	(17.1)	(8.7)	5YR 6/8 橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 5/1 褐灰	外面に円形浮文、刻目、櫛描文。
561	14	柱穴２	甕	-	(3.2)	5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	2.5Y 5/1 黄灰	口縁外面に刻目。
562	14	柱穴２	甕・壺	-	(8.5)	7.5YR 4/4 褐	5GY 4/1 暗オリーブ灰	5GY 4/1 暗オリーブ灰	内外面ナデ。
563	14	柱穴２	甕	-	(3.1)	7.5YR 5/3 にぶい褐	7.5YR 6/4 にぶい橙	10YR 5/1 灰褐	外面ナデ。内面剥落。
564	14	柱穴２	甕・壺	-	(13.4)	5YR 7/6 橙	5YR 7/6 橙	N 2/0 黒	外面に浮文、ナデ、沈線。
565	18	竪穴住居１	甕	-	(5.1)	2.5Y 7/3 浅黄	2.5Y 7/4 浅黄	7.5YR 2/1 黒	内外面ナデ。
566	18	竪穴住居１	底部	-	(2.1)	7.5YR 6/4 にぶい橙	5YR 5/3 にぶい赤褐	10YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。剥落著しい。
567	18	竪穴住居２	底部	-	(1.2)	7.5Y 3/1 オリーブ黒	7.5Y 2/2 オリーブ黒	7.5YR 2/1 黒	外面ナデ。剥落著しい。
568	18	竪穴住居１	底部	-	(2.4)	2.5Y 5/1 黄灰	2.5Y 5/1 黄灰	5Y 4/1 灰	内外面ナデ。内面に指頭圧痕。剥落著しい。
569	18	竪穴住居２	甕	(18.4)	(5.8)	10YR 8/6 黄橙	7.5YR 6/8 橙	N 2/0 黒	貼付口縁。内外面ナデ。外面に指頭圧痕あり。
570	18	竪穴住居２	壺	(12.8)	(6.0)	10YR 8/6 黄橙	5Y 2/1 黒	5Y 2/1 黒	外面に微隆起突帯。剥落著しい。
571	18	竪穴住居２	甕	(18.0)	(7.0)	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 7/8 黄橙	10YR 2/1 黒	貼付口縁。内外面ナデ。
572	18	竪穴住居２	甕	(18.8)	(4.7)	10YR 5/3 にぶい黄褐	7.5YR 7/4 にぶい橙	2.5Y 3/1 黒褐	貼付口縁。内外面ナデ。
587	24	土坑３	甕	(13.0)	(3.1)	10YR 8/6 黄橙	10YR 4/1 褐灰	10YR 4/1 褐灰	内外面ナデ。外面に微隆起突帯、浮文。剥落著しい。
588	24	土坑３	甕？	-	(2.2)	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	7.5YR 3/1 黒褐	内外面ナデ。外面に微隆起突帯、浮文。剥落著しい。
589	24	竪穴住居５	底部	-	(1.6)	10Y 3/1 オリ - ブ黒	10YR 3/2 黒褐	10Y 3/1 オリ - ブ黒	内外面ナデ。剥落著しい。
590	24	土坑３	甕	(15.4)	(3.4)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 3/1 黒褐	内外面ナデ。外面に微隆起突帯。剥落著しい。
591	24	土坑３	甕	(20.2)	(1.8)	2.5Y 6/2 灰黄	5Y 3/1 オリーブ黒	5Y 3/1 オリーブ黒	内外面ナデ。剥落著しい。
592	24	竪穴住居４	甕	(15.2)	(5.7)	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	内外面ナデ。外面に微隆起突帯、浮文。剥落著しい。

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　種	法　量 (mm/g)				石　材	特　　徴
				最大長	最大幅	厚さ	重量		
540	10	土坑	二次加工のある剥片	1.8	0.8	0.3	0.4	チャート	
541	10	土坑１	石鏃 未製品	3.05	1.8	0.6	3	サヌカイト	
542	10	土坑１	二次加工のある剥片	1.9	2.4	0.5	2	チャート	
543	10	土坑１	石核	8.3	12	2.1	340	砂岩	
544	10	土坑２	叩石	12.7	10.6	4.6	910	砂岩	
573	19	竪穴住居１	石鏃	2.1	1.6	0.5	1.6	チャート	
574	19	竪穴住居１	石鏃	2.4	2.1	0.6	2.6	サヌカイト	
575	19	竪穴住居１	石鏃 欠損品	2.9	1.6	0.35	1.8	不明	磨製石族
576	19	竪穴住居１	石鏃	3.3	1.8	0.25	1.6	不明	
577	19	竪穴住居１	二次加工のある剥片	8.1	5	2	72.1	砂岩	
578	19	竪穴住居１	二次加工のある剥片	5.6	5.6	0.9	24.5	不明	

表Ⅳ –2　出土遺物観察表２

図番号	図版番号	出土地点・層位	器　種	法　量 (mm/g)				石　材	特　　徴
				最大長	最大幅	厚さ	重量		
579	19	竪穴住居 1	二次加工のある剥片	7.1	11.5	1.5	185.4	不明	
580	20	竪穴住居 1	砥石 欠損品	5.6	4.2	1	46	砂岩	
581	20	竪穴住居 1	砥石 欠損品	6.3	5	0.8	38.2	不明	
582	20	竪穴住居 1	砥石 破損品	3.6	2	0.3	3.8	不明	
583	20	竪穴住居 1	砥石 欠損品	4.5	6.1	0.6	30.4	不明	
584	20	竪穴住居 1	砥石	14.3	3.4	3	310	不明	
585	20	竪穴住居 1	砥石 欠損品	12.2	2.9	1.6	85.2	砂岩	
586	20	竪穴住居 1	台石・砥石	26.7	18.3	10.7	6000	砂岩	φ 25 センチほどの亜円礫
593	25	竪穴住居 3	楔形石器	2.3	2.8	2.2	4.7	チャート	
594	25	竪穴住居 5	石鏃	3.6	1.8	0.5	3.5	チャート	
595	25	竪穴住居 2	二次加工のある剥片	4.2	2.3	1.2	9.5	黒曜石	
596	25	竪穴住居 4	叩石	9.7	8.9	4.8	570	砂岩	
597	25	竪穴住居 4	叩石	21.4	21.8	8.4	6500	砂岩	
598	26	表採	石鏃	2.15	1.4	0.45	1.1	チャート	
599	26	表採	石鏃 破損品	2.5	1.4	0.4	1.6	サヌカイト	
600	26	遺構検出面	石鏃 破損品	3.2	2.1	0.4	3.5	チャート	
601	26	表採	石鏃 未製品	2.8	1.7	0.3	1.9	チャート	
602	26	遺構検出面	剥片	2.5	4.4	0.75	6.2	サヌカイト	
603	26	遺構検出面	砥石	12.8	7	2.8	400	砂岩	
604	26	表採	二次加工のある剥片	9.8	14.8	1.9	290	粘板岩	

表Ⅳ –3　出土遺物観察表 3

第Ⅴ章　調査成果のまとめ

調査成果のまとめ

平成 11 年から平成 15 年にかけて実施された 6 次の発掘調査によって得られた成果は多岐にわたるものである。以下ではその調査成果と今後の課題をまとめたい。

西中野地区

西中野地区からは弥生時代中期末頃の遺構群が確認された。これまで市内では当該時期の遺構および遺物がまとまって出土することは少なく、遺構をともなう集落の存在は明確に知られていなかったが、今回の調査において古津賀地域に当該時期の集落が存在することが明らかとなった。

今回の第 1 次調査、第 5 次調査では柱穴や土坑等は確認しているものの、具体的な集落像を復元できるには至ってない。しかし、第 5 次調査で確認した柱穴等の残存状況を考慮すれば周囲に比較的良好な集落跡が存在することは疑いない。なお、周辺の試掘確認調査の成果から弥生中期段階の集落は第 1 次、第 5 次調査地点を含めて南へ広がる可能性が高いものと推測される。

出土遺物に目を向けると、在地の土器の主体となっているのはいわゆる南四国型甕で、出土する口縁部片の大半が当該器種に分類される。これに対して他地域からの搬入品としては、赤色の顔料を塗布された土器群が挙げられる。これらは北部九州で弥生時代中期に盛行する須玖式土器に似るが、所謂須玖式土器の器種構成の中には出土する遺物と同類のものを確認できない。これらの土器の出自は大分県東海岸部付近に追うことができる。北部九州から九州東海岸地域へ伝播した須玖式土器が当該地域で変容をきたし、古津賀遺跡群へ搬入されたものであろう。これらの土器は東北部九州では日常的に使用される土器ではなく、祭祀関連の遺跡に多くみられるものである。この他に弥生中期末に九州東海岸付近の在地系の甕として盛行する所謂東北部九州型甕が出土することも注目される。これら在地系の甕がともに出土したことで時期的な併行関係はより確かな評価ができるものと考えられる。これらの土器は県下でも類例がなく、古津賀遺跡群出土品が初例となる。なお、当該時期に高知県中央部で頻出し、組成の中でも大きな割合を占める凹線文土器は、古津賀遺跡群ではわずかに口縁部片 2 点のみが出土するにとどまっている。既往の調査成果からも凹線文土器の受容のあり方は、中央部と幡多地域では大きな温度差が存在することは明らかである。このような現象は弥生時代中期末における中央部と幡多地域の土器文化圏のあり方、ひいては文化圏のあり方の違いを反映するものとして検討されていく必要がある。

東ナルザキ地区

西中野地域の集落にわずかに遅れる弥生時代中期末から後期初頭にかけての集落が東ナルザキ地区で確認された。西中野地区等の平地での集落址との比高差は約 40m をはかる。この高位の丘陵先端部に 5 基の竪穴住居が確認されている。それぞれの竪穴住居から出土する遺物に大き

な時期差はなく、遺構の前後関係のある竪穴住居 1 と竪穴住居 5 を除けばほぼ近しい時期に竪穴住居が併存したものと考えられる。試掘確認調査の結果と丘陵の平坦部の面積を勘案するとこれ以上の大きな集落の広がりは期待できないものと思われる。

出土する遺物の特徴としては土器に比して石器類の比率が高いことが挙げられる。特に、砥石、打製石鏃の未製品やチップ等が住居址内もしくは付近の土坑から出土しており、集落内で石器の加工が行われていたことが分かる。これに加え伐採斧や叩石、偏平片刃石斧、石包丁等の存在は農耕をともなった生活を具体的に物語る資料といえる。

さて、これらの住居址群はどのような集落であったのだろうか。他の遺跡に比してやや高所に位置する集落であるが、石器組成をみると石鏃など狩猟具・武具に属するものは全体の 22% 程度でしかなく、むしろ前述した包丁など生業を農耕に依存していたことを示唆する遺物が組成に含まれていることが注目される。現に発掘調査直前までは現地は耕地として利用されており、日常的に徒歩等で現地に赴いて作業がなされていた。40m という比高差は数字で与える印象程生活のうえで影響はないのではないかとも想像される。また居住するにあたっては水源の確保は大きな問題であるが、丘陵中腹付近でも湧水がみられており、丘陵下にいたっては湧水で調査に支障をきたすほどであった。なお、この「ナルザキ」という地名は、地域にのこる伝承によると後川が東に蛇行していた頃この遺跡の存在する丘陵下にも河道が流れており、地名はこの丘陵先端部下に流れる沢の音をとって「鳴る崎」と呼ばれていたことに由来するという。

このような状況を勘案すると当該集落は緊張関係のなかで武装化し、高所に営まれた集落というには無理があろう。まず、当該地域においてそのような緊張関係が生じていたかどうかも明らかでない。また比高差のみを根拠に所謂「高地性集落」の分類へ当てはめるのも憚られる。

いずれにしろ、比較の対象となる同時期の集落が確認されていない現在において結論に帰着しようとするのは尚早であろう。資料増加を待って検討を深めていく必要はあるが、本稿では現段階の理解として、生業を農耕においた武装化しない高所の小集落として位置づけておきたい。

ホウシボウ地区

ホウシボウ地区では 3 次の調査が近接する地点で実施されており、古墳時代の竪穴住居と思われる土坑や同時期に利用されていたと思われる溝等を確認した。検出した遺構の多くは形状の明確でない土坑もしくは土器群であるが、竪穴住居 (第 4 次調査　竪穴住居 1) や出土する遺物量から考えても当該時期の集落が存在することは明らかである。これら土器群や竪穴住居が点在する地点の南西には長期的に利用されたと考えられる溝 (第 5 次調査　溝 2) が存在しており他の遺構との関係も今後明らかにされていく必要がある。このほかに第 5 次調査では弥生時代後期前半代の所産と考えられる土坑 (土坑 2) が確認されている。古津賀地域ではこれまで弥生時代後期に属する遺構が低地で確認されていなかったため、集落の存在を示唆する資料として貴重である。しかし、発掘調査や試掘確認調査の結果から弥生時代の包含層は明確に確認できるほど層厚もなく、広がりもまばらである。包含層の存在自体が西方では希薄になる傾向にあり今回の

調査地点は弥生時代の集落としては辺縁に位置するものであろうと考えられる。時期的にも地理的にも大きな距離のない東ナルザキ地区 (第 3 次調査) の成果とあわせて当該時期の古津賀地域を考える資料となろう。

結びにかえて

古津賀地区における区画整理事業にともなった発掘調査はこれまでの四万十市 (旧中村市) にはなかった大規模なものとなった。発掘調査は 6 次を数えるが、それに先立つ試掘確認調査を含めると面積としても調査数としても当市が経験したことのないものであった。この一連の調査成果によって古津賀遺跡は古津賀遺跡群としてその範囲を大きく広げ、その広がりにおいても内容においても当市を代表する遺跡となった。

古津賀遺跡群の発掘調査が与えた影響はそれだけにはとどまらない。これまでにない頻度で発生する発掘調査に対応すべく、埋蔵文化財の調査を市が主体的に実施できる体制の整備、それに並行して埋蔵文化財および文化財行政の体制整備が大きく前進した。埋蔵文化財や文化財行政については後進的と言われる地域にあって、今回のような大規模事業に伴う発掘調査はその底上げをおこなう大きな契機になったことは間違いない。

現地での発掘調査は終了し、古津賀地域は区画整理事業によって大きくその姿を変えた。遺物の整理作業も及ばずながら本稿にて調査報告書の刊行までたどりつくことができた。しかし、調査の検討と同様にこれからが始まりである。出土した成果をこれからのまちづくりや教育にどれほど還元させていけるか、本稿の刊行を契機として新しい取り組みを始めていきたい。

〔　文　献　〕

小田富士雄　『小田富士雄著作集 3　九州考古学研究　弥生時代篇』　1983

田崎博之　「東北部九州 – 南豊前」『弥生後期の瀬戸内海 - 土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通 -』
古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料　1996

坪根伸也　「豊後（東部九州）」『弥生後期の瀬戸内海 - 土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通 -』
古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料　1996

※　田崎博之（愛媛大学考古学研究室）・坪根伸也（大分市教育委員会）両氏には搬入遺物について多大な協力と助言を頂いた。記して謝意を表したい。

大分県教育委員会　『大在古墳・浜遺跡第 2 地点　大在土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』　1995

中村市教育委員会　『古津賀遺跡群　東ナルザキ地区　現地説明会』　2000

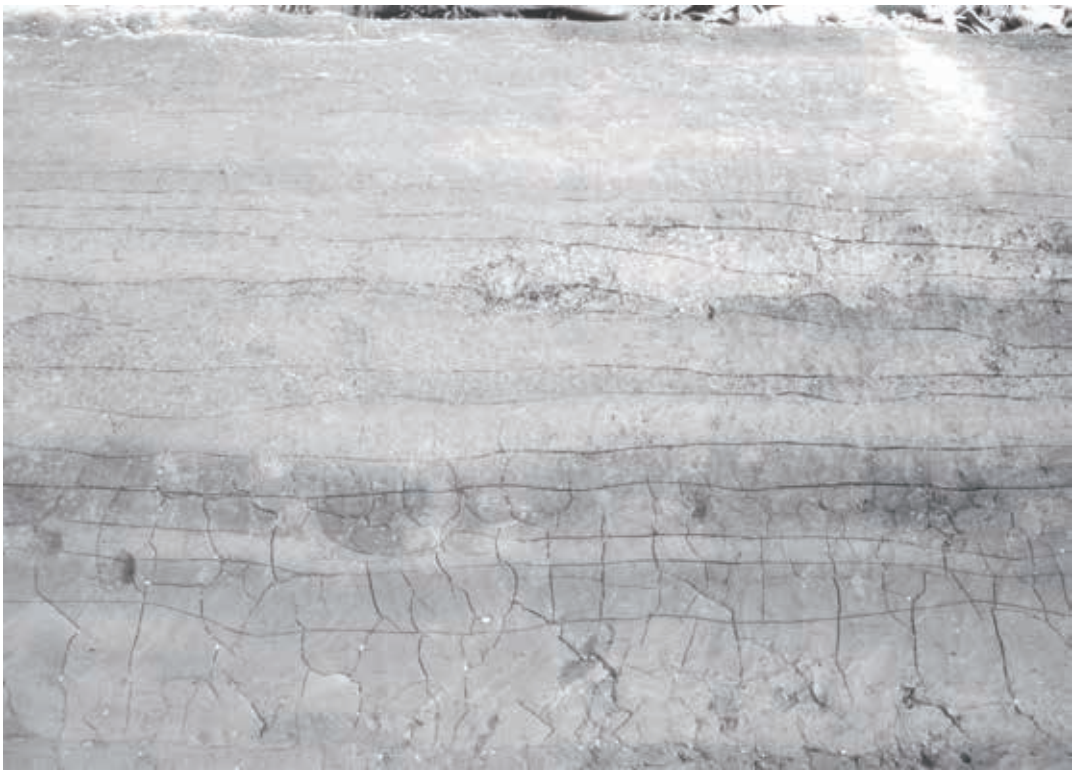
森岡秀人ほか　「特輯　弥生時代高地性集落研究の現状と課題」『古代文化』Vol.54　2002

中村市教育委員会　『古津賀古墳』　1975

高知県教育委員会・（財）高知県埋蔵文化財センター　『久木ノ城跡・遺跡・、古津賀遺跡、神ヶ谷 2 号窯跡、具同中山遺跡群Ⅱ -2』
中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ　第 81 集　2003

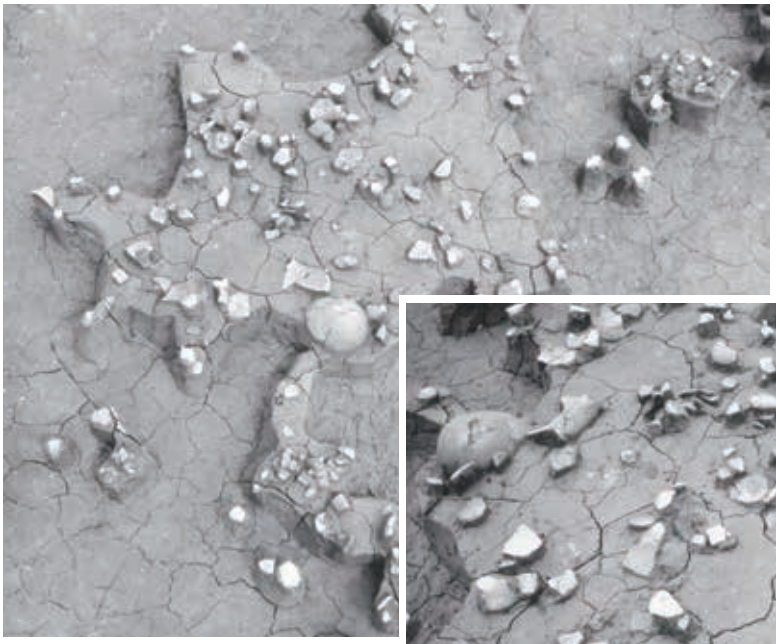
（財）高知県埋蔵文化財センター　『具同中山遺跡群Ⅳ　県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書』　2001

第 1 次調査　調査前の現況

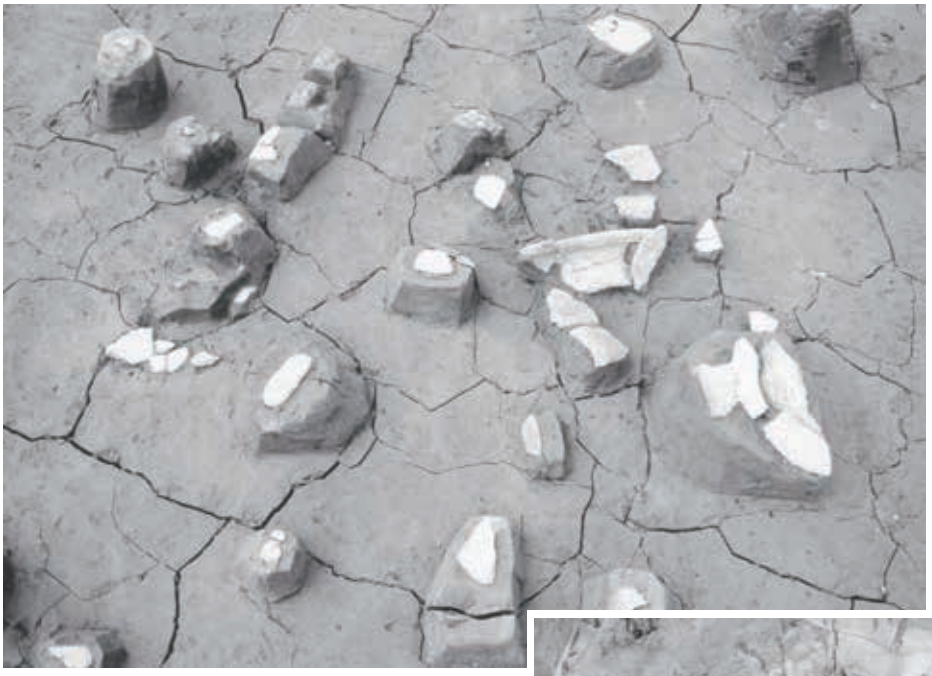


第 1 次調査　土層堆積状況

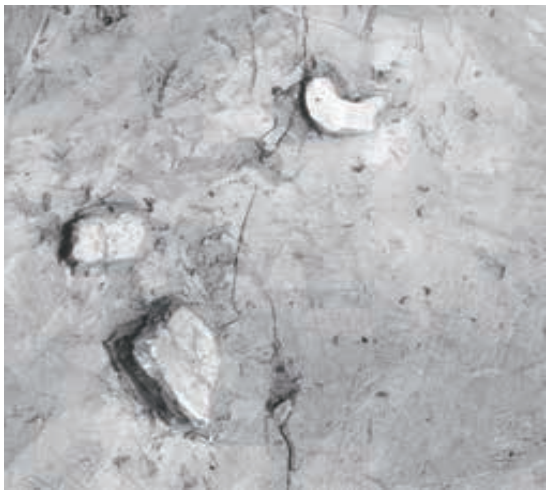
第 1 次調査　遺構検出状況



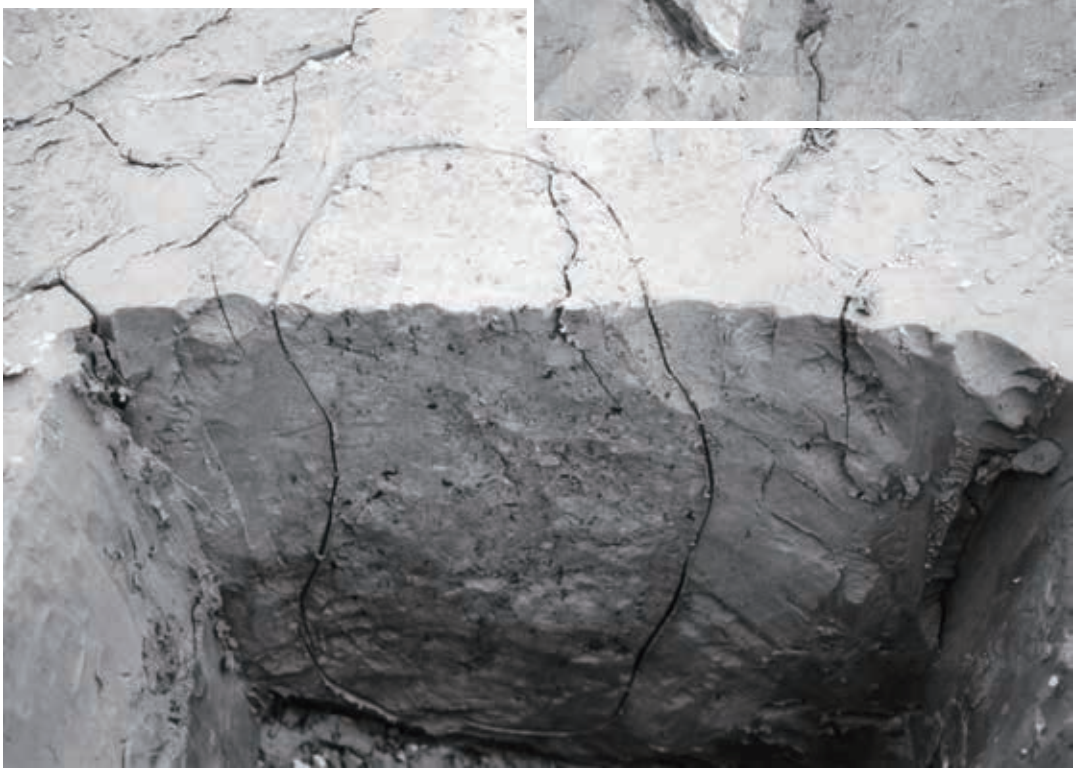
第 1 次調査
古墳時代包含層遺物出土状況



第 1 次調査　弥生時代包含層遺物出土状況



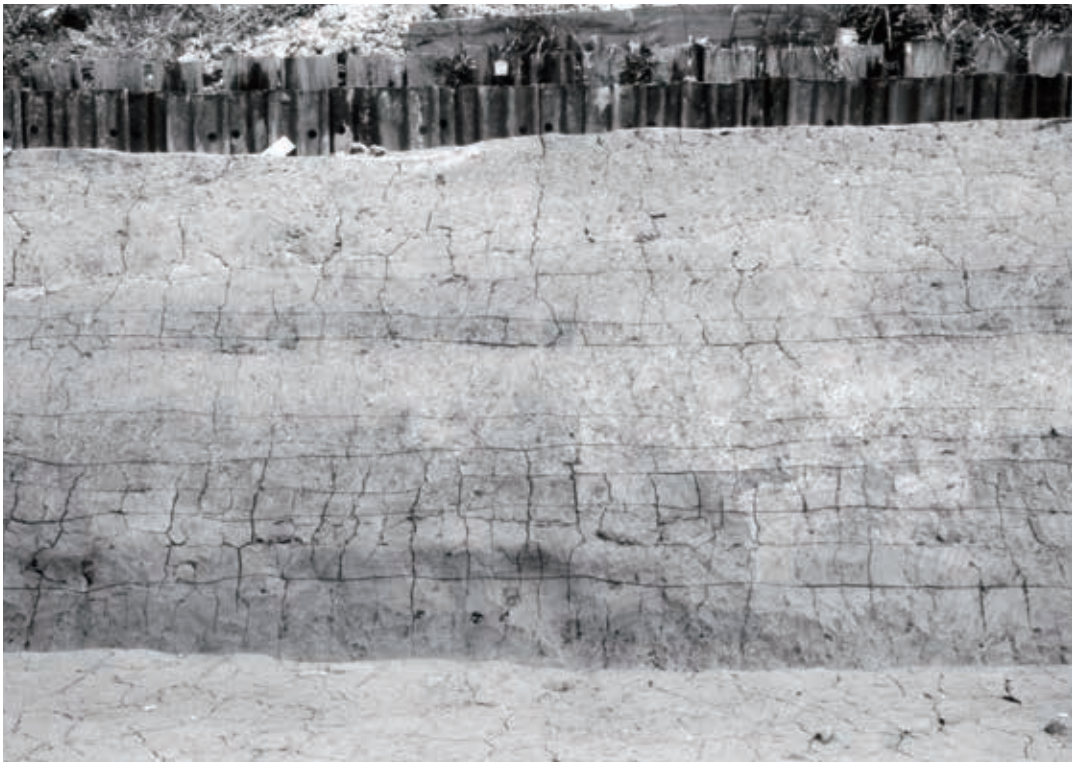
第 1 次調査　石製品出土状況



第 1 次調査　柱穴半裁状況

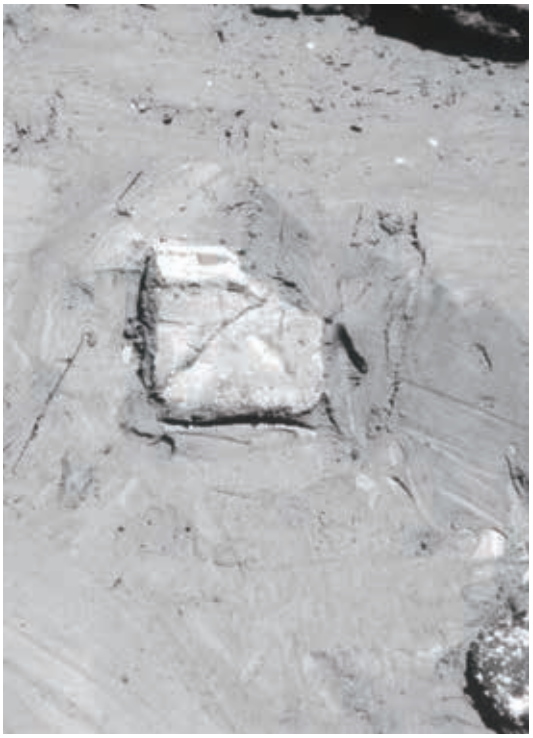
第 5 次調査　Ⅴ-2 層遺物出土状況

第 5 次調査　遺構完掘状況（Ⅷ-2 層）



第 5 次調査　土層堆積状況

第 5 次調査　土坑 4 石包丁（159）出土状況

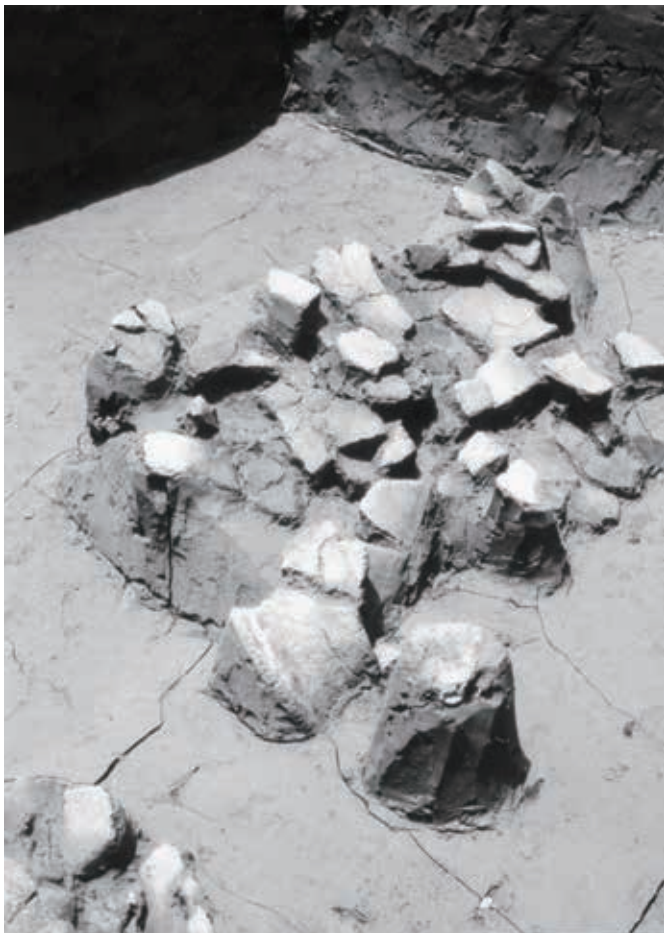


第 5 次調査　搬入土器出土状況

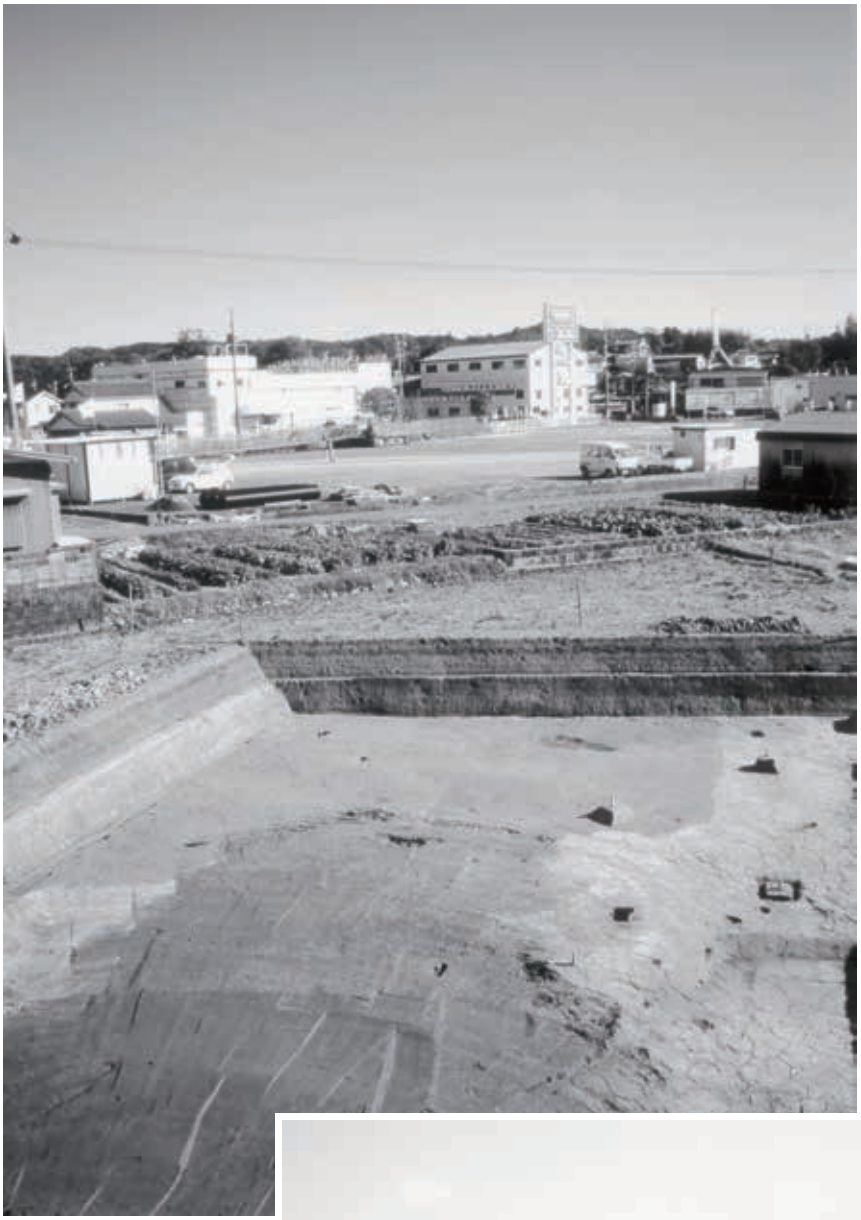
第 5 次調査　遺構完掘状況（IX層）

第 5 次調査　柱穴 1 半裁状況

第 5 次調査　溝 1 土層堆積状況

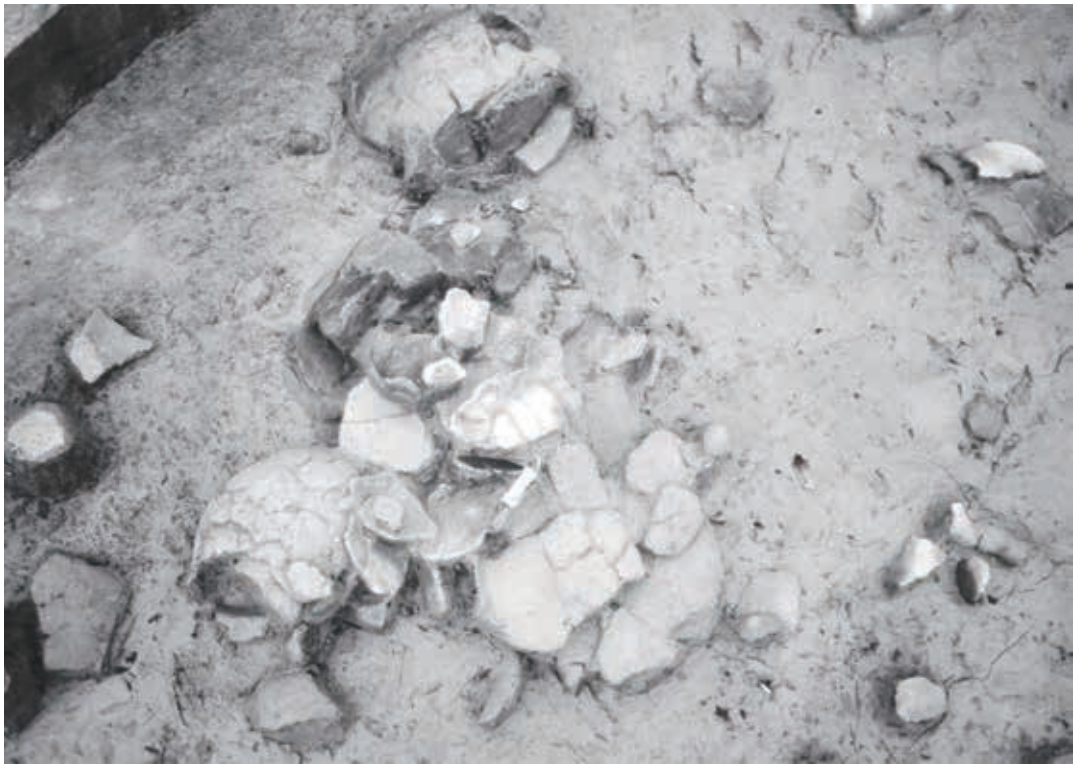


第 5 次調査　溝 2 遺物出土状況



第２次調査
遺構検出状況

第２次調査　調査前の現況

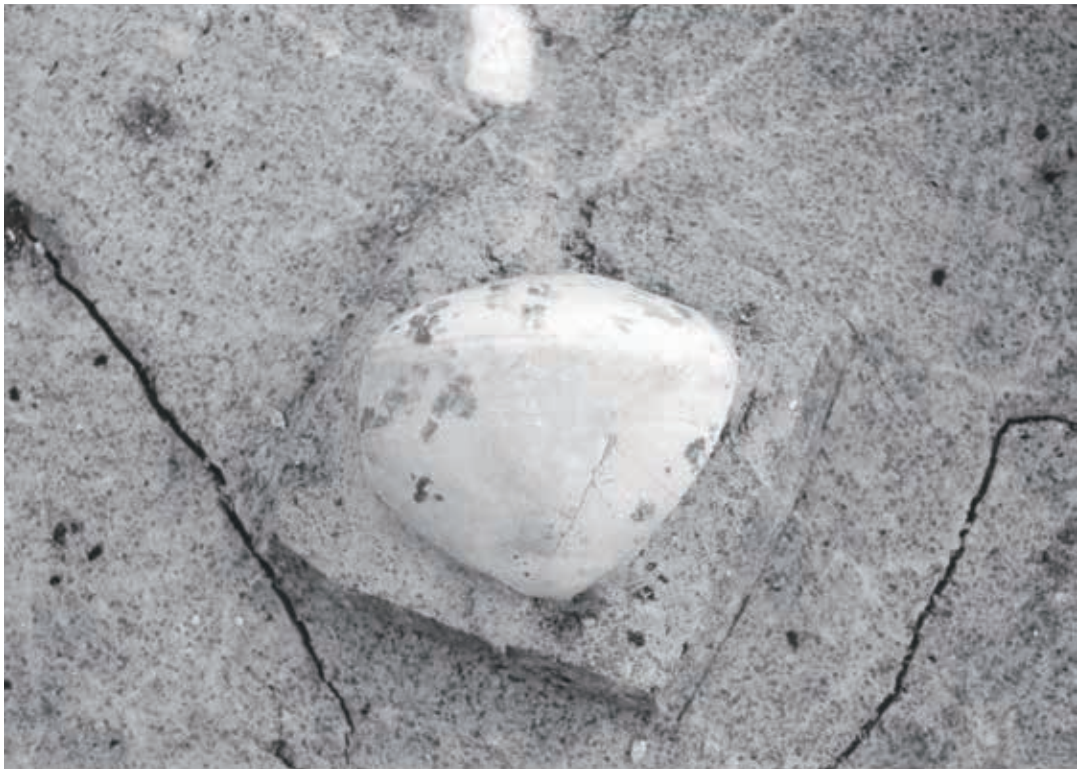


第 2 次調査　古墳時代包含層遺物出土状況

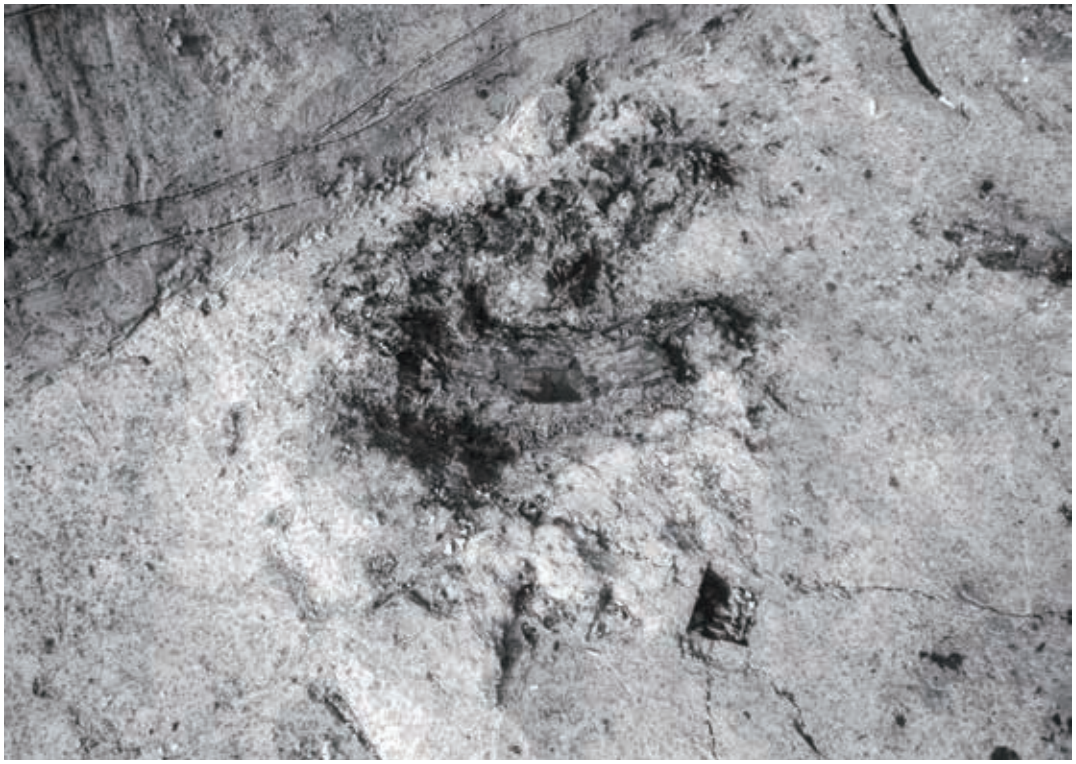
第 2 次調査　土層堆積状況

第４次調査　土器群９遺物出土状況

第４次調査　土器群４（367）出土状況



第４次調査　土器群９（366）出土状況



第４次調査　土坑２検出状況

第４次調査　竪穴住居１炭化物検出状況

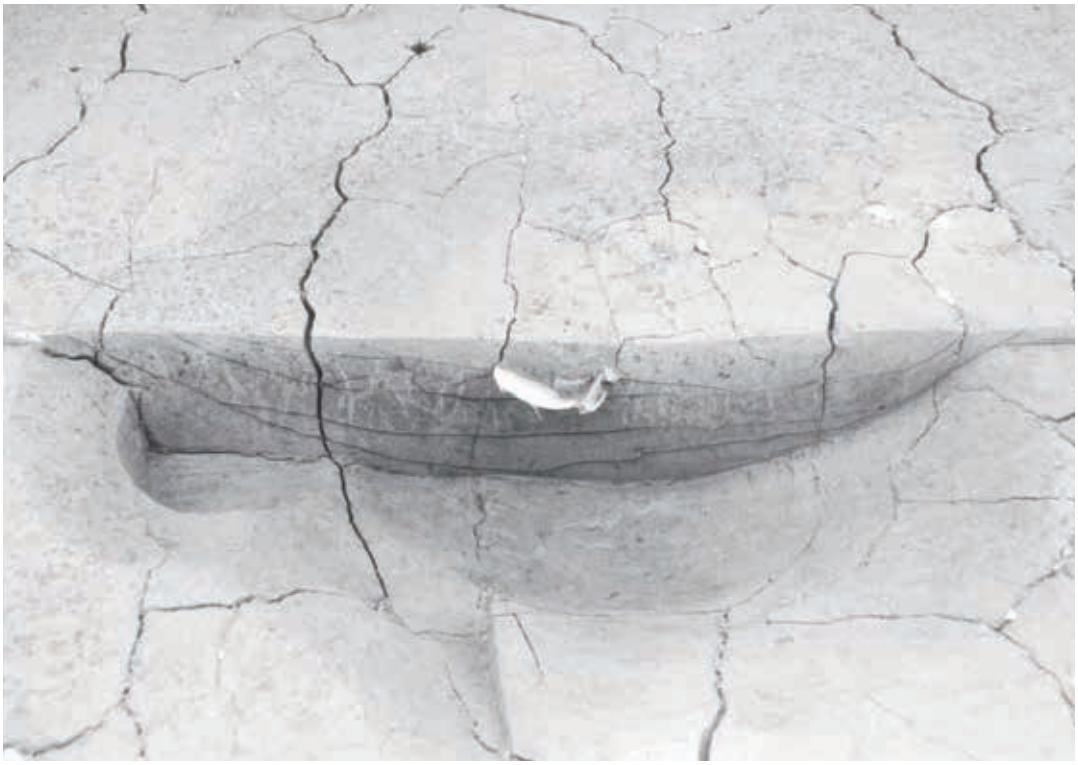
第４次調査　竪穴住居１完掘状況

第６次調査　土層堆積状況１

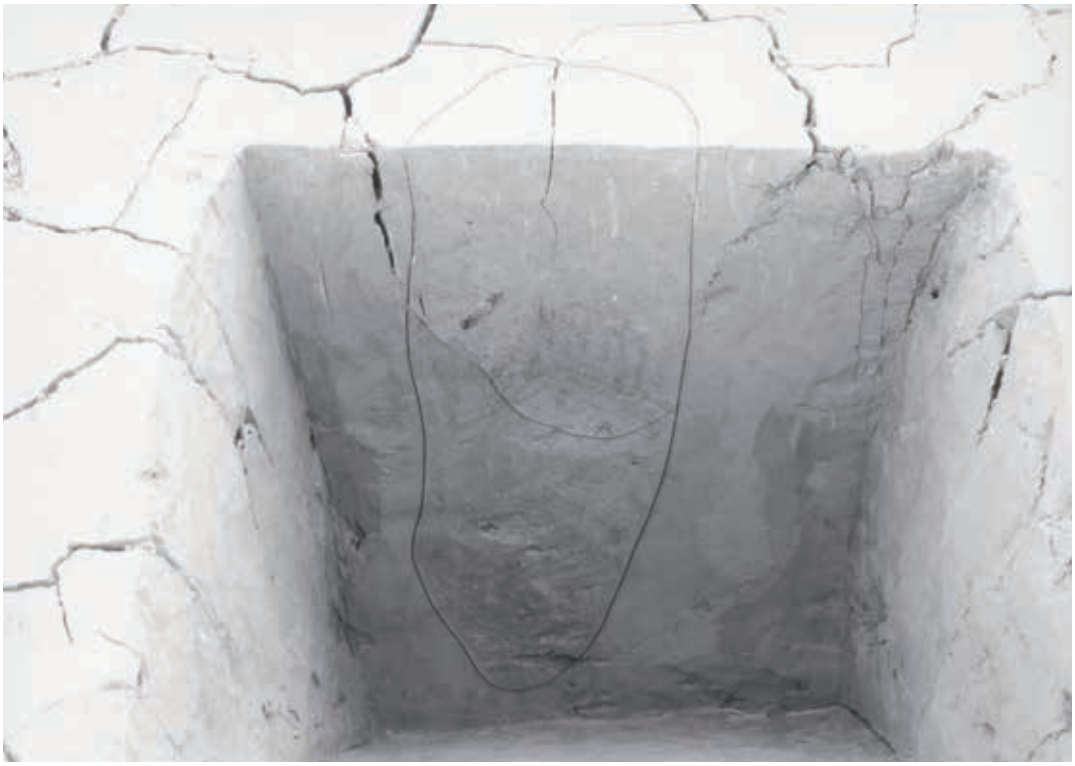
第６次調査　土層総堆積状況２

第 6 次調査　9 層完掘状況（A 区）

第 6 次調査　9 層完掘状況（B ～ D 区）



第 6 次調査　土坑 3 半裁状況



第 6 次調査　柱穴 21 半裁状況

第 6 次調査　10 層完掘状況（A 区）

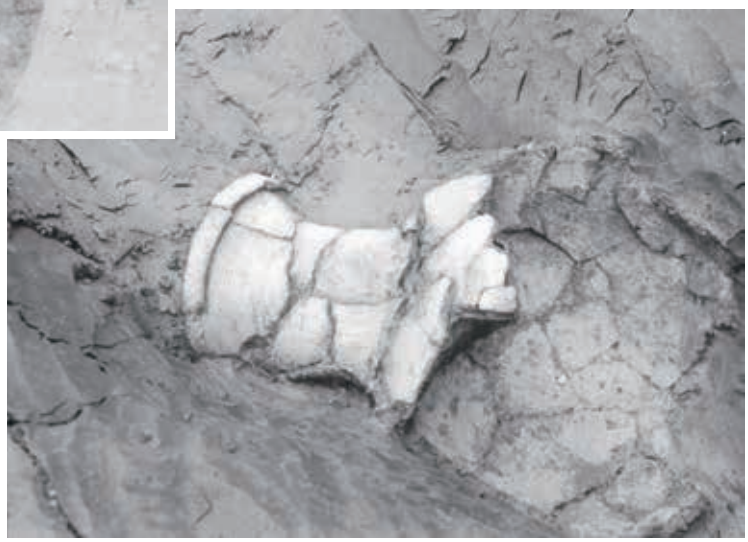
第 6 次調査　10 層完掘状況（B ～ D 区）

第６次調査　掘立柱建物３

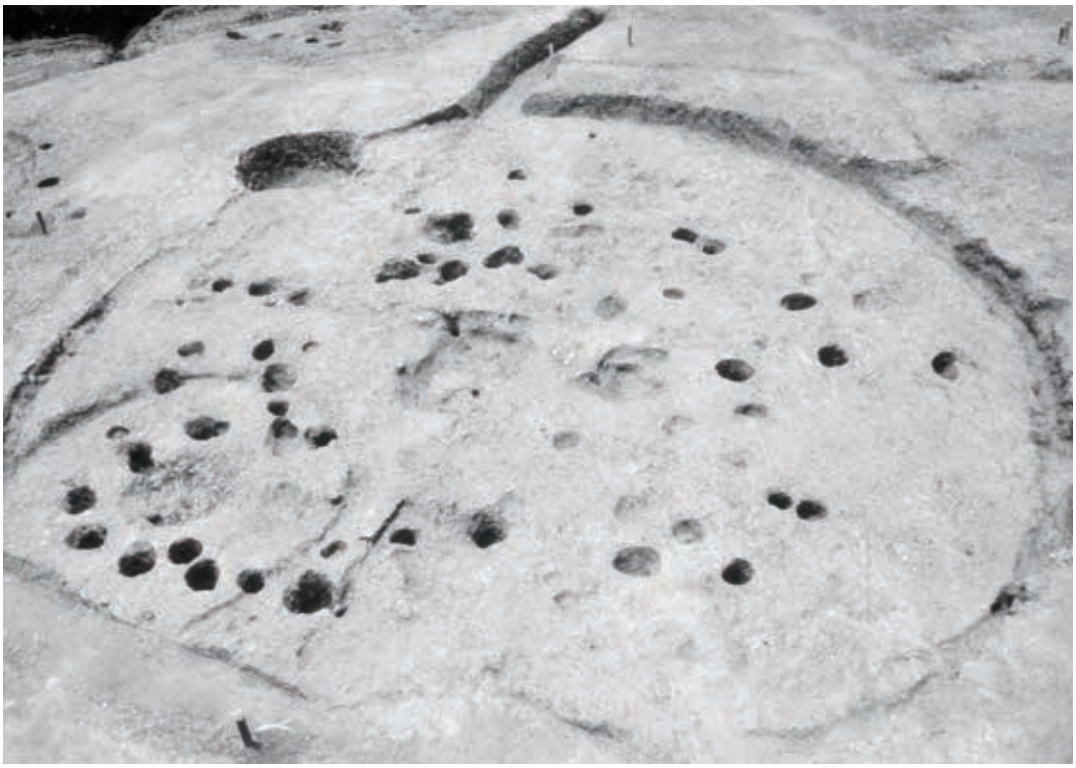
第６次調査　溝２完掘状況

第 6 次調査　土坑 2 遺物出土状況

第 6 次調査　土坑 2 石包丁（455）出土状況



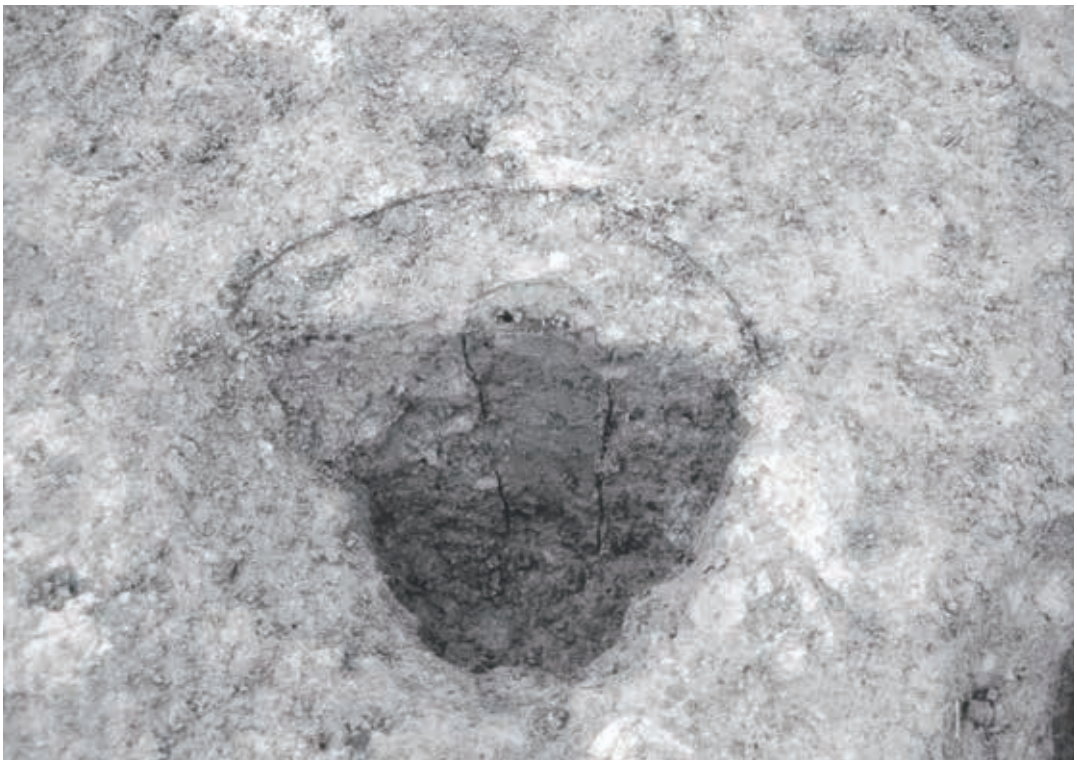
第 6 次調査　土坑 2　壷（453）出土状況



第 3 次調査　竪穴住居 1・竪穴住居 5 完掘状況

第 3 次調査　竪穴住居 3 完掘状況

第３次調査　柱穴２遺物出土状況



第３次調査　柱穴７半裁状況

14

6

7

4

15

5

3

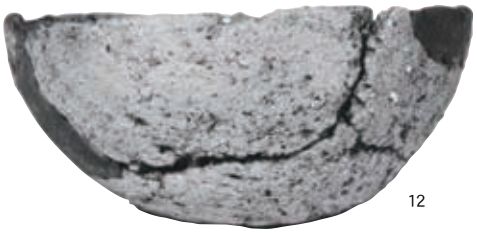
9

17

18

2

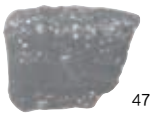
40


12

32

30

46


47

48

49

50

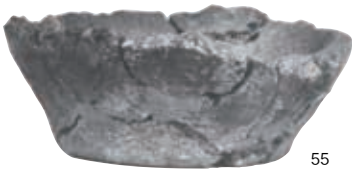
51

57

52

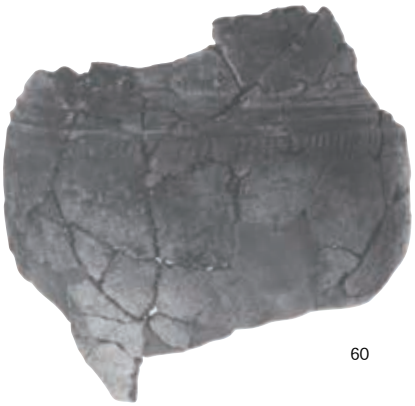
59

56

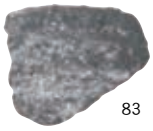

55

58

53


60

61


83

86

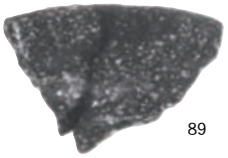
81

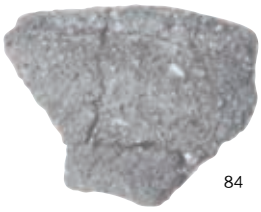
79

80

88

87


89


84

82

100

71

77

63

67

74

78

75

76

65

70

72

85

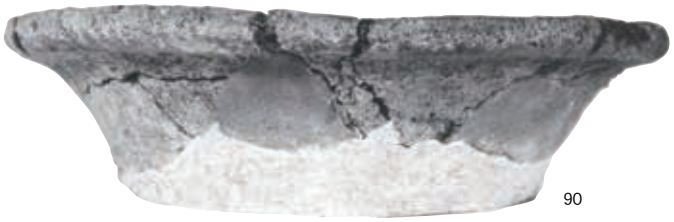
92

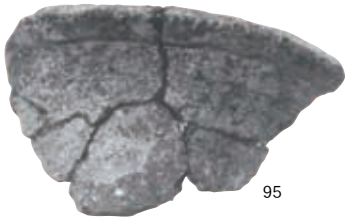
93

98

91

99


90

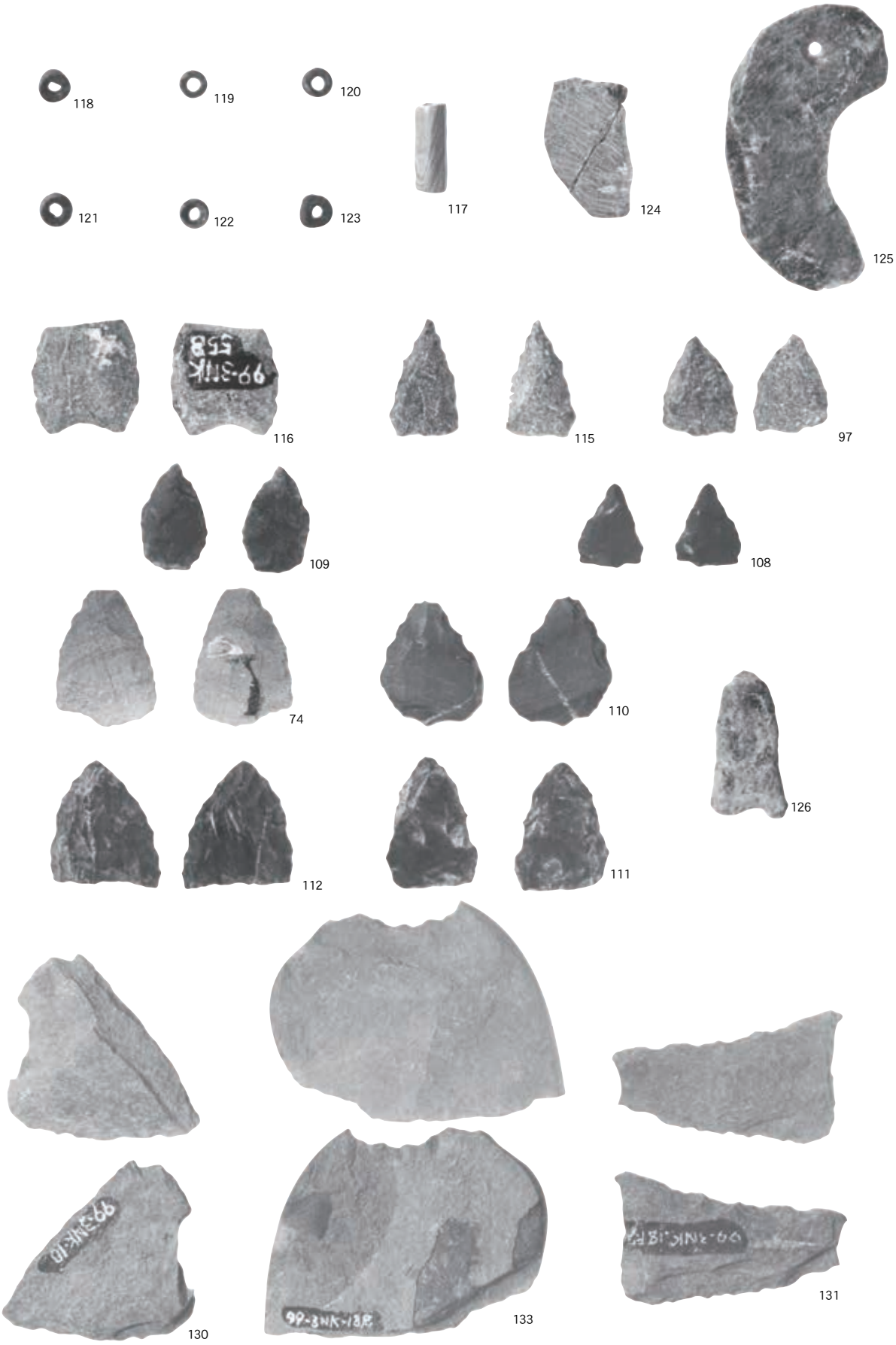

95

96

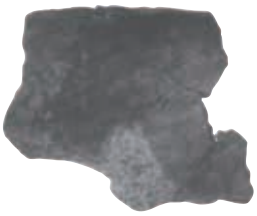
97

128

129


118
119
120
121
122
123
117
124
125
116
115
97
109
108
74
110
126
112
111
130
133
131

140


135

134

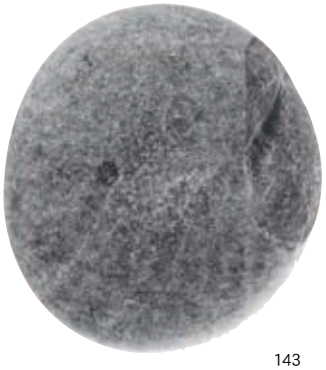
137

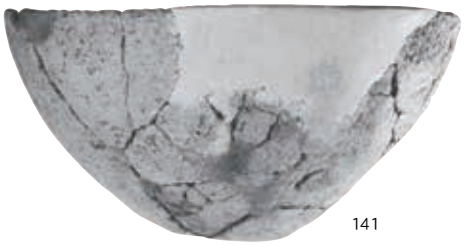
136

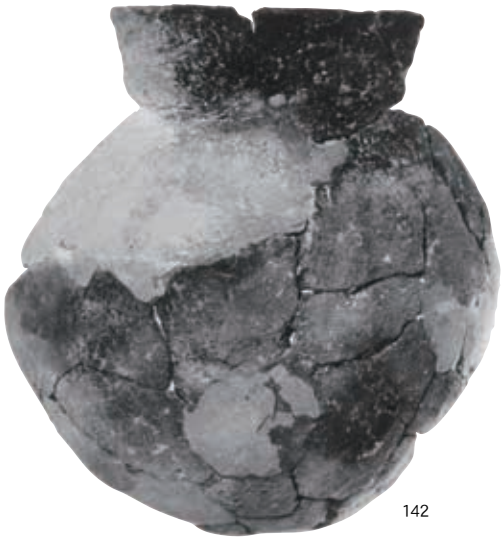
139

138

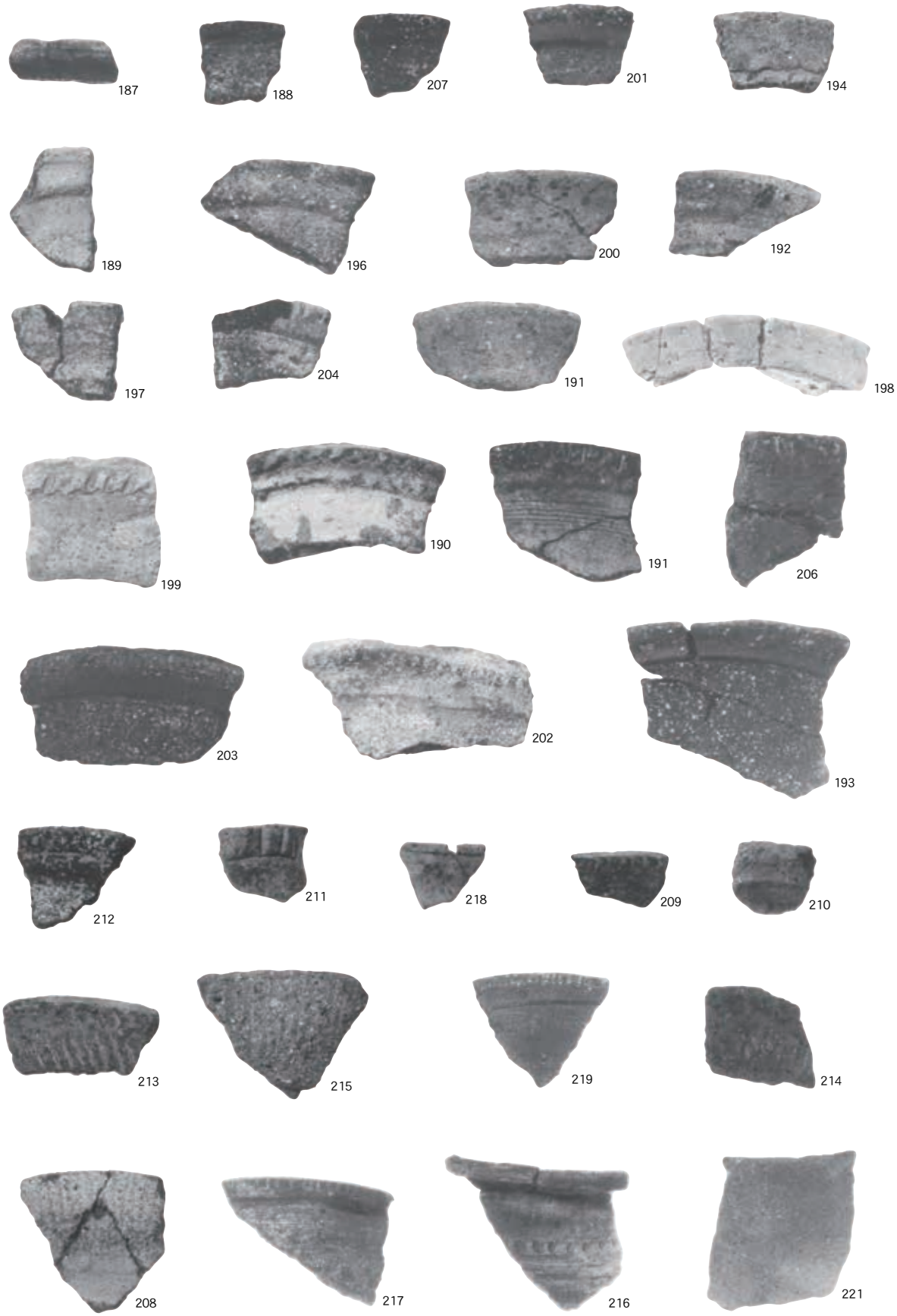
160

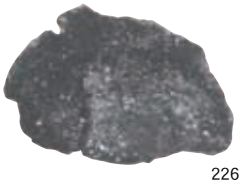

143


141

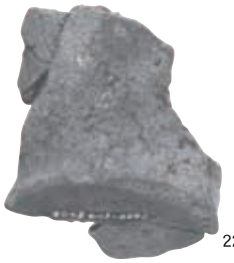

142

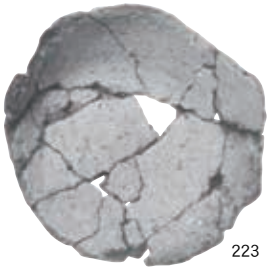
142


187
188
207
201
194
189
196
200
192
197
204
191
198
199
190
191
206
203
202
193
212
211
218
209
210
213
215
219
214
208
217
216
221


226

222


224


223

220

225

227

228

233

234

231

230

235

232

229

319

301

318

320

290

289

288

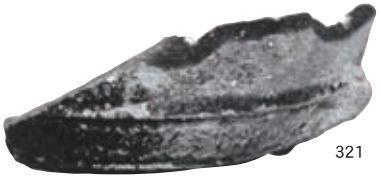
292

291

287

286

268


321

311

304

334

303

329

338

339

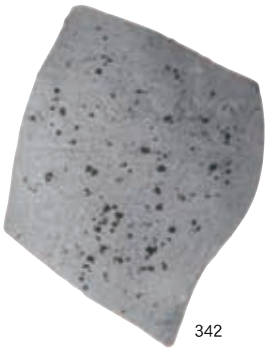
341

343

344

340

345


342

347

346

348

349

350

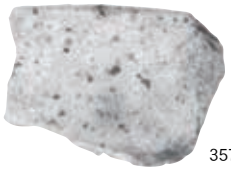
353

352

351

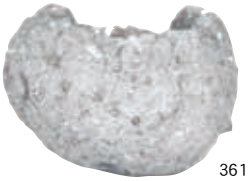
355

354


357

359

356

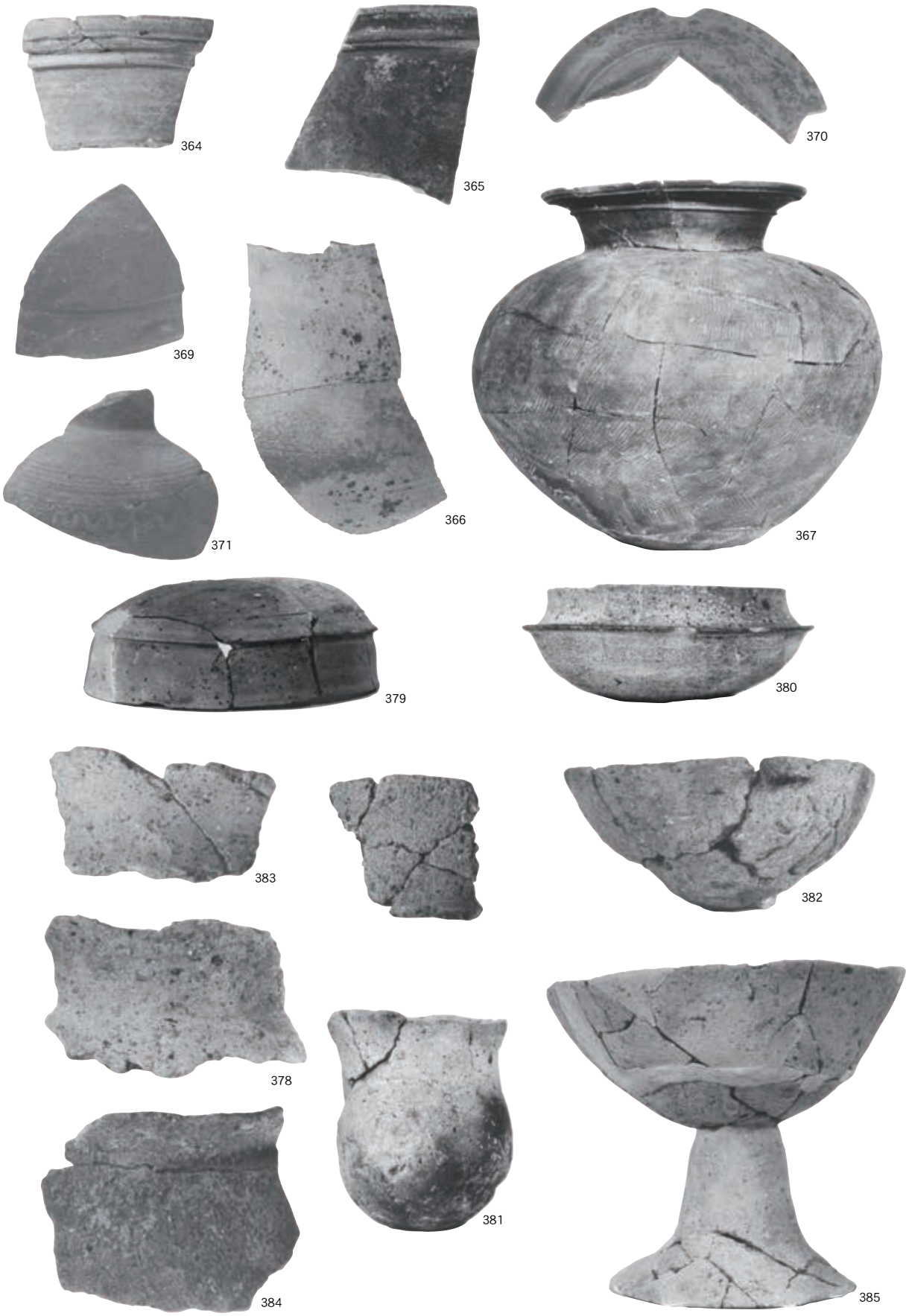

361

360

362

358

363


364
365
370
369
366
367
371
379
380
383
382
378
381
384
385

390

389

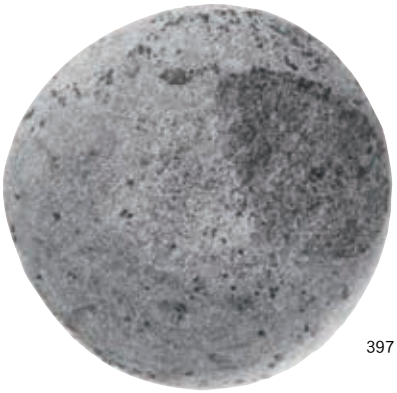
387

395

391

392

393


397

394

396

399

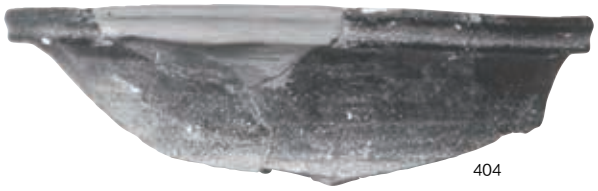
398

400

401

402

403


404

406

405

409

408

415

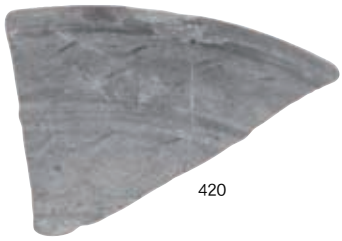
414

412

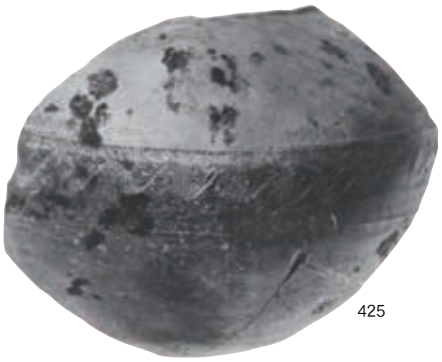
417

407

410


420

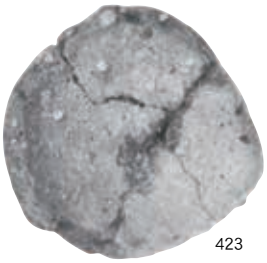
419


425

421

424

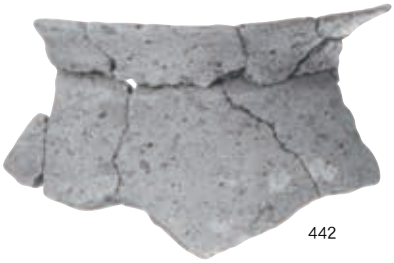
422


423

426

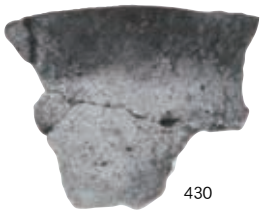
428

429

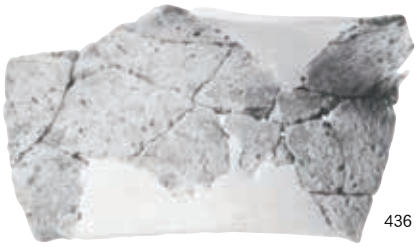

442

441

437


430

440


436

444

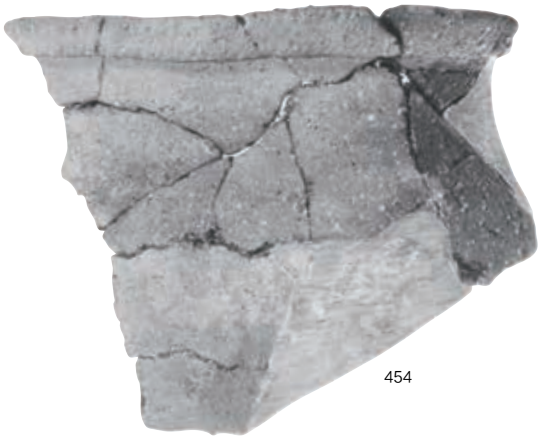
449

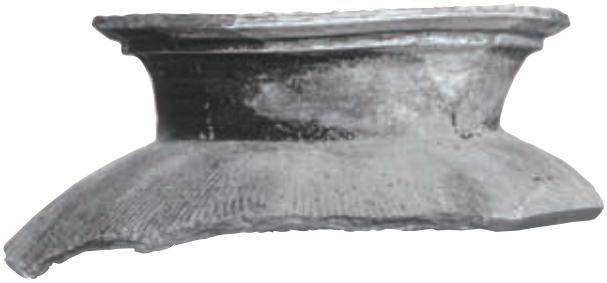
450

451

452

453


454

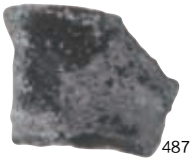

478

455

479

476

492


487

482

480

481

494

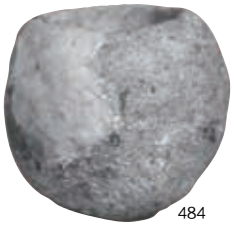
491

486

485

493

495


484

497

503

504

505

506

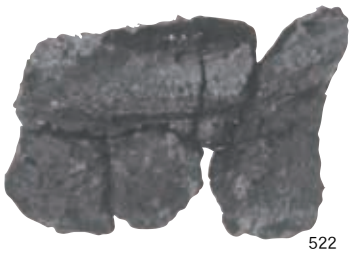
498

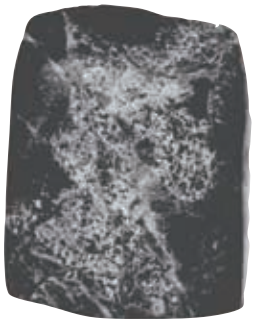
501

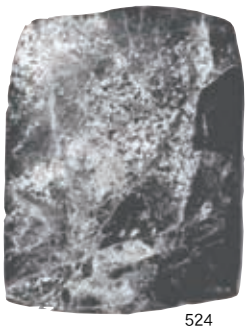
502

517

518


522




524

523

525

531

551

550

545

549

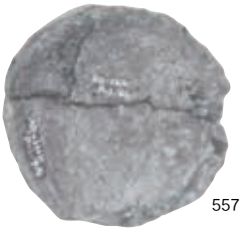
547

548

552

555

556

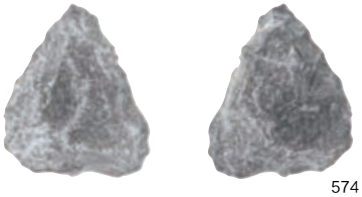

557

563

560

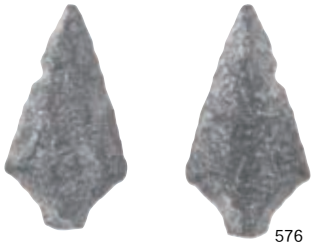
558

573

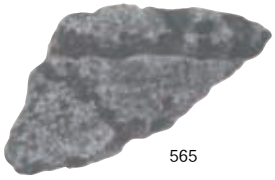

574

585

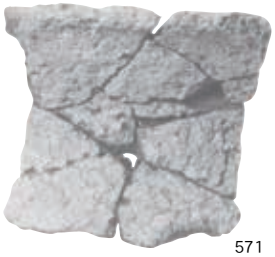
575


576

572


565

584

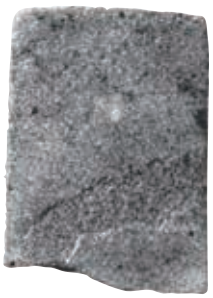

571

569

582

583

581



580

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こつかいせきぐん　だい１じから だい６じはっくつちょうさほうこく
書　　名	古津賀遺跡群　第１次～第６次発掘調査報告
副　書　名	古津賀土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	四万十市文化財調査報告
シリーズ番号	第１輯
編 著 者 名	川村 慎也
編 集 機 関	四万十市教育委員会
所　在　地	〒787-0012　高知県四万十市右山五月町 8-22　TEL 0880(34)7311（生涯学習課）
発行年月日	西暦　2006 年 1 月 10 日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古津賀遺跡群（こつかいせきぐん）	四万十市古津賀字西中野	39207	070211	32°58′55″	132°57′13″	第１次調査 990510～990820	800 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う市道新設
	四万十市古津賀字ホウシボウ			32°59′6″	132°57′13″	第２次調査 991012～991119	320 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う市道新設
	四万十市古津賀字東ナルザキ			32°59′14″	132°57′25″	第３次調査 000410～000726	7,000 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う造成工事
	四万十市古津賀字ホウシボウ			32°59′5″	132°57′14″	第４次調査 001010～010116	800 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う市道新設
	四万十市古津賀字西中野西大場			32°58′54″	132°57′12″	第５次調査 020401～020820	800 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う市道新設
	四万十市古津賀字ホウシボウ			32°59′4″	132°57′13″	第６次調査 030723～031004	300 ㎡	古津賀土地区画整理事業に伴う店舗新設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古津賀遺跡群	集　落	弥生時代 古墳時代	住居址 柱穴群 土坑	弥生土器 石鏃 土師器・須恵器	弥生時代中期後葉段階の遺物 弥生時代九州地方の遺物 弥生時代後期集落 古墳時代土器群

四万十市文化財調査報告　第１輯

古津賀遺跡群第１次～第６次発掘調査報告

平成18年（2006年）１月10日発行

発行　四万十市教育委員会
〒787-0012　高知県四万十市右山五月町 8-22
TEL 0880 (34) 7311
編集　生涯学習課 社会教育振興係
印刷　㈱文化堂印刷所